THE CENTRAL REVIEW

大正九年七月一日發行（每月一回一日發行）

中央公論

七月號

第三十六年　第七號　第三百九十七號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は
腦病良藥 健腦丸 を要求す

島村博士證明
健腦丸
腦病良藥
KENNOGWAN

主効
腦充血 神經痛 頭痛 眩暈
腦膜炎 腦貧血 耳鳴 健忘
逆上症 卒中 中風 便秘

特長
逆上を引下け、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を増進す。

改正價藥
五回分 參拾錢
四日分 六拾錢
一週分 壹圓
二週分 壹圓八拾錢
三週分 貳圓五拾錢
五週分 四圓
十週分 七圓

全國各藥店に取次す

本舖 大阪市順慶町 東京市[illegible]屋町 丹平商會藥房

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す


被つても脱いでも
これなら紳士！
鷹印帽子
純品質主義
大阪
株式會社高橋製帽所



中央公論第卅六年七月號目次

▼公論

石を抱いて沈まざらんとする者……卷頭言……一

社會の發見……杉森孝次郎……二

日支經濟同盟に實行的價値ありや……法學博士 堀江歸一……一七

小學校教科書の根本的改造……高島米峰……二九

漢文學及び佛典國譯の流行……文學博士 三宅雪嶺……三七

社會力經濟力の表現としての現實政治……大山郁夫……四三

綱紀弛廢の社會的心理的考察……永井柳太郎……六七

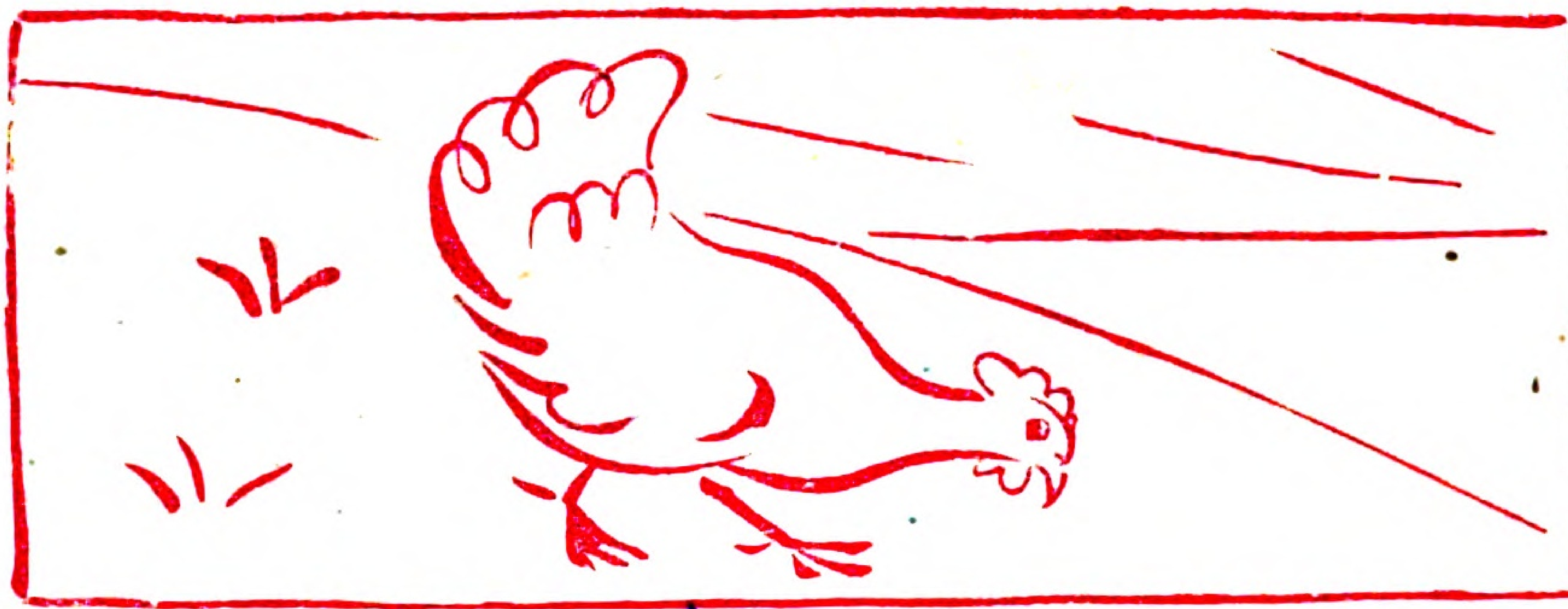
▼說苑

死の前の家康……村松梢風……一

夏を籠りて……佐々木指月……二三

都筑ヶ丘から相模野へ……河井醉茗……三八

刺笑の世界から……大泉黑石……四六



耐火建築の研究

◎住宅の本質的及人文史的考察と耐火建築……工學博士 佐藤功一……五三
◎國民經濟上より見たる建築改革……法學博士 渡邊鐵藏……七五
◎曷ぞ耐火家屋を造らざる……工學博士 伊東忠太……七九
◎都市の防火と耐火構造……工學博士 内田祥三……八四
◎都市の耐火と大建築……高松政雄……一〇一
◎建築問題の趨勢……内務省都市計畫課長 山縣治郎……一〇六
◎耐火構造……工學博士 佐野利器……一一二

▼時論

日米交渉の一問題としての山東問題
我國勞働運動の一大缺陷
佛國と羅馬法王廳との接近
小題小言四則
（○太平洋會議開催の説○所謂評議會の成功不成功○虚構の自白○現内閣の殘せる精神的債務）……法學博士 吉野作造……一一七

（創作）

■鶴唳……谷崎潤一郎……一
■妾の番人……大泉黑石……二一
■捕獲物……豐島與志雄……四六


新型の
書よい
萬年筆
は此の
プラトン萬年筆
新人の萬年筆は
近來皆プラトン
日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣



MISS CHRISTABEL A. COCKERELL MRS. GEO. FRAMPTON

モウパッサン全集

田中純氏譯◎最新刊◎

第七篇

湯の町の戀

（四六判ヌメクロース金箔押箱入 定價金二圓七拾錢、送料拾七錢）

大膽なる筆と描寫の奔放なる點に於て「美貌の友」（ベラミー）を凌駕すると許せらるゝ大長篇にして、貴婦人社會の腐敗、淫蕩なる貴族が金策結婚、資本家の山師的企業、熱烈なる不義の戀等例に依つて自然主義の極致を發揮し、人間愛慾の奥底を描寫して戰慄を感ぜしむる名篇なり。

第一篇 美貌の友 發賣禁止に付追て改訂

第二篇（六版）前田晁氏譯 生の誘惑 價二圓九拾錢送拾七錢

第三篇（五版）矢口達氏譯 戀の力 價二圓六拾錢送拾七錢

第四篇（四版）宮島新三郎譯 狂へる戀 價二圓八拾錢送拾七錢

第五篇（三版）水の上 吉江孤雁氏譯 虐げらるゝ女 價二圓七拾錢送拾七錢

第六篇（三版）矢口達氏等譯 戀の謝肉祭 價二圓八拾錢送拾七錢

三上於菟吉氏譯◎最新刊◎

ゾラ性的文藝傑作集第一卷

怖ろしき夢魔

（四六判羽二重表装金箔押細活字印刷 定價金貳圓七拾錢、送料金拾七錢）

愛妻の過去に於て情夫あるを知るや深夜列車中に於て人知れず之を殺害する嫉妬狂の兇行より事件は展開し婦人の柔かき肉體の魅惑を感ずれば忽ち其の血汐を見んとする劇しき變態性慾狂の青年は遂に其情婦を山間の廢屋に殺害するに至る其間熱烈なる變愛と己が戀を遂げざるため非常なる大慘事を演ずる少女等變態性慾者を描寫して戰慄を感ぜしむる有名なる傑作ラ・ベート・ユーメエンの完譯也。

東京市麹町區飯田町壹の貳 株式會社 天祐社 （振替東京一〇一二八番 電話九段長一一七三番）



石を抱いて沈まざらんとする者

今は昔、さる新興國に時めく專制主義の政治家、とかく自國の隣邦諸國に評判のあしきを苦慮し、如何にかして之を取り除かんものと、或は情報局とか國際平和協會とかを作つて海外宣傳をやつたり、又或は莫大の機密費を使つて內地の外字新聞や通信員は固より、遠く諸外國の有力なる新聞までを買收して、頻りに自國の美點長所を吹聽せしめた。が、一向に利き目が無い。之は內部に自分達の政策を非難するものがあるからだと考へて嚴しく言論の壓迫を試みて見たこともあるが、是亦海外に於ける不評判を輕減するの效は更に無かつた。

專制主義は棄てたくない。併し專制主義とは云はれたくない。白晝耳を塞いで鈴を盜むといふ諺があるが、鈴を盜んで他人の耳を塞がうと云ふのだから無理だ。

處が一番不評判の高い支那から最近斯う云ふ情報が來た。某大學の教授某氏、支那青年學生の招に應じて各地に講演し、大に共共鳴と感動とを買ひ、爲に彼地に於ける我國の不評判少しく緩和せられたりと。之を聞いた前記の政治家大によろこび、之を利用して親善恢復の端緒を得んものと、段々調べて見ると、豈圖らんや、教授某氏とは彼の最も嫌ひな所謂危險思想家であつた。何の事だと彼は夫れ切り匙を投げた。

やがて又亞米利加から情報が來た。二十有餘年間日本に居た某宣教師、先き頃歸省して母校の某大學で日本に關する講演をした。具さに日本に對する米國の誤解を解き、聽衆に多大の感動を與へたとある。前記の政治家之を聞きて又大に喜び、中々話せる宣教師だとて其の歸任を今や遲しと待つて居るうちに、段々演說の內容を調べて見ると、此國には今仍頑迷度し難い專制主義者も尠くないが、併し青年の多數は平和と自由とに憧れて居る。舊い政治家等は仕方が無いが、我々は新しい青年に將來の望を繫けて親んで行けると信ずる。而してまた今現に壓迫されつゝある之等の青年に限りなき同情を寄せねばならぬと云ふのであつた。之では丸で支那や朝鮮の青年を煽動する外人の口吻その儘だとて、政治家は又もや匙を投げた。

流石の專制主義者にも外交上の孤立は苦になる。之を脫せんが爲には之れまで隨分苦心したが一つも成功しない。偶々成功しさうな手段があるからと覗て之に手を觸ると、意外にも之には何も軍國主義打破の毒素を含んで居る。之れでも此國の政治家は自家の運命に氣付かない。必竟彼等は石を抱いて沈まさらんとする者、此國の隆運は到底此輩の存在と兩立しさうに見へぬ。我々日本人亦以て鑑とすべきである。

中央公論



第卅六年第七號
七月號
第三百七十號

社會の發見

杉森孝次郎

大戰は徒爲に戰はれなかつた。それは世界をして、社會を發見せしめた。發見する機運に向かはしめた。大戰前にも社會はあつた。けれども、人はそれに氣づかなかつた。事實が、その場合に於いても、聰明と良心を追ひ越したのであつた。自覺は、あまりにしば〲經驗の前提でなく、結論だ。けれども、人生の行旅は、本質的には悠久だ。人は意思であり、意思は常に將來主義であるといふ意味に於いてだ。結論として到來する自覺は、絶望的還着ではないのだ。

人が二個、相互の視界能域のうちに生存すれば、恐らくは必ずそこに社會が成り立つ。協力が成り立つのだ。その二個人が、年わかき一男と一女であつたなら、戀愛も成り立たう。その二個人が、同性者であつたなら、時には喧嘩もし

よう。しかし、和解發力の瞬間も頻りに現はれて且つ比較的に永からう。人は本來、友を待つ生物に出來てゐるのだ。すべての生物が、多少の程度に於いて、友待ちの性を帶んでゐるが、人に於いて、その性は著しく強い。人と社會とは、一事實の內容と外觀だ。

船車電路出現して、空間の意義は一變した。社會は坤上大となつた。この幅ぴろい、そして偕音、不偕音の千萬無量に交響する新舞臺を、居据はりの演奏者たり、觀聽客たる現代人は、大戰の前夜までは見なほさなかつた。事後心像（アフターイメージ）の捕虜となつて、主觀的餘影を客觀的現實と誤想した。社會は舊て依つて自國大、自民族大とばかり思ひ込んでゐた。大戰によつて、英は獨の化學品の舶來を見ず、獨は米の貨財の輸入を遮斷され、多くの國々が、諸種の形式に於いて、機械の狂ひと、部分的運轉熄止とを如實に經驗した。大戰の行き盡きるを待たずして、各國の理想家と、先覺者と、責任政治家のうちにさへも、新國際組織の要求が多少あざやかに萌發して來たのは、いさゝかも不思議でない。

現存の諸國民が、現存の社會を、それの內實關係に從つて直視し、正觀し、明認することとさへできれば、民族爭と、國民戰とは、その瞬間に消失する。現代人は、幾多のかたちに於いて、偶像崇拜者だ。この偶像の巨大たる一は民族だ。國民だ。民族と國民とが、全部偶像では無論ない。たゞ、現代人の意識する民族と國民とは、あまりにしば〳〵、あまりに大なる部分に於いて偶像だ。

現存の社會を見ずして、その社會組織の一部を見、それに全部的價値を迷信するが故に、その全的社會組織に痙攣が起こる。裂隙が生ずる。最初は一部の利益と假現して、結局は各部の損失を齎らする。米日も、佛獨も、英露も、東亞異民族も、同一社會の成分たる事理に閉眼する餘地が、餘地といふべく過大だ。社會を見ずして國を見、民を見る。その原始的不聰明は、人を見ずして國を見、民を見る原始的不聰明と竝行する。」

人は社會を形成する。しかしながら、それは文字通りに形成するのであつて、社會の內容實質は、社會の發達路及び橫斷面の各節各位を通じて人だ。人の社會であるといふことは、物の影であるといふことほどにも爭はれない關係だ。人と人の或る關係が社會だ。關係の主客ともに人だ。或ると略したのは、意思に依る協力を理解したのだ。意思に依らない協力なら、相鬪ふ二人者の間にさへもある。勝敗ふたつながら、要するに敵味方の協力の結果だ。その意味の協力は、自然法の別名だ。點滴と軒石との協力の結果が飛沫であり、滔盃と逐扇との協力の結果が落蔕であり、歐洲諸强四年有餘の殺戮的協力の結果が、弱歐强米であるといふやうに、その妥當區域は、因果律の支配領と同一だ。それ故に、社會の定義は、意思の協力でなくてはならん。

近世は、人の發見の時代として發程した。學藝復興の意味と本質は、人の發見の第一着手にほかならなかつた。宗敎改革はその第二着手であつた。啓蒙思潮を先驅とせる佛革命はその第三着手であつた。目下の賃銀制破毀運動はその第四着手だ。世界の道德的中心は、天上の神にもあらず、地下の鬼にもあらず、天下地上の人間であり、しかもその各個人であるといふ知識と信念が、近世文明の基調だ。これ以上に偉大な發見は古來曾てなかつた。恐らくは今後もなからう。第五着手、第六着手と、數限りもなく新な第が展開するに相違ないからだ。そして、その第一着手以來の成績は、粗雜試作の發表にすぎなかつたからだ。かきなほす可能と必要が無際限に併存するのだ。永久に常存するのだ。

人は意思として發見された。カントの哲學は、その不完全なる一象徵だ。人が意思として發見されたことは、アメリカが別大陸として發見され、地球自身が私公轉の一主體として發見された如くに、一事物が、それの眞實性に從つて發見されたのであつた。人は、疑ひもなく意思だ。人を石像土偶から區別することは客觀的に可能だ。第一に意思の有無によつてだ。人を人參根から區別することも客觀的に可能だ。要するにまた第一に意思の有無によつてだ。人を猿猴か

ら區別することも容觀的に可能だ。尙ほ且つ要するにまた第一に意思の有無によつてだ。人參根は石像土偶の持たない成長力を持ち、猿猴は人參根の持たない意識を持つ。けれども、猿猴の意識は、比較的に機械的心理だ。人の意識は、然るに、比較的に創造的心理だ。猿猴に自決能があるとしても、それは比較的に本能を內容としてをる。人の自決能は、然るに、比較的に思索を內容としてをる。想像、實驗、これらこそが人の自決能の主要條件だ。猿猴は、いかに聰明であつても、要するに閾境で測られる分際の聰明だ。人は、閾境では測られないのがその傾向だ。人の本質的傾向は、いよ〳〵ます〳〵閾境で測られなくなるにある。水の如きは、一定の溫度下に置かるれば、必らず沸騰したり、氷結したりする。閾境で測り盡されるのだ。枝葉の暢達繁茂は、日あたりの反射だ。猿猴が智だといふても、一定の閾境に於いては、ほゞ一定の行動を示すのだ。人の智に至つては、一定の閾境に於いてさへ、斷えず變はつた行動を示す傾向が顯著だ。斯くの如くにして人は、今人猶は古人のごとく、尾鰭もなければ、羽翼もないが、今人は古人に比して、その發明的自決能に依つて、尾鰭以上の尾鰭を振ひ、羽翼以上の羽翼を持つ。戰時の英國に、アスクイス氏が首相であつたら、亡びなかつたかも知れない獨逸が、ロイド・ジョージ氏が首相となつて、亡びた。同閾境に對する異反應だ。ロイド・ジョージ氏の一特質は、比較的に、困まつてしまはないことだ。人は、多少の程度に於いて、誰れもロイド・ジョージ氏だ。閾境を改造し、新設する能を、人は固有してをる。發明力を內容とする自決能であり、意思であつて、始めて自決能、意思の榮稱にそむかない。人が意思として發見されたことは、意思が人として發見されたのだと換言しうべき程度に、人が唯一の意思として發見されたことを意味する。

人は意思だ。意思は自決だ。自決としての意思が、複數に、同時及び異時に存在して、その複數意思の間に、協力が起こるときに、社會は形成される。その同時的協力は現實的社會だ。その異時的協力は歷史的社會及び理想的社會だ。

人は、横に同時的に、縱に異時的に、多少の他人と協力する。いひかへれば、各人は、自己の意思を達するために、多少、他人の力を用ゐる。協力が社會だといふことは、社會は各人の內事だといふことだ。各人が、自己の意思を達する方法が社會なのだから、社會は、各人にとつて、その意思が至貴すなはち絕對價であるが如くに必要だ。人と社會との關係は、目的と手段との關係だ。この立言は、社會を輕蔑したのでなく、尊敬したのだ。人が、その目的を遂げるための手段とあれば、社會の意義は、實に重大ではないか。

×

近時わが國の公、官人の間に、無責任の行動が續々として曝露し、綱紀振肅の要が多少注意を新たにしつゝある。公、官人の私利的醜行も、その主原因の一は、かれら、乃至廣く國民全體が、社會觀念を缺乏してをることだ。自己と社會とを、內外の關係に於いて理解し、確信してをる。社會は自己の內事でなく、外事であると思うてをるのだ。公私生活の間に、便宜的假線でなく、實行的眞線を引いてをるのだ。私生活をば本能で營み、衝動で營み、欲望で營み、公生活をば、理性で營むといふ大體の方法論だ。本能、衝動、欲望と合體しない理性は、容易に裏切られる。機會主義の理性に惰落しがちだ。機會主義の理性は理性でない。社會をそとに見るの不聰明、社會を外在的に考へ信ずる謬妄が、公人道德不振の一大因だ。人は意思だが、人にとつて、その意思に次いで、最も內的な、自己的な事實は社會だ。社會は、窓をあけて、望遠鏡を裝して眺觀すべき存在ではない、密室の反省に於いて、悔いと惱みと勇みに於いて、愛の心調と誇りの心樂に於いて、最も直接に、眞實に意識しえられる存在だ。社會は、人のうちに生まれ、育ち、更にまた人のうちにその生育を新たにして、人の存するかぎり、その最親友として生存發達を續ける事實だ。

社會を見るの急要は、國民と民族が多くの人の多くの場合に於いて偶像であることを知るためにも切實だが、階級爭の解決策としても最大要件だ。民族戰と階級爭、現代に於ける一雙の代表的問題は、原因と歸趨に於いては單一だ。社

會盲が原因だ。社會心が闕趨だ。大正の今日に、もしも九州と東北が、日本を忘れて覇を競うたなら、識者ならずともその愚を明視するだらう。日本のためを意識して、その見地に立つて、客觀的綜合的基礎の上に自己の意思を決定し、成遂するでなくては、地方主義は失敗だ。今日の民族戰は、世界を忘れて自己に耽溺する民族間の現象だ。正邪善惡よりも、賢愚智蒙の範疇によつて取り扱はるべき現象だ。悔ゆべき事實であるよりも耻づべき事實だ。目的と手段との間に背反があるのだ。

階級爭は、現代に於いて、民族戰よりも分布圖が廣い。友民間には、民族戰はないかも知れん。尙ほ且つその各民族内に、階級爭はありうるのだ。現在に於いて、階級爭は、ブールジワ對プローリテーリアンのかたちをとつて現はれてをる。ブールジワとはそも〱なんであるか。プローリテーリアンとはそも〱なんであるか。今日プローリテーリアンをひいきする人々は悉くプローリテーリアンであるか。今日ブールジワを攻擊する人々は悉くブールジワでないか。プローテーリアンとブールジワとは、明確な概念であるか。以下しばらく、プとブといふ略語を用ふることにするが、プとブとは、現代に於いて、早くも一種の偶像と幻像とに硬化し果てんとしてをる。資本主義撲滅の勇將コール氏も、最近の一著に於いて、プとブの改釋と新釋とを必要事として試みてをる。プのうちには、手、腕、一切のかたちに於ける勞働者を含め、隨つて學者をも、組織者をも、十分に算入し、商賣人や實業家をもかなりの範圍まで包容し、つまり筋肉勞働または頭腦勞働によつて衣食し、生活する人々全體をプの概念の內容とし、殘りのブをば、單なる富の力によつて衣食し、生活する人々の總烙印とする趣意だ。常識と健全哲學に近づいて來たのだ。既成現存の常識と健全哲學にではない。未成將存の常識と健全哲學にだ。新常識と新哲學は、プローリテーリアン主義の自覺の發達と、教育の增進の原因であると同時に結果だ。その新常識と新哲學は、社會觀念の所有を礎柱の全部ともする。社會とはなにか、人と

はなにか、社會と人との關係はどうあるべきかといふ問題の自覺と、研究と方角と解決を新常識と新哲學は內容とする。

大戰は世界をして國民と民族とを意識せしめた如くに、各國民と各民族をして階級を意識せしめた。意識した結果は、國民主義と民族主義の增進であるが如くに、階級主義の集中加速だ。しかし、大戰自身が、直接には國民主義の作用であつたから、大戰後の國民主義は、複式だ。內實をば從來にもまさる自己集中にし始めたが、外形をばつとめて國際主義にする。國際主義が、僞善の程度に於いて發生したのだ。僞善は半善だと解釋される可能があるから、皆惡よりは進化したのだ。アメリカが武裝して來た如きは、大戰に刺戟せられたる國民主義の新自覺を例示する。アメリカの國民主義の如きは、大戰中、やうやくその發生の緒についたのだ。印度、支那、アラビヤ、埃及、愛蘭等も、大戰によつて國民主義を刺衝された仲間に屬する。民族的または國民的自治獨立以上の把勢實力を有する國民は、すなはち强大國は、肚裏を一層用心深い國民主義にし、本質的帝國主義にして、標面を國際主義にしだした。自治獨立以下の弱小民族は、表裏ともに國民主義を主張しつゝある現狀だ。大戰は、決して、國民主義の總勘定をすました行爲ではなかつた。世界はいま、國民主義の餘燼をあまねくかき起こして、炎々の火焰を再擧するにいそがしい。米その他、新薪材の供給がそれに加勢する。しかし、聲容を國際主義、超國民主義にして來ただけは、進步だ。

階級主義に至つては、單式だ。ロシヤだけは、このさき、複式に變移し行く順序だが、多くの國々に於いては、一九一四年の夏に、近代國民主義の結論的悲劇を開始したりしが如くに、目下おもむろに、近代階級主義の結論的悲劇を開始せんとして準備しつゝある。資本專制の現實と、勞働專制の理想との對立が、目下多くの國々の社會的代表現象だ。超階級主義は、僞善の程度に於いてさへも、未發現だ。天下はいま、明白に資本、勞働兩勢に向背を決せんとしてをる。このいきほひで進まば、遠からずして大破綻が生じよう。一九一四年の六月二十八日の、セラジェオの小變が、世界が目

撃した通りの大變に化した。今後しばらくの間は、各資本主義國は、外難が機會となつて、そして敗折が機會となつて、第二のロシヤとなる多少の可能を有するのだ。一九一七年の初春、殊に暮秋以後のロシヤが、ひとへに惡例だとは決していはない。あの事情下には、峻嚴苛烈なる公規と、共產主義的產業公營、經濟公督が、唯一の、殘されたる賢策であつたにちがひない。資本主義國でも、例へば英國でも、米國でも、戰時中には、幾多の產業を國有と國營に近づけ、國民の三食の種類及び分量をさへも、國家の直接制定下に支配したのであつた。殆んど一時的共產主義の實現に似た現實を呈した。一九一七年の末期以來の露の如きは、英、米の一九一八年の上半期に於ける國內事情に、桁ちがひの窮迫危急を入れかへたものにほかならない。一九一八年の上半期に於ける英、米の國內事情は、純乎たる戰時組織であつた。個性主義の發動の餘地は全部沒收されたのであつた。意見の發表の末に至るまでも、官、公の監督と制裁が追及した。勿論現露の中心人物の見解と信念に從へば、共產制は、早く實施されるに越したことはなかつたのだ。その中心人物の見解と信念に、甚深多大の價値あることをば疑はない。しかし、露の民衆が、好んで、或ひは好まずながらも、莫斯科の政令に服事してをるのは、幾部分は、國內の周圍の事情に援けられての事だ。各國の社會に、恒久的に期待し、希望すべき常則としては、われらは、共產制を信ずる前に、社會を知り、社會を信ずる必要あることを主張したい。共產制は、その信者にいはすれば、かれの社會知、社會信の直接命令だらう。しかし、そこには、研究の餘地があると信ずる。

もしもわれらが、社會內の一階級の生存と榮達とを、最高目的とするならば。他の階級の生存と榮達とは、われらにとつて、全然無益有害であることを、われらは明知し、確信してゐなくてはならん。しかし、階級別の撤廢は、或る意味に於いて、可能にして且つ必要だが、もしも階級別によつて、個性にもとづく生活、事業の種類、性質、程度の別を意味するならば、その意味の階級別の撤廢は、社會の各人の本質的損失であるが故に、社會の各階級の本質的損失だ。例

へば、科學、藝術の保育に不便、不親切な社會組織は、たとひその組織が、階級撤廢の自信の上に成り立つてをるとしても、理想的でない。昨今の露が、科學、藝術の保育に、事實上不便、不親切であつたのは、主義に因る現象であるよりも、力の不足に因る現象であつたかも知れん。やゝ新努力を、その不足の補充に示しかけて來たのは、いさゝかわれらの意を强うする兆象だ。莫斯科の中心人物は、生きてをる人であるから、經驗からも學び、反省と研究からも學ぶところが今後ともにあつて、共産主義の形式的學說の或るものよりは、事實上賢明な點があらう。實行に於いて、多少新學說を創示するかも知れん。産業と經濟は、重要價値ではあるが、社會の總價値ではない。富の生産者が、有價人のすべてでもない。先づ人格的個性の本質的全内容に開眼して、それに組織あり、統一ある發表實現の機會を十分に給與することが、理想的社會組織の第一原則でなくてはならん。戰時、非常時、窮迫時、危急時の最賢策が、必らずしも平時、當時、餘裕時、安泰時の最賢策ではない。最近の階級鬪爭は、その根を深く人の本質的自覺の發達に有し、政治的デモクラシイの初幕としての佛革命に相當した、經濟的デモクラシイの初幕の準備たる意義を有する現象ではあるが、最々近には、露の無限度信の實行が、殆んど測り知られぬ深影響、强感化を、所在の青年と、勞働者と、獨立思想家に與へたことは、毫頭の疑ひをさしはさむ餘地もない。最近の露の實證は、世界歷史の立派な一段節であつて、われらは、ひとへにそれを變態視し、例外視すべきではない。汲みうるかぎりの教訓と示唆と啓蒙とを、われらは最近の露の、犧牲多き、勇敢なる理想主義的實驗から汲みつくす良心と聰明とを要する。ただわれらは、その實驗が、いかなる社會の現象であつたか、またあるかを、明確に知る責務を帶ぶ。理想には、絶對妥當的方面と、相對妥當的方面とが常にある。莫斯科の中心人物の至誠にして僞りなき心實と行實、その堅信不拔の長き過去、その公普を熱欲する聖志、その進步的思想、いづれもわれらの理想我を刺戟する、偉大なる道德的、宗教的價値だ。しかしわれらは、いかなる價値の前にも、

催眠化せられてはいかん。いかなる價値をも、偶像式に崇拜してはいかん。後世の回教徒がマホメットに對し、現代の基督教徒がヤソに對する態度は、後世現代の佛教徒が釋迦に對し、後世現代の儒教者が孔孟に對し、或ひは世間の二宮信徒が二宮に對する態度と同樣に、われらの執るべき態度でない。われらは明信すべきだ。迷信すべきでない。莫斯科の中心人物が、絕大の思想家でないことは、新思想、新學說の偉大なる創建者で、かれがない一事にも明示されてをる。また近代の露には、產業と呼ぶに値ひするほどの產業の發達は未實現であつたことをも、われらは忘れてはならん。敎育の普及は、甚だしく未實現であつたことをも記憶すべきだ。大多數農民は、無知識、迷信の盲動者であることをも注意せねばならん。それから、帝政時代の惡政を、その程度に從つて知了せねばならん。規律、訓練、秩序、組織にかけて無能であり、短能であつた民性、民情、民俗をも想起せねばならん。非常窮迫といふ一時の事情に加へてだ。治療は醫者の絕對妥當理想だ。しかし、同一名稱の疾患をさへも、或る場合には內科療方に從ひ、或る場合には外科療方に從ひ、時あつてか單なる自然健康增進療方にさへ從ふ。社會理想家と、社會經營者も、その理想の絕對妥當的側面と、相對妥當的側面とを、自由に識別し、區別するだけの智と術を持つべきだ。

社會を知らずして階級鬪爭に全信を托してはならん。社會を知らずして民族鬪爭に全信を托してはならん如くにだ。生活の一極に人格的個性を體證し、生活の他極に社會を確認せよ。そして、その兩極の間に介在する萬事、落ち來たる萬物をば、便宜的には社會の名に於いて、或ひは一層根本的には、人格的個性の名に於いて、解釋し、批判し、待遇すべきだ。社會の布をば、人格的個性の本質價によつて織らねばならん。經緯あはせてだ。本質價が偶然價に虐服される光景は、生活の舞臺から迹を拂ふやうにせねばならん。ただ、われらは、人格的個性の本質價そのものが、驚くべく多種多樣であること、ありうることに、十分に敬虔なる注意を向けねばならん。偉大なる客觀詩人の心理は、一主義の實

行者にも、その背景として所有さるべきだ。

われらは、抽象的社會理想と竝行して、具體的社會理想を持つべきだ。具體的社會理想の名にかくれて、偏狹固陋なる地方主義、習慣主義、或る種類の傳統主義を保護し、主張することは、もとより罪惡だ。それと同時に、抽象的社會理想の單純信者となつて、時代と地方とを理解せずに、劃一主義を信じ込むことも、禍害だ。青年心理の落り入りやすき一危險は、抽象的社會理想偏信だ。老人心理の落ち入りやすき一危險は、具體的社會理想偏信だ。社會は、抽象的側面を有すると同時に、具體的側面を有するのだから、眞の社會理想と社會策は、社會を、その兩側面から觀じ、信ずる人の特權だ。社會を具體的に知らぬ結果は、模倣だ。過去模倣か、近隣模倣だ。無暗に中世を模範視し、または、盲目的に先時代の思想家の豫言を履行する如きも、過去模倣に屬する現象だ。同時代の異邦の改造新設を、科學的に研究するを待たずして、早くもそれに對して宗教的に信念の結論を構成し終はる如きは、近隣模倣に屬する現象だ。模倣によつて伸びる部分は、一社會と他社會との類性的部分であつて、一社會の特性的部分は、發明によらねば伸びない。社會は成長を目的とすべきだ。それ故に、社會は、模倣するのみではいけない。社會の本質的中樞的要務は、模倣に存せずして、發明に存する。われらは、社會を、成長の可能體、必要體として發見すべきだ。

人格的個性の本質的要素のおの／＼を、擴大し、類集し、發展させたかたちが、社會内の各專門、各職業だ。またその專門や職業を、直接的及び間接的に背景とする組合や結社だ。專門や職業は、及び組合は、本質的客觀的區別では決してなく、主觀的便宜的區別に過ぎない。生產者と消費者、役人と人民との關係が、この間の事理を語る。專門や職業は、なんらかのかたちに於ける生產だ。役だ。畫家は畫を生產し、樂人は樂を生產し、農夫は食料品の大部分を生產し、建築者は家屋を生產し、炭坑夫は炭を生產し、鐵道從業者は運致を生產し、醫家は治療を生產し、學者は知識を生產す

る。生産者としては、世が進めば進むほど、人は間口を狹くする。社會に於ける自己の間口を狹くする。しかし、消費者としては、世が進めば進むほど、人は、社會に於ける自己の間口を廣くする。各人は、殆んどその社會のすべての專門と職業の生産の消費者だ。觀劇をも好み、聽樂をも悦び、農産物をも食し、家にも住み、炭をもたき、汽車にも乘り、醫者にもかゝり、科學をも信用する。消費者としての一人は、生産者としての萬人を意味する。一人格的個性の自給は、社會のすべての人格的個性の力を利用することによつて、可能とされる。もしもわれらのおの〳〵が、限りなき能力の所有者であつたなら、われらのおの〳〵は、一人にして萬業を兼ねる筈だ。ただ一人の力には、なさけないほどの制限がある。その制限ある一人の能力をもつてして、制限なき一人の必要を滿足させる方法として、われらは、社會を發明する。個性の本質的特殊化と、その特殊化された個性の組織だ。新意義に於ける、すなはち改釋せられたる分業的協力だ。されば、われらが、一專門や一職業や、隨つてまた一組合に社會的全理想を基礎づけるならば、それは、社會盲であるよりも、自己盲だ。自己認識の缺乏だ。

科學自身の分業も、近代いよ〳〵發達して來た。各學者は、一科の學者だ。けれども、宇宙そのもの、實在そのもの、經驗そのものに、化學的、物理的、生理的、心理的、經濟的、政治的、教育的、藝術的等の、本質的客觀的別領域が存在するわけでは決してない。宇宙は一體だ。ただわれらの研究力に、かなしむべき自然的限度あるが故に、われらは、一體を多體に抽象化する窮策を講ずる。そして、結論に於いては、あだかも最初から、客觀的一體を、如實に一體として研究したかの如き成績を享樂する。專門學者にあるが、專門經驗や、專門實在や、專門宇宙は絶無だ。おの〳〵の專門學者が、その專門を、近時やうやく偶像的に崇拜する傾向がいちじるしい。

科學と藝術との間にも、藝術と生産との間にも、すなはち專門職業の各一態と各他態との間には、人間の主觀的便宜

的區別が成り立つのみであつて、その客觀的本質的區別は成り立たないわけなのだ。偏狹なる專門的嫉妬、職業的排他は、その專門と職業に對する無自覺だ。結局は他と自とを傷害する。

專門と職業のおの〳〵が、かたちに於いては別人の內容を形成しても、意味に於いては、一人の內容內の殊差、異別にほかならない如くに、組合は、今後殊に、簇々として多種多數に發生し、成長する社會的必要があるが、斯くして發生し、成長する諸組合も、實は、各人の內容の或る部分を形成するにすぎないことを、われらは、注意すべきだ。いかに多種多數の組合が發達しても、もしもその各組合の間に協力がないならば、それは社會內の現象ではない。社會內の現象であるかぎり、多種多數の組合間には、一人の個性の一部と他部との間に存する關係が、その基礎的關係として實存せねばならん。一組合の一員たることは、その組合が、その人にとつては、自己の生活の一部を形成してをることを意味する。一人が、二、三、四、五乃至それ以上の異組合に、一員として屬してをることは、その人が、二、三、四、五乃至それ以上の部分を、相當組合の名に於いて自己生活內に所有することを意味する。組合の總額は、社會の全內容には達しないが、社會の全內容をもつてしてさへも、一人の生活內容の全體をば形成しえないといふ結論を述べれば、一組合と一人との關係、乃至すべての組合と一人との關係、隨つて一般的に、組合と人との關係が、いかなる性質のものであるかは、推知される。社會を知らずして、組合を知ることはできないのだ。人を知らずして、社會を知ることはできず、社會を知らずして、組合を知ることは、演繹論理の法則に從つて、できないのだ。

現今の一不備は、人を知らず、人を信ぜずして、先づ社會を知り、社會を信ぜんと欲するにも大いに存するが、人を知り、人を信じた上の社會を知り、社會を信ずることなしに、先づ組合を知り、組合を信ずるにもある。演繹方と歸納方は、相まつて自他の用を增す。組合に對する知、信から、社會に對する知、信に進み、更らに進んで人に對する知、

六

信を補修完成することは必要だが、大體に於いて、人に對する知、信と、社會に對する知、信が、根本的、總要的に準備されてをることが、今後のわれらの生活に於いては殊に切に必要だ。さうでないと、われらの生活の、内容自身の一部と他部とがきしる。人を發見した上の社會の發見は、その發見にもとづく知と信は、そのきしりを避ける油だ。

革命もきしりだ。戰爭もきしりだ。きしりの著大なる發現だ。人觀と、それにもとづく社會觀が、唯一の油だ。温情主義や、外交政策は、却つてそのきしりを激烈にする。油とはいつても、既成現存の階級別や國民別を保存して、その階級間、國民間だけに、新知信を挿入するわけではない。既成現存の階級、國民そのものに、本質的變化、改新、消滅、轉生を催進するのだ。階級人として死し、社會人として再生するのだ。國民人として死し、社會人として再生するのだ。社會人の誕生よ、人類の新紀元は、こゝに開始される。現存の諸問題は、この新生兒の成長によつて、かれの手によつて解決される。

長谷川如是閑先生著

四六判六〇〇餘頁
脊皮美裝製本箱入
正價金參圓五拾錢
書留送料金貳拾錢

最新刊

現代國家批判

本書は長谷川如是閑先生が近時世に公にされた論文十五章を國家及び政治の二篇に分つて之を集大成したものです。先生の文章は全く講壇の臭味を絶つてゐますけれども、その所論には諸科の專門に亘る該博なる智識が有機的に統一されて居り、その底には著者の人格の釀す潜熱か草原を横ぎる龍の如く見ゐ隱れしてゐます。その國家批判の諸篇が當代の論壇に於て最も異彩を放てるものなることは今更申すまでもありますまい。

發行所

京都市丸太町寺町東入
振替大阪三五二六四番

弘文堂書房

日支經濟同盟論に實行的價値ありや

法學博士 堀江歸一

繰返しの日支經濟同盟論

大正六年の十月から十二月に至る三個月間、私は或る用向きを持つて、北京に滯在して居つた。當時歐洲戰爭は酣であつて、果して捷利の榮冠は聯合諸國と獨墺諸國との孰れに戴かれるや、殆ど測り知る可からざるの趣であつた。隨つて歐米諸國も内國戰時財政を處理するに忙はしく、財力を支那の方面に用ひることを許されなかつたものであるから、支那は日本に向つて財政上の援助を仰がなければならぬことゝ爲つた。卽ち支那の方では日支親善論が高唱され、一方に當時の國務總理であつた段祺瑞も、日本の首相であつた寺内伯も共に軍閥出身で軍國主義を崇信すると云ふ點から、所謂肝膽相照す仲であつて、日支親善を具體化する爲めに、兩國の間に經濟同盟を組織しようと云ふ說が有力に爲り、私の如き屢々支那人から斯る同盟の利害に就て、意見を徴されたことがあつた。當時支那に中央財政の困難を救治する爲めに、種々の利權や、財産を擔保に提供して、借款を起し、日本獨り之に應じた。而して此借欵に應じて、日本が支那に資金を融通する、斯る資金に依つて、支那の富源が開發され、又借欵で敷設された鐵道が此富源を運搬し、結局日本に向つて、豐富に供給されたならば、是れこそ卽ち日支兩國の間に經濟同盟が組織されたものであると云ふ論法が一部の人々に依つて認められ、支那政府の方では何でも借欵が成立して、一時の財政難が救はれゝば、目的を達したと云ふ考で、前途の處置の如きは、少しも考へずして、盛に借款を申出す、一方に日本の方では寺内内閣の意を承けて、特種銀行が支那に向つて借款に應ずる、寺内首相に緣故があるとか、或る首相から密旨を授けられたとか稱する輩が頻に借欵成立の斡旋をすると云ふような有様であつた。

然らば斯く日支經濟同盟を實現する手段として、行はれた借款は如何なるものであつたらうか。成立の當時から、不信用の

もの丶少なくなかつたことは、明白の事實であつて、現に借款に斡旋した特種銀行が今日其整理回收に苦んで居ることを見ても、其一斑を知るに難しとしない。然らば是等の借款を通じて調達された資金は何か永久的利源でも開發する目的を以つて、或る所に固定して、其爲めに回收困難に陥つたのであるか、果して然らば貸すに時日を以つてしたならば、漸次回收されるかも知れず、又資本運用の効果が實際に現はれるとすれば、原料品其他天然資料の產出高が豊富に爲つて、日本に對する供給を確實にするを得る譯であるが、事實は決してさうでなく、段祺瑞内閣が借款に依つて、日本から融通を受けた資金は歐洲戰爭參加の經費や、南方討伐費などには勿論其他の政治上の仕事に空費されて、今日に至つて見れば、何等經濟上の意義や、効果は之を求めるを得ないこと丶爲つたのである。

經濟同盟とは何であるか

經濟同盟と云ふことは、時々一部の論者が唱出する言葉であるが、嚴格に解釋して、如何なる說明を下す可きものであらうか。今日の如き國際關係の下に於て、國と國と相對して居れば兩者の間に必ず或る經濟上の交涉接觸を生ぜざるを得ない。然し是れだけでは、經濟同盟でも何でもない、經濟同盟と云はれるには、兩國の間に於て發生す可き經濟上の關係を自然の成行に一任しない、之に或る人工的制限を加へて、特に他の諸國に對するよりも、兩國に對して、便利であり、親密である關係を現出せしめることを必要の條件とするのである。例へば英國と濠洲聯邦との間には、特惠關稅の制度がある。近年まで濠洲の方だけで、英國の物資に低率の關稅を適用する偏務の特惠制度であつたが、今度の戰爭に於て、英國自ら濠洲其他殖民地の物資に對しては、諸外國から輸入される同種の物資に對するよりも、低い輸入稅を賦課すること丶爲り、斯て双務的特惠關稅制度の成立を見るに至つた。固より特惠の施される物資の數に制限があり、又特惠稅率と普通稅率との開きも餘り大きなものでないが、兎に角斯る制度が成立すれば本國と殖民地との經濟的關係は餘程厚くなる譯である。然も尙ほ之を以つて本國殖民地間の經濟同盟など丶稱するを得ない。何故かと云ふに、濠洲聯邦の重要なる產物は食料品と原料品との兩者であつて、英國に輸出するものも亦是等兩者に外ならない。故に英國が總て外國から輸入する原料品や、食料品に輸入稅を賦課し、濠洲加奈陀から輸入する兩種の物資に無稅の輸入を許すこと丶したならば、關稅特惠の効果は餘程顯著に爲り、一方に殖民地も本國に向つて多量の原料品食料品の賣れる所から、自然本國に就て、多量

の製造品を買ふこと丶爲るであらう。斯う爲れば此關係を指して、經濟同盟とも云へるが、英國と殖民地との特惠關稅制度は決して此程度に至らないのである。何故斯る程度まで進まないかと云へば、英國は今日世界到る所の產地なり、市場なりから、食料品と原料品とを買入れて居ればこそ、最も豐富なる又最も廉價なる供給を受け得るのであるが、若しも特惠關稅制度で、外國の供給に係る食料品原料品を排斥したとした所で、殖民地產出の食料品原料品を以つて、之に代らしめることが出來るかどうか。今日の狀況を以つてしては、英國は殖民地だけの原料品食料品では、從來諸外國と殖民地との兩者に供給を仰いで居つたと同じ程度の供給を受けられない、其れでは英國工業の存立上に一大打擊を及ぼすこと丶爲る。英國の如き、世界到る所に殖民地を擁し其殖民地の政府なり、人民なりは本國の利益に殉する決心を持つて居る、狀態の下に、尙ほ經濟同盟を組織するに就て、幾多の難關の存在することは、吾人の記憶を要する所である。

同盟と云ふことの一面には排他と云ふことが伴ふものである。卽ち一國が他國と經濟上の同盟を結んだ以上は、資金の貸借に於ても、物資の出入に於ても、船舶の往來に於ても、同盟國との關係を重くして、同盟以外の諸國との關係を輕くすることゝ爲らざるを得ない。同盟を結ぶ對手國は一國なり、二國なり、要するに少數の國である一方に、同盟外に居る國の多數であることは、論を俟たないとして、單に一國との關係を厚くする爲めに、他の多數の國と疎隔する事が得策であるかどうか、經濟同盟論を提唱するに先だつて、吾人の思を致す可き點である。

日支經濟同盟論の論據如何

以上私は經濟同盟なるもの丶輪廓を畫いて、其性質なり、其成立の要件なりを明にしようと試みたが、此種の同盟は本來日支兩國の間に存立する可能性を持つて居るものであらうかどうか。思ふに兩國の間に經濟上の關係の密接に爲る可き理由のあることは、爭ふ可からざる所である。左に之を揭げる。

第一、兩國は地理的に接近して居り、運輸交通は最も便利であり、又同文同種の關係から、接近し易かる可き筈である。

第二、支那には各種天然富源、地下に埋藏されて居るものが無限であると稱されるが、之を開發して、一個の富とするだけの資力もなければ、經營能力や、技術的知識もない。是れでは所謂寶の持腐れであつて、何の用を爲すを得ない。

第三、然るに日本は近年諸種の工業が勃興したとは云ひながら、其經營に要する原料は多く外國から輸入するのである。

而して其外國と云ふ内には、南北亞米利加もあれば、濠洲、印度、海峽殖民地もあり、隨分距離の懸隔であり、又我國と外交上如何なる關係を生じるか、豫想し難い國に供給を仰いで居るものもある。日本の現狀に訴へて、原料品の内國自給は到底望み難い所であるとして、之を外國に求めるならば、今少し日本の權勢の及ぶ、又交通の安全を保障し得る場所に就て、之を得ることが出來ないものであらうか。之を得ることの能否如何は誠に我國工業の存立又は發展の上から考へて死活問題としなければならぬ。

第四、斯の如く煎じ詰めて考へて來れば、日支兩國の經濟同盟は可能性を持つて居るように思はれる。即ち日本は支那に比較して豐富である資本、發達した技術經營能力を供給して支那の富源を開發する任に當る、開發された富源は日本の船舶で、日本内地に於ける工業家の用に供へ、之を原料として製造された製造品は支那の内地に輸出することゝしたならば我國の工業に於て重要問題を以つて目されて居る原料品供給の確保と云ふことも解決され、一方に支那は事業に資金が供給されて、富源開發、日を逐うて進んだならば、國內の人民に職業を與へて、其生活程度を上進させ得るであらうし、又輸出貿易の増加する結果、外國から製造品の輸入を受けて、之に對する代價の決濟容易なるに至るのである。

日支經濟同盟論者は右の如き議論を直に以つて、經濟同盟の根據に充てようとするのである。然しながら私をして言はしめれば、右の議論は日支兩國の經濟關係は密接にしなければならぬ、又他に著しき障害の加へられない限り、必ず密接に爲るであらうと云ふだけの話であつて、前掲の事情が其れ〳〵兩國に在るとした所で、之を以つて直に經濟同盟の成立する論據とするを得ないと考へる。

日支經濟同盟に對する障害と疑問

私は既に經濟同盟を以つて、漠然兩締盟國の經濟的關係を密接にすると云ふばかりのものでなく、一國は他國から優先的に天然資料の供給を受ける、他國は一國から同じく優先的に工藝製造品を買入れる、而して其賣買の行はれる間に、同盟以外の國々排除する意義の存するものでなければならぬと解釋した。經濟同盟に對して、斯る解釋を下した以上は、此種の同盟を日支兩國間に組織するには、兩國相互の交易取引に特惠的待遇を與へる協定を結ばなければならぬのである。即ち

(一)支那で產出される天然資料即ち原料品の類で、殊に日本の資本に依つて生産されたものは、年々或る分量まで、日本が

優先的に供給を受けること

(二)支那は日本の資本に依つて產出される天然資料の供給を增加させる爲め、外國に借款を起す場合には、先づ日本に交涉すること

(三)日本は支那の天然資料を輸入する場合には、自由輸入を以つて、其本則とし、一方に外國から輸入する同種天然資料には相當の課税をする、若しも兩者に課税する場合には、支那の物資に對する税率を輕くすること

(四)支那が日本から製造工藝品を輸入する場合には、之に對する輸入税は全然免除するか、少なくとも外國同種の物資に賦課するものより之を、輕くすること

の諸條件は日支經濟同盟の骨子と爲る可きものであつて、是等の條件が缺けて居り、又備はらないようであつたならば、經濟同盟は名あつて實なきは勿論、幾ら人々に依つて呼號されたとした所で、犬の遠吠と異ならないのである。然るに今日の通商條約は如何なる主義の下に締結されて居るであらうか、其主義の一つは所謂通商の自由であつて、此自由を享受する爲め、各國は他國との通商條約に於て、或る一國に對して殊遇を與へることを禁止する方針を取つて居る。殊に支那の如き、所謂天然の寶庫であつて、如何なる國も此寶庫に近づくことを希望して已まないと共に、或る一國をして之を私せしむることに、絕對の反對を表するのである。列國が今日支那に對して、門戸開放と機會均等とを二個の主義とし、以つて外交政策を律して居ることの如き、卽ち如上の趣意に基くものに外ならない。隨つて日支兩國共に他の諸國に對して、最惠國條款の無條件適用を基礎として通商上の關係を律しなければならぬ規定を通商條約に於て認めて居る。果して然らば此規定が通商條約から除却されない限り特惠主義の下に、兩國の間に經濟同盟を成立させようとした所で、事實に於て不可能とせざるを得ない

假に通商條約が改正されて、兩國の間に特惠主義を以つて、關税則を制定するを得たとした所で、果して是れが兩國に有利なる結果を齎す所以であらうか。第一日本は支那に原料品の供給を仰ぐ方針を取り、從來諸外國をして供給させた分まで、盡く支那に供給させ得るであらうか、第二斯る狀態に達するまで日本の資力を以つて、支那の富源を開發し得るであらうか、第三日支兩國協力して、支那に於ける門戸開放、機會均等の主義を蹂躪し去ることは諸外國をして日支兩國に對して、或る報復の手段に出でしめるの虞れなしとしないであらうか、第四支那は日本の工藝品に差別的殊遇を與へて、此輸入を便にするとした所で、日本は果して支那の需要するだけの工藝品を豐富に又

低廉に供給するを得るであらうか、支那の爲めに謀れば、寧ろ日本だけでなく、他の多くの國から支那の好む所に隨つて、輸入することを以つて、便利であると考へないで居るであらうか、第五日支經濟同盟の下に、日本は專ら支那を原料品の産出地とし、一方に支那に向つて、工藝品を賣却する、斯くて日本は原料品供給の確保に就て、安全なる地位に立つことが出來るとしても、一方に支那は何時までも原料品供給國として、滿足して居らなければならぬ。原料品を産出する國は即ち農業を主要の産業とするものであつて、文化の發達から云へば、製造工業の盛なる國に比較して、幼稚であることを免かれない、支那が何時まで斯る狀態に安んじて居るであらうか。殖民地であつても本國の爲めに、何時までも農業國の地位に立つことには、默許せざるを得ない、隨つて此地位に立たしめるに就ては、本國の方で殖民地の爲めに、讓歩しなければならぬ。本國殖民地の間であつて、既に然りとしたならば、一個の獨立國をして永く他國の爲めに天然資料の供給國たらしめるのは餘程の難事である。現に先年支那が鐵鑛の採掘に就て、外國資本の干與することを禁止し、又鐵鑛其ものゝ輸出を制限する法律を制定したるが如き原料品産出國として居るよりも、製造工業國として立つ方が經濟上に於て、得策であると云ふ考から出たものであつて、今後此種の考は支那が國際經濟上に於ける地位を進めんとするに隨つて、强さを加へることであらう。第六支那が安んじて日本の原料品供給地を爲るとした所で、支那の天然資料をして今日以上に充分の産額あらしめようとするには、富源の開發に就て餘程多くの資本を要する。然るに支那に對する資本の供給に就ては、從來の來歷から、國際間に借款團なるものがあつて、一國獨自の行動を許さない、是れは或る一國が支那の運命を制するような地位に立つことを以つて、國際關係上に於て、危險であるとし、之を掣肘する爲めに設けられた規約であつて、門戸開放、機會均等の政策と共に、對支外交上の根本方針としなければならぬ。日支經濟同盟は要するに支那の門戸開放主義にも牴觸するし、一國と他國との間に於ける機會を不平等ならしめる處もあるし、又資金供給の點に於て、日本をして支那に優越權を擁せしめるに至る。斯の如きは從來諸國に依つて承認された對支政策の根本原則に背反するものである。他國と對支外交に於て、協調し來つた日本が今日卒然として斯く方嚮の異なつた所に獨往し得るであらうか、私の信ずるを得ない所である。

六月八日の東京日々新聞は原内閣の大藏大臣高橋是清氏が日支經濟同盟に關する一片の意見書を起草し、元老、國務大臣、外交調査會委員其他の有力者に配布したと云ふことを報道した。

高橋是清氏ならば往年秘露の廢鑛事件で、何か間違のあつた人であるから、此方面の問題に就て、意見でも出すには、多少の縁故もありとしよう。又國民は株式の賣買に堪能であつて、事の眞僞は知らないが、一兩年前の議會では、何か職務上の知識を利用して、株式の賣買で、奇利を博したと云ふ攻撃を受けたこともあるから、株式關係の問題に就て、意見を公にするならば、自ら理由ありとも云はれよう。然し高橋氏と支那方面の問題とは如何にも縁が遠い、支那に就て高橋氏に幾何の知識があり、又造詣があるか、私の知らない所である。而して同氏の意見書も私は直接に披見した譯でないから、立ち入つた批評を下すに苦むが、東京日々新聞の報ずる所を綜合すると、第一我國が五大強國の一として、其地位を維持するには、不讃の物資を確把しなければならぬこと、第二隨つて、我國は未開の資庫である隣邦支那と徹底的に提携し、我は彼を開發して、物資の不足を補充し、彼は我に依つて、其領土を保全すること第三帝國主義的思潮に累せられた我國對支方針の如きは、之を撤去し、彼の大隈内閣時代の日支協約の如きも、我國より進んで之を廢棄すること、第四支那は今日非常に財政困難を極めて居るから、我國は進んで借款の要求に應じ、都合に依つては、四國借款團を脱退するをも辭さないことの諸點に外ならないようである。

「人を以つて、言を廢せず」と云ふのは、支那の一格言である。高橋是清氏は私共の眼から見ると、餘程變な人であつて、其財政經濟上の問題に就て發表する意見の如き、常に常識を逸し又道理に外れたものばかりである。隨つて私の如き、財政家としての高橋氏の技能なり、見識なりに對して、寸毫の信用を拂うを得ない、斯る人物が我國財政の當局者であることの如き、選叙を誤まれるの甚だしきものであつて、我國の財政に損傷を及ぼすことの幾何であるか、殆ど測り知る可からざる譯である。現に高橋氏が藏相と爲つて、今日に至る二年半の歳月に於て彼は我國の財政に對して幾何の貢獻をしたであらうかと云へば單に漫然たる積極主義の下に、無謀なる經費の膨脹を招き、經濟社會を過度の投機熱から、極端なる不景氣に陷らせた罪惡こそ頗る顯著であるが、功勞の認む可く、錄す可きものに至つては、一として其在るを知らないのである。財政家としての高橋氏の不信用は世間公知の事實であるが、今回彼の發表した對支經濟意見には多少の見處がある。即ち從來の對支外交に於て、

我國外交當局者に一定の見識がなく、時に或る方針が定まつたかと思へば、當時支那に於ける或る權力者を支持する位のものであつて、其權力者の爲す所が果して民衆の利益に副ふや否やと云ふようなことを顧みない、隨つて我國當局者は存外支那の爲めに謀つて居る積りでありながら、却つて我國をして支那に於て、民怨の府たらしめた趣がある。殊に近年軍閥の勢力が對支外交上に加はつて以來、我國は何か支那に對して領土上の禍心を懷くものゝ如き想像を支那朝野の人士に持たしめることを免がれなかつた。我國では斯る想像の支那側に起るに隨つて、之を打消するに勉めたようなものゝ、支那の要地に我國の駐屯軍を配備し、軍の威力で支那人を壓倒し、斯くて其間に我國の勢力を張らうとするのが軍閥者流の對支外交上の方針に外ならない。大隈內閣當時の日支協約の如き、最も露骨に此事實を表明したものであつて、是れでは支那人が我國に信賴しない、他に信を託す可き國があれば、其國の庇保を受けて排日的所業を無遠慮に講じて、已まないのは寧ろ事の當然とせざるを得ない。されば此點に於て、高橋氏が軍閥外交の弊を論じ、帝國主義的思潮に累せられた手段方法を誤まれりと斷じ、更に進んで日支協約二十一個條中の或るものゝ廢棄を說いたのは、誠に高橋氏の議論としては、空前の――或は恐らく絕後の――名論であつて、私の贊成を惜まない點である。私が人を以つて、言を廢せずと云つた趣旨は自ら爰に存するのである。

非常識なる經濟論

然し高橋是清氏の非常識であり、又知見の蒙昧であることは先天的病弊であると見へ、對支外交に於て、軍閥の勢力を除却し其臭味を一掃す可き點に關して、相當の議論をして居るかと思ふと、肝腎の經濟論に於ては、支離滅裂の言を爲して、憚らない。是れでは千日で刈つた萱を一日で燒くの愚を演ずるものである。

第一高橋氏は曰く、我國が支那に資金を融通するに就て、借欵國が妨碍に爲るならば、我國は四國借欵團から脫退するを辭するものでないと。議論は如何にも豪快であつて、恰も氏が衆議院で反對黨議員を一喝すると同樣の威勢を示したものと見られるが、要するに斯の如きは一場の空氣焰に過ぎない。我國が卒然借欵團から脫退することの國際間の信義に反する點は姑く措き、單に利害の上から打算しても、非得策であることを認めるに苦しむ。成る程歐洲戰爭中歐洲諸國は勿論、北米合衆國にしても、支那の借欵に應ずる餘裕を持たなかつた、隨つて寺內內閣の時代に於ては、日本は對支借欵に於て、殆ど獨舞臺の地位

に立ち、歐米諸國をして我國の後塵を拜するに至らしめたのである。若しも今日斯る狀態が依然として存續して居るならば、我國が借款團を脫退して、對支借款政策に自由の手腕を揮ふとも、我國現在の資力の之を許す以上は、或は可なりとし得るかも知れないが、私は決して其然るを信じない。高橋氏等は或は歐米諸國の戰後に於ける財力恢復を悲觀して居り、之を根據として、我國の借款團脫退に介意しないのかも測り難い。然しながら諸國の財力恢復は要するに時期の問題であつて、合衆國が最も早く恢復し、英國が勞働爭議さへ或る點に於て、收拾されたならば、之に次ぐであらうと云ふことが、公評である。殊に諸外國は今度の戰爭で、對外放資の方嚮に就ては、國家自ら嚴重なる監督を加へることの必要を認めるに至つた。卽ち資本家の利己心で資本の或る方面に放下されようとする場合に、國家が他の方面に資本の放下されることを、より以上に必要と考へたならば、國家の干涉で、資本放下の方嚮を前者から後者に就かしめる政策は大に重要視される模樣である。果して然らば對支放資の如き、英米兩國のような國柄に取つては、他の方面に於ける放資を節しても、寧ろ此方面に向はせることを得策とす可き譯であつて、支那を放資上に於て日本の獨擅場たらしめるは、思ひも及ばざる所である。然らば高橋氏の說の如く、日本は四國借款團から脫退しても宜しいと云ふことの如き、無茶苦茶論であつて、斯る粗笨なる頭腦を以つて、對支借款政策に於ける協調主義を一掃し去らうとするが如き、私をして云はしめれば、末恐ろしきの感なきを得ないのである。

第二、高橋氏は日支經濟同盟の前提として、先づ日本から支那に資金を融通して、財政を整理しなければならぬと考へ、年額八千萬圓を五年間引續いて貸出すことを必要とするさうである。我國に何等の苦痛なく、是れだけの資金を連年繼續して、支那に融通する餘裕があるとして、一方に支那の財政を整理するのに、四億圓の資金を融通したゞけで、足りるであらうか。支那は近年財政に困難を告げて、收支不適合の狀態に居り、昨今は官吏の俸給支拂にすら、支障を生じたと云ふ程の次第であるから、或る國が支那の求める儘に、借款の要求に應じたならば財政困難を救ひ得るであらうと云ふことは、高橋氏の如き素人の考へさうなとである。然し支那の財政困難は決して收入の不足に基くと云ふやうな簡單なる問題ではない、根本的に財政を整理しようとする以上は、政治上の制度組織に變革を加へなければならず、又富源を開發し、國力を培養し、國家の求めるに隨つて、收入の調達される工風を講ずることを必要とする。單に數億圓の資金を支那に貸付けたゞけで、其れで支那の財政が整理

されると思ふのは、何たる戯言であらうか、私の許するに苦む所である。

第三、高橋氏は我國から四億圓の資金を支那に融通したならば、支那の財政は整理されるものと考へて居る。四億圓の資金にして、財政整理の爲めに、支那政府に貸付けられるものである以上は、所謂日支經濟同盟の骨子である支那富源の開發には、直接の關係を持つものではない、此方面の資金融通には專ら民間の富豪、事業家をして之に當らせることゝ爲るのであらうが、此場合に支那の幣制が今日の如くであつては、資金の融通に大なる障害たらざるを得ない。支那の幣制を改革して、金貨の基礎に移すことは、對支經濟策上に於ける最大重要事項であつて此一事を閑却して、國民に對支放資を勸奬した所で、効果の擧る可き譯のものでない。高橋氏、僅々四億圓の對支貸付に依つて、支那をして幣制の改革まで行はしめ得るものと考へて居るのであらうか。果して然らば氏自身の無智を暴露したものか、然らずんば、氏自ら世人を愚にしたものと許す可きである。

第四、從來我國で對支借款の最も盛に行はれたのは、寺内内閣の當時であつたが、當時の借款 單に金を貸す爲め、又借りる爲めの借款であつて、其目的とする所は甚だ簡單であつた。其れにしても餘りに債主國たる日本の方で事功を急いだ爲めか擔保物の不確實なることに累されざるを得ざるに至つた。高橋氏の計畫し、主張する對支借款は決して從來の借款のやうに單純のものでなく、日支經濟同盟實現の一方便たらしめようとするのである。然らば支那に資金を融通するにしても、漫然之を貸出すことを以つて、足れりとしない、必ず資金の融通に依つて原料品の生産の助成されること、斯く生産された原料品が專ら日本に供給されることの二條件を必要とする。高橋氏は日本自ら四國借款團から、脱退しても苦くないと云ふように、至極大雜把の考を持つて居るやに見へるが、借款團の脱退は兎に角として、日本自ら支那から天然資料の供給を順當に受けるとか、日本だけの力で然に富源を開發するとか云ふやうなことは、通商條約上の關係に於て、果して自由自在に行はれ得るものであるか、又支那朝野の人々は自國を永く日本の爲めに、原料供給地たる地位に置いて、顧みないものであるか、此點に於て支那人をして満足せしめようとするには、日本は支那なり、支那人なりの爲めに、何を爲す可きものであるか、是等の事は對支經濟策を確立する上に於て吾人の攻究しなければならぬ點である。

日支經濟同盟の先決問題

日支經濟同盟の組織は兎に角にして、日本の現狀から考へて

支那に對する經濟上の關係を密接にし、有無相通じ、長短相補う境域に至らしめることは、極めて必要である。而して此目的を達するには、日本として先づ爲す可きもの丶多々あることを知らなければならぬ。其一つは日本が他の文明諸國と併稱されるだけの濟事殊に文化的方面の事業を支那に向つて爲す可きことである。從來日本は支那に對して、何事を爲したであらうか、日清戰爭で、支那の實力の頗る微弱であり、又所謂眠れる獅子でないことを世界に公告したのは、日本ではなかつたらうか。斯くて歐洲諸國は盛に支那に對して、領土上の野心を懷くように爲ると、日本も亦同樣の野心を逞うして已まない、大隈内閣時代の日支協約の如き、日本の眞意を最も露骨に表明したものとして、支那人の最も嫌忌する所であつて、近年の排日的感情は總て彼の協約に胚胎するものと認て差支ない位である。更に支那の如何なる所に就て見ても、外國人殊に英米人の相應に居住して居る開港場開市場には必ず彼等の努力なり、又本國から送付される資金なりに依つて、經營されて居る文化的事業がある。教會を開いて、人民を教化する、學校を設けて、兒童に知識を授ける、病院を建て丶、貧民の施療給藥に當ると云ふようなことは、文明國民の力を致す所であつて、一方に諸外國に遊學する支那人の成業して、支那に歸來する者の多くなると共に支那人全體の其國に對する信頼を深くすることの幾何であるか、殆ど測り知る可からざる譯である。之に反して日本の支那に對して、爲す所は如何であらうか、第一番目に理屈を出し、第二番目に劍を出すと云ふのが從來の遣り方であつた。高橋氏は第二番目に同盟論を出すのだと云ふのであらうが、私をして云はしめれば、第一番目に理屈を出すのが大間違であつて、是れから引込めて仕舞はなければならず、我國民全體殊に支那に居る日本人の支那人に對する態度なり、支那留學生に對する日本人の態度なりを一新しなければ、經濟同盟の成立は愚か、日支の親善すら、頗る覺束ないのである。

次に經濟同盟論の前提として、必要であるのは中央政府を有力なるものにする一事である。高橋氏は單調な頭腦を以つてすれば、資金さへ貸せば、中央政府は必ず強く爲り、斯く強く爲つた中央政府を對手とすれば、何事をも爲し得ると云ふ考への生じ來ることも、無理ではなからうが、是れが支那の實情に暗い者の陷り易い誤りであつて、今日の狀態では、如何なる問題であつても、支那の中央政府に交渉して、纏りの着くものではなく、又其中央政府が若干の資金を外國から融通して貰つたからと云つて、其れだけで直に面目を刷新するに至る譯でもないのである。

空論は無用なり

要するに東京日々新聞の記事で見たゞけの高橋氏の日支經濟同盟論は甚だしく不備のものであり、又恐ろしく空疎のものである。私は敢て經濟同盟と云ふような文字は用ひないが、日支兩國の經濟關係を密接にするには、至極同感であつて、歐洲戰爭後歐米諸國に行はれつゝある原料品政策から見ても、痛切に其必要を認めるのである。然し此目的を達するには、自ら順序があり、方法がある。高橋氏のような論理で此問題が解決し得られるものであらうかどうか。私が東京日々新聞の記事を通じて知つた同氏の意見の如きは、瑕疵百出殆ど取るに足らない、モツトく緻密なる頭腦を以つて、工風畫策しなければならぬ。若しも高橋氏が意見書に現はれたゞけの考案で、日支經濟同盟の計畫に從ふものならば、氏は徒に秘露廢鑛事件と同樣の失敗を繰返すに過ぎないであらう。氏が成功しようと、失敗しようと私の關心する所ではないが、生半可な對支經濟政策の行はれる爲めに、肝腎の日支經濟的接近の妨げられるのは、吾人の忍ぶ能はざる所である。此點から私は高橋氏の日支經濟同盟論の暗から暗に葬り去られることを希望して已まないものである。

原内閣が今や四方行き詰りの窮狀に居るのは著明の事實である。左ればとて滿身に傷痍を負うた儘で、局を退くのも、苦痛であらう。何か局面を轉回して、人心を一新し、再擧を期して一旦退くか、都合に依つては、其儘居据らうと云ふのが狡猾なる原内閣員等の心術ではあるまいか。財政經濟上に不景氣を煽揚し、投機熱を助成する外に、何等經綸の認む可きものゝない高橋是清氏が一知半解の對支經濟論などを擔ぎ出したのは、是れ亦局面轉回の一策であるかも知れない。俗に枯れ木も山の賑いと云ふのは、此邊の事を指すものであらうが、私を以つて見れば對支經濟政策の如き、我國の國利民福と重要の關係を有する問題であつて、隨つて政治家の一時の出來心や、賤む可き策略などで左右す可きものではない。私は特に此一事を擧げて、世人の良心に訴へんとする次第である。」

小學校教科書の根本的改造

（劃一主義を打破し自由採擇を主張す）

高島米峰

一　教科書に無關心なる父兄

これ僕の宿論にして、昨今新に考へつきし意見にあらず。これを以て、機會ある毎に、これを論議して、その實現に努むるところありしが、由來、世人、その子弟の教育に關しては、多大の注意を拂ふもの尠からざるにも拘らず、その子弟の用ゐる教科書については、比較的無關心なるもの多く、特に、教育の業に從事するもの以外、一般父兄によりて、教科書改善の提唱を聽きたることと、殆どこれあることなく、從つて、僕の意見の如き、たゞ僅に、文部省の教科書編纂委員中に、小學校教員を加ふべしと言へる主張が、昨年始めて實現せられたるのみにして、他は今に及ぶも尙ほ舊態依然として昨の如きものあり。偶々『尋常小學國史』上卷に、傳教大師の事蹟を削除したることよりして、漸く、國定教科書に對する世人の注意を喚起し、從つて、識者の國定教科書を非難するもの、次第に多きを致せるを見る。此の時に當り、一は以て當局者の反省を促し、一は以て讀者の批判を請はむがために、敢てこの論をなすもの、全く無用の業にあらざるべきを信ず。

二　個人解放と教科書

佛蘭西革命の點火者たるルソーは、總て自然の手に成れるものは麗はしく、人の手に成れるものは醜しとなし、『自然に還れ』を絶叫せり。これ蓋し、當時の人間生活が、種々なる點に於て、或は加工せられ、或は鑄型に嵌められ、不自由となり、不平等となり、その自然性を失ふこと頗る多きところより、原始生活の、如何にも自然性に富み、且つ如何にも自由に、如

にも平等なりしを追慕するの言なりと、聽かざるべからざるべし。今日言ふところの解放の希望、民衆化の要求も、畢竟、その端をルソーの『自然に還れ』に發し、流れ〳〵て、遂に汪洋澎湃たる、謂はゆる現代思潮を成すに至れるものと解せざるべからず。惟ふに、吾等の生活は、これを外にしては、晴天もよし、雨天もよし、雪もよし、風もよし。これを内にして、喜もよし、怒もよし、哀もよし、樂もよし、常に大自然の懷に抱かれ、哺くまれ、そこに向上あり、進歩あり、發展あるものなるが故に、若しこゝに、一定の型……晴天型或は悲哀型といふが如き……を作りて、これによりて、萬人を規律せむとするが如きものあらば、吾等は、精神的にも、肉體的にも、衰滅するの已むを得ざるに立ち至るべし。若し、自ら衰滅するに忍び得ざるものあらば、現狀に對する打破、改造、革新の叫びは、そこより生じ來らざるべからず。而して、その要求は、當然、解放ならざるべからず、民衆化ならざるべからず、『自然に還れ』ならざるべからざるなり、この一文の目的、亦こゝに立脚して、國民教育上に於ける一種の型たる、小學校教科書の根本的改造を主張し、その向上と進歩と發展とを、促さむと欲するに在るなり。

三　新訂小學國史上卷を評す

現行小學校教科書の內容について、徹底的に檢討批判せむこと、最も重要の事業なれども、そは殆ど、その煩に堪へざるなり。今試みに、本年度より、全國の小學校五年生に使用せしめられつゝある、『尋常小學國史』上卷のみについてこれを觀むか。まづその文章の拙劣にして、毫も生徒の感興を惹くに足らざるべきに失望せり。されど、文章の拙劣なるは、全卷に通じての事なるを以て、一々例を擧げて批判することを避け、たゞ何故に口語體を用ゐて記述せざりしかを、難詰するにとゞむべし。殊に、中橋現文相就任以來、口語體の宣傳に努力しつゝある文部省の製作品としては、如何にも辻褄の合はざることならずや。啻に、然るのみならず、その內容に至つても、亦、隨處に不滿足を感ずる點を發見し、一々これを擧げば、殆ど完膚無からむとす。今その三四を例示して、他は讀者の類推に任せむ。

まづ第一に、天照大神が、稻麥などを、田畑に植えさせ給ひたりとまでは兎も角、蠶を飼はせ給ひたりと記せるは如何。此くの如きは、自然の發達と見るべきものにして、特に、敎へたりとか、命じたりとかいふ、斷定を下すべきものにあらざるべし。從つて、この一項は、寧ろ、削除するを穩當なりとすべし。

第二、三種の神器の説明の不徹底至極なること、遺憾千萬な

り、元來、國史としては、三種の神器の如き、重要なる事柄に關しては、特に一章を設けて、十分にこれを解説せむことを要す。足利氏のためなどに、二章を設けて、比較的詳説するところあるにも拘らず、三種の神器の説明を、僅々四五行にとゞめたるは、その體を得ず。殊に、三種の神器及び敬神思想の發現に關しては、特に一章を設けて、崇神天皇の御事蹟を、記し奉らざるべからざるに、その御名をさへ擧げ奉らざりしは、謂はゆる、佛造つて魂入れざるの憾なくむばあらず。

第三、聖德太子の條、文章殊に甚だ拙劣なるのみならず、十七憲法の製作を記して、冠位十二階の制定に及ばず、法隆寺を擧げて、四天王寺を逸し、隋に遣はし給ひし國書の冒頭も、隋史に記されて國史に記されざる、『日出處天子、致書日沒處天子、無恙』を掲げて、國史に明記せられたる『東天皇、敬白西皇帝』を略せり。兩者併せ掲ぐるを最も可とすと雖も、孰れか一方のみを擇ぶべしとせば、言ふまでもなく後者を採るべきなり。

第四、佛教に關する記事に至つては、全く言語道斷なり。まづ、佛教傳來の當時、この外來の新思想によりて、國民の精神生活に與へたる影響、朝廷に於ける論議、蘇我物部兩閥族の確執などの記載ありてこそ、こゝに始めて聖德太子が、篤敬三寶の意義も闡明せられ、燦然たる推古時代文化の淵源も、明白となるべきに、この重要なる佛教の傳來を記載すること、聖德太子の條に於て、僅に二行弱なり。降つて、平安朝に於ける高僧、傳教、弘法兩大師に關しては、弘法大師のためには、特に一章を設けて、その遺德を讃嘆し、渡唐の圖より、筆跡（忠孝の二字、若し、それ、これを、上杉神社の『綜藝種智院式』より採りしものならば、大師の筆跡なりと斷定するに、多少の異論なき能はず。）さては、弘法大師を、一個の曲藝師の如からしめ、却つて兒童をして、輕侮の念を起さしむべき、例の『投げ筆』の如き、怪しげなることをまで、記載せるに拘らず、叡嶽に護國の基を開き、和氣清麿及びその子弘世等と共に、平安の帝業に參加して、桓武、嵯峨兩帝の尊信を受け、不幸短命なりしがために、社會的活動こそ、或は弘法大師に比して、一籌を輸せざる能はざりしとするも、入唐の勅許も弘法大師よりは早く、大師號の宣下も弘法大師よりは早く、佛教史上の效績、日本文化史上の貢獻、決して弘法大師に比して、些も遜色なき傳教大師に關しては、一言のこれに及ばざるのみならず、その名をさへ記さずといふが如き、縱令、如何なる事情の存するありとするも、その失態たることは、蔽ふこと能はざるなり。獨り、傳教大師のみにとゞまらず、永く、日本國民の、精神生活の根

本基礎を成し來りし佛教、その佛教の中に於て、純粋日本佛教と稱することを得べき、鎌倉時代の新佛教に關しても、亦一言の記載だにこれあらざるは抑々何の意ぞや。法然、親鸞、道元、日蓮等諸高僧の名と、その開闢せられたる宗旨の名をさへ記すに吝なるは、その意、血腥き戰爭の記事以外、國史は可能ならずとなさむと欲するに在るか否か。

第五、然り、全卷三十二章中、二十一章までが、血腥き戰爭の記事にして、國民の文化生活に關しては、極めて僅少の頁を費したるのみ。これに依つて教育せらるゝ少國民の將來、眞に憂ふべしと言はむよりは、寧ろ、この非軍國主義的精神の勃興せる現代に、日本國民は、先天的好戰國民なりといふことを國家自ら、世界に向つて宣言しつゝあるものなりと解せられむも、到底、辯解の辭なきを如何せむとするか。推古時代の文化につきても、奈良時代の文化につきても、平安時代の文化につきても、鎌倉時代の文化につきても、文化教材は、實に多きに苦しまむ。寧ろ、戰爭記事を制限するも、尙この文化教材を採錄すべきにあらざるなきか。

第六、天照大神より後奈良天皇に至る、百六十頁中、後醍醐天皇より北條氏の滅亡までの記事に、約四十頁を費したるなど、繁簡その宜しきを得ざること甚だしく、三十二章中の三十一章は、人物本位、標題を附したるに拘らず、第十九章のみ、「武家政治の起」と題したる、その體を破るの甚だしきものと言ふべし。

これを修身書に觀、これを國語讀本に觀る、まづ、戰場討死の外に忠義なく、廿四孝的孝行以外孝行なしとするが如き、根本思想の立直しを必要とし、區々章節について批判せむも、到底、古家の造作に等しくして、その勞に酬ひらるゝこと能はざるなり。如かず、高處より達觀して、直にその牙城に迫らむには。

四　學問思想の官營

曾て、『官營藝者』と題する落語を聽きたることあり。その梗概は、一言にしてこれを約せば、政府に、藝者專賣局といふものを設置し、苟も藝者を招いて、宴席の興を添へしむと欲する場合、まづこの藝者專賣局に出頭して、藝者招聘願を提出し、而して後、判任待遇の藝者が、海老茶の袴に編み上げの靴といふ扮裝にて、有髯の局員に導かれて、料理屋に御出張と相成り、お座附の代りに『君が代』を歌ふといふが如きものなりき。此くの如き話が、落語家の口を借りて語り傳へらるゝといふことは、抑々何事を意味すと解すべきか。竊に思ふに、これ正に、

日本政府の、餘りに官尊民卑主義たること、官憲萬能主義なることを識したるものなるなからむや。國有と言ひ、官營と言ふ、これを絶對に拒否すべき理由とこれなしと雖も、國民の精神生活にまで立ち入りて、極度の國有官營的施設を爲すが如きは、斷々乎として反對せざるを得ざるなり。

吾等の學問、及び思想に對する國有官營的壓迫は、敢て今に始まりしことにあらずと雖も、斬捨て御免の封建時代ならばいざ知らず、明治の聖世を經て、大正の御代となりたる今に於てさへ、尙且つ此くの如き、國民思想の自由を無視し、學問の獨立を蹂躙するが如き態度あらば、少くとも、吾等は、立憲治下の國民として、これを默止することと能はざるなり。言ふまでもなく學問と言ひ思想と言ふは、元來、獨立普遍なるものにして、決して何々の政體、何々の國家といふが如きものゝ下に、隷屬し屈從すべき性質のものにあらず、又、斷じて、政府のお役人輩に、頤使せらるべき筈のものにもあらざるなり。ガリレオの地動說は、當時の社會に於ては、ガリレオを殺してまでも、その說を廢棄せしめむと企てしと雖も、しかも眞理は、俗吏や衆愚の壓迫によりて滅びるものにあらず。ルーテルも亦、非常の迫害を蒙りたりと雖も、プロテスタントは、遂に世界を風靡せるにあらずや。南都北嶺の舊佛敎徒が、當時の新佛敎たる念佛の興隆を嫉視して、法然親鸞を流罪にまで行はしめたりと雖も、却つて、淨土宗や眞宗の繁昌は、南都北嶺の宗派を壓倒するに至れるにあらずや。假令、文部省や內務省に於て、學問や思想を製造して、これを國民に賣下ぐること、恰も煙草の如く鹽の如くせむと欲するも、少くとも、憲法に依つて與へられたる、國民の權利と自由とを、如何ともすること能はざるべし。

然るに、今現に、國民の義務敎育として強制せられつゝある、小學敎育に用ゐる敎科書を國定にして、その專賣權を某會社に附與す、これ明に、官製國民思想の賣下げにして、その事自體已に甚だ不合理なるに、その專賣權を、一會社の特權として附與するところに、更に他の不合理を胚胎す。吾等は、この點に向つても、亦峻嚴なる檢討を加へざるべからず。

五　牛埴的敎育

今の日本の國民敎育は、卽ち謂はゆる劃一主義にして、全國民を、同一のものに作り上げむとすることを目的とす。これを以て、四月一日の午前九時には、日本全國の學齡兒童は、一齊に同一の姿勢を保つて、同一の聲を揚ぐるが如く仕組まる。敎科書已に一定し、敎師は敎科書以外に一步も踏み出す必要もなく、又自由もなく、たゞ定められたる紋切形を、機械的に喋

りつゝある間に、自然に時間が經過して、一日の課業を了はるといふ組織なり。此くの如くば、畢竟、今の小學教育は、或は必ずしも、生ける人間を教師として、雇つて置く必要これ無きにあらざるか。寧ろ、氣の利いた蓄音機を採用する方、遙に經濟的に有利なるべし。

謂はゆる劃一主義の教育は、すべての被教育者を、同等のものに教育せむことを目的とするが故に、これを例せば、恰も橐駝師の生垣を作るに酷似せりとすべし。生垣は、杉にせよ枳にせよ、すべて一定の高さに丈を揃へて、聊かにても頭を出すものあれば、剪刀一閃、これを切つて捨つ。これを以て、これを生垣として見る時、その形整ひて、多少の美觀なしとせざれども、しかも、その一本づゝを引き拔いて、これを何ものにか用ゐむと欲するも、柱にもならず、板にもならず、まして、棟や梁など思ひも及ばず。即ち、今の教育は、この生垣教育にして、誰も彼も、格恰よくは育てられたりと雖も、さて人間として、何の役に立つかといへば、沈香も焚かず、屁もひらず、孔子にもあらず、盜跖にもあらず、平々凡々、一癖ある人、傑出せる人、此くの如きは、絕えて望み得べからざるが如し。苟も、國運の進展を念とするもの、いつまでも、この、人を殺すにも等しき、生垣教育に滿足することを得むや。乃ち、僕は、この生垣的教育たる劃一主義を打破して、山林的教育の、自然主義自由主義を主張せむと欲す。夫の參天の大樹が、鬱々蒼々たるを見て、何人か悲觀するものあらむや。萬卒もとより尊重すべく、一將更に尊重すべし、萬卒を作り得て、一將を産み得ざる今の教育は、眞に禍なるかな。僕は、寧ろ、一將を作るの穎才教育を振興することを以て、當面の急事なりと信ずるものなり。

六　小學教員は機械か

僕自身の理想は、國民教育（義務教育）には、教科書を必要とせざるに在り。教育（イヂユケーション）といふ言葉は、引出すといふ意義を有し、被教育者の本然の性を誘導し、天賦の能力を開發するをその目的とす。然るに現代の教育は、教科書といふ機械を、教師といふ機械が運轉して、被教育者に、何事か詰め込むことを以て能事終れりとなす。これを以て、教師は、機械以上の人物たることを要せず、才能を要せず、手腕を要せざるなり。

敢て今の小學教師を目して、機械の如しと言はむと欲するにあらず、機械の如きものにても、尚小學教師たり得べしと言ふなり。手腕なく才能なく、機械に等しき教師は、被教育者の個性の尊貴なる所以を理會せられざるべし。又劃一主義の教科書

は、元來、甚だ兒童の個性を侮蔑せるものなるが故に、從つて、今の教育は、到底、印刷以上の味を出すこと能はざるなり。印刷は、千枚にても萬枚にても、悉く同じく刷り出すことを得と雖も、たゞそれ同様なりといふのみにして、他に何の意義も妙味も含蓄せず、然るに、兒童は、人間の卵なり、活物なり、短所を有するものもこれなり、長所を有するものもこれなり、その長短の度合、亦一人一人、皆相異れり、かく多種多様の個性を悉く教科書といふ同一鑄型の中へ流し込みて、同一のものに製作せむとすること、豈甚だ殘酷ならずや。縱令、短所あらむもこれを抑へむとする消極的教育法よりは、寧ろその長所を發達せしめむとする積極的方法こそ、却つて甚だ必要なるべし。これを以て、僕は、義務教育においては、出來得る限り、教科書を用ゐず、手腕あり才能ある教師をして、十二分にその手腕才能を揮はしめ、以て、兒童の個性を尊重して、その長所を開發せしむことを冀ふ。

七　教科書の自由編纂

勿論、今直に、教科書を全廢せむこと、或は不可能なるべし。これを以て、僕は、將來、教科書を廢止するに至る準備的手段として、まづ教科書の國定制度を打破して、その自由編纂自由採擇を主張す。

國定教科書編纂の方法は、數名の委員……全然初等教育に無經驗なる老學者と、教育を學問として研究しつゝある教育學者と、地理歷史等の專門家と、貴衆兩院の議員と、これに小學校長二名を加へて……を選任して、萬事その委員諸君の合議に決定す。言ふまでもなく、合議制によりて作られたるものは、その何ものたるを問はず、力の籠りし特長の鮮かなるものゝ、出來たるためしこれあるを見ず。それもいけない、これもいけない、その角も削れ、この瘤も取れと、段々相談したる結果は、全く骨拔鰌となりて、潑溂たる生氣消磨し盡して、可もなく不可もなく、毒にもならず藥にもならず、有つても益なく、無くとも差支なき底のものとなり了らざること少し。今の國定教科書の如き、この合議制産物の代表的なるものとす。若しそれ、その編纂を民間の競爭に一任し、文部省これを檢定すること、中等教科書の如くせむか、優秀なる幾多の教科書輩出して、國民教育の、これがために蒙れる利益、果して幾何ぞ。

自由編纂の結果は、當然、自由採擇ならざるべからず。自由採擇は、各府縣をして、最もその地方的事情に適合するものを擇ばしむるが故に、教育の效果も、亦著しかるべき道理なり。或は言はむ、自由採擇に伴ふ弊害は、往年の教科書事件を見て

以て戰慄すべしと。されど、當時國民の精神生活は、これを今日に比して、遙に劣等低級なりし上に、制度の缺陷も亦甚だしかりしが故に、彼が如き不祥の事件を出したりと雖も、爾來約二十年、人心の向上進歩著しく、且つ制度を更改してこれに臨まば、或は大過なきを得む。その小過の如きは、國定制度勵行の現時に於てさへ、尙これなきを保し難し。その印刷製本に關し、その發賣に關し、國定敎科書共同販賣所といふ特權株式會社が他の出版業者の怨府となりつゝある現狀は、抑々何を語りつゝありとするか。寧ろ、これを解放して、自由競爭に一任せば、或は、品質良好のものを、低廉に提供し得ることゝもならむ。

敎科書自由採擇の理想は、各小學校をして、個々に採擇せしむるに在り。されど、東京の如き大都市にして、居住民の轉居の頻繁に行はるゝところに在りては、各學校が、區々の敎科書を用ゐること、或は幾何かの不便を感ずべし。若し、各府縣に於て、小學校敎員中より、敎科書採擇委員を互選して、その府縣內に用ふる敎科書の審査採擇を一任せば、これ等の不便を一掃することを得む。或は、各府縣に於て、その府縣內に用ゐる敎科書を、各別に編纂するも亦一法たらずとせず。

八　國民の自治的能力

勿論、日本國民は、一般に自治的能力に於て、頗る疑問とせらる。模範都市たる東京の公吏さへ、醜態百出の現狀は、到底、自治の能力を有するものとは斷じ難し。されど、これを恐れて、いつまでも、國家が國民を赤ン坊の如く取扱ひ、事每に保護し干涉し、その自由と獨立とを認めざるに於ては、國民の能力は、永久に伸展せざるべきなり。これを以て、敎科書編纂の如きもこれを國民の自由に任せて、こゝに始めて、立憲政治の本義が、國民敎育の上に、明白に現はれ來りて、如何に國家が、國民の權利を認め、自由を尊重するかといふことも、徹底するに至るべく、かくて吾等は、現行敎科書の內容に關して、重箱の隅を楊子にてせゝるが如き、些末の皮肉を試みるの閑葛藤を、廢するを得るに至るべきなり。（大正十年六月十四日）

漢文學及び佛典國譯の流行

文學博士 三宅雪嶺

*

人は時間の連鎖の中に生存し、一刻でも過去、現在、將來を離れ得ないが、性質又は境遇で其或る一部に重きを置き、或は專らにし、他を顧みぬと見える。生れ付きで野菜好きなのがあり、肉好きなのがあるが如く、性質で變へられぬ所がある。其性質も境遇で幾らか變じ、境遇に狹い關係と廣い關係とがある。一身一家とか郷里とかの關係は狹く、之に比べて國外とか世界とかの關係が廣い。汽車で運轉手は前のみを見、普通の客車は横のみを見、展望車は後をのみを見る。運命に最も關係多いものは將來に注意し、一般世間は現在の事に忙しく、設深な階級は過ぎ去つた所、過ぎ去りつゝある所を見て安じて居る。性質よりするのは何の割合であらうか、何事でも多數は尋常であり、極端は數が少く、時間に對しても亦左う認めて可い。境遇では時代又は土地が與かる事頗る多く、幾代も變化らしい變化ない所があり、變化が急、變化に次ぐに變化を以てする所がある。一概に云へぬけれど、東洋は歐米に比べて變化少く、印度の如き、數千年前の習慣を守るのがある。若し全く變化せぬならば、過去が即ち現在、現在が即ち將來、過去のまゝに續けて可い。絶對に變化ないのは無く、多少の變化があり、寧ろ自ら意識するよりも多く變化したりするので、過去の儘にするのが齟齬を生ずる。

*

然しそれと云ふて過去は事實であり、誠に人生の事、時々刻々悉く過去とならうとし、過去から離れようとしても出來ぬ。現在及び將來に特殊の變化無いとして、過去が人生の大部分を形造り、全く變化無いと信ずる者の眼には、過去の外に何物も無いかに映ずる。過去のみに沒頭する者は、何處にでも珍らしく無い。歐洲中世の僧侶及び學者に左う云ふのがあつた。何から何まで過去の或る書物を讀み、それで生涯の重要事とする。支那で古來祖宗の法に則る事に定まつて居り、日本との交往で

も、一々大淸會典に準據しようとした。戰爭の結果で斯かる事の益なきを知り、改革意見が起つたけれど、過去の法則に據らうとするのが可也に有力である。

*

小兒が手を引かれたがる如く、老人が杖に縋る如く、弱味ある者は兎角他に依賴しようとし、測るべからざる現在及び將來に彷徨するよりも、過去に依賴すべきものあれば依賴しようとする。自ら財產を造るよりも、親の財產を宛てにする事になる。それが惡いかと云へば、强ち左う限らず、弱者は何者かに依賴するのが安全であり、强い者でさへ、杖で石橋を叩いて步かねばならぬ事もある。唯依賴するのが習慣になつて居り、依賴しなくても可い所、依賴してならぬ所まで依賴し、折角持つて生れた力を伸さずに終るの恐れがある。現在の人の爲しつゝある所は過去の經驗の積み重つたものであり、現在の人のみで爲す所は僅かの部分であるが、それで事每に過去を顧み、新に自ら斫り開かうとせぬ樣になつて、現在及び將來に少からぬ違ひを生ずる。過去は人生に重大ながら、其重大なるを感嘆し、新に進まうとする所無ければ、其處で進步が止まり、多數がさうなれば社會の進步が止まるを見る。同一の事なれど、千年前二千年前と云はれる所に特殊の趣味を生じ、同じ茶碗でも二千年前のものとあつては、感想無くして居れぬ。人を殺してはならぬ、物を竊んではならぬと云ふ事を、友人から聽いて何の感ずる所無けれど、白髮の祖父から聽けば何處か感ずる所があり、幾千年前の語とあれば、人間以上の語の如く感じたりする。

*

人類が出てゝから幾十萬年になつたらうか、微かに歷史の初まつたのが一萬年來の事、歷史と稱すべきは五千年來の事、歷史の初まるまで、一通り人間相互の關係が定まり、已れの欲する所を人に施せよ、已れの欲せぬ事を人に施してはならぬと云ふやうな事が知れて居り、其後之を變革するまでに相互の關係が變じて居らず、社會がいよ／＼複雜を加ふるに從ひ、斯かる心掛けを肝要とするに傾く。單に要目を舉げるのみでなく、場合に應じて精しく說くやうな事もある。大體の事は數千年前略ぼ知れて居り、何事でも過去を辿れば頗る遠きに及び、何處に起原あるかを明かに知り難い。數千年間人の身體に變化無く、頭腦の量も變化なく、それだけ根本に於いて變りがなく、幾分か變化あるとして、檢微鏡的に屬する。變化の表はれる所は人工を加へた物質の上に在る。先祖代々道具類を增加し來つた如く、人に變り無くても、少さな小屋が鐵骨コンクリートになつたり、纜で船を繫いだのが幾萬噸の波止場になつたりして居る。周公

とかペリクレスとか云ふのが今日生れれば、何時でも大臣位になれる。亞歴山と那翁と何れが才能あるか、容易に決する事が出來ぬ。

そこで時代が甚だしく隔つて居つても、過去の人で今日に劣らず、却つて優るやうに思ふのがある。普通人間の關係について說く所、今日當て嵌まるやうな事がある。數千年前既に云ひ古した事、今日の人の云ふ事が餘計な事であると思ひもする。時代が隔つて居るだけ、同じ事を云つても雅味があり、或は有難味を覺える。

＊　＊

歐洲では近世史が初まつてから幾變遷し、古代の見樣も異つて來たれど、東洋で幾十年前まで聖人の敎が神聖にして冒すべからずと知られ、後ち漸く種々の方面から學術技藝が入り、聖人に對する判斷を變じ、動もすれば反動的に之を卑しめる。卑めても強い者に從はうとの習慣が續き、過去の有力者に依賴するのがある。新思想を取入れるに忙殺され、他を考へるに遑ない際、之を專らにするけれど、新思想もやゝ種切れと見えると共に、過去を振返り、茲處に何物かを求めようとする。科學的知識は隨分難産であり、大黒が小鎚で振り出すやうな譯に行かず、少しく道が明いたかと思へば行き詰まつて終ふ。纔かづゝの處歩が積り積つて見るべき結果となるのであるが、さう云ふ結果は容易に出でず、天動說が地動說となり、人類創造說が進化論となるが如き、常に待ち設くべくもない。間斷なく研究があり、功績の著るしいのもあるけれど、少數者の間に知られるに止まり、一般の人に沒交涉であり、世間で目醒しい事を聞かねば、早くも行き詰まつたと感ずるやうになる。

＊　＊

日本は支那より進んで居つても、科學的知識を得る事日淺く、兎角之を厭ふの傾がある。歐米にも性急な者が居り、科學の行詰りを說き、日本で科學に趣味を覺えぬ者は直ちに之に附和し、科學萬能の夢から醒め、新たに求むる所無くてならぬとする。科學萬能とは何事か、誰が現代の科學で萬能と云ふか。現代の科學の缺陷は定り切つた事であり、之を萬能とするが如き誤つた考へする者、苟くも常識を具ふる以上一人も有るべき筈で無い。自ら科學萬能の夢から醒めたとて、異つた方面に足を向けるのは、白人が東洋人を以つて眞理探求の精神を缺くとする所以である。白人も迷信深く、研究力も豐かとせぬが、比較的根氣よく續ける所がある。日本で科學的知識を得、東洋で珍らしいとするかせぬかに、早くも科學草臥れするの嫌ひがある。何進となく科學を輕んじ、之を卑しむの跡がある。而して何を求

めるかと云ふに、古典に安心を求めようとする。儒教でも、佛教でも、基督教でも、何でも、權威を以て己れの不安狀態を靜めて與れる事を望む。氣の早いのは大本教の如きに入る。分別あるのは大本教を嗤ひつゝ、過去の權威に從はうとする。今日の如く思想混亂しては適從する所を知らず、やはり古代の偉い人に賴る方が安全であると考へる、考へて思ふ通りになるか何うか。

* * *

何にしても古典を求めるの勢があり、只だ古典が讀み難く、讀み易い方法もがなと思ひ、偶々漢書の國譯佛書の國譯が出版せられると聞き、それ待つて居ましたと云ふ調子で之れを求める。之を求めるのは分つて居るが、それで目的を達するか何うか。漢書でも佛書でも、過去の知識の或る重要なる部分を集めたものであり、相當に重きを置くべきであるが、若し古典に何物かを求めるならば、何故に原型の儘においてせぬが。國譯と云ふのは漢文を假名交りにしただけであつて、多少漢字の知識ありさへすれば返り點だけで澤山であり、ワザと假名を入れて行を長くするには及ばぬ。實は返り點を附けず、棒讀みにするの習(ならひ)を養ふも可いが、返り點を附けても漢字の配置に變りなく目で漢字を見る所に一種の妙味あるとせば、所謂國譯でない方が優つて居る。希臘又は羅典文を英文に譯するならば相當の益があるけれど、漢文を假名交りにするのが何程の事あるか。國譯で讀む位ならば、今少しく辛抱して原型の儘に讀む方が可いでないか。國譯の名を値するには、口語體を以つてすべきであり、口語體ならば漢字を入れてこそ意義が解けれ、假名でも羅馬字でも理解し得るのであつて、確かに國譯たるを失はぬ。漢書佛書の國譯と稱する處は、適當の名稱と云へるかに疑がある。

然し之を求むる者の多いのは、漢文を讀む力の減じたのであつて、やがて口語體とならうとするのであらう。但、口語體では譯するに骨が折れ、急に企てる者が無い。半端なものの出づるのも餘儀ない次第とする。二三十年前程漢字の儘に讀むの習慣あれば、原書其儘に翻刻して多くの應募者があらう。今でも爲し得ぬでないが、原本の儘にしては、眞に讀むよりも飾らうとする意向が勝つ。今は確かに讀まうとする所がある。併し實は何程まで讀むか。眞に讀むの志ある者は國譯を待たず、原型に於いてすべきでないか。國譯を讀むのは、國譯ならば理解し得ると考へての事であつて、いよ〱開いて讀み、早解りせぬ場合中止するやうな事ないか。或は單に讀むと云ふのみにて理解せず、理解せずとて理解したかに感ずるやうな事ないか。

* *

漢書佛書で或る研究を積む事は、東洋人の文化に貢献するの捷徑であり、之を奬勵するのが宜けれど、國譯を讀んで研究し得るか。研究といふ程にするには、原型に於いてし、剰へ幾通りも同樣の書を集めねばならぬでないか。漢書佛書の國譯は研究よりも普及の意があり、普及として口語體に及ばず、先づ原型より口語體に移るの過渡期に於ける產物とすべきである。原本について研究する事は、世界文化史上有益の事業たるを失はぬが、自ら安心を求める方に如何のものであらうか。國譯によつて眞理を求め得ぬでなけれど、多くは中途の砂利道を徘徊し、其儘に疲れるやうな事ないか。漠然古典に何等かの寶の潜むとし、之を探がさうとするのであつて、寶を探し當てるか何うか、先きへ行つて見ねば分らぬ。不安狀態で安心を求めるならば、必ずしも多くの書物を讀むを要せぬ。儒教の方で陸象山、王陽明の出たのは、書物讀みの弊に懲りたのに因る。佛教の方で禪宗と念佛と並んで行はれたのも、多くの書物を讀んだり、煩はしい儀式を行つたりするの弊に懲りたのである。而して不立文字の禪宗が他宗よりも文字に拘泥し、文字攻めにしたりするのは何の心得であるか。念佛さへ書物を讀まねばならなくなつて居るとは、よく／＼書物に祟られて居るものと云はねばならぬ。

知識を得る爲めに書物を讀まねばならず、其爲めには漢書佛書で足らず、他に讀むべきものが多く、悉く讀むを得ぬので、或る一部分を選ぶの外なく、現在及び將來に爲すべき事多き今日、多數が過去の事を專らにすべくもなく、之れを少數特志者に任かすのが宜からう。科學萬能の夢から醒めるとか、科學的知識が行き詰つて居るとか、早くも後返りしようとするのは、東洋人の弱點を暴露するものとして考へ直すべきである。之れで安心を得るか何うか。安心はさう云ふ廻り遠い事をするに及ばぬ。心掛けさへあれば、書物を讀まなくても、端的に得る事が出來る。安心を得られぬからとて、之を求めるが爲めに難しい文字を讀むのは餘計な勞である。

古典及び其譯書の喜ばれる一つの事情の中、印刷機械の進步を擧げねばならず、恐らく之が第一の事情である。以前ならば容易に備へる事が出來なんだのが、今は誰でも備へ得るやうな氣持し、備へて置けば何時か役立たうとし、眞に役立つと否とを問はぬのでないか。人によりて書物を備へて置くのみで。讀んだやうな氣のするのがある。書物が偶像になつたのであり、偶像破壞の必要が何處まで及ぶか測かり知れぬと云へる。

社會力經濟力の表現としての現實政治

——現政局の綜合的批判——

大山郁夫

一

我國の現下の政局は、純理と感情と權勢欲とが複雑に絡み合つて居るために、ひどく行詰まつて居る。この狀態を打開するだけの力を持つて居るらしい政治的勢力は、今のところ、どちらを向いても見當らない。それ故に、我國に於ける現實の政治關係は、かういふ風に行詰まつたなりに、その儘前へ推し進まうとして居る。

いや、それどころではなく、我國に於ける現實の政治關係が行詰まりの狀態を示したのは、實は昨今に始まつたことではないのである。それは少くとも、超然內閣でも立ち行かないし、それかといつて政黨內閣でも持ち切れないといふことが明瞭になつた時から、もう立派に行詰まつて居たのであつた。かういふ狀態は、嚴密にいへば、我國の『憲政』の殆んど初期から萌さして居たのであつたが、殊に日清戰爭後の頃からは、それが著るしく目立つて來たのであつた。今から我國の『憲政』の短き過去を振返つてみれば、かういふことは誰れにでも考へ附かれることである。

それ以來、我國の『憲政』は、ずつと跛行をつゞけて來たのである。それもその筈である。何にせよ、行詰まつたなりで推し進んで居ては、どうせ正式な歩みが運べよう道理がなからうではないか？　そしてこの跛行的『憲政』は、寺內內閣の沒落を合圖として、一度はばつたりと倒れてしまつた。

そのあとへ、原內閣が產まれた。それは、どう見ても『過渡的』のものであつたとは言ひ條、兎も角、大體に於て政黨內閣の體裁を備へて居たものであつた。が、しかし、この內閣もまた、跛行的のものでなくはなかつた。それは、どの點から見ても、さういへるものであつた。まづ第一に、その發生の過程からい

ふと、それは既往に於けるすべての跛行的內閣の生みの親であつたと同時に、またその產婆でもあつたところの、相も變らぬ元老といふ、政治的に無責任な集團の斡旋に依つて、この世の光を見たものであつた。從つてそれは、その編制といふ外的方面に於ても、陸海軍兩相の椅子を軍閥の代表者に讓らなければならなかつたし、それからまた、從來から『憲政』的に批難の多かつた所謂『臨機啓沃』とやらの機關たる外交調査會をも從前のまゝに殘して置かない譯にはゆかなかつた。

しかしながら、原內閣をして眞底から跛行的狀態を脫却することを得しめなかつたものは、原內閣に取つて一種の宿命的因緣とも見られたところの、さうした外的强制力から來た壓迫ばかりではなかつた。否、さうしたものは、そのためには、寧ろ派生的原因としか見られないものであつた。そして、その主要なる根本的原因はといへば、それは全く別のところに在つた。それは、仔細に觀察すれば、原內閣そのものゝ本質の中に巢喰うて居たものであつた。私が現下の政局の綜合的批判を試みようとするためには、私は順序上、まづこの點から明かにして掛からなければならない。現下の政局は、一見恰かも變態的現象のやうに思へるが、その實決してさうしたものではない。それは、我國の社會的政治的諸勢力の釣り合ひの現勢からみて、當然さうあるべき筈の狀態を示して居るものに過ぎないのである。で、若し强ひてそれを變態的のものだと言はうとならば、その根柢に橫はつてゐる我國の社會狀態及び政治關係をこそ、尙ほ更ら、變態的のものだと言はなければならない勘定になるのである。しかし、變態的といつても、何といつても、それはそこに實在して居たものである。無論、それはいつまでもそこにそのまゝ停滯して居よう筈のものでもなからうし、またどの點からいつても、そのまゝ停滯させておくべき筈のものでもなからう。けれども、苟くもそれがそこに實在して居る限りは、我國の政界の現狀を觀察したり、批判したりしようといふ人々は、それを無視してはならない筋合のものである。しからば、それは一體どういふ性質のものを意味して居るのであるか？私は今、それに關する私自身の見解を、次に略述しようと考へて居るのである。

二

立憲政治の歷史によれば、政黨政治といふものは、資本階級の手に依つての、獨占的——もしくはそれに近き——政治的支配の實權の獲得と共に完成したものである。從つて、資本階級の政治的支配の實權が壓倒的勢力を以て進んで居るイギリス及

びアメリカに於ては、それが最も高度の發達を遂げて來たのである。ところが之に反して、資本階級の利害以外の利害が尙ほ多少の程度に於てその政治的表現を示して居るヨーロッパ大陸側の諸國に於ては、政黨政治の發達は、今日に於ても、まだまだ大に後くれて居るのである。いはゆる資本階級の利害以外の利害といへば、たとへば、曾てフランスのロイヤリストがさうであつたやうに、舊王家の再興を目的として居るものや、今でもドイツのユンカーの集團を中心として出來て居る保守黨のやうに　舊封建貴族の立場を代表して居るものや、または、同じドイツの中央黨とか、イタリアのカトリック黨とかのやうに、各國の宗教上の立場の政治的表現を求めて居るものや、――といつたやうなものを指して居るのである。それからまた、ヨーロッパの各國に於て次第に大なる政治的勢力を得るやうになつて來たところの、勞働階級の利害を代表する諸黨派のやうなものも、矢張り斯ういふもの丶うちに數へ込まなければならないものである。この點に於ては、イギリスといへども、今日では最早、他の諸國に對して例外を示すものではなくなつて居る。殊に近年に於けるイギリスの勞働黨の勢力の激增は、將來勞働黨內閣さへ出現するであらうといふ豫測の、必ずしも根據のないものでないといふ事實を暗示するやうになつて居る。かくて從來の二大政黨互立の原則――それは先年に於ける戰時內閣(War Cabinet)の出現に依つて『一時的』に停止せられたものだと考へられて居るものだが――の形式の上に、一大脅威を加へるやうになつて來たのである。

かういふ諸事實の外に、我々は尙ほ、現代の政治的組織を根本的に轉覆しようと脅威して居る社會革命の氣勢が、各國に於て漸々醞釀せられつ丶ある事實を無視してはならない。殊に四年前のロシア革命に於て、曾ては殆んど不可能事だと考へられて居た大變革が、物の見事に成し遂げられてからこのかた、この趨勢がます〳〵濃厚になりつ丶あることは事實である。もとより、かういふ大變革が、今後世界の各部に通じて完全に實現せられるであらう時期が縱しあらうとも、それは、少くとも我々の判斷力が到達する限りに於ては、まだまだ餘程遠き將來のことだといはなければならない理由がある。が、それにも拘らず、結局そこへ導かいでは置かないものであるらしく見られる樣々の傾向が、今後に於て一層急激に增進することがあらうとも、少しも減退する氣遣ひはあるまいと推測することもまた同樣に、決して根據のない出鱈目だといふ譯にはゆかないのである。

しかし、現下の我國の政局を觀察しようとしてゐる私は、か

ういふ將來に對する憶測——縱しそれが如何に興味があり利益があることであるにせよ——を廢して、まづ何物にも囚はれない心境に於て、現實を凝視しなければならない。で、前に言つた通りに、現今普通に用ひられて居る意味に於ける『議會主義』(Parliamentarism)の根柢に横はつて居る政黨政治の完全型(perfect type)は、資本階級の手に依つての、獨占的——もしくはそれに近き——政治的支配の實權の獲得に伴れて形づくれるものだといふことが本當だとすれば、我々は果たして、我國に於てさうした狀態が既に準備せられて居るものだと見ることが出來ようか？　これに對する誰れもの解答は、それが或る成心によつて與へられるものでない限りは、必然的に幾分か否定的のものでなければならないのである。

三

若し我々が、ブルジョアジーといふ言葉の中に、商工業上の資本家たちの外に、農業上の資本家たち、すなはち地主の集團を包合せしめ、尚ほその上に、曾つてエンゲルスがイギリスの場合に就いて言つた通りに、貴族の集團をも包合せしめるならば我國に於てもまた、ブルジョアジーの政治的支配の獨占が、殆んど完全に近い程度に達して居るものだと見ることが出來る。【註一】、

然しながら、かういふ意味に於けるブルジョアジーは、我國の場合に於てもまた、或る點から見れば、如何にもプロレタリアート(廣義の)に對してこそ、皆一樣に同樣の地位を占めて居るものであると言ふことが出來るが、それにも拘らず、其各構成分子間の經濟的利害、及びそれから生じて來る人生觀社會觀といつた樣なものは、全然同一だとは決して言へないのである。換言すれば、商工業上の資本階級や地主の集團や貴族の集團やは、無論、彼等の仲間内に於てこそ、ブルジョアジーとしての共同

【註一】　エンゲルスは、その著『イギリスに於ける勞働階級の狀態』(Engels, Friedrich: Die Lage der arbeitenden Klassen in England, 1845)の中で『ブルジョアジーのプロレタリアートに對する地位』に關して記述して居る一節の劈頭に於て、斯う言つて居る。——『私が玆でブルジョアジーに就いて語る場合には、私は所謂貴族をも一緒にその中に籠めて居るのである。といふのは、貴族は唯ブルジョアジーに對してこそ貴族であり、特別に特權づけられて居るものであるが、プロレタリアートに對しては、さうでないからである。所有の特權の前には、他のすべての特權が消えてしまふ。で、兩者間の相異點は唯、本來のブルジョアジーに在つては工業上のプロレタリアートに、また部分的には鑛山プロレタリアートに、且つまた土地借耕者としては農業上の日雇勞働者に、それ〴〵對立して居るものであるが、之に反して所謂貴族は、たゞ鑛山プロレタリアートの一部分と、並びに農業上のプロレタリアートとに對して交渉を持つて居るものである、といふところに存して居るのである。』

の利害關係を（從つてそれから生ずる共同の人生觀社會觀といつた樣なものを）持つて居ることは事實であるが【註二】、しかしながら、それと同時に、是等の各集團はまた、恐らくそれと同程度に於て、それ〴〵相異した經濟的利害關係をも持つて居るのである。そのうちにも、地主の集團と貴族の集團とは、多くの點に於て、——殊に實際上屢ば見られる通りに、貴族が同時に地主である場合には、それこそ總ての點に於て、——双方に共通の利害關係を持つて居るものだといふのは、恐らく事實に遠い言ひ前ではあるまい。それからまた貴族の集團は、本能的に社會組織の上に急激なる變革の起るのを嫌ふところから、其政治上の見地に於て商工業上の資本階級の主力たる集團の立場に反對しても、さういふ方面の小資本家の集團（プティ・ブルジヨア）だのプロレタリアートだのゝ利害關係を顧慮してゐるやうに見える——無論それは貴族といふ一段と高い立場から見下ろしてのことであるが——場合があることは、我國の貴族院の議事錄などの上にも、屢ば現はれて居ることである。

兎に角、右に述べた樣に、商工業上の資本階級と地主や貴族やの集團とは、彼等のすべてに共通した經濟的利害關係を持つて居るが、同時にまた、それぞれ相異したそれをも持つて居るのである。もつとも、この關係は、一方に於ては、資本階級の貴族化——それは時として起ることがある著名の商工業者らに對する授爵といふやうな出來事で象徵せられて居るが、それよりも、彼等の生活に於ける貴族趣味の模倣といつたやうなことに依つて、もつと普遍的に表示せられて居る——の傾向に依つて、そしてまた他方に於ては、貴族の或る程度に於ける資本階級化の傾向に依つて、始終その釣り合ひが動搖して居るものであることは、爭ふべからざる事實である。それに、地方農民の商工業方面への投資の傾向の漸進して來たやうに見える事實——それは今から少し前に米價が暴騰した結果として、地方農民の懐合ひが急に肥えて來た際に於て、殊に顯著に目立つたものであつた——もまた、この釣り合ひの動搖の上に、相當の影響を及ぼして居るものであることも、同樣に爭ふべからざる事實である。が、それにも拘らず、これらの各集團を各別に特殊の集團として眺めるとき、その間に横はつて居る經濟的利害關

【註二】　以下「經濟的利害關係」といふ言葉が用ひられてある場合には、『それから生ずる人生觀社會觀といつたやうなもの』といふ文句が、當然のことゝして、その中に包含せられて居るものとして、特にそれを擧げる必要のない場合には、大體は省略することゝする。

係は、必ずしも彼等のすべてに共通して居るものばかりだといふ譯ではなく、甲乙のいづれかが偏して居るといつた種類のものも、可なり多くあるのである。

我國の議會を中心として、現實政治を直接に、積極的に動かして居るものは、實に右に掲げた三つの集團なのである。そして、その他の一般民衆はどうかといへば、最も好都合の場合に於てさへ、彼等は現實政治に對しては單に間接的、消極的の――もしくは牽制的の――效果を及ぼし得る地位に在るにすぎないのである。しかし、それはそれとして置いて、さてかういふ局面に就いて、私が今取扱つてゐる主題に關係のある點を摘出すれば、結局かういふことに歸着するのである。――すなはち、我國の政界に於ては、資本階級の政治的支配の實權の獨占的――もしくはそれに近き――獲得が、根本的に實現せられる運びにはまだ立至らないといつた處にまでしか進んで居ないのである。疑ひもなく、それは着々、その實現の方向へと移動しつゝあることは、事實である。が、それにも拘らず、當分の間は一方に於ては、我國の資本階級は、その政治的支配の實權を、貴族の集團と共に分掌し、他方に於ては、同じ資本階級の仲間うちに在つても、商工業上のそれと、農業上のそれとが、それぞれ異同のある經濟的利害に立脚して、各自の政治的活動をして居るのである。そのうち、貴族の集團の政治的立場が貴族院に於て代表されて居て、資本階級全體のそれが直接には衆議院に於て代表されて居ることは、いふまでもあるまい。そして衆議院に於ては、農業上の資本階級の政治的立場が、近年に至るまで最も有力に代表せられて居たものであつたが、日清戰爭以後商工業上の資本階級のそれも、次第々々に著るしくそこに代表せられる傾向を示して來たが、殊に最近の數個年間に於て、主として世界大戰の影響を受けて、商工業上の資本階級がその實力の上に一大飛躍を遂げてからは、その衆議院に於て代表せられてゐる勢力も、非常な急調子を以て增大したやうに見られるのである。

しかし、これらの諸事實を念頭に置いて考へても、一方に於ては、我國の資本階級は、資本階級として、貴族の集團と共にその政治的支配の實權を分つて居るし、他方に於ては、同じ資本階級仲間うちに於ても、商工業上のそれと、農業上のそれとが、それぞれその間に異同のある政治的立場を、各自に於て固守して居るのである。そして、この三つの集團の間には、前に述べた通りの、一種の『三角關係』が成立つて居るのである。――斯ういふのが、少くとも大體に於ては、我國の政界に於ける政治的支配の實權の分布の現勢である。で、私はこの種

上に立脚して、私の能力と時間との許す限りに於て、現下の我國の政局に對して、主として社會心理的見地から、成るべく委細に私自身の考察なり批判なりを加へてみようと思ふ。

四

日露戰爭以後の我國に於ける資本主義の發達は、兎も角、他の何物のやうに見えるよりも、より多く政黨內閣のやうに見える原內閣の成立を可能にしたばかりではなく、その殆んど三個年に跨がる存續をも可能にした。そして、原內閣は、その反對黨の側から頻りに投げ掛けて居るところの、例の『內政外交上に於ける重ね重ねの失敗』のために、殊に最近その施政の下に於て續々發生した官公吏に關する腐敗事件とか、半官的性質の企業會社の重役連に係はる瀆職事件とかのために、今にも倒れさうになつて居るとかのやうに取沙汰されて居る。けれども、事實上に於ては、それは倒れさうで中々に倒れないのである。曾て『西にレニンあり』などと賑やかに囃し立てられた、其當のレニンが、幾たびか訃音を傳へられながら、いまだに健在して居る通りに、『東にある』其片割れである原敬氏の內閣も、幾たびか顚覆しさうになつて居るかのやうに噂されながら、尙は依然としてその命脈を保つて居るのである。否、單にそればかりではなく、この內閣の不安定なる存續の可能性も、それが倒れた場合の後繼者として豫想され得る限りの如何なる內閣の成立の可能性よりは、寧ろ幾倍も確實なものとして、我々の眼に映じて居るのである。

それは一體どういふ原因に基くのであるか？ 或る一部の人達は、それは原首相の剛愎に依るのだとか、または、それは彼の性格の强さに基くのだとか言ひ合つて居る。かういふ說は、一種の惡魔讃美論とか、英雄崇拜論とかに歸着するものである。そして、それは一種の詩的幻想の產物かも知れないが、決して科學的觀察から出た結論ではないのである。いかにも、聖者にもせよ、惡魔にもせよ、彼れ一人の指頭の力で『天下の形勢』が左右せられて居るものだと見るのは、多少ロマンティックな傾向を持つて居るもの丶想像に訴へるだけの魅力を充分に持つて居ることかも知れない。しかしながら、あらゆる歷史的事實の根柢には、如何なる種類の個人といへども、その單獨の力ではどうにもすることが出來ない、或る社會力經濟力の底流が橫はつて居るものだといふことを知つて居るもの丶側からは、さうした神話的な、唯美主義的な考へ方は、齒の浮くやうな幼稚な考へ方だとしか見えないのである。如何にも、原首相は剛愎な男であらう。誰れがそれを否定し得よう？ しかし、彼をしてそ

の囘復を立て通ほさしめるものは、それは一體何であるか？如何にも原首相の性格の強さは、偉大なものであらう。これに關しては、異存のある人々も澤山あらうが、まあさうだと假定して置いても、私の論據の關係して居る限りでは、一向差構ひはない。しかし、彼をして此假定上の性格の強さを發揮せしめ得るものは、それは一體何であるか？　我々が今手にして居る問題に關して、苟しくも原首相を『超人』扱ひにするやうな、原始的な考へ方をするといつたやうな種類の甘い人々でない限り——かういつた種類の甘い人々が世間には案外數多く生存して居るのだが——は、まづこのことから決めて掛かる必要のあることを認めないものは、恐らくあるまい。

　この問ひに對して大抵の人々から豫期し得られる答案は、恐らく、『それは現在の政局の表面に立つて活躍して居る政治的勢力を代表して居る諸集團の中に於て、政友會が一番強い集團であるからだ』といつたやうなところへ落ち着くであらう。ところが、『強い』とか『弱い』とかいふことは、まづ第一段には、力量の比較から出て來る表現である「換言すれば、或る個人なり集團なりが『強い』とか『弱い』とかいふのは、その個人なり集團なりの力量を、他の個人なり集團なりのそれに比較した上で、始めて言ひ得られることなのである。この點から、政友會が現政局の表面に於て活躍して居る政治的諸集團中で一番強い集團であるといふこと——それは英語の master of the situation といふ言葉で最も簡潔に表現せられて居るものである——を解釋すれば、どういふことになるであらうか？

　いふまでもなく、政友會が一番強い政治的集團であるといふことは、その相手方たる政治的諸集團がそれよりも弱いものであるといふことゝ、同じ意味なのである。政友會を他の政治的諸集團から切離して、それを單にそれだけのものとして見ればそれは別に『強い』とか『弱い』とかの問題を伴ふべきものではない。それ故に、一個の政治的勢力としての政友會の現在の地位を知らうとすれば、我々はまづそれを、その相手方であるところの、他の政治的勢力としての諸集團の現在の地位に比較して論究しなければならないのである。

　政友會の相手方！　かういへば、我々に直ちに、貴族政治家の集團、すなはち官僚及び其立場を政治的に表現して居る貴族院内の各派と、衆議院内に於ける政府黨たる政友會と、同じく衆議院内に於ける憲政會を筆頭とする在野黨との間に挾まれて居る『三角關係』を想ひ浮べない譯にはゆかない。現政局の表面に活躍する立役者としての斯うした政治的諸集團の間に於ける『三角關係』は、ずつと前に述べた政治的事實の實體の最後の分

業者としての商工業上の資本階級と、農業上の資本階級すなはち地主の集團と、貴族の集團との間に於ける『三角關係』と全然合致しては居ない。そのうち、貴族の集團の政治的立場は、官僚のそれとなつて、貴族院内の各派の行動の上に明瞭に反映せられて居るが、しかしながら、官僚の、從つて貴族院内の各派の——政治的立場の焦點は、甚だ曖昧なものとして我々の眼に映ずるのである。少くとも、それは一つどころに纏められては居ないのである。といふのは、前に述べた通り、それは、一は貴族が多くの點に於て地主の集團と共通の經濟的利害關係を持つて居るところからも來て居るし、一は貴族の或る程度に於ける商工業的資本階級化といふことからも來て居るし、一は貴族が或る他の考慮から民衆の歡心を買ふ必要を感じて居るところから、來て居るのである。ところが、それに似通つた關係が、大體に於ては、政府黨たると、在野黨たるとを問はず、衆議院の諸政黨の行動の上にも、殆んど同樣の過程に於て現はれて居るのである。すなはち、これらの諸政黨はいづれも、一方に於ては、臨機應變的に貴族政治家の集團すなはち官僚に對して强き相互的牽引力を感じて居るし、他方に於ては、彼等はいづれも商工業上の資本階級の利害關係をも代表すれば、農業上の資本階級すなはち地主の集團のそれをも代表する必要に迫られて居るのである。その外、各政黨は、いづれも、官僚とは多少異つた意味で、民衆の支持をも求めようとして居る。若しくは少くとも、彼等の各自は、群衆心理を利用することに依つてでも、民衆の輿論を自黨のために好都合な方向へ導かうと努めて居るのである。

かういふ諸現象のうち、商工業上の資本階級の經濟的利害關係と農業上の資本階級のそれとが、全然同一の政黨に依つて代表せられて居るといふ樣なことは、我國の場合に於ても、一つの過渡的現象ではないかと考へられるのである。右の兩者間に於ける相互的反撥は、我國の議會に於ても、近年に及んで漸次明瞭に反映せられる樣になりかけて居るのである。今此點に關する一例を擧げてみれば、第四十四議會に於て通過せられた米穀管理法の如きものは、將來に於ては、商工業上の資本階級と農業上のそれとの間に、或る種類及び程度の衝突の動因を提供する可能性を多分に帶びて居るものではあるまいか。現に、第四十四議會に於ては、純粹の農民黨の組織を唱道した代議士さへ現はれて、稍々早産の氣味のあつた『自稱農民黨總理』などが飛び出したやうな茶番式の餘興もあつたのである。しかし、この笑劇の動機となつたものが全然滑稽のものばかりでなかつたことだけは、明かにそれと言ひ切ることが出來ると思はれるの

である。

しかし、それはそれとしておいて、私は、私が今しがた說明しかけて居た貴族政治家の集團すなはち官僚及び其立場を政治的に表現して居る貴族院內の各派と、政府黨と在野黨との間に於て見られる三角關係に就いて、そこで言ひ殘したことを、今少し繼ぎ足しておきたい。そして私は、私自身の便宜上、ふたたび官僚及び貴族院の方面から說き起さうとして居るのである。

五

私はこれまでのところでは、假りに『貴族政治家の集團』といふ言葉を用ひて、官僚を性質づけて來た。しかしながら、官僚をその本質に立入つて精細に觀察すると、それをこんな簡單な說明句で片附けてしまふのは、少くとも甚だ不充分である。しからば、官僚の本質といふものは、一體どういふものであるか？

この問ひに向つて滿足な答案を與へようといふとは、恐らく誰れに取つても、可なりむづかしい仕事であらう。誰れでも官僚といふものを、直覺的に認識することは出來る。だが、官僚の本質を幾らかでも解剖的に說明せよと求められると、大抵の人々は多少戸惑ひせざるを得ないであらう。私は、私自身もまたさうした『大抵の人々』のうちの一人であることを白狀する。けれども、私は同時にまた、私のこれまでの論點を先きへ進めて行くためには、どうしても一度はこの難關を通り越さなければならない必要のあることを感じる。であるから、甚だ粗末でもあり不完全でもあると思ふが、私は次に、私が今それについて與へ得る限りの說明を、よし試驗的意味に於てなりと、一應提供してみようとして居るのである。

官僚といふ言葉は普通には、英語の bureaucracy に當るものだと說明せられてゐる。けれども、私の考へるところでは、少くとも特に我國の場合に就いてといふきには、この解釋はいさゝか的を外づれて居ると思ふ。英語の bureaucracy は行政上の官制の組織に關聯して居るものであつて、國家及び地方の公務を取扱ふために設置せられてある大小の官職を占めて居る人員の全體を指して、集團的に呼んで居る總稱である。そして、その本質と見做されて居るところのものは、それらのすべての官職が何々省、何々局、何々課といふ風に上から下へと順々に段階的に排列せられて居て、さうしてまた、すべての官職は、結局この官制的組織の樞軸たる中央政府に依つて、統一せられてしまふのであつて、しかも、この組織內に於ける各

を占めて居る人々が、直接に公衆に對して責任を負ふのではなく、唯自分の屬して居る各部局の長官に對してのみ責任を負ふのだ——といつた樣な點にあるものと諒解せられて居るのである。かういふ意味を持つてゐる bureaucracy といふ言葉から派生したものであつて、そして、その樣々の特徴を指し示さすために用ひられて居る形容詞は、例の bureaucratic といふ言葉である。

我國の場合に於ては、我々が『官僚的』といふときには、如何にも、我々はそれを英語の bureaucratic と同樣の意味に於て用ひて居る。がしかし、我々が單に『官僚』といふときには、我々はそれを、英語の bureaucracy よりも更らに一層限局せられたる或る特殊的意味に於いて用ひて居るのである。まづ第一に、我々の慣用の意味に於ける『官僚』といふ言葉は、中央及び地方政府の官職を占めて居る人員の全體を指して居るものでなくして、むしろ、その最上層に位置を占めて居る比較的少數の頭目株の人々の集團を指して居るのである。しかも、かういふ風に『頭目株の人々の集團』といつても、それは法律上の上長官達を指して居るのではなく、むしろさういつた法制上の形式上などには拘泥しないで、事實上の頭目株としての實力を有し、且つそれを實際に行使して居る人々でさへあれば、官僚團内の人々であるに於て、甲乙はないのである。この意味に於て、『官僚』の『官』は、嚴密なる意味に於ける法制上の『官』と全然合致して居るものだとはいへない。法制上の高官の地位を占めて居ても、但しは布衣となつて『閑地』に『靜養』し居ても、官僚は官僚である。それ故に、山縣公のやうな人であれば、今のまゝの『綱要』の地位に留まつて居ようが、官職位記を脫ぎすてゝ昔の狂介に還元しようが、如何なる場合に於ても、彼が官僚團外の人とならうなどは、何人の想像の上にも浮んで來ないとである。でなければ、彼が容易にさうした無鐵砲のことを言ひ出す譯がなからうではないか？

しかし、これだけのことを言つたところで、官僚の本質が充分に說明され出來たものだといへないのである。それをしようと思へば、我々は同時に、我國の官僚が今日でも尙ほ超憲法的勢力を實質的に擁して居る一個の政治的集團であることを、我々の念頭に置かなければならないのである。それは、官僚が既に憲法制定以前に於て掌握して居た政治上の實權を憲法制定以後にまで持ち越して來たものであつて、しかも憲法の條規に制約せられないで存續して居るところの、彼等の明治維新以來の傳統的權勢の殘照である。この點を一層明瞭にしようと思へば、我々は明治維新から憲法制定までの我國に於ける政權の運用の

歴史を述べなければならないことになるが、しかし私は、短きこの一文の中にさうした試みが企て得られるものだとも考へないし、また企てようとも考へて居ない。で、私は本篇の目的のためには、かういふ風に、この重要なる一の政治史的事實を示唆するだけに止めておくことにする。

六

官僚が憲法制定前から持越して來た傳統的權勢の殘照であるその超憲法的勢力は、官僚に取つては國寶以上の珍品である。一體に、官僚及び資本階級を含めての――廣義に於ける――ブルジョアジーは、それ以外の一般民衆に對しては、一個の特權集團を構成して居るものであるが、しかし、その內部では更に、官僚が官僚だけで資本階級に對して一個の特權集團を構成して居るのである。さうして、かういふ事情の發生を促した最大原因は？　といへば、それは實に官僚がこの國寶以上の珍品を擁してゐるといふ事實そのものなのである。

かういふ譯であつて見れば、官僚がその特權集團としての存在の源泉たるこの超憲法的勢力を特別に尊重し愛護して、只管その永久的保存を謀るために腐心して來たのも、別に不思議でも何でもないといふことになるのである。憲法制定以後に於ても、彼等はそれを、この傳來の珍品を害ふことのないやうに解釋し運用することに努めて來たのであつた。そして、彼等は或る期間に亘つて、相當の自己滿足に耽り得られる程度に於て、さうすることに成功したのであつた。といふのは、一つには、憲法の條項が、所謂國家の『基礎法』だといふので、いくらも解釋の餘地が殘されてある程に概括的なものでもあり、その上、故伊藤博文公の『憲法義解』以來、直接間接に官僚から出た共解釋が、世間で行はれたそれの標準となつたものであつたといふところから來て居ることは、明かなる事實である。しかしながら、この事實よりも更に根本的なものといふべきものが、もう一つ別にあつたのである。それは、憲法の起草者が、伊藤公を中心としての官僚團內の一團であつたといふ事實であつた。憲法は當時盛にメートルを上げて居た民間の一部の志士たちの憲法期成運動の氣勢に促されて產まれたものであつたが、しかしその起草の當事者が官僚團內の人々であつたといふ事實は、さうして產まれた憲法の上に、さうでなかつた場合には決して見られなかつたであらうところの官僚的烙印を捺し附けたのであつた。さうして、それがさうならない譯にゆかなかつた事實の根柢に於ては、我々は或る歴史的必然性の糸を辿ることが出來るのであるが、しかし、この點を闡明するといふ興味ある企て

もまた、遺憾ながら、私のこの論文の目的の範圍外に置かれてあることとなるのである。

しかし、官僚が憲法制定前から持越して來たその傳統的權勢の殘照も、官僚が必死になつてその保存的努力をしたにも拘らず、矢張り本來の殘照が辿るべきものになつて居る必至の運命を免れることが出來なかつた。すなはち、この殘照の光りは、立憲政治がその軌道の上を廻轉して行つただけづゝ、段々と薄すれて行つたのである。憲法制定以來、我國の「憲政」も甚だ緩やかではあるが、矢張りその軌道の上を廻轉しつゞけた。そして、その廻轉のための動力となつたものは、資本主義のその時以來の發達であつた。この資本主義の發達が、官僚の一敵國としての政黨の戰闘力を培つた。殊に日清日露の兩役以後、我國に於ける資本主義が商工業の方面に於て急に增進するやうになつてからこのかた、さういふ傾向が、一層著るしくなつた。少し既往に溯つて考へてみると、我國に於ける近代式資本主義の發達は、明治維新以來の官僚政府が採つて居た所謂殖産興業奬勵政策に負ふところが多いものであつたとは、いふまでもないことである。ところがかういふ風に、彼等の「指導誘掖」の上にその發達の重要動機を見出だした資本主義も、今や彼等の發達を招來する働きをするやうになつたといふことは、一見恰も矛盾の現象のやうに見えるが、しかし、仔細に觀察すると、そこにも我々は、歴史的必然性の糸が隱微の裡に貫通して居るのを認めることが出來るのである。

七

官僚はその官僚としての生存上の必要の衝動から、その憲法制定前から持越しの傳統的權勢の殘照を、どこまでも消滅させまいと努めた。斯くて彼等は、我國の憲政を、この目的のために都合の好いやうに運用しようと企てた。超然内閣主義といつたやうなものは、彼等のかういふ作戰計畫の産物であつた。しかし、さうやして居る間に、政黨が彼等の權勢維持策に對する大なる脅威を以つて彼等に肉薄して來た。それは、初期の議會から資本階級の機關として活動して居た政黨が、その後の資本主義の發達に伴れて、段々とその戰闘力を增大したからであつた。しかも政黨は、議會的政黨としては官僚に對する一敵國をなして居たが、同時に、自分達の仲間に於ては、當然の成行として、相互的に敵視し合ふ諸政黨として群立して居たのであつた。かういふ風に、一方の側には政黨全體を目のかたきにして居た官僚が立ち、他方の側には、口やかましく藩閥打破とか官

僚退治とかを叫びながら、相互間に於て激烈に軋轢排擠し合つて居た政黨が立つといつたやうな狀勢の下に於て、一種の奇妙な組み合はせ（グルーピング）に於ける妥協反撥、離合集散の政治的悲喜劇が、その頃からずつと引續いて繰返されて、今日に至るまでその痕跡が消滅し切らないで居るのである。

官僚は初めから立憲政治の下に於てもその傳來の超憲法的勢力を維持しようと目論んで居たのであるから、從つて、もと〳〵プロシア式憲法をモデルにして作られた憲法を、プロシア式に解釋し運用しようとした。それは、當然のことであつた。ところが、政黨は之に反して、その憲法をイギリス式に解釋し運用しようとした。それもまた、當然のことであつた。政黨は資本階級の機關として活動するのでなければ、充分にその威力を發揮することが出來るものではない。そして、イギリス式の憲政は前にも言つた通り、同國に於ける資本階級の手に依る獨占的――もしくはそれに近き――政治的支配の實權の獲得の産物であつた。資本階級の機關として立つてゐる政黨政治が、それを手本にして其議會的行動を續いて行かうとしたのは、その間にいさゝかの無理がないことであつた。そこで彼等は、そのために邪魔になる超然主義內閣に挑戰し、そして政黨政治に立脚する責任內閣制の樹立を、その合ひ言葉にしたものであつた。

我國の政黨は、もとはいづれも資本階級が主動的に組織したものではなかつた。それは寧ろその初めに於ては、官僚政府の段梯子から失脚したところの、失意の「志士」たちに依つて組織せられたものであつた。それ故に、後には資本階級の機關となつた諸政黨も、その前身は官僚と一つ穴のむじなであつたのである。この事實もまた、今に至るまで、我國の議會的諸政黨に深き印刻を留めて居るものである。我國の議會政治家の大抵のものが、その政治的言動の上に於て、まだまだ官僚的色彩を脫し切らないで居るのも、但しはまた、彼等の多くが諸政黨の首領としては、まだまだ當の敵である筈の官僚に對して、どうかすると相互的牽引性の働きを感じ易い地位にあるのも、それをその淵源に溯つて考へると、結局はかういふところへ行き着くのである。官僚の傳統的權勢の殘照の光りが流石に薄れて來て居る今日に於ても尙ほ、小田原の大御所が政界のメッカともいふべき聖地として殘つて居て、そこへ巡禮する政客の群れが引きも切らない光景を示して居るのは、いはゆる議會政治家とか立憲政治家とか自稱して居る群政客の心理に於て、まだ全然 metamorphosis（變形）を遂げて居ない昔ながらの官僚意識が、その底深く巣喰つて居るためでなければならない。

八

『勝てば官軍、敗ければ賊よ！』といふ輿論がただ空に鳴り響いて居た時代に於て、官僚圏内から追放せられた失意の『志士』たちは、その失はれたる權勢を取戻すための最良手段として、政黨を組織し始めた。しかし、いよ〳〵政黨となつてみると、資本階級の機關としてでなければ、有效なる議會的行動をすることが出來ないといふことが、段々と判つて來る樣になつた。現實政治は、どういふ外見の立派な形式で裝はれて居ようが、どういふ人聞きのいゝ理論で包まれて居ようが、その根を洗へば、畢竟、社會力經濟力の表現である。この赤裸々な事實を無視して政治を論じて居ては、決してその核心に徹することが出來るものではない。政黨に、その政黨としての生存上の必要の衝動から、この原則を本能的に認識した。彼等はその個々の指導者たちの意思の如何に拘らず、その内部からの生命力の發現に依つて、自然的に、必至的に、そこに導かれたのであつた。それはちようど、磁針が北を指すといつたやうな調子で、そこへ導かれたのであつた。いつ頃からは知らないが、イギリス式の政黨政治に立脚する責任内閣主義を代表する『憲政の常道』といふ言葉が、我國のすべての政黨の標語となつた。如何にも、各政黨の行動が、大抵の場合に於て、この政治的信條を裏切つて居るために、且つまた、彼等が屢々ば自己防禦のためにこの標語を濫發するために、彼等のかうした叫び聲が、著るしく僞善的調子に聞えるやうになつて來たといふことは事實である。そして、彼等が僞善を日常茶飯事として行つてゐるといふことも事實である。それからまた、僞善といふことが、その慣行に依つて、政黨の『道德』となつて來て居るやうに見えるといふことも事實である。けれども、これらのすべてのことを考慮のうちに加へても、政黨が年來イギリス式の憲政の運用の方へ近寄らうと努めて來たことは、決してその模倣性ばかりから來たものだともいへないし、また、その僞善的動機ばかりから來たものだともいへない。それは實に、究極に於ては、その政黨としての生存上の必要の衝動から來たものなのである。

しかし、政黨が挑戰した官僚にしても、曾て眞底からの資本階級の仇敵であつた樣なことはなかつた。それどころではなく、彼等はその公生活に於ては、前にも掲げた通りの、維新以來の殖産興業奬勵政策に依つて、我國に於ける近代式資本主義發達の素地を開拓したのである。それからまた、彼等はその私生活に於ても、幾多の政商と結托して、色々と彼等のために便宜を與へたりなどしたのである。其間に於ける醜關係が外間に暴露

したことすら、一再には止まらなかつた。『珍品』の贈答は、原内閣の下に於て始めて登錄せられた新案だとは、決して言へないのである。それぱかりではなく、官僚の仲間の多くが、自ら直接間接の投資者として何かの事業にどういふ方法かで關係して居るとか、もしくは、彼等が公人として立つて居る場合にその地位から當然に得られる相場の變動などに關する誤らざる觀測を利用して、直接間接に投機に手を染めることがあるとかいつたやうな個別的事實を離れて考へても、官僚は貴族といふ集團の一構成要素として、必然的に、この集團が代表して居る資本經濟的利害關係の中に卷き込まれて居るのである。かういふ點に關しては、私は既に本文の前の方で一言しておいたから、今はそれを再說しないで、單にその事を回想するだけに止める。

しかしながら、官僚が官僚として集團的に最も關心するところは、直接に資本階級の經濟的利害關係を代表することでなくて、むしろ、その保護者として、その奬勵者として、そしてまた、その指導者として、國家政策を導いたり、社會的經濟的施設をしたりなどするところにあるのである。少くとも、私自身はさう見て居る。そしてまた、それは、彼等が曾て環境からの印象を最も受け易い年頃に於て受けた封建思想的訓練から來て居るものだと見て居る。さういふことのすべては、彼等がいはゆる『治國平天下』の道だと考へて居るとでなければならない。彼等は其壯年時代から積んで來た修養に依つて、封建的パターナリズムが國家全體のために、最良の『治世の要道』だと考へて居るのである。けれども彼等は、それが彼等が官僚として集團的に生存して行くための必須條件だといふ根本的事實を、少くとも意識的には無視して居るらしく見えるのである。否、さういふことは、或は實際上に於ても、彼等の集團意識の上には、浮んで來ないことなのかも知れないが。しかし、さういふことも、彼等の無意識的感覺の上には、深く印刻せられて居るに違ひない。かういふ場合に於ても我々は、彼等の無意識的衝動の方が、彼等の意識的反省よりも　彼等の實際上の集團的行動を導く上に於て、遙かに有力なる要素として働いて居るものであるといふ事實を、可なり明瞭に認めることが出來るのである。

かういふ風に、產業上の方面に於ては、官僚は、官僚として集團的に或る經濟的利益を直接に代表するよりも、寧ろ彼等がその補育者なり指導者なりとして行動する方が、結局自分達自身の經濟的利益がより多く酬いられるのであることを、本能的に知つて居たのである。換言すれば、彼等は、自分達自身の手に巨大なる富を擁するよりも（彼等の個々が決して巨大なる富を擁してゐない譯ではないが）、更らに一層大なる富を擁して居

る資本家達を自分達の勢力範圍の中に引き入れて、自分達の命令で自由に彼等を頤使し得る地位に立つために、日頃から、その公私生活に於て彼等に恩を賣つたりなどして置く方が、詰るところ、自分達自身の經濟力が增大したのと同じ結果になるのであることを、本能的に知つて居たのである。彼等はまづ第一段には彼等の意識的反省によつてそこに導かれたのではなくして、無意識的衝動によつてそこに導かれたのである。或は斯ういふ方が、一層適切かも知れない。すなはち、彼等の場合に於ては、殆んど他のすべての場合に於けると同樣に、彼等の意識的反省は、多くは彼等の無意識的衝動から出る各種の行爲を肯定する役目を務むるだけに過ぎないものである、と。兎も角、產業上の方面に於ける彼等のパターナリズムは、かうしたところから產まれたものである。

しかし、同樣のパターナリズムは、彼等が直接に政權を動かして居た間は、社會生活の各方面に向つても亦、必然的に現はれて居た。しかも、それが最も著るしく目立つたのは、教育及び思想の方面に於てであつた。彼等は各國の各時代の支配階級と同樣に、教育及び思想の方面の指導誘掖、もしくは監督抑壓の權利を獨占するのが、彼等が集團として生存して行くのに都合の好い社會狀態を釀成するための最良法であることを、本能的に認識して居た。そこで、彼等はその執政の期間に於ては、かういふ方面に關しても、大規模の上にパターナリズムを行つた。かくして、小學から大學に至るまでの全段階に適用せらるべき教育精神とか、教育課程とかを規律する廣汎なる國民教育上の行政の組織が作られた。かくして、言論、出版、集會、結社の上に臨む手剛き警察的監視や檢閲やの制度が設けられた。我國民は、いまだにかういふものを、官僚政府からの遺產として受け繼いで居る。そして、かういふ教育制度なり、かういふ警察法規なりは、時代が政黨內閣のそれになつても、依然として存續せられて居るのである。產業上の方面に於ては、次第に資本階級的自由主義の方へと步みを移しつゝある政黨內閣も、教育とか思想とかの方面に於ては、いつまでも官僚內閣から傳來した方針を變更しようとはして居ないのである。かういふ點に就いても、興味ある考察をなし得る餘地が大にあるが、私は今はそれを企て得るだけの時間の餘裕を持つて居ない。

九

しかしながら、私はいま玆で、官僚政府がその後々を引繼いだ各政府への遺產として殘した國民教育制度だの、言論抑壓政策だのゝ總勘定の一端を示したいやうな氣持ちの誘惑に打勝つ

ことが出來ない。これに關しては、私は餘り遠い過去のことをいはうとしてゐるのではない。私は現在私達の眼の前に展ろげられて居る諸事實のうちから、その二三の例を拾はうとしてゐるのである。

といへば、私が今私の胸裡に、近年に於ける所謂『危險思想』の傳播（無論、官僚を始めとして、一般の支配階級の立場から見たまゝの）だの、社會的頽廢の傾向の增加だの、『官紀紊亂』の發露だのといつたやうなことを思ひ浮べてゐるものだといふことには、敏感な讀者たちは、直ちに氣附かれたであらう。實際これらのすべてのことは、近年來世間の眼を聳てしめた社會的諸事實のうちに於て、最も顯著なるものゝ部類に屬するものである。

いはゆる『危險思想』は、近年に於ては、主として社會生活なり國家生活なりの批判に涉る言論のうちに於て發見せられるものである。かうした言論は、大抵はみな、現在の社會組織の缺陷から出た產物なのである。そして、かうした言論は、現在の社會組織の下に於て各種の利益を受けて居ると考へて居る支配階級の立場からこそは、安寧秩序を紊すものとも思はれようが之に反して、現在の社會組織の缺陷を痛感して居る人々の群れの耳には、縱し天來の福音のやうには聞かれないまでも、決して危險とも物騷とも響かないことだけは確實である。かういふことは、既に多くの言論家たちに依つて指摘されて來たことであるから、私はこれ以上、それに就いて何をもいはうとは思はない。が、かういふ言論が、當局の鵜の目鷹の目の監視の下に於ても、少しも減退しないばかりか、益々增進して來たのであつて、そして尙ほこれからも一層增進しようとする徵候を見せて居るのである。私は、それが當局の言論警察の失敗だといはうとして居るのではない。私はたゞ、社會的必要の前には、當局の嚴重なる抑壓政策も、如何に無效なものに過ぎないものであるかを明かにしたいのである。

近年に於て著るしく目立ちかけて來た社會的頽廢の傾向にしたところで、矢張り資本文化が產んだ社會現象の一つである。資本主義的經濟組織が、如何に舊來の社會生活の諸相の上に破壞的效果を齎らしたかといふことは、今更らいふだけが野暮である。それは遠き過去から傳來した文化を破壞し、傳統を破壞し、風俗習慣を破壞し、宗教道德を破壞し、家族生活や鄉土生活を破壞し、若しくは、これらのすべてを尙ほ一層破壞しようと脅威して居る。私は斯ういふ現象を、いゝとか、わるいとかつて、その上に價値批判の尺度を適用しようとして居るものでは、決してない。のみならず、私は、斯ういふ現象が起つたの

も、若しくは起らうとして居るのも、或る見地からそれを觀察すれば、將來我々の新しき生活上の要求にヨリ善く適合する新しき文化の發生するに至るまでの間に於て、我々が必然的に通り越さなければならない一つの過程だと認められるべきものではないかとさへ考へて居る。いづれにしても、この場合に於ては、私は前方へ疾驅しかけた車輪を人爲的に後へ引戻さうとするやうな努力は、畢竟徒勞に屬すべきものだと見て居る。だが私は唯、かういふ社會的頽廢の傾向は、資本文化がそれ自身の附隨物として現代社會に齎らし來つたものであつて、そして、今後資本主義が發達すればする程、かういふ傾向が益す増進するであらうといふことを述べようとして居るのである。かういふ傾向の前に於ては官僚式國民教育制度も、警察的干渉と同樣に、何等の抑制的效果を奏しないものであることは、我々の眼前の事實が證明して居るところである。この事實もまた、官僚式國民制度の失敗を物語つて居るものだといふよりは、寧ろ、それが如何に資本主義の發達の前に無效であるかの事實を反映してゐるものである。

社會的頽廢は、享樂本位の生活主義の普及に依つて標示せられもすれば、また各種の犯罪——殊に殘忍なる殺傷的犯罪の流行などに依つて反映せられもする。それから、アルコホリズムや花柳病やの傳播とか、『邪教淫祠』の跋扈とか、挑發主義の性慾文學の流行とか、『不良』少年少女の横行とかいつたやうなものも皆、社會的頽廢の傾向のインデッキスと見ることが出來るものである。かういふことを念頭において、さて我々が我國の——ばかりではなく、一體に資本文化に中毒して居る諸外國のもだが——社會生活を一瞥すれば、我々はそこに社會的頽廢の徴候が、最早如何に淺薄なる觀察者の眼にも明瞭に映じない譯に行かない程も、それ程もウヨ〱と動いて居ることを發見するのである。そして、かういふ狀況は、明治維新以來五十年間の官僚式國民教育制度の實施の後にも、なか〱根絶されたどころの騷ぎではなく、この上ます〱増進しようとする形勢をさへ見せて居ないとはいへないのである。

流石に日頃から我國の國民教育制度の完備とその普及とを自慢にして居た官僚も、かういふ社會生活上の趨勢を見て、今更らのことのやうに驚いて居るらしい。我々は官僚の政治的立場が代表せられて居る貴族院の議事錄を見ても、如何に彼等が、『風紀の紊亂』だとか、『道義の頽廢』だとかの前に戸惑つて居るかを知ることが出來るのである。そして彼等は、かういふ狀態の救濟策としてはこの上更に國民教育——彼等が斯ういふときには必ず官僚式國民教育制度を念頭に置いてゐるのであること

は、無論の話である——を振作すべきことを唱道するのである。それはちようど、曾てトクヴィルだつたかゞ、『デモクラシーの救ひは、更らに多くのデモクラシーを行ふことである』といつたのと、但しはまた、現在我國の政黨政治家連が、『議會政治の矯正は、更に多くの議會政治を行ふことである』といつたやうな趣旨を述べて居るのと、全く同じ心理狀態から出て來たものであるに相違ない。そこで彼等は、『更らに多くの國民教育を！』と叫ぶのである。彼等は國民教育の——官僚式國民教育制度——の五十年の間に亘る實驗も、餘りに永い期間の實驗ではなかつたのだと考へて居るらしい。かういふところに、貴族院がいはゆる氣樂院である眞面目が現はれてゐる——もつとも衆議院もあまりに氣苦勞院であるらしくは見えないが——のかも知れないけれども、それにしても、それは暢氣にも程があるといふものである。

社會的頽廢が、一般國民の體質上に惡影響を與へる傾向のあることは事實である。ところが、官僚は殊にその信條の一つである軍國主義の立場から、國民保健といふことを非常に氣に掛けて居る結果として、此點を大に憂慮して居るのである（誰だつても、社會人としてそれを憂慮しないものはない筈だが、其を殊に軍國主義の立場から憂慮しようとするところに、官僚の特徴の一つが現れて居るのである）。それからまた、社會的頽廢が生理的(バイオロジカル)過程(プロセス)もしくは遺傳によつて、現代の國民の體質の上に害惡をのこす傾向のあることも事實である。ところが、官僚はその信條の他の一つである國家主義の立場から、この點をも大に憂慮して居る（誰れだつてもまた、社會人としてそれをも憂慮しないものはない筈だが、それを殊に國家主義の立場から憂慮しようとするところに、官僚の特徴の他の一つがある）。そこでは彼等は、かういふ點に關してもまた、『更らに多くの國民教育を！』と呼ぶと同時に、『更に多くの警察的干渉政策を！』とも叫ぶのである。しかし、社會的頽廢を救ふために國民教育——官僚式國民教育制度——が無效であることは、最早實驗濟みになつて居るのである。それは前に述べたことであるが、更らに警察的干渉政策に至つては、そのもの自身が社會的頽廢の醱母ともなることすらあるのである。手短かにいへば、警察的干渉主義は社會生活の諸方面から自由を奪ふものであるが、生活の自由の束縛はその沈滯を醸み、生活の沈滯はその頽廢を促し勝ちのものであるといふことは、自然的過程のロジックである。要するに、近來の社會的頽廢の諸徴候は、縱し皆が皆までゞなくとも、それらの多くは、資本文化の發達の影響として現はれたものである。官僚は、——この點に關しては資本階級の機關たる

政黨も、――この根本的事實に氣が附かないで居るらしい。否、彼等は少くとも、それに氣が附かないで居ようと欲して居るらしいのである。

一〇

所謂官紀紊亂もまた、社會的頽廢の現はれの一つである。すなはち、それが特に、國家及び地方の官公吏のサークルに於て現はれたものである。けれども、最近に於て續發したこの官紀紊亂の一部分の曝露は、從來我國の官僚の誇りであつたところの、廉直潔白である筈の官公吏の仲間に於ても、さういふことが矢張り存在して居たのだといふ事實を摘發したものであるだけに、そこにはまた、或る特別の意味が示唆せられて居るのである。

實際我國の官僚は、我國の官公吏團が世界に比類のないほども訓練の行き屆いた、そして腐敗行爲に對しては免疫性を持つた人々の集團であることを、日頃から自慢話の一つとして言ひ立てゝ居たのである。それはちようど、各種の政治的施設に關して彼等にモデルを供給したプロシア（一九一八年の革命前迄の）の官僚が、同國の官公吏團の Unbestechlichkeit （非腐敗性）を吹き立てゝ居たのと同樣に、彼等の封建思想的訓練の結晶の一つである威信與能辯から來たのである。けれども、ドイツの政論家たちは、プロシアの官公吏團が、必ずしも耐收賄性の人間的材料ばかりで練り固められて居るものでないことを、――たとへば、先年同國に起つたクルップ會社に關する疑獄事件などに就いて、――屢ば指摘したものである。同樣に、我國の官公吏團もまた金鐵木石から鍛ひ上げて作られて居るものでないことが、最近に於て簇生した官公吏や、半官的會社の重役連やに關する多種多樣の『珍品』事件に依つて證明せられて、このところ、加藤憲政會總裁も、さうした方面に於ける名譽（？）を獨占することが出來ないやうな悲況（？）に陷つて來た。

否、官公吏の腐敗の實例が晒らけ出されたことは、今に始まつたことではない。明治の初年頃から大正の今日に至るまでの期間に於て、世間に公にせられたゞけの官公吏の瀆職事件を數へ立てただけでも、相當の件數に上ぼるのである。その上、闇から闇に葬られた同樣の事件を新に摘發することが出來たら、どれほどの數に上るかは、恐らく誰れにも見當がつくまい。しかも、我々が從來に於ける官界の裡面の情弊を知らうとするためには、我々は必ずしも、さうしたものを一々數へ立てるには及ばないのである。明治維新後幾年も幾年も續いて居た高位顯官の持主たちと當時の政商等との結託關係については、其歷史の

幾分が、既に世間に相當に知れ渡つてゐる。また、官僚の巨頭たちの多くが、官界生活の全過程に於けるその御役目柄の俸祿を積み累ねてもその一部分にしか當らない程の巨富の所有者であるといふ事實は、公衆から既に猜疑の眼を以て眺められて居るのである。『上の好む所下之より甚だしきは莫し』とか何とかいふのは、官僚の人々が口癖にしてゐることであるが、我々が官界の末派の人々の腐敗行爲の發露を見るとき、我々にはどうも、唯それだけのこととは思へないのである。

けれども、高位顯官の持主たちは比較的容易に罪跡を隱し立てすることが出來るから、彼等は兎も角ものこととして、せめては、官界の末派の者共になりと、文字通りの廉潔を保せたい、——といつたやうな蟲の好いことを考へて居るものが、官僚の集團中には決してないとはいへまい。かういふのは、彼等の威信萬能主義から、當然引出し得られる推論である。實際に於てプロシアの官僚が沒落した今日に於ては、我國の官僚ほど威信を氣にして居る人種は、他に絕對的に類例があるまいと考へられる理由がある。そして、時としては、彼等の威信癖が滑稽とでも形容すべき形式を取つて現はれる場合さへ少くはない。新聞紙の報道に從へば、數百本の竹槍と數百挺の小銃との蓄への外には殆んど無防備で、しかも別に官憲を相手に今にも戰爭を開始しようと準備しては居なかつたらしい大本教の本陣へ、數百名の警官の決死隊を乘り込ませたのも、官僚式威信癖がさせた業である。普選運動やメーデーの示威運動やに際して、數千の巡査の人垣を作らせて、漫畫家たちに好材料を供給したりなどしたのも、矢張り官僚式威信癖がさせた業である。また、無害の社會主義者たちの主催の講演會などを、その開會に先つて解散させたりなどしたのもまた、矢張同じ官僚式威信癖がさせた業である。かういふことは皆、原内閣の施政の下に於て行はれたものだとは言ひ條、現在でも行はれて居る我國の警察國家主義的政策の創始者たる官僚の『精神』が殘した遺產の成果であることは、いふまでもないことである。

これほど威信といふことを氣にしてゐる我國の官僚が、最近簇生した官公吏の瀆職事件を聞いて、俄にあたふたと騷ぎ出したのも、決して無理ではない。彼等はまづ第一に『官憲の威信』の傷けられことを慨歎し、次いで『綱紀振肅』といふ傳家の寶刀のやうなものを舁ぎ出して、第四十四議會の終り頃に於て、貴族院でそれに關する決議案を通過せしめて、原内閣に警告を與へたのである。この頃に及んでは、更らに、憲政會がその尾鰭に縋つて、いはゆる『綱紀肅正運動』をやり出した。

二

政黨内閣の下に於て、最近に於て見られたやうな官公吏の腐敗事件が續々と暴露せられて、しかも政友會の多くの人々までが、——別けてもその首領株の人々までが、——直接間接にその中に卷き込まれて居る形跡が見えたことは、一方に於ては官僚の威信辯を傷けたらしいと同時に、他方に於てはまた、官僚に幾分の自己滿足を與へたらしいのである。彼等は恐らく、かうした腐敗事件が簇生したのは、すべて皆政黨内閣の缺陷に基くものだと考へて居るであらう。若しくは少くとも、さう考へようと欲して居るであらう。彼等は恐らく、かういふことのすべてが、現代の資本主義的精神の一產物として、我國の社會生活の上にも段々とその影を濃厚にしつつあるコンマアシアリズムに基づくものだといふ、根本事實を無視してゐるであらう。若しくは少くとも、それを無視しようと欲して居るであらう。それは、かういふことのすべてを、特に原内閣——といふよりは寧ろ、一般に政黨内閣の缺陷に塗りつける方が、彼等が官僚として集團的に復活するために好都合であるかも知れないからである。彼等は、淡よくばこの機會に乘じて、その既に西空に消滅しかけた傳統的權勢の殘照の光りを呼び戻すための、淸盛の扇の樣なものを求めて居るのである。

しかし、淸盛の扇は、傳說の世界にしか求められないものである。そして現實政治の局面に於ては、官僚の傳統的權勢の殘照の光りは、誰の手に依つても呼び戻されさうにもないのである。官僚の超憲法的勢力が、段々と終局に近づきつつあることを示す徵候は、注意深き觀察者の眼を逃がれることが出來ないのである。山縣公と原氏との地位が外形的に顚倒するやうなことは容易に起りさうにもないが、しかし、それが實質的に變更するのは、恐らく遠き將來をまたないであらう。今度のやうな官公吏の瀆職事件の續發した場合に際しても、官僚の立場を政治的に表現する貴族院からは、海軍瀆職事件を出した山本内閣時代に於て試みられたやうな咆哮が、最早聞くことが出來なくなつたのである。それには、政黨をその機關にして官僚式パターナリズムを抑制しようとする資本主義が餘りに進みすぎて居る。如何にも資本主義は我國に於ては、可なり步みが鈍ろくはあるが、それにしても、それは斯ういふ點までは進んで來て居るのである。

曾て官僚が政界に於て算へることが出來る殆んど唯一の政治勢力であつた時代に於ては、當時尙ほ幼稚であつた我國の資本主義は、その指導誘掖に依賴もして居たし、又それに負ふ所も

多かつた。けれども資本主義が發達すればする程、それは資本階級的の——ではあるが、兎も角、或る一種の自由主義の方へ移動する傾向を持つて居るものである。そして、この種の自由主義は、究極に於ては、官僚の善意のパターナリズムとも調和することが出來なくなるものである。まだ幾分か幼稚な我國の資本主義も、多くの歳月を經てゐる間に、次第々々に、この過程を辿つて來て、今やそれは、その利害關係の代表機關としては、より多く政黨の方を擇ぶやうになつて來たのである。それに、政黨の組織や訓練は、本來ビューロークラティック（ビズネス的意味に於ける）な資本的企業に酷似して居るところから、その關係からも、兩者の間により多く相互的親和力（ミューチュアル・アフィニティ）が生じ得る素地があるのである。若し我々がこの點を念頭に置いて考へるならば、我々は直ちに、大膽に企業的になつて居る政友會の方が、今日でも尙ほ半官僚的色彩を脫し切らないで居る憲政會よりも一層有力な政黨として活動してゐるといふ事實の原因を——若しくは少くともその一つを突き當てることが出來るのである。

原内閣が行詰り狀態に陷ると、その跡釜に官僚内閣が復活するとか、貴族院内閣が成立するとか取沙汰するものがある。これは恐らく一片の風說に止まるものであらう。原内閣は今のところ、行詰つたなりに前へ推し進まうとして居る。が、假りに原内閣が倒れて官僚内閣とか貴族院内閣とか、その跡に立つにしても、誰れだつてそれを、原内閣のための代辯内閣、中繼ぎ内閣、腰掛け内閣以上に評價するものはないであらう。しかもさういふ内閣が成立したとすれば、それは、原内閣が豫々口にして居る所謂『憲政の常道』といふ純理論が、政黨政治の原則に依つて内閣引繼ぎ權を主張するであらうところの憲政會に對する憎惡感情と、原内閣自身が後日政權に復歸する道を平坦にしておかうといふその利害觀念——若しくはその權勢欲とに負かされたためでなければならないことは、誰れにでも氣が附くことである。

官僚に取つては、一般に政黨内閣といふものゝ下に於て官紀頽廢の諸徵候が簇生したといふことが、——そしてそれが幸にも官僚内閣の下に於てゞなかつたといふとが、多少の自己滿足の種になつて居るのであるが、しかし憲政會に取つては、特に原内閣の下に於てかういふ失態が暴露したことが、目附けどころになつて居るのである。憲政會もまた、かういふ現象が資本文化の一産物であるとに氣が附かないか、若しくは氣が附かうと欲して居ないかしてゐるのである。憲政會が政權にありついて居た當時の大隈内閣當時に於ても、形式こそ違つて居たにし

ろ、同種類の腐敗事件が起らなかつた譯ではなかつた。また、それからずつと前に溯つて、我國の憲政の初期に近い時代へ行くと、官僚内閣が時々の政狀に應じてそれ〳〵の政黨なり議員なりを買收するために、盛に黄金政策を行つたやうなこともあつた。近來の官紀紊亂をシカメ面で憂へて居るやうに見える山縣公も、又曾ては、この種の黄金政策の實行者であつたこともあつたのである。もつとも、彼は受ける側に在つたのではなく與へる側にあつたのだが、しかし、いづれにしても、腐敗行爲であることは一つである。無論、原内閣の下に於ける官紀紊亂の暴露は、餘りにも件數が多すぎた。しかし、それは質の問題でなく、量の問題である。のみならず、原内閣の執政時代は世界大戰後の成金風の吹きすさんだ時期を通り越して來て居たので、あゝした事件の起り得べき可能性が多つかたことも、否むべからざる事實である。その上、憲政會にしても、その總裁が『珍品』事件を惹起して居るのではないか。この場合に於ては、幸に相手が私人であつただけに、犯罪行爲を構成しなかつたがしかし、事件の性質は、どちらも同じことであつたのである。かういふことを指摘することは、政友會の罪責を輕める理由にはならないが、しかし憲政會の矛盾不合理を示す材料にはなるのである。

憲政會も純理的立場から『憲政の常道』の咒文を唱へる熱心さに於ては政友會に劣らないが、感情だの、利害觀念だの、若しくは權勢欲だのに支配せられて居る程度もまた、矢張り似たり寄つたりである。すなはち、憲政會は、その内部の實力の充實を待つて、『憲政の常道』の咒文にある通りにその内閣引繼ぎ權の要求を現實にしようと試みるよりは、寧ろ邪が非でも、即座に目のかたきの原内閣を倒して、同時に『熟柿』の分け前の幾分にでも有り附かうと焦躁つて居るらしく見えるのである。

純理と感情と利害觀念との渦卷き！　それは我國の現政局の上に於て、最も露骨に展開せられてある圖である。

—一九二一——六——二五

綱紀弛廢の社會的及心理的考察

永井柳太郎

（一）

「石川や濱の眞砂は盡くるとも」の歌は誰の作か知らぬが、眞理である。人間の生活狀態が社會的にも亦個人的にも理想的完全に達した曉は何うなるか知らぬが、現在の狀態を脱し得ぬ限り、「盜人」の種は寧ろ增加しつゝある。今「盜人」と云ふ字を狹く只の强竊盜と云ふ意味でなしに、廣く犯罪人と云ふ意味に解すれば、最近十年間丈けでも左の如く增加した。此統計は明治四十二年以來我國の刑事被告人中第一審で有罪の判決を受けた者のそれである。

明治四十二年	六五・二二二
同　四十三年	六六・八〇〇
同　四十四年	六九・三二四
同　四十五年（大正元年）	六七・四四九
大正二年	六四・九〇四
同　三年	五〇・一七二
同　四年	四六・九七八
同　五年	一〇四・五九二
同　六年	一〇九・〇七九
同　七年	一一五・六九三

即ち大正七年の第一審刑事有罪被告人の數は明治四十二年の夫れに比すれば約二倍に達せんとして居る。此間に我國の人口は五千萬から五千六百五十萬となり、約一割三分の增加をなしたのであるから、犯罪人の增加は人口の增加に數倍したのである。若し我國に於ける敎育の目的が人の思想を善導して、克く國法に從ひ、喜んで社會に奉仕する人物を作るにあつたとすれば、それは明かに失敗に終つたと云はなければならぬ。此犯罪人に關する統計夫れ自身が我國に於ける敎育の破産を最も有力に宣言して居る。之れは實に國民生活の根柢を危うする重大なる事實であるが、茲に我等の注意すべきは、此十年間に於て如

何なる種類の犯罪が最も增加したかと云ふ事である。驚くべき事には狭義の「盜人」即ち强窃盜とか詐欺及び恐喝に關する犯罪人は此間に寧ろ減少して居る。即ち窃盜を犯した者は明治四十二年に二七・二二二人であつたものが、大正七年には一八・九八一人となり、詐欺及び恐喝に關する犯罪人が明治四十二年に七・八八八人であつたのが、大正七年に六・八五六人となつて居る。然るに之れに反して最も顯著なる增加を示すものは第一が騷擾罪である、第二が賭博及び富籤に關する罪人であり、第三が瀆職に關する罪人である。今左に數字を以て之れを明白にする。

(一)騷擾罪を犯したる者

明治四十二年	一三
大正七年	三・二六四

(二)賭博及び富籤に關する罪を犯したる者

明治四十二年	一〇・四九六
大正七年	六〇・一三五

(三)瀆職罪を犯したる者

明治四十二年	一四七
大正七年	六六七

之れに依つて見ると一方に於て賭博とか、富籤とか、又公權の濫用とか云ふ事に依りて一攫千金を夢み、正直なる勤勞を喜ばざる風潮の盛大となりつゝある事と同時に、他方に於て或は安寧秩序を紊さんとし、或は騷擾を醸さんとするが如き不平家や反抗者が著しく增加しつゝある事を察するに足る。殊に瀆職に關する罪人を出す事最近益々甚だしく、或は東京市疑獄事件と云ひ、或は滿鐵事件と云ひ、或は大連阿片事件と云ひ、或は横濱稅關脫稅事件と云ひ、我は寶塚事件と云ひ、不正事件の發生するもの頻々として相次ぎ、東京市疑獄事件のみにても嫌疑者、參考人、又は證人として召喚せられたる者、二百有余名、起訴せられたる者七十有余名、中に代議士あり、市會議員あり、官吏あり、公吏あり、大會社の重役ありと云ふに至つては綱紀の紊亂も亦極れりと云はざるを得ぬ。此恐るべき社會道德の頽廢が如何なる所に原因するかを研究し、今にして其矯正を圖るは、實に國民の急務なりと信ずる。

(二)

前述の如き犯罪の增加は、私の觀る所では、主として次の三大原因に歸するやうである。固より總ての犯罪人には其人に獨特の遺傳や環境があつて、それが其人を驅つて特種の罪惡を犯さしむると云ふ事はあるけれども、併し此種の犯罪に共通したる大原因と認むべきものは次の三種に大別する事が出來る。第

一は資本萬能主義の經濟組織である。リチャード・イリー博士は其著「産業社會の進化に關する研究」に於て「産業社會の支配權が小數なる富豪の獨占に歸し、大多數の貧困なる民衆が正直なる勤勞や、公正なる競爭に依りて、到底産業社會於ける自己の運命を開拓し、獨立自由の生活を營むの不可能なる事を知つた時には、それが社會道德に對する大なる危險を意味するに至る。即ち一方に於て産業社會の支配權を掌握したる富豪は、遊んで居ても莫大なる利益を收むる事が出來るから、勢ひ心が弛みて、自ら安逸に流れ、贅澤を樂しみ、終には墮落して精神も肉體も共に萎靡するに至ると同時に、他方では貧者は自然自棄となり、不正なる手段に依るにあらずんば富を得る能はずとなし、遂に不正なる事をも敢てして富を造り以て富者と贅澤を競はん事を計る。」と云ふて居るが、如何にも此言葉の通り、經濟組織が不完全にして一方には只其祖先傳來の資本を提供するのみで、自分は手を懷にして居り乍ら莫大の利益を收むる者があり、さうしてそれが贅澤の限りを盡して居るに拘はらず、他方に於て終日汗を絞りて勞働するも猶家族の口を濡らすに苦しむと云ふ如き狀態では、黄金萬能と云ふ思想が自然に其社會を風靡するのは必然であつて、其結果如何なる手段に訴へても黄金を獲得せんとするが如き誤てる考へが其間に發生する危險がある。

此黄金慾の奴隷となつた人間が自尊心をも失ひ、良心をも消耗して只管富を獲得する事にのみ沒頭する危險ある事は古今東西變りはない。現に獨逸の經濟學者ウェルナー・ゾンバルト氏の如きも、其著「資本主義の精髓」に於て、此黄金慾が古來ヨーロッパに於て如何に人を卑劣にし、如何に人を不正直にしたかを說明し、中世時代に於けるヨーロッパ人は農工商に從事して正直に勤勞するよりも寧ろ(一)官途に就きて官金を胡麻化し、賄賂を取り、其他官權の濫用に依りて種々の利得を計る事や(二)富豪の從者となり、又は富豪の眤懇者となつて、其遺産分配に與る事や、(三)高利貸をする事や、(四)貴金屬を産する山を掘り當てる事や、さう云ふ方法に依つて一攫千金的に金銀財寶を獲得せんとする風潮が盛になり、終には純朴なる農夫も、勤勉なる商人も、次第に其風潮に化せられ、當時の經濟的發達を阻害したる事頗る大なるものがあつたと云ふて居る。今日の經濟組織に於ても亦、勞働者階級に屬する者は、如何に努力しても資本家となる事殆ど不可能である。のみならず、勞働者は資本家のために其生殺與奪の權を掌握せられて居るのである。例へば工場を一つ建てるにしても、第一に土地を所有しなくてはならぬ。第二に建物を持たなくてはならぬ。第三に機械を購求しなくてはならぬ。第四に原料を買入れなくてはならぬ。第五

に、其製造品が賣れると賣れざるとを問はず、其傭人に賃金を支拂はなければならないのであるから、少からざる財産若くは信用がなければ、到底其經營に任ずる事が出來ない。そこで資本のない者は、如何に學問があり、又才能があつても、結局人の傭人として生活する外はない。永久に勞働者階級を離れ得ないのである。之と同時に同じ資本家でも大資本を有する者と小資本を有する者とが競爭する事になれば、大資本を有する者は小資本を有する者に比して其生産組織を大仕掛にする事が出來るから、第一に嶄新なる機械の應用が出來る。第二に多量の原料を仕入れるから割引が出來る。第三に運賃も亦大きく割引する事が出來る。第四に廢物を利用する機會が多い。第五に優等なる技師及び職工を使用する便宜もある。從て其生産費は小資本の者の經營に比して、安くなり、其生産品は優等となるのであるから、結局同じ資本家でも大資本家が小資本家を壓倒し、大會社が小會社を兼併するに至るのは自然の勢であつて、終には小數の大資本家が産業社會の支配權を得る危險ある事は爭はれぬ。さうなれば勢ひ大多數の者は其生殺與奪の權を小數の大富豪に奪はれ、其命令の儘に勞働し、其與ふる賃金に甘んじて生活しなければならないのであるから、此資本萬能主義の經濟組織の犧牲者となりたくないと云ふ人間の本能が、稍ともすれば多くの人を誤てる方向に導き、知らず知らず不正なる手段に依つてゞも、資本家となり、支配者となり、經濟的强者とならうと努力させるのであつて、今日の不正事件や瀆職事件は、或意味に於て、現在の經濟組織の一大缺陷を暴露したものであると云ふ事が出來る。

（三）

第二に近代思潮の特色とも云ふべき主我的精神の勃興と云ふ事が或程度迄今日の利己的貪慾の原因になつて居ると思ふ。全體社會の目的に依りて個人が支配さるべき者であるか、個人の生活が本位であつて社會は其生活を完成するために存在するのであるかと云ふ問題は過去數千年の論點であつたが、近代に於ける人心の傾向は、宗教上に於ても亦社會上に於ても、努めて個人の生活を社會の束縛より解放せんとするに在るやうである。ルーテルの宗教改革は教會の信仰を以て個人に强ひんとするに對しての反抗であり、ルッソーの天賦人權の思想も亦個人の生活を封建制度の壓迫より解放せんとする絕叫であり、それが十九世紀に至つて稍逆轉し、個人を超越する社會の價値を認むる思想の勃興となり、社會又は國家はそれ自身の存在の目的のために個人の生活を統制し之を管理すべきであると云ふやうに變

化したけれども、其傾向が稍々極端となつたので、十九世紀の末葉に至つて再び個人を尊重する運動が勃然として興り來つた。殊に此運動が最も顯著に現れたのは哲學と文藝とであつたと思ふ。此個人の獨立を主張し、個性の權威を發揮せんとする思想の勃興に對して最も代表的なる地位を占むる者は文藝に於てイプセン、哲學に於てはニイチエであつた事は云ふを待たぬ。兩者は共に個人をして社會の奴隷たるを免れしめ、其獨立を確實にするの必要を絶叫して止まないのであつた。此兩人に依て唱道せられたる主我的精神が全人類の自尊心を呼び起し、引いて現代文化の特色とも云ふべき各個人の創造的精神を旺盛ならしめたる事は疑ひないのであつて、吾等は此大なる貢獻に對して兩人に感謝する事を忘れてはならぬけれども、この主我的精神の勃興は又同時に利己主義的の思想を刺激した事も少くないのである。現にイプセンの作品を見ても、さうした思想の傾向が明白に見える。イプセンの「幽靈」に現はれたるレギナの如きも「あゝ私はとてもこんな所に居て病人の看護などして居られません。私のやうな貧乏な娘は若い中に出來る丈の樂しみをしなければなりません、此樣、私も世の中の樂しみがしたくなりました。」と叫んで居り、又「人形の家」に於ても、ノラが其夫を棄てゝ去らんとし、夫から「他人が何と云ふか考へて御覽なさい」と云はれた時、「私は人の考など考へては居られません。私は自分にとつては行くと云ふ事が必要なのだと云ふ事より外は知りません。」と云つて居る。此レギナやノラの如き思想を持つた者が一歩を誤てば、利己主義の、自分の爲には他人に迷惑を掛けて顧みない、ひどい人間となるのである。ニイチエにしても、彼は主我的本能を尊び、哀憐とか犠牲とか云ふ如きものは疲勞せる意志が進歩を止めて後方を振かへつた結果であつて、それは人生の大なる墮落であり且つ危險であると考へた。從つて彼は自己の生存の最深且つ最大の意義と認むる所に全力を集めて突進する事が即ち較大の善であつて、其突進のためには殺行、掠奪征服の如きも亦決して惡に非ずと云ふ思想を持つて居た。斯くの如き思想は啻にイプセンやニイチエのみに限られたのではなく、實に十九世紀末に於ける時代思想ともなつたのであつて、それが日本國民の道徳的觀念にも大なる影響を與へたのは疑ひない。

顧みると明治維新以來の我國民道徳は、大體に於て、二期の變化を遂げたやうに思ふ。第一期は所謂武士道時代である。之れは幕末維新の時代であつて、武士道が國民道徳の中心思想となつて居つたのである。武士道の道徳觀念には稍々偏異なる所もあるけれども、而も滅私奉公の犠牲心に至つては甚だ熱烈な

るものがあつたのであつて、今日の老人が多く稜々たる氣骨身を以て君國に奉ずるの熱情に富むは此教育の賜であるに相違ない。併し維新と共に泰西の文物が輸入せられ、教育の方針も亦一變して、從來の單純なる四書五經の講義から一躍して近代科學の智識を普及するを主眼としたる學校教育を受けるやうになつたが、然し維新以後今日に至る迄の學校教育は、其內容に於て、頗る不完全であつて、唯科學的智識の普及に於ては多少の進步があつたけれども、精神教育の根柢に至ては、舊き權威が廢れたに拘らず、何等新しき權威の之に代るものなく、國民道德は今や拠依るべき所を失ふて混沌たる狀態になつた。之が即ち第二期の無道德時代であつて、今日の成年者の大多數は、實に此時代の產物である。從て國民の道德觀念に大變化が生じたのは、毫も怪むに足らぬが、此混沌たる道德思想の變遷期に更に外國の主我的思想が侵入し、益々其動搖を激成したのであるから、其間に自ら利己主義、享樂主義の風潮が人心を腐蝕するに至り、之れが資本主義の經濟組織の缺陷と相俟つて種々なる不正事件を釀すに至つたのは、寔に當然の歸結と云はねばならぬ。

(四)

第三に政府も亦議會も共に國民の統制に任ずべき中樞機關でありながら、國民道德の建設に對して何等の方法を講じないのみならず、寧ろ其頹廢に乘じて或は官權を濫用し、或は利を以て誘惑して只管自己又は自己の屬する黨派の權勢を擴大せんとする事にのみ汲々たる事が、今日所謂不正事件の增加して底止する所を知らざる大原因の一つである。現に此度天下の耳目を聳動せしめた各種の不正事件の嫌疑者及び被告人の多數が政府及び議會に於ける有力者である事は、此觀察の誤たざる事を裏書きするものである。例へば今日の選擧法に基く中央及び地方議會の議員選擧は莫大なる經費を必要とする。今日の選擧法の下に於ては、如何に立派な人物でも純然たる無產者では候補者になる事が難かしい。強ひて候補者になつてなつても當選を期する事は殆んど不可能である。此弊害を矯正し、眞に立派な人物が自由に立候補し、其當選を期し得るやうにする事が政府及び議會の最も重大なる任務でなければならぬが、此任務を果さんとすれば勢ひ(一)普通選擧を實施し、候補者が直接民衆に訴へて其贊同を求め、從來の如く中間の投票仲買の犧牲となる事を免れしめ、(二)選擧區の如きも之れを大又は中選擧區となし、情實又は誘惑に依つて無能の候補者が當選するの機會を少からしめ、(三)市長村會議事堂とか、小學校々舍の如き、公共

の建物を各派の候補者に自由に使用せしめて政見發表に要する費用を少からしめ、（四）又戸別訪問を嚴禁し、投票賣買の惡弊を豫防すると云ふが如き各種の改革を企てる事の必要なるは云ふを俟たぬ。然るに今日の政府及び議會は立憲政治の根柢たる選擧制度に對してすら其弊害を矯正すべき何等の方法を講じないのみならず、寧ろ選擧法の不完全に乘じ、或は利慾を以て誘ひ、或は强ひて公正なる人物の當選を妨げ、國家よりも寧ろ自己の黨派に忠實なる議員を出來得る限り多數當選せしめて以て黨勢の擴張を圖るのに努力して居る。現に滿鐵不正事件にしても塔連炭坑の買收と云ひ、又鳳山丸の賣買契約と云ひ、共に昨年の總選擧の前後に行はれ、又大連阿片事件に連坐し、既に起訴せられたる古賀氏が昨年の選擧に際し、九州地方の自黨候補者數名に選擧費を支給した事は天下周知の事であり、又同事件の爲め目下旅順に收監中なる遠藤代議士も當時東北地方の選擧參謀を以て任じて居つた人であると云ふやうな事實に照して見ても、目下社會の問題となつて居る不正事件が昨年の總選擧と密接なる關係があつたと云ふ事は之れを推察するに難からざるのみならず、今日の政府も亦議會も共に國民道德の頽廢を防止する誠意なく、反つて其頽廢に乘じて黨利黨略を專にせんとして居る事が明白である。斯くの如く良心の痲痺したものが今日の政府に坐し、又議會の多數を制して居ると云ふ事が國民思想を惡化せしめ、勝てば官軍負ければ賊だと云ふやうな卑近な思想を呼び起し、事を決するにも正邪善惡と云ふ事よりも寧ろ利不利、便不便と云ふ事のみを專らとする傾向を生ずるのは必然と云はねばならぬ。原總理大臣の如きも若し國民道德の刷新を以て國家の急務なりとする精神があつたならば、其内閣組織に際し古賀廉造氏の如き人を擧げて拓殖局長官とする事に躊躇しなくてはならぬ筈である。古賀氏は曾て廣東紙幣僞造事件に被告となり、東京地方裁判所に於て三年の懲役の判決を受けた人である。幸にして控訴院に於て證據不十分の廉を以て無罪となつたけれども、其同類たる瀨田龜五郎氏は終に三年の刑に處せられた程不正事件に密接の關係あつた人であるから、之れを陛下に奏請して親任官となす事は皇室に對しても、亦國民に對しても不謹愼の極みであると云はなくてはならぬ。又曾てシーメンス事件の當時豫審調書に其名を止められ、且つ監督不行屆きの責任を負ふて豫備役に編入せられたる齊藤實男を起して朝鮮總督に奏請したるが如きも、亦原總理大臣が鋭敏なる良心を有する人に非る事を證明するものである。併し鋭敏なる良心を有せざる事に就いて咎めを受くべき者は一人原總理大臣のみでなく、斯くの如き人々を今日に至る迄信任する意志を表示したる議會も亦同

じ非難を受けなければならないのであつて、斯くの如き政府及び議會の存在が國民の良心を益々麻痺せしめ、其下に屬する多數の薄志弱行なる官公吏をして、總ゆる機會に其地位を利用し、其權力を濫用して集め得べき富は出來得る限り之れを集める事が當然の役徳であつて、之れを集めない事が馬鹿な事であり、損であると云ふやうな誤てる思想を抱かしむるに與つて力ありし事は云ふを俟たぬ。英國の植民史を繙く者は印度帝國の基礎を確立したる二大功勞者としてロバート・クライブとワーレン・ヘスティングとの名を忘るゝ事は出來ぬ。實に此兩人の印度帝國建設に對する功勞は莫大なるものであつて、兩人なかりせば印度帝國は今日果して英國の領土たりしや否や疑問である。從つて英國民も亦兩人の功勞を認めて之れに感謝する事を忘れなかつたのであるけれども、而も一度ロバート・クライブが印度人ミヤー・ヂヤツフアーに金三百萬磅を以てベンゴール副王たる地位を賣却したりとの風評を傳へらるゝや、英國議會は直ちに査問會を組織し、クライブを召喚して其實否を糺彈し、最後にクライブの行爲に情狀の酌量すべきものありと認められたりと雖も、英國民の彼に對する尊敬は地を拂ひ、クライブは快々として樂まず、歳未だ四十九歳にして自殺せざるを得なかつた。ワーレン・ヘスティングも亦印度總督として英帝國の基礎を確立する事に盡瘁する事前後二十一年其勳功拔群なるものがあつたに拘はらず、一度彼が官職を售つて金四萬磅を受領し、又恣いまゝにウードの土人政府に英國軍隊を貸與して約四十萬磅の報酬を收めたりとの告發に接するや、英國下院は直ちにヘスティングを彈劾し、彼を上院の査問會に附し、英國議會の三大雄辯家と稱せられたるバーク、フオツクス、及びセリダンの三人が主査として前後約十年に亘りて細密なる訊問を試み、最後に證據不十分の廉を以てヘスティング放免せられたれども、彼は殆んど廢人となりて、實に悲慘なる一生を終つたのである。假令大臣大將と雖も國法を無視し、道義に反する者あれば其不正を責むる事英國議會の如くに非れば眞に國民生活の中樞機關として其責任を全うしたりと云ふ事能はざるべく、私は十八世紀に於ける英國の政府及び議會と、廿世紀の今日に於ける我政府及び議會とを比較して今日の我政治家が其政治的良心の發動に於て十八世紀の英國政治家にだも尚及ばざる事を遺憾とせざるを得ない。

（五）

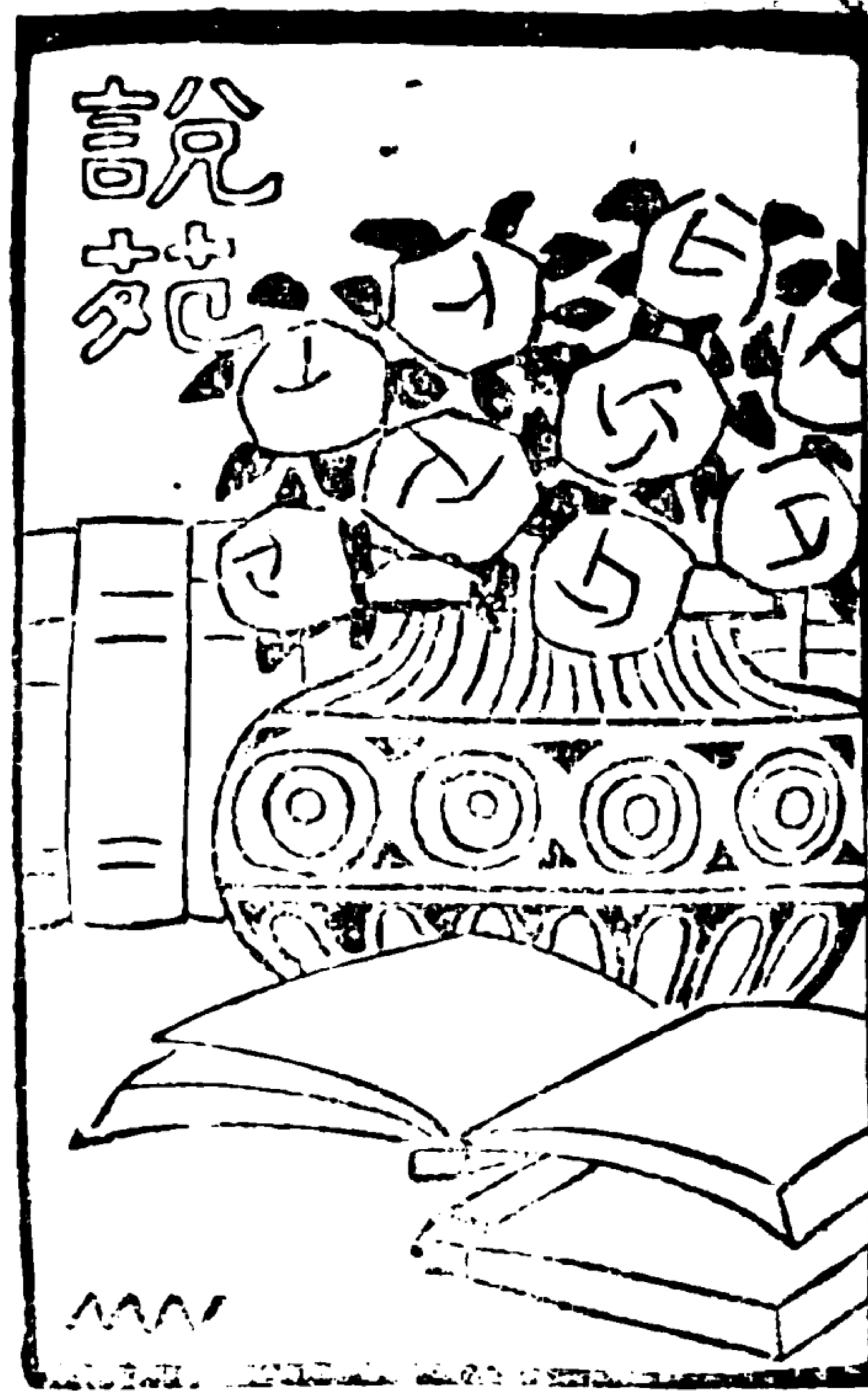
之れ等の事實を綜合して之れを考ふるに、我國に於ける社會道德の頽廢は其淵源する所深且つ大なりと云はさるを得ぬ。故

に綱紀の振肅は結局前述の如き原因の全體に對し、大改造を加ふるに非れば其徹底を期する事は出來ぬ。即ち之れを換言すれば眞の綱紀振肅は民衆全般の生活を保障し、其日々に新なる生の要求を實現せしむるに必要なる機會を具備し得るやうに組織せられたる新國家を建設すると同時に、民衆の各個人をして人生の眞意義に對し徹底したる信念を得せしむる事に歸する。各個人が眞に機會均等の立場に立ちて、各々の生の要求を自由に實現し、創造の本能を恣いまゝにし得べき希望を抱き得るに至ればそこに自ら各個人の中に潜む眞實性、獨創性、偉大性が發現し來り、我等は個人としても亦國民としても其生存の眞意義に徹底する事が出來るのである。オイケンは其名論「獨逸精神の世界歴史的意義」に於て、獨逸人が他の民族に比し、獨創性眞實性、偉大性に富む事を誇つたけれども、然しそれは獨逸人のみの特性ではない。人間は自由にして責任ある立場に置かれる時、自ら其眞實性、獨創性、及び偉大性を發揮する傾向あるものである。

ダーウキンは有機體の進化は自然淘汰に基くものにして、自然淘汰を促すは各有機體の間に行はるゝ生存競爭である。生存競爭の結果「適者」即ち優者が殘存し、「不適者」即ち劣者が亡ぶると云ふた。併し今日の如き社會組織の下に於ける生存競爭は決して眞の優者の勝利にならぬのみらず、事實は人間の天賦の能力が其極度迄發揮せらるゝ機會を與へられて居らぬ。現在の社會には各個人間の自由且つ公平なる生存競爭を妨ぐべき幾多の障害があるではないか。或物は生れながらにして貴族である。而て貴族は政治的特權を有し、自己の利益を保護する法律を作り、自己の利益に反する法律の成立を妨ぐる事が出來る。或物は生れながら莫大の財産を世襲し、勞せずして富豪となる。資本の乏しき者は如何に才氣が勝れて居ても大資本家に敵し難く、貧民の小供は如何に生れつき强くとも、屢々營養不良のために死んで了ふ。故に今日の社會に於ける生存競爭の勝敗は必しも其競爭に從事する各個人の優劣に依りて決するのではなく、主として各個人の周圍に於ける人間以外の者の力に依りて定まるのである。此組織を根本から改めないで人間の眞實性、獨創性、及び偉大性を發揮せしむる事は不可能なりと云ふべく綱紀を振肅し、國民道德の發揚を徹底せしめんと欲するならば實に機會均等主義の大精神に則つて現在の社會組織及び經濟組織の上に大改造を行ふと云ふ事が必要である。

而て之れと同時に教育の方針及び方法の上に同じ程度の大改造が必要である。今日の教育の病根は前にも述べた通り思想に統一がない事である。人に統一した生活の根本義を與へる事の

出來ない教育は、其他の點に於て如何なる物を與へる事に成功しても決して教育の目的を達したものでない。所謂佛を作つて魂を入れないものである。而して魂は如何にして入れるべきかと云ふに、それは卽ち心靈教育に依らなくてはならぬ。各個人は孤立した存在ではない。各個人は其心靈に於て常に宇宙の大心靈に結合して居る、此各個人の心靈は宇宙の大心靈に結合せるものである事を自覺する事に依つて、總て我等は自己の生活に絕對的意義があると云ふ事を信ずるに至る。凡そ我等は完結せる世界に屬する者ではない。我等の中と、我等の周圍にある見ゆる世界も、亦見えざる世界も、共に無數の問題を持つて居つて、そして我等は最善の力を盡して之れが解決に從事しなければならぬ。それが人生の最大意義であると云ふ事が近代の一大思想であるが、此大いなる世界文化的使命を擔つて生存する各個人は、其地位や職業は何であらうとも同じやうに尊い人間として絕對價値を有するのである。此人間として絕對價値を確信すると云ふ事が、實に人格の尊嚴、及び個性の尊嚴に對する自覺の基礎になるのであつて、此人間は人間としての絕對價値を有すると云ふ事を信ぜしむる事が教育の根本義である。斯くの如く一方に於て階級的社會組織と掠奪的經濟組織とを打破して、眞に各個人の機會均等權を確立すると同時に、他方に於て深刻なる心靈教育を基礎とする、徹底したる各個人の自尊心を養成すると云ふ事が卽ち今日の政治道德及び社會道德の根本的革新に達する唯一の道であつて、我等は全心全力を盡して此大道に突進しなくてはならぬ。然るに現內閣及び議會に於ける其與黨の如きは其途中に在つて、我等の進行を妨害せんとするのであるから、此意味に於て、昨今政界の有志が組織したる所謂綱紀肅正大會と云ふが如きものも、假令それが單に內閣を破壞すると云ふ意味に用ひられても、此內閣に代るべき次の內閣を前述の改造の大方針に基きて組織せしむる事を理想とするものならば、それは大なる文化的意義を有するものとなる。



死の前の家康

村松梢風

一

元和二年正月廿一日の朝明けの六ツ頃、徳川家康は、鷹狩の準備をして、駿府城を出たのであつた。お供に附き随ふ者は、侍、足輕總勢卅人餘りの小勢であつた。

馬上の家康は、狩裝束で、左手に重籐の弓を持つてゐた。髮こそ白いが、體も顏もでつぷり肥つてゐて、血色などは寧ら若者のやうで、右手に手綱を掻い操り、鐙を踏ん張つて、たうたうたうと駒を進める容子では、これが七十五歳の老翁とは誰れの眼にも見えなかつた。

同勢は、馬場前門を出ると、本通を眞直ぐに西へ向つて進んだ。空はすでに明るく、靑々と澄み渡つてゐたが、地上から街の屋根のあたりまでは、狭霧がしつとりと立ちこめてゐた。早起きの家でなければまだ戸を明けなかつた。それでも、早立ちの旅人たちがチラホラ街を通つてゐたが、彼等は、思ひがけぬ人馬の足音に駭かされて途を避けた。けれども、他國の者ではこの同勢の主が大御所であることには思ひ付けやうもないので「おほかた大身の御隱居でゞもあらうか、さて〳〵この寒いのに醉狂なヿだ」とでも云ひたげな顏をして、笠の下から無遠慮に家康を見上げたりするのであつた。

安部川の水は、ほそぼそと瘠せて、小石の上を流れてゐた。水上の方には、龍爪山が、黑牛のやうな姿を横たへてゐた。

宇津谷峠から彼方を、今日の狩り場に目差してゐるのであつた。手越の里を過ると、兩側に山が起きて來て、東海道は、次第々々に其の谷間の奥へと進むのである。

家康は、子供の時分から、鷹狩りが非常に好きだつた。幼少で今川家へ人質に取られて矢張り駿府で暮らしてゐた頃から、其の面白味を覺えたのだつた。十二三歳の頃には彼はしよつちう馬に乗つて野山を驅け廻つた。併し、最初は單に鷹狩り其のものの興味ばかりであつたが、十四五歳に達して以後は、猶それに對して別の考へも加はつて來た。それは、野掛けをするくらゐ、武道の鍛錬に役立つ事はないと自身で考へたのだつた。彼の其の考へは中つてゐた。彼は自然に、馬術と弓術の妙を得ることが出來た。

矢張り其の時分のことだつた。或る日も鷹狩に出掛けたが、其の日に限つて一羽の雀さへも獲られなかつた。彼は或る寺へ寄つて辨當をつかつた。草鞋を履いたまま書院の廊下へ腰を掛けて辨當を食つてゐる彼の足許へ、鷄が二三羽ヒヨコ〱と遣つて來た。彼が割籠の飯を箸で彈いて鷄にやると、鷄は「コココ……」と聲を立てながら喜んで飯粒を啄むでゐた。其の聲を聞きつけると離れてゐた鷄も集まつて來て、全部で廿羽ばかりの數になつた。

「此の鷄がもし山にゐる鳥だつたら――」

そんなことを考へながら彼は鷄の群れを眺めた。さうして、そんな大きな獲物を手にする心持を想像した。すると、急に此の鷄が欲しくなつて來た。野山で獲物が無かつた不滿足な氣持をば、鷄を獲ることに依つて滿たしたくなつた。けれども、寺の和尚が容易に呉れるやうなことはあるまいと思つた。

彼は、辨當の飯を箸で彈きながら、到頭最後に和尚に向つて云つた。

「御坊、此の鷄を一羽わしに下さらぬか？」

すると、和尚の答へは全く意外だつた。

「皆お持ちなされても宜敷う御座る。畑を啄いてまことに困り申すが、ひとりで育つたので御座るから其の儘飼つて置きますのぢや」

彼は自分の足許にゐた牝鷄を、兩手を伸ばして背後からギユツと捉まへた。牝鷄は吃驚したやうに「カカカ」と啼いた。柔かい、温かな羽毛の上から、肉の重たい牝鷄の胴體をしつかと抱へた時、彼は非常に嬉しかつた。

「面白い坊主だつた」と、家康は考へた。

六十幾年前の、其の小さな歡びが、微かに家康の胸に甦つて來た。六十年の間に、彼は三河の土豪の小倅から征夷大將軍に

なつてゐた。戰をして、一國一城を切り隨へて我が物にしたことは幾度びあるかしれない。併し、さうして國や城を手に入れた時の歡びでも、今では忘れてしまつて思ひ出せないやうなことが幾らもある。然るに、たつた一羽の牝鷄を獲たことの歡びが、未だに心から消え去らずにゐるのは、どういふわけであらう？

其の邊の山は悉く、險阻で、それでゐて形は圓味を帶びてゐた。冬枯れの山には、寂しい畫趣があつた。

鞠子の宿を離れると間もなく、前面へ突如として、宇津谷峠が現はれた。それはすさまじく險しい形をして、遙かに見上げるばかりに、行手の空を遮つてゐた。山の上からは、小鳥の啼く聲が聞えて來た。

鷹を掛けることとの興味が、家康の心を強く襲つて來た。拳から放たれた隼が矢のやうに、風を切つて飛んで行つて、空の小鳥をギユツと爪に掛ける時の氣持を、彼は胸に描いた。

二

家康の同勢が、志太郡田中の城に到着した時は、もう未の刻を廻つてゐた。冬の陽脚は短く、大井川の眞上あたり迄傾いてゐた。くろぐろとした田圃ばかりの平野を、冷たい風がそうそうと吹いてゐた。

田中城には、榊原内記照久がゐた。照久は、今日大御所が來ることは前以て分つてゐたので、朝のうちから準備を整へて待つてゐた。家康は獲物を澤山持つて來て、それを配けて照久に與へた。無論、今夜は此處へ一泊する豫定であつた。

「昨日珍らしい人間が當城へ參りまして、本日は上樣に御目通りを仕り度いと申して、控えて居ります」と照久が云つた。

「誰れぢや？」

「宇治の宗以が駿府へ御機嫌伺ひに行くと申して立ち寄りましたのを、明日は上樣が當城へ御成りになる筈だからと申して引き留めて置いたので御座ります」

「宗以が參つて居るのか、それは一段と宜い折ぢや、早速是れへ、と申せ」と家康は上機嫌で云つた。

宗以は京都の茶人で、本名は四郎次郎と云つた。元來は呉服商人であつたのだが、茶道に堪能であるところから、追ひ追ひ其の方で諸家へ出入りをするやうになつたのであつた。家康とは豐公在世の時からの識合ひで、家康が伏見にゐた時分などは明け暮れ出入りをしてゐた人間であつた。

宗以は直ぐに家康の御前へ出た。相口だから忽ち談話ははずんだ。宗以は、近頃の上方の風俗だの、珍らしい世間の出來事

などを面白く話した。家康は、元來茶の湯に對して餘り深い趣味は有つてゐなかつた。茶の湯に限らず、あらゆる藝事に對しても矢張りさうであつた。大抵は當座の退屈凌ぎにやつてゐるに過ぎなかつた。何んと云つても、彼が眞個に面白味を感じるのは武術だつた。自身でやるにしても、人のするのを見るにしても、武術には彼の魂とピタリと觸れ合ふものがある。退屈凌ぎといふやうな生ぬるい興味ではない、直接生命の糧をそれに依つて得るやうな氣持がした。だから彼は、いかな日でも、馬に乘る事と、弓を引く事と、それから鐵砲を三發宛練習する事を忘れたことはなかつた。だが、それでは、退屈凌ぎといふやうな事は無意味であるかと云へばさうは思へなかつた。殊に近年のやうに閑散な境涯に身を置いて見ると、さうした無用の事柄が追ひ〳〵有用になつて來るのに氣が付くのであつた。「何事でも覺えて置くに越したことはない、世の中には全く無駄な事といふのはないものだ」と彼は人にも云ふのであつた。

「近頃、上方では、何か珍らしい料理がはやりはせぬか？」と、家康は宗以に訊いた。

「左樣で御座りまする――。別に變つた料理では御座りませぬが、鯛を其の儘胡麻の油で揚げて、醬油で受けて頂きまするとなか〳〵結構で、專ら諸人が賞翫いたしますやうで御座ります」

と宗以は答へた。

「成るほど、それは一段と佳い風味であらう」

家康は其の料理を心で味はつて見た。

すると、折も折、城主照久から家康に鯛を獻上して來た。大鯛二枚とあま鯛三枚を笹を敷いて籠に入れて家康の目通りへ持ち出した。

「只今、燒津の濱でとりました鯛で御座ります」と云つて照久は披露した。

「丁度よいところぢや。己は唯今四郎兵衛から鯛の料理の講釋を聽いて食べたう思つたところぢや。彼に申付けて直ぐに是れを料理せい」家康は大層喜んだ。

宗以の指圖で、鯛の油げの料理が出來上つて、家康の前へ運ばれた。家康は喜んでそれを食べた。終日野懸けをして空腹であつたところへ、油揚げの料理は殊に舌觸りが佳かつた。彼は鯛の代りをして、到頭三枚まで平げた。家康は健啖家だつた。彼は食物に對する攝生といふことは餘り重んじなかつた。事實そんな事を顧慮しなくてもよい程に健康でもあつた。健康といふことは、家康の強い誇りであると同時に歡びであつた。彼の父廣忠といふ人は性來病身であつて、廿四歲で歿したのであつたが、其の子の彼は七十五歲の今日まで病氣らしい病氣の味は

知らずに濟んでゐるのであつた。人生は所詮運である。が其の運も健康で長命を保たなければ掴めない。彼は、自身の健康を意識する時ほど、愉快なことはなかつた。

家康は、機嫌よく人々と談話に耽つた後で寢所へはひつた。さうして直ぐに睡りついた。

三

丑三ツ頃に家康は眼を醒ました。厭な夢を見た後のやうに動悸が躍つてゐた。胸がムカムカして嘔氣を催すやうな氣持があつた。暫時經つと下腹がグウグウと鳴つて痛み出して來た。

彼は起きて厠へ行つた。劇しい下痢があつた。床に戻つて來ると同時にまたもや腹が痛めて來た。「鯛の油揚げに中てられたのだ」と彼は氣が付いた。

宿直の者は、人々を呼び起して來て、共に主君の介抱をした。早速、今日の御供に加はつて來てゐる醫者の片山與安を呼びに遣つた、處が、何處へ行つたのか折り惡しく與安が宿にゐなかつたので、使の者は方々探し廻つた。其の間に家康は非常に苦しんだ。下痢のほかに二三回吐瀉もあつた。

「與安はまだ來ぬか」と家康は側の者に向つて訊いた。

人々は醫者の來ようが遲いのでハラ〱して氣を揉んでゐた。其處へ漸うのことで與安が、周章てやつて來た。彼は宵から城下の知人の家へ行つて、其家の主と圍碁に耽つてゐる處へ、漸く尋ね當てて來た主君の使に接して、仰天して驅けつけて來たのであつた。

家康は與安が參つたらば叱り付けて遣らうと思つてゐたが、其の顏を見た時には苦痛が先立つてそれどころの元氣はなかつた。與安の診立も無論食傷に違ひはなかつた。

「與安、萬病圓をまゐれ」と、家康は自身で藥の指圖をした。

與安は藥籠から萬病圓三十粒程取り出した。家康はそれを掌へ載せて一度に口へ入れた。が直ぐに後から、それだけでは不安心な氣持がして來た。

「與安、銀液丹をまゐれ」

「藥が立て合ひましては反つてお毒で御座りますから、今暫らくお待ち下されますよう」と與安は答へた。

「默れ此奴。まゐれと申さば直ぐにまゐれ」

與安は困つた顏をしながら、銀液丹を十粒程紙の上に載せて側の侍に渡した。家康はそれをも一度に嚥み下した。

それから間もなく餘程苦痛が和いで來た。明け方頃には下痢も遠間になつて、スヤ〱と睡りついた。

早朝、駿府へ急使が立つた。

「大御所樣が、昨夜丑の刻時分から俄かにお虫が差し發つて、なか〳〵の御苦しみで、二時ばかり御氣絶なされた」

と使者は少しく聞き事も交ぜて報告したので、駿府城内は駭然として動搖した。即刻、御出頭青山伯耆守忠俊、藤堂和泉守高虎、金地院崇傳の三名が田中へ急行することになり、別に、大番組落合小平次に命じて、早馬を以て此の由を江戸表へ急報させた。

小平次の馬は、駿府から江戸表迄四十五里の行程を、僅か十二時で馳せつけた。秀忠は、其の遠來の速かなる事を賞して、黄金二枚と呉服とを小平次に與へた。

青山、藤堂、金地院等は、廿二日の正午頃に田中城へ着到した。彼等は直ぐ樣御前へ呼ばれた。

もう家康は元氣を恢復してゐた。血色は少し惡かつたが、大して疲勞の容子は見えなかつた。彼は仰向きに寢た儘、一同に向つて病氣の原因や昨夜の苦しかつたことなどを、平常と同じ元氣で物語つた。

「それでも、萬病圓の效能はあらたかぢやよ。あれを呑むと間もなく氣分が良うなつた」

家康は、其の萬病圓を服用したいと思つても醫者の片山與安が居なかつたために大變永く苦しんだ事を思ひ出したが、それを彼等に話すと與安が叱られるのが可哀そうになつたので、口には出さなかつた。

一同は其の儘田中に逗留することになつた。翌廿三日には、家康の病氣は殆んど恢癒したやうに見えたが、まだ食事は進まなかつた。

廿四日に家康は田中から駿府へ還つた。今度は無論途中は駕を用ゐた。それにも關はらず、小鳥の多い處を通ると、家康は駕を停めて、鷹を放たせて見物した。

駿府へ還つて後も病氣ははかばかしく本復しなかつた。毎日一二回宛劇しい差し込みがあつた。さうして一向食事が進まなかつた。だから、表面の元氣には變りはないが、身體は少し宛衰弱していつた。

醫者は、片山與安、半井驢庵の兩名が主で、其の他にも一二名侍してゐた。が、家康は、醫者には脈を見せるだけで、藥は例の萬病圓ばかり服用してゐた。醫者がすすめる藥はどうもきゝそうな氣がしないので、呑んで見る氣がしなかつた。自分の體には萬病圓が一番適してゐると彼は固く信じてゐた。

全體家康は醫學に對しては自身に可成りの素養を有してゐたから、其の智識を以て自分の病氣の狀態をも考へて見て、他の人のやうに醫者委せにはしないのであつた。彼の醫學に對する

興味に、慶長十三年に林羅山を長崎へ遣はして、「本草綱目」を始め數種の醫學上の珍書を集めて來させた時から、眼が明き始めたのであつた。彼は幕醫片山與安、吉田宗恂等に命じて、本草綱目、奇効良方、千金方、和劑局方等の書物を講義させたり、或ひは和漢の藥種を蒐集せしめ、數種の藥を製して、諸大名等にも度び度び頒けて與へたりした。例の萬病圓は、家康自身が處方を書いて調劑せしめた藥であつた。

「萬病圓は名藥に相違御座りませぬが、何分劇藥のこと故、御老體には如何かと存じまする」と侍醫等は云つた。

が、家康は其の服用を止めようとはしなかつた。それでも、餘り彼等が云ふので、一度は其の藥を呑んで見る氣になつた。處が、驢庵の煎藥は、處方を聞いて見ただけで氣に入らなかつた。與安の藥も、口の側まで持つて行つて見たが、「どうもきゝそうにない」と直覺的に感じられたので、到頭是れも止めてしまつた。

鳩尾の下のところに、鷄卵位の塊があつて、それが動き始めると腹が痛み出した。醫者はそれを腸の疾患だと云つた。が、家康自身の考へでは、それは寸白に違ひないと思はれた。腸の疾患はとうに癒つてゐるのだと思つた。其の點が、根本的に、家康自身と醫者と見解を異にして居るのであつた。侍醫等が餘り强硬に自説を主張すると家康は非常に立腹した。彼等の輩が何程の事を識つてゐるものかといふ氣持にもなつた。專門家の智識といふものも、或る程度までの用しかなさないものであることを、彼は生涯に度び度び經驗して來た。最後は、自己の直覺力を信ずるのが一番確かだと思つた。戰をするにも彼は其の主義で押し通して來た。さうして益、自身の直覺力を信ずるやうになつた。

「己の體は己が一番よう識つて居る」家康はかう云つて醫者を叱り飛ばした。

四

正月晦日に江戸を發した秀忠は、二月一日の申の時に駿府へ到着した。そして、直ぐに本丸へ行つて、父に對面した。家康は非常に憔悴してゐた。顔の肉がたるんで、眼縁に黑い影が現はれてゐた。血色が失せて、皮膚の色が灰色になつてゐた。眞白な髮が、餘計痛々しい感じを起こさせた。

だが、不相變元氣だけは佳かつた。

「御政治向き御繁多のところを、態々御見舞ひは御苦勞であつた」

恁う家康は挨拶をしてから、其の後の江戸の様子などをこま

ごまと秀忠に訊いた。秀忠が、江戸の街が一日増しに發達してゆく事を話した時には、家康の眼に希望の光が耀いた。江戸の興廢が、自分の事業の盛衰を意味するものだといふ風に家康には考へられた。「もう一度江戸へ行つて見度い」と彼は思つた。

「御覽の通り格別の病氣ではないから、追つ付け全快致すであらう」と家康は自分からもさう信じて云つた。

秀忠が來た事は、家康一人に確かに氣強い思ひをさせたばかりでなく、あらゆる人の心を何んとなく明るくさせたのであつた。事實、家康の病狀も其の翌日から餘程立ち直つて、脈なども順調に復しかけて來た。食事も、初めて朝と晩と二回取つた。

夜は、藤堂高虎や金地院崇傳等を呼んで、元氣よく話した。

「己の病氣は寸白に極まつて居るのに、醫者めが色々面倒に申し居る」と云つて家康は旺んに醫者を罵倒して笑つた。

一同の者は納豆汁の料理で、御前でお茶をいただいた。

併し、一日二日經つと、病氣は又元へ逆戻りをしてしまつた。そして、不相變強い差し込みで苦しめられた。其の上、今度は痰も加はつて來た。咳が出始めると、其の痰が切れるまでは咳き續けた。さうして最後にガツカリして、枕に頭を載せるのであつた。

大御所御違例の旨が、江戸の老中本多佐渡守から公然發表されたので、三家を始め諸大名は續々と駿府へ集まつて來た。駿府は、開闢以來の賑はひを呈した。此の事が京都へ聞えると、大内では、武家傳奏廣橋大納言兼勝、三條西權大納言實條の兩人を御見舞ひとして差し向けられることになり、勅使は二月廿三日に京都を發つた。同く廿一日には、三寶院義演准后に勅して、清凉殿に於て一七日の間普賢延命法を修せしめられ、至尊も其の場に出御ましまして、玉冠を傾けさせられて家康の病氣平癒を御祈り遊ばされた。勅使は十九日に駿府へ到着した。家康は日を撰んで、廿三日に兩卿を城へ招じて、勅を拜した。

家康が、例の萬病圓一點張りの手療治を用ゐてゐることについては、秀忠を始め一同の者が尠なからず心を惱ましてゐた。が、浮つかり其の事について彼れ是れ云ふと家康の機嫌が忽ち惡くなるので、今は誰れあつて喙を挾み得る者もなかつた。與安の如きは、餘り度び度びそれを諫めたために、自然に首尾を惡くしてしまつて、此の頃では滅多には御前へ顏出しも出來ないやうな羽目になつてゐた。

併し、家康自身でも、萬病圓だけではすこし不安になつて來た。其處で今度は、寬中散といふ藥を併せて用ゐ始めた。が、是れも矢張り彼自身の處方で調劑させた藥だつた。

秀忠を始め一同の者は、何んとかして先づ此の手療治を止めさせなければ不可ないと思つた。其處で折りふし評議をして見たが、門外漢の意見などを用ふる家康ではないから、是れは矢張り醫者をして極諫せしめるより外に方法はないといふことになつた。では醫者の中では誰れに云はせるのが一番適任だらうかといふと、矢張り與安を措いて他には人がなかつた。與安なれば誰れが見ても當代隨一の名醫ではあるし、それに平常の君寵も群を拔いてゐることだから、縱しんば幾分御前體が不首尾になつてゐる際とは云ひながら、此處は矢つ張り彼をして強いて云はしめるのが、一番效果がありさうに思はれた。

此の重大な任務が、與安の肩の上に置かれた。與安は當惑した。彼は今迄にも度び／＼其の事で主君の機嫌を損ねたくらゐで、醫者としての自說は十分主君の前で表明してある筈だつた。それにも關はらず、主君は一向其の意見を採用して吳れないのだから、今更同じ事を何遍申し上げて見たところで到底無駄であることは分つてゐる。のみならず、此の上主君の心に逆つたらどんな御怒りに觸れぬとも限らない。とは云ふものの、彼として此の役目を引き受けぬといふわけにはいかない。何故と云ふまでもなく、醫者である以上、病人に對する自己の正當な意見を主張せよといふ至極當然な命令に對して、躊躇して居れば卑怯者だと誹られても仕方がない。また、自分一個の立ち場から見ても、それが主君に對して自己の臣節を全うする唯一の手段でもあるのだ。

與安は決心をして主君の前へ出た、病床にはおるいの方が侍してゐた。廿そこその此の若い御局の姿は、嚴冬の古木の如き病める大御所の身邊に、牡丹の花から發するやうな濃艶な氣分を無遠慮に撒き散らしてゐた。

「恐れながら我が君へ申し上げ度う存じまする」與安は遙か離れて平伏して云つた。

家康は頭を枕の上で廻して、ジロリと大きな眼で與安を見た。おるいの方は「折が惡い」と云ひ度いやうな眼付きをして見せた。併し、與安はもう默つて引き退るわけにはいかなかつた。

「御不興を蒙つて居りまする與安めが、又もや斯樣な事を申し上げると御叱りも御坐りませうが、我が君の御容體につきまして、愚老の存じ寄りを今一應御聽き取り下さるならば有難い仕合せに存じまする。――」

與安の顏色は蒼ざめて緊張してゐた。彼は其處で少し前へ躙り出て自分の云ふ可き事を云ひ出した。まづ第一に彼は、家康の病氣が決して寸白ではなく、腸の疾患であることを斷言した。是れは衆醫の診立ての悉く一致する處で些か疑ひの餘地は無い

といふことを彼は附け加へて云つた。次ぎに、萬病圓寛中散共に劇藥であるから、一時の虫押へには妙藥であるけれども、是れを持藥に用ふる時には甚だしく人體に有害である事を說いた。そして最後に彼は恁う云つた。

「我が君が如何に百事に通曉なされおいで遊ばすにしても、醫學は醫者か本業で御坐りまするから、御病氣の際は醫者に御委せ下さるが至當かと存じまする」

「馬鹿者！」と家康は滿面に朱を濺いで呶鳴り付けた。

「それしきの講釋聞かいで解らぬ家康と思ふか、たはけ者めが」

彼は、今日は胸が閊えて氣分が殊に不快くてならないでゐるところだつた。それで唯さへ疳が昂ぶつてゐるところへ、與安が名醫ぶつて喋々と辯じ立てるのを聞いてゐると溜まらなく腹が立つて來た。人にゝ各考があり信ずるところがあるのだ。それを醫者だからといつて、無闇と醫者の立場ばかり振り舞はして、他人の意志や感情をば更に顧みないといふのは、實に無禮至極な奴だ――

「誰か。此の與安めを早く引つ立てェ」家康は激しい怒りに慄き入りながら叫んだ。

近侍の者が二三名お次から立ち出でて、疊へ喰ひ付いて泣いてゐる與安の腕を兩方から持つて引き起した。

「與安殿、御諚で御坐るぞ、はやはやお退りなされ」

恁う云つて彼等はヒヨロヒヨロしてゐる與安を向ふへ連れ去つた。

家康の怒りは容易に納まらなかつた。與安は、主君に抗つた罪に依つて信州高島へ配流に處せられた。彼は即日、駿府から信州へ向けて護送された。

五

三月になつた。氣候の溫暖な此の土地では、二月の末頃から櫻が咲き盛つた。龍爪山の右手に聳えてゐる富士山には、大抵の日に淡霞が懸つた。

家康の軀は滅切衰弱して來た。それでも精神は依然として確かだつた。勅使、將軍家、諸大名、悉く駿府に淹留してゐた。秀忠は、毎日、三家の主や、越前宰相等を隨へて本丸に父の病床を見舞つた。前田利常、伊達政宗、福島正則、黑田長政等の諸大名は、一日隔きに表迄出仕した。

夜は、大概の晚に御咄衆が御前へ召された。其の人名を擧げて見ると、日野唯心入道、細川幽齋、山名禪高、藤堂高虎、金地院崇傳、神龍院梵舜等の人々であつた。家康は、此の人達を

相手に元氣よく咄をした。御咄衆は、いつも四ツ時分にお暇が出て奥から退出した。

三月廿一日、京都に於て、家康に對して太政大臣の宣下があつた。駿府では、廿七日に其の拜任の式を行つた。此の日家康は裝束を着けて表へ出て、勅使に對面した。在府の諸大名諸役人何れも裝束で其の儀式に參勤した。

其の翌日から、家康の病勢は俄かに募つて枕も上らなくなつた。

彼は、初めて死に面してゐることをはつきりと意識した。大きな宇宙の中の小さな自己が滅びつつあることを識つた。彼は十七歳の時初めて戰爭に出た。それから老年に及ぶ迄の間に戰塵の間を往來した經驗は數知れず有つてゐた。さうして幾度びとなく死生の間を潜つて來た。鎧の上に隙き間もなく矢を立てられたり、鉄砲の彈を身に受けたりしたこともある。敵の血と自身の血とで全身朱に染められたこともある。そんな時でも、彼は嘗て一度も死といふ事を考へたことはなかつた。死は、いつでも彼の身から遙か遠くにあつた。併し、今は其の死が、彼の直ぐ眼の前にあるのだつた。彼は其の無限の壁とピタリと對き合つてゐた。

「己はもう直ぐに死ぬのだ」と彼は思つた。併し其處には煩悶もなければ哀傷の感じも起きはしなかつた。ただ、行くべき處へ行くのだといふ氣持だけであつた。

彼は自分のした事業のことを考へた。事業のことを考へる時にはさう平靜な氣持ではなかつた。彼は自分のした事を小さいものだとは思はなかつた。人間に出來る事柄の中で、一番大きな仕事を仕遂げたのだとさへ思ふこともあつた。其の時、彼には自分といふものが非常に偉きく感じられた。

家康が一番心に懸る事は、秀忠に天下を統御するだけの實力があるかどうかといふ事だつた。其の次きが、自分の死後に於ける一部の大名達の向背如何の問題であつた。秀忠といふ男は我が子ながらも不可解な人物であつた。彼には、底があるのか無いのか、家康にも解らなかつた。

家康は藥を用ゐることを止めた。食事も殆んど切れてゐた。

或る日、伊達政宗が病室へ招かれた。政宗が今度家康の病氣の事を知つたのは仙臺にゐてであつた。奥州一帶は此の年非常な飢饉だつた。政宗は專ら窮民の救恤に努めてゐる際だつた。併し政宗は直ぐ樣家康を見舞ふ準備をした。其處へ本多佐渡守から書面で「飢饉の際でもあるから出府は見合せるよう」と云つて寄越したが、政宗は思ふ處もあるので其の儘仙臺を出發して二月廿二日に駿府へ到着、法華宗感應寺を旅宿として引き籠き

滞在してゐるのであつた。

二人の老雄は久方振りで顔を合せた。家康の顔には死の色が強く現はれてゐた。

「日々の登城御苦労に存ずる」家康は恁う云つて、それから政宗が遠路を遥々見舞ひに來てくれた事を深く感謝してゐることや、領分内が飢饉で嘸かし心労なことであらうと云つて、飢饉の有様などを細々と問ひ訊ねたりした。二人の様子は誰れの眼にも親密な友人同志のやうに見えた。事實、恁うして差し向ひで話してゐる時には、現在の地位身分の相違といふやうな事はどちらも忘れてゐた。豐公在世の時分、同じ大名としていつでも膝を交へて談笑した其の習慣が未だに抜けないのであつた。

「舊い友達はもう御身と己ばかりぢやな」と、家康は云つた。

政宗は、何んとも云へない懐かしい響きを其の言葉の中に感じた。彼は、家康に對して是れ程強い親しみを覺えたことは嘗てないことだつた。互ひに友人として親しく交際してゐた當時でも、家康が政宗に對して油斷しなかつたやうに、政宗の方でも家康を信じてはゐなかつた。嘗てまだ家康が織田信長の手足となつて甘んじてゐた當時に、政宗は既に奥州に雄飛してゐた。天下に心を掛けたのは自分の方が家康よりも先きだつたかも知れないと政宗は思つた。尠くとも自分が競爭者と目した者の中には、家康以上の有力者が澤山ゐた。然るに、時勢が推移して當時の群雄も今は悉く世を去つてしまつた。殘つてゐるのは家の方と自分ばかりだ――。政宗の腦裡からは、天下を經略して見たいといふ壯年時代迄の空想が、今でも全然消え失せてしまつてはゐなかつた。時々それが心に閃めいて來た。「機會が到來すれば――」と彼は常に心に思つてゐた。家康は、政宗の其野心を知つてゐた。そして、自分の死後に、徳川の敵として一番畏るべき者は彼であるとも思つてゐた。家康も、政宗も、お互ひの心を能く知り合つてゐた。が、さういふ事が、此場合二人の間の友情を傷ける原因にはならなかつた。政宗は、何んとなく引き入れられるやうな氣持になつた。さうして他の總ての事を忘れて、此の死にかけてゐる友達の幸福を祈つて遣り度い氣持になつた。

「併し、己はもう間もなく死ぬのぢや」と家康は云つた。そして彼は痩せ細つた大きな手を政宗の前に差し伸べた。二人の手は固く固く握り合はされた。家康の眼は熱情で燃えてゐた。彼は云ひ續けた。「政宗、己は唯一つ御身に頼み度い事がある。ほかではない、秀忠の事ぢや。彼を御身に守り立てて貰ひ度いのぢや」

政宗は激しく胸を搏たれた。彼は家康が自分に向つてさう云

ふ心持をよく解してゐた。冷酷な、如何なる場合でも他人に屈することは欲しない家康でも矢張りさうだつたのかと思ふと、彼は始めて人間の眞の弱さに觸れた時の大きな悲哀に包まれた。

「如何にも政宗承知致した。秀忠公の事は少しも御案じなさるには及びません」と、政宗は固く手を握りしめながら云つた。斯う云つてしまふと、同時に政宗は多年の自身の重荷を一度に卸ろしたやうな氣持がした。彼は、哀しいのか嬉しいのか自分ながら譯の分らぬ氣持で、大きな聲を發してオイオイ泣き出した。

政宗は、家康の弱さを見出したつもりで、事實は、自身の弱點を家康の前にさらけ出してしまつたのだつた。

六

家康は、諸大名を一人一人病床へ招いて今生の暇を告げた。さうして彼は、政宗に云つた通りの言葉を、幾人もの相手に向つて繰り返すのだつた。めいめいの者は、自分獨りが特に家康から憑まれてゐるのだと思つた。さうして、感泣して、徳川家のために忠節を盡すべきことを誓約した。

ただ一人、福島正則の場合だけは異つてゐた。家康は、正則の顏を見ると直ぐ斯う云つた。

「其方の事は、將軍家が常々心を置いてとやかう申されるが、己が能く能く申し宥めて置いたから疎畧にはなさるまい。併し乍ら、其方若し將軍家に對して不滿があらば、遠慮に及ばぬ、速かに國へ歸つて籠城するがよい」

正則は眞蒼な顏をして家康の前を退つた。次の間迄來ると其處に本多正純がゐた。正則は、正純に向つて唯今の事を話した。

「某が、太閤御在世の當時に於てすら當家に對して二心の無かつたことは、君も能く御存じの筈だのに、斯樣な御言葉を蒙るとは誠に情ない事で御座る」

と云つて正則は聲を放つて泣いた。正則が退出したあとで正純は家康に其の事を話した。家康の面には微笑が現はれた。

「左樣か、まづ彼にも心配はいるまい」と、家康は正純に向つて云つた。

藤堂和泉守高虎は家康が無二の氣に入りであつた。併し、家康が高虎を愛した以上に、高虎は家康を崇拜してゐた。高虎は最初大和大納言秀長に仕へ、秀長の死後嗣子秀保に仕へ、二代に亘つて其の國政を掌つたが、主家滅亡の後薙髮して高野山に隱遁したのを、秀吉のために強いて起たされて伊豫宇和島の領

主となつたのであつた。彼は純然たる武人ではなく、識見時流を抜き、智謀一世に卓越した俊傑であつた。此の點に於て、諸大名を通じて彼と比肩し得べき人物は、唯一人黒田孝高あるのみだつた。孝高が無二の家康黨であつた如く、高虎も最初から家康には深く推服してゐた。秀吉の死後再び動亂に近付いた天下を整理し得る人物は家康の他に無いことを彼等は知つてゐた。高虎は衷心から家康の事業を補翼しようといふ意志を抱いてゐた。家康も、高虎の志を知つてゐた。そして、味方として、是れ程頼母しい人物はないと思つてゐた。

高虎は、熱心な宗教信者であつた。彼の宗旨は眞言宗であつた。

或る日家康は病床で高虎と何くれとなく物語りをしてゐた末にふと恁う云つた。

「其方が大閤在世の頃から己に心を寄せて與れた懇志の程は、己は死んでも忘れはせぬぞ。出來る事ならば死後迄も現世と同じく側にゐて貰ひ度いと思ふのだが、殘念なことに其方と俺とは宗旨が違ふからそれは叶はぬことだらう」

當座の心持だけで云つた此の言葉が、高虎の胸に大きな感激を起こさせた。彼は涙を垂れて御前を退つて來た。彼は早速天海僧正に會つた。そして「唯今御前で斯々の仰せを承りました。某は唯今から改宗致すによつて、何卒貴僧の御弟子にして頂き度う存じます」と云つた。天海は快く承服して、其の場で高虎を法弟に加へ、天台宗の血脈を授けて、僧都號までも與へた。高虎は大いて欣んで、直ぐ様天海と同道して家康の病床へやつて來た。

「先刻あのやうな仰せを蒙りましたゆへ、早速宗旨を改め、天海僧正の御弟子となりまして僧都號までも授かりまして御座る、此の上は來世まで永く御奉公仕るで御座りませう」と高虎は云つた。

家康は意外な氣持がした。併し、何氣なく云つた自分の言葉が、斯く迄強い響きを他人に與へてゐることを考へると、彼は快く、得意でもあつた。彼は、未來といふ事に就いては、多くの人々と同樣に、朧げに其の存在を信じてゐた。さうして、現世に於て高い地位ある者は、罪惡を犯さぬ限り、未來でも矢張り高い地位に置かれるもののやうに考へてゐた。

「それで己も安心した。其方達二人は來世まで己の側にゐて、德川の子孫の守護神となつてくれますよう」喜んで恁う云つた家康の言葉には眞實がこもつてゐた。

七

二代將軍秀忠は謹嚴無類の人であつた。或る年、彼は駿府へ來て數日滯在したことがあつた。其の時家康から阿茶の局へ內意を傳へて云ふことには、「秀忠は若年の者のことゆへ、數日當所に逗留しては定めて徒然であらう。其方の心得で、年の若い女を一人見舞ひに遣はすがよい」といふのであつた。阿茶の局は畏まつて引き退ると、直ぐに大勢の腰元の中から花といふ今年十七歲の女を見立てて、これに右の內意を申し含めた上、お菓子を持たせて、御內使といふわけで密り庭口から遣つた。そして、秀忠の處へも其の向きを知らせてやつた。すると、秀忠は、大急ぎで上下を着けて父の使を待ち受けてゐた。軈て花がお菓子を捧げてそれへ來ると、秀忠は自身で起つて庭の木戸を明けて迎へ入れて、彼女を上座へ座らせた。さうして秀忠は飽くまで禮儀正しく其の菓子を食べた。花は困つてしまつた。そのうちに秀忠はお菓子を食べ了つたけれども、彼女はまだ歸るわけにはいかないので其處に座つたままうじうじしてゐた。すると秀忠は「花、もう御使は濟んだぞ、早く歸るがよいぞ」と云つて、又もや自身で庭の木戸を明けて花を送り出すのであつた。

秀忠は、一見茫乎とした感じのする人物であつた。彼は、將軍として江戸にゐたけれども、事實上政治は悉く家康が駿府で處理してゐたから、彼が手腕を發揮するやうな機會はそれまでになかつた。彼に就いて知られてゐる事は、謹嚴、温厚の長者といふことだけであつた。家康にも、それ以上の事は解らなかつた。

家康は、秀忠を枕べに呼んで云つた。

「秀忠、わしはもう近々死ぬることと思ふが、就いては、わしが死んだ後は、諸大名を三年間江戸に留どめて置き、能く能く彼等の心事を試して見られるがよい」

すると、秀忠は暫時考へてゐたあとで斯う云つた。

「父君の仰せもさる事では御座りますが、秀忠の存念は、其の曉には諸大名を悉く國へ歸し、一兩年休息の上で江戸へ參勤致すべしと申し付け度う存じます。若し其の中に野心の輩らがあつて、國許で籠城の色が見えますれば、早速馳せ向つて踏み潰し申すで御座りませう。とかく天下は、一陣致さずしては、治まるまいと存じまする」

家康は、我が子の手を取つて押し戴いた。

「秀忠、よくぞ申された。わしは其の一言が聞きたかたのぢや。偖々天下は安泰と極わまつた」

家康の兩眼から、初めて感激の涙が泉のやうに迸り出た。

八

家康は、老臣を集めて、死後の事を細かに云ひ遺した。

「亡骸は久能山に葬り、位牌は祖先の例に慣つて三河の大樹寺に安置して、七々日の法會を營むよう」

と家康は云つた。が、二三日經つと其の事を變更した。そして今度は、

「死後は先づ久能山へ葬つて神に祭り、一年も經つた後に下野國の日光山へ小さな堂を建てて勸請致すよう。予は關八州の鎭守となるであらう」と云つた。

それから、祭祀の事は、平常特に親しかつた榊原內記照久に掌らしめるやうに命じた。

家康は、靜かに死の迎ひを待つばかりであつた。さうしてゐる時、彼はふと思ひ付いて、御腰物番の都筑久太夫を召し寄せた。久太夫が伺候すると、家康は平常身につけてゐた三池典太が鍛へた刀を取り出させて、久太夫に渡して恁う云ひ付けた。

「久しく手心を見ぬに依つて、是れで罪人の生胴を試めして來い」

久太夫は畏まつて、直ぐ樣町奉行の牢屋へ行つて、一人の罪人を引き出して生胴を試めした。そして立ち歸つて刀を返上すると、

「切れ味はどうだつた？」と家康は訊いた。

「是れこそ眞の名刀と申すもので御座りませう。手に覺えもなく、瓜を切るやうで、土壇まで、切り込みまして御座りまする」

と久太夫は答へた。

「さうか——」

家康は心地よげに恁う云つて、鞘を拂はせ、刀を自分の手に持つて二三遍空に振つて見た。たつた今其の刀で人を殺した事については、久太夫が言葉の瓜を切つたほどにも家康の心には感じなかつた。

「己が死んだら、此の刀を神體として祀れよ」と、家康は側らの本多正純を顧て云つた。

それから二日過ぎて、四月十七日の巳の刻に、家康は眼を閉ぢたのであつた。

九

家康の亡骸は、四月十八日の晩頃に、遺言通り久能山へ埋葬された。

家康に仕た御厩の舍人に井出八郎右衞門といふ者があつた。若年の頃から家康に仕へ、處々の戰場へ御供をして片時も御馬

の側を離れたことはなかつたから、家康も一方ならず此の八郎右衛門を寵愛してゐた、太平の世となり、八郎右衛門は自分の躰も弱つて來たので、近頃は隱居してゐたが、彼は常々人に向つて「若し我君百歳の後は、自分は必ず殉死して冥土迄御供申し、平素の御恩に報ゆる存念だ」と云つてゐた。處が今度家康が死んだので、彼は朋輩の酒井藤九郎といふ者の許へ行つて、自分の決心を話した上で藤九郎に介錯を頼んだ。藤九郎は快く承知して呉れた。埋葬の夜、二人は連れ立つて久能山へ詣つた。儀式が了へた時にはもう明るくなつてゐた。八郎右衛門は隙きを見て墓前で切腹しようと、すると折り惡しく人が來て見咎められてしまつた。其の時まだ山にゐた本多上野介等も其の場へやつて來て、八郎右衛門の忠節を賞めた上で、懇々と其の心得違ひを說いて誡めた。八郎右衛門は、人々の手前死ぬことが出來なかつたので一旦山を下つたが、久能山の麓にある石藏院といふ寺の門前迄來ると、其處から山の方へ向つて拜して今度は美事に割腹して素志を遂げた。

信州高島へ配流になつた幕臣片山與安は、家康の死後三年目に當る元和四年四月に至つて漸く赦免に遇うて江戸へ歸つた。彼がそんなに永く配所で暮さなければならなかつた譯は、三年父の道を改めぬ秀忠の孝道の犠牲となつたのであつた。彼は秀忠の命に依つて日光山へ詣でて家康の廟を拜した上、江戸に歸り、再び元の如く幕府の御藥の事を掌つた。(完)

「附錄」

久能山

推古天皇の御代であつた。駿河の國守に久能忠仁といふ人があつた。或る時國守は、同國有土(うど)の山へ獵に行つて、終日鳥獸を追ひ暮してゐるうち、何時の間にか從者にもはぐれて、唯一人道も無い山の奥深くへさ迷ひ込んでしまつた。併し何處かに里へ出る道があるだらうと思つて、國守はあちらこちらと歩き廻つてゐるとふと、妙なものを發見した。それは、直ぐ側の非常に年を經た杉の樹の洞の中から異樣な光が發してゐるのであつた。よく、蛇だの野獸などの眼が光る、それとも異つてゐた。むしろ、日中の太陽に眼を向けた時のやうな、眩しいやうな光が其の暗い洞の奥から出て來るのであつた。

「何んだらう?」

國主は不思議に思つて暫らくそれを見詰めてゐたが、元來

男な人だつたので、到頭其の洞の中へ這入つて見ることにした。洞の中を探ると彼の手に觸つた物があつた。取り出して來て見ると、長五寸ばかりある閻浮檀金の千手觀世音の像であつた。國守は畏れ尊び、其の像を捧げて山を出て館へ歸つた。

國守は信仰の厚い人だつたので、早速其の山へ一寺を建立して尊像を安置し、田園百町を寄捨して寺產とした。すると或る夜のこと、國守が睡つてゐる枕元へ年八旬餘りの老僧が現はれ「我れは補陀洛山の淨土より衆生濟度のためここに永く影現す」と告げたかと思ふと、忽然として其の姿は消えて、國守は夢から醒めた。そこで國守は、寺の山號を補陀洛山と呼び、本願の名を以て久能山と名付けた。

それから百四十年を經て、養老七年に、行基菩薩が海內巡錫の砌此の寺に立ち寄つた。菩薩は、かの閻浮檀金の尊像をば自身の筐中へ納め、替りに自ら千手大悲の像を彫刻して爰に安置した。

久能山は古へから風景の絕勝を以て識られてゐた。西行法師の「山家集」には次ぎの歌がある。

駿河の國久能の山寺にて月を見てよめる

淚のみかきくらさるる旅なれやさやかに見よと月はすめども

永祿年間、武田信玄は今川氏を亡ぼして駿河一國を占領すると同時に、久能山が天險の要害であるのを見て此處に築城して今福丹波守をして守將たらしめた。それは主として、小田原の北條氏の海軍に備ふるためであつた。當時の海道は、海に沿ふて、此の山の脚下を通つてゐたのである。久能寺は、其の時以來有十郡村松の郷に移された。現在の鐵舟寺が其の跡である。武田家滅亡の後、駿河は德川家康の所領に歸し、家康は久能城に同族松平豐後守勝俊を置いて守將とした。家康は、生前屢此の山に登攀遊覽して手づから樹木を植ゑたりした。一と年駿府城が火災に遇つた時の如きは、溶解した金銀を此の山上へ運搬せしめ、榊原照久に命じて其の守護をせしめたこともあつた。要之、久能山は戰國時代に於ては海道隨一の要害であつた。家康が、此處を我が墳墓の地と定めたことについては、なみなみならぬ用意があつたことも窺はれる。

家康の埋葬の當日、駿府城內では意外な活劇が一幕演じられた。其の仔細に恁うであつた。埋葬の儀式も滯りなく濟み、諸役人諸大名以下悉く登城して秀忠を候問した。其の席で、本多正純から「大御所樣御遺言の如く、御葬儀も相濟み、先以て珍重に存じ奉る」と言上した。すると、其の言葉の下から、

「いや、此の度びの御葬儀は御遺言に違背致して居る故、大御

所様には御滿足には思し召さるまい」と無遠慮に云つた者があつた。それは川越喜多院の住職天海僧正であつた。一座の者は喫驚したが、中にも今度の葬儀については萬端顧問格で指圖をした金地院崇傳は默つてゐられなかつた。

「僧正は何事を申される？狂氣でもなされたのか」と崇傳は威丈高になつて云つた。

「お默り召され、和僧が何を知つて差し出口をせらるる」天海負けずに遣り返した。

正純は双方を制して、

「僧正、御前を憚らず過言を申して不屆であらう。吃度吟味に及ぶであらうから、早々此の席をお起ち召され」と天海に向つて語氣鋭く云つた。

天海は靜かに起つて法衣の袂を掻き合せながら御前を退つた。此の不意の出來事のために並み居る諸役人諸大名何れも云ふべき言葉を失つて座中は白け渡つた。將軍も不興氣な顔をして奥へはいつてしまつた。併し秀忠は、天海の一言には何か深き仔細のあることだらうと思つたので、直ぐ樣正純に命じて其の仔細を尋ねさせたところが、天海が云ふには、

「大御所樣には愚僧へ仰せ置かれたには、我が死後は神に祀るべし。さり乍ら、佛法も歸依の事なれば、同じくは佛法神道共に用ゐたく思ふが、左樣な祭祀はなきか、との御上意であつた。依つて愚僧が申し上げたには、兩部習合と申して昔よりこれあり、即ち日吉山王など右の兩部習合で御座りますと御答へ申した處甚だ御悦怡の體で、さらば予の死後は其の兩部習合の神に祀るやう其方心得居つて執り行ひくれよとの上意で御座つたが、其の節愚僧は未だ此の山王一實の法を傳授を得て居らなかつたので、追付け上京の上禁中へ奏聞して此の傳授を申し受け度く存じて居つた處、俄かに大阪の一亂差し起り、依つて大御所より禁中へ秀賴征討の綸旨を下され度くと内々奏聞に及ばれたが、何かと御滯りあらせられたので、大御所には惡くの御憤りで、既に承久の古例に倣つて主上を隱岐國へ遷し奉らんとなされたのを、愚僧がお留め申し上げ、直樣上京して大御所御憤りの次第を逐一内奏申し上げた處、主上にも殊の外に驚き思し召され、能くこそ内奏致しくれたと叡感の餘り、此の御賞として何なりと望めよとの御内意があつた時、愚僧より、出家の身なれば何の望みも無之、唯常々の願望は、天台宗に於て唯受一人の法と致し來る山王一實の祭祀法を相傳仕り度く、何卒此度びの御賞として、座主の宮へ仰せ下されて、天海に相傳下さるやう、是れのみ願望に御座りますると申し上げると、唯受一人の法を他人

に相傳の事は、縱ひ座主の宮へ仰せ下されたとて中々御受けはあるまじ、幸ひ主上には先年御相傳あらせられたれば、それを天海に御相傳あるべしとの御事で、やがて院中へ召され、御親ら愚僧へ御相傳下された。されば、此度びの御祭祀は定めて愚僧へ仰せ付けらるる事と存じてゐた處、左はなくて吉田流の唯一神道を以て御葬祭申し上げた故、御遺言に違背致すと申した次第で御座る」と滔々と淀みなく答へた。

正純から天海の答辯の一伍一什を聽き取つて秀忠は非常に驚いた。直ぐ樣天海を呼び出し「御遺言の趣き御尤至極である。唯今より山王一實の法を以て天海祭祀を奉仕致すよう」と上意があつた。

爾來、天海が祭祀を掌り、榊原照久が宮の守護をする事になつた。天海は上京して禁中に奏請し、東照大權現の神號を賜つた。すると、金地院崇傳等が是れを非難して、「權現とは權りに現はれたる神で眞の神をいふのではない、正しき眞の神なれば明神と崇め申すべきである」と口々に云ひ觸らした。老中の面々も聞き捨てに出來なくなつて、一日天海を呼んで「世間には斯々に申す者もあつて、權現の方が明神より一格下つたものの如く云ふが、此の儀は如何である」と尋ねると、

「いや、明神より權現の方が宜ろしう御座る」と、天海は卽座に答へた。

「併し、林道春なども明神の方が權現より宜いやうに申して居るが何故であらう？」と老中の面々は重ねて問うた。

「いや〳〵、誰れが何と申しても權現の方が一段と宜ろしう御座る」と天海は強情に云ひ張つた。

「然らば其の仔細を申して見られよ」

「仔細も何も入り申さん。あの豐國明神の樣を御覽なされ」

恁う云はれて始めて氣が付いて、老中の面々はあつと計りに感服して、二の句が繼げなかつた。豐國明神は、大阪落城後は神號勅祭をも止められてゐるのであつた。

金地院崇傳は、南禪寺の前住で、世に本光國師と申す人である。圓頂黑衣の身でありながら非常な俊才で、家康、秀忠、家光の三代に歷仕し、後年彼の諸宗法度勵行から延ひては公武の大衝突を惹き起し、遂ひに後水尾天皇の御脫屣を見るに至つた大騷動の黑幕も彼で、所謂黑衣宰相を以て自らも任じてゐた程の人物だが、どうも天海僧正には敵はなかつたと見え、常に一本參られてゐたやうだ。

元和三年三月、靈柩を日光山へ移葬した。儀式は天海が掌り自ら鍬を取つて靈柩を取り出した。是れは、傳教大師が藤原鎌足を改葬した先蹤に倣つたのだといふ。出發に際して天海は左

の歌を詠んだとある。

あればあるなければなしとするがなる久能の御山の神うつしかな

○

昨年の秋、清水港の常盤ホテルに滯在してゐると、東京から松崎天民君がやつて來たので、丁度幸ひと、同道して久能山へ參詣した。宿から俥で出掛けた。町を出端れると、黄色くうなだれた稻や、紅く熟した柿や、青い蜜柑の香りの農村を通つて、やがて海ばたへ出た。往來の下には荒磯の浪がさかんに打ち寄せてゐた。片方は段々畑で、其の上の方には高い山が連らなつてゐた。そなれ松、掛け茶屋、陸へ曳き上げられた漁船――さうした油繪風の風景がしばらく續いた。

畑には段々に石が積み上げてあつて、其の一つ一つの石の間から小さな青い葉が出てゐた。何を作るのかと訊くと、「苺畑だ」と俥夫は答へて、石を積むのはそれに依つて太陽の熱を反射させて苺の生育を速めるためで、此の土地では正月の初めから苺が出來ると云つて說明した。

先きへ進むほど山の形が險しくなつて來た。水の涸れた石ころばかりの谷川が、ところ〴〵へ、樋を掛けたやうに山から走つて來て、眞逆樣に海へ落ちてゐた。

やがて、私どもの行手に、峩々とした巖石ばかりの山が現はれた。緋青色の其の山を、蔦かづらの紅葉が美しく彩つてゐた。丁度、妙義山の一部を切り取つて來て眺めてゐるやうな氣持がした。

麓で俥を下りた。可成り家數の多い村落があつて、鳥居前には綺斑背だの名物などを賣る茶店が立ち並んでゐた。其處から見ると、山は仰ぎ見る程に高かつた。直立千尺、十七曲りあるといふ石段が、樹間へ白く隱見してゐた。

私どもは、俥を麓に待たせて置いて山を登り始めた。殆んど垂直に切り立つた山へ、石垣を築き上げて、千鳥に石段を附けてあつた。其の難工事のほどは、今人の想像以上であつたらうと思はれた。石には、白い華のやうな苔がむしてゐた。千年以上も經たものらしい老樹が、椀を伏せたやうに、脚下に枝葉を茂らせてゐた。

家猪の如く肥つてゐる天民君は、いくらも登らぬうちに平太張つて、閻魔のやうに、火の息を吹き、熱湯の汗を拭うた。石に腰掛けて憩へば、山上の凉氣は膚を襲ふて汗を凍らせた。駿河灣は一眸の下にあつた。山下の村落の裏の濱邊で地引網を曳いてゐる漁夫の姿が、餌を運ぶ蟻のやうに見えた。

蔦折れの石段は一の門で止まつてゐた。往時は、玆に與力二

時、同心八人が勤番してゐたといふ。一の門から少しく登つた處に、勘介井戸だの物見の松などといふ城塞當時の舊趾があつた。物見の松は、唐崎の松を小さくしたやうな形で、西へ向いた絶壁の上から、千仭の谷間へ枝を差し伸べてゐた。

石段はなほも續いてゐた。天民君は「もう厭だ」と云ひ出した。厭だと云はれても、僕が石段を片づけるわけにはいかず、德川家康も矢張り肥つてゐておまけに老人であつたが、而も度び度び登攀したといふくらゐだから、勇氣を震つて頂き度いと云ふと、「僕は到底家康公と競爭は出來ない」と、いきなり兜を脫いでしまふので始末におへぬ。建錚無類の天民君も、脚の方では雜兵以下だ。

漸うの事で頂上に達した。大臣門のあたりから望むと、高い石段の上に、杉木立を背景にして、唐門、拜殿、神樂殿などの建物が、金銀丹碧の極彩色を輝やかしてゐた。私どもは年取つた丈の高い神官の案內で、神殿の內部を拜觀した。內々陣には、中央が東照權現、左に豐太閤、右に織田右府の三神を祀つてある。豐公、右府の二公は御相殿といふものであると云つて神官が說明した。拜殿の側らの御廟門を這入つて、又もや數十階の石段を上り詰めると、其の上に神廟があつた。廟は、高い石垣で積み上げられ、一丈五尺の墓標が西を向けて立てられてゐた。

墓標を南面せず、殊更西向きに建てたのは、これも家康の遺旨によるのである、と神官は云つた。

殉死人の墓

つい先達て、又々淸水へ行つて廿日間ばかり滯在した。一日、運動旁々、此の前見落して來た井出八郎右衞門の墓を見に久能迄出掛けた。山下の茶店へ立ち寄つて其の墓の在所を尋ねると、茶店の亭主が出て來て、それは此處から二三丁西へ行つた處の石藏院といふ寺の門前、つまり彼の殉死した現場にあると云つて明細に敎へて吳れた後で、「先年松本順先生が度び度び來られて、墓をもつと立派に致し度いと申されたのでしたが、其の後三百年祭の時寄附を集めて漸う立派な物をこしらへました」と自慢顏をして云つた。敎へられた場所へ行つて見ると、遥か山手へ引つ込んだ寺の門前の、往來端にそれがあつた。切石を積み、石の玉垣を繞らした、成る程亭主が自慢しさうな立派な墓所で、「家　公厩舍人何々……」といつたやうな文句を刻んだ新しい石碑やら、石燈籠やら、花立てやらが、コテ〳〵立つてゐる。よくよく見ると、其の中に古い墓が一基ある。それが正物であつた。長三四尺位の石で、正面に「空風火水地」の五字があ

り、右側に「爲悦叟道〇〇居士井出八郎右衛門尉」左側に「元和二龍集辟四月十九日殉」としてあつた。

是れほどちやんとした墓があるのに、松本先生がどう云つたかは知らぬが、何も八郎右衛門を成金扱ひにしたくても宜さそうなものだにと可笑しくもある。

——六月廿一日——

夏を籠りて

佐々木指月

蓮池

目には、蓮のまはるい葉が見え、蓮池の水のさびた上に、まつ白なその花が、風もないのにゆれながら、青空の光をうけて、ゐるのが見える。

耳には、ひとつ蟬がきこえる。

わたしは、やうやくすはりどころを見つけたやうに、すはるのを愛しながら、そこの疊の、どことなく香の匂のする上へ、足をまじへてすはつてゐた。

だす息、ひく息のほかには、わたしに屬してゐるものはなんにもないと、思ふその思ひさへ、ともすれば忘れてゐる。

心には、いつか、思ひ出の繪卷物がくりひろげられてゐた。

それは秋の景色で、わたしは蓮池のわきの石に腰をかけて、實を孕んだ蓮のうてなが、おもてを水にひたしてゐるのを見てゐた。

蓮の莖はみな枯れて、末枯れた葉をつけてゐるのはみな折れて、その葉を水に沈めてゐる。莖と莖とのあひだには他の莖が見えて　一面にあれはてた池のおも、空はぎらりとその上に映つてゐた。

わたしは、その莖と莖とが立ちならんで、また入り亂れて、一幅の畫をなしてゐるありさまを見つめてゐたが、胸は、いつか深い疑ひにとらへられた。

それは土のかたまりが咽元までこみ上げてそこにつかへてゐるやうなこゝろもちである。ぐつと、とりつめた、むな苦

に、息さへつまつてくるやうな。

ふと、わたしの耳には、花ばさみの音がして、氣のせいか？うしろに誰れか佇んでゐるやうに感じたので、ふりむいて見ると、そとには老師が立つてゐた。老師は、笑ひ顔をしてゐられた。

いかなる悶えのあるときも、いかなる疑ひのあるときも、老師の顔を見ると、安らかさはどこからともなく、あたゝかいものゝやうに、わたしの心につたはつた。

『老師！』と、わたしは呼びかけて、枯れ蓮を指さしながら、『あの蓮の莖の並んでゐるところを見ますと、もう、あのなかの一本をとることも出來なければ、またあのなかへ一本を添へることも出來ないほど、完全した畫になつてゐますが、どうして自然と云ふものは、あんな巧みを持つてゐるのでせう？わたくしはそれを疑つてをります。これがわからなければ、わたくしには自然と云ふものも、藝術と云ふものもわからないものになつてしまひます』とわたしは、さきほどからの心もだえを訴へた。

老師は、なんととられたか？これの言葉に答へるのが煩はしいと思はれたか？きゝもらされることはよもあるまいに、その邊に咲いてゐた菊の花なぞを二た莖三莖はさまれて、默したまゝで、わたしにはうしろをむけながら、靜かに庵室に歸られた。

わたしの目はしばらくは暗くなつた。疑ひと恥かしさとは亂れあつて、心のうちは一としきり渦をまいたが、茫然と老師のあとを見送ると、その折そこにとざゝれた障子には、短日が、はや、傾きかかつてゐた。

思ひ出の繪卷物の一と卷は卷きつくされて、耳には、一つ蝉の聲がまたきこえはじめる。

じゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝと、限りなくつゞいてゆくその聲は、思へばそれは、たつた今の繪卷ものに奪はれてゐたわたしの心を、目には見えない時間の上に縫ひつけてゐた一本の糸だつた。

目のまへの蓮池は、夏の眞晝の日のしたに、鏡のやうにかゞやいてゐる。まんまるい浮き葉もみんな光つてゐる。あゝ、眞つ白なその花よ！今日はわたしも疑はずに、そのうつくしさに見とれることが出來る。

穩待

待者寮の宵はものしづかだ。

町ならば、灯のともる頃から、友だちなぞが訪ねて來て、氷

水なぞ呑むのだけれども、こゝではまだ明りもつけず、たそがれの軒に蚊やりばかりをなびかして、周珅さんとわたしは、さつきからぼんやりと坐つてゐる。

小華さんがはひつて來た。

いつものやうに、かるく衣紋をしやくつて、ちいさな丸髷のあたまをさげて、丁寧に、ゑしやくをして、

『まだ、明りをおつけにならないのですか？たいさうお暗いじやございませんか？』と云ふ。

そこでこちらも拶挨の首をあげて、さうしてわたしは答へた。

『あなたのやうに、御修業成就をなすつた方でも、やつぱり明りはいりますか？』と。

小華さんは、また、一寸、衣紋をしやくつて、

『えゝえゝいりますとも、もうから年をとりましては、日暮がたなぞは明りなしでは、足もとがけんのんでなりませんから』と云ふ。

わたしは立つて、電燈のつまみをまはした。灯が、さつとあたりを照らすと、今迄は、まだ、晝のこゝちのいくぶんか殘つてゐた待者寮に、急に夜るがおとづれた。

『おやまあ！これはたいさう明るいぢやございませんか？』と小華さんが目をしよぼしよぼさせる。

『すこしきまりがわるいくらゐでせう』と、わたしはすかさず揶揄した。

『えゝ、もう、かう、おばあさんになりましてはねえ！あはゝゝゝゝ』と、かんばしつた聲で笑つた小華さんは、手のひらで、ぽんと自分の膝をうつて『よかつたねえ』と、つけ加へた。

さうして、また左の手を胸にあてゝ、ちよつと、衣紋をしやくる。

その一と聲の笑ひは、わたしが點じた、目のまへの、電燈の光よりは、華やかだつた。

わたしは、思はず、周珅さんと顏を見合はせた。

周珅さんは、まじめな顏で、番茶を入れてゐたが、剃りたての靑いつむりを、うやうやしくさげながら、先づ小華禪子にその一ぱいをついで出した。

『どうも恐れ入りますねえ』と、禪子は云ふ。

『いえ、どう致しまして』と、周珅上座は片手のさきを胸につく。

わたしたち三人は、兩手に茶碗をとりあげて茶をすゝつた。

小華さんは、のみ了つて、今度は念入れに、ぐつと衣紋をし上げて、珠數でも揉むやうに手のひらをもみながら、

『あの、お老師は、御在庵でゐらしつて？』ときく。
『えゝ、御在庵でゐらつしいます』と、周珅さんは答へた。
『それでは一寸どうぞ』と、小華さんは、また手をもむ。
『御相見でございますか？申し上げて參りましやう』と、周珅上座は立つていつた。
あとは、わたしと小華禪子のさしむかい。小華さんは、夏羽織の背なかをまるめて、また衿をうしろになげて、すはつてゐる。
紋の蚊やりは、追ひ〳〵に乏しくなつて、蚊のなき聲は、耳に近くきこえてくる。わたしは立つて、あたらしく木をくべた。
待者寮の夜の庭はしづかだ。

禪　子

一としきりは、この庵にあつまつて來た禪子たちも、今はみな散り〳〵になつてしまつた。
しばらくでも、同じ心の道すぢを、ともに歩んだ人たちだと思ふと、いつの日に思ひ出してもなつかしい
小淵さんと云ふ、まるがほな若い禪子もあつた。玉洲さんと云ふ、おもながな色じろの人もあつた。月洲さんと云ふ、ほそい眉毛のいい聲の人もあつた。また、慧皓さんと云ふ、女には珍らしい丈のすぐれた禪子もあつた。
そのたに、慧燻さんと云ふ、つややいだ目をしてゐて、姿もすつきりとした人があつた。わたしは、その慧皓さんと、この慧燻さんとを、誰れよりもよく覺えてゐる。
ある夏のこと、こゝの老師が、海外の旅にのぼられるその別れを送るために、催された會があつた。
それは、どこの禪堂にも、あつたためしのかつてない華美な催しで、多くの若い禪子たちはあつまつて、ばびろにやの昔ばなし、びらむすと、ちすべの戀のものがたりを、めろどらまに仕組んで、餘興としてそれを演じた。
わたしは、今でもその時の光景を目に浮かべることができる。その時にうたつた歌も覺えてゐる。さうして、それはあの時の年若い禪子たちが、心の境の師にわかれると云ふことの嘆きを、云ひあらはしたものであつたとも思はれる。
『若人は、へだての壁によりそひてこそ悶えけれ』と、うたひ手の禪子たちは、聲を合はしてその序歌をうたひはじめた。
慧皓禪子の、びらむすは、白い、ひたひをうなだれる。
『かはすは息か？囚はれの若きちすべの胸の火か？』
慧燻さんの、ちすべは、髪をひらいて泣きみだれた。
『壁のわづかの隙き間より、顏見あはするその戀よ！』

二人の、しぐさがをはるとゝもに、場面はかはつて、そこへは、沙漠のなかに白い桑の樹の立つてゐる背景がかけられた。桑の樹の根には、泉がゑがかれてゐた。

獅子の役をつとめたのはわたしだつた。背景はその前の日に三人で畫いたのだつた。

ちすぺは、獅子に驚いて、巖窟のなかにかくれる。

息せききつて馳けて來たぴらむすは、落ちてゐる、ちすぺのうすものと、獅子の足あとを見いだした。

歌ひ手の禪子たちは、またうたひ出す。

『われぞ、なを、死の沙漠にはいさなひける。あゝ戀人よ！そは誰がためいけにへぞ？ながいのちこそわれのそれにはまさりけれ。』

慧皓さんの、ぴらむすは、絶望に氣もくるはしく、

『獅子よ、來よ！巖のはざまより。その齒にてこの罪人をひき裂けよ！』

慧皓さんは、そこに落ちてゐた、うすものをとつて、白い桑の樹にかけた。

『あゝ約束の桑の樹よ！こゝに來て待つべしと、しめし合はせし目じるしよ！わが血潮にてその白き實をそめよ！』

ぴらむすは劍をぬいて、心臟の上に加へた。

慧蕉さんの、ちすぺは、ぴらむすに失望させまいと思つて、そこへ歸つて來たが、桑の樹の色のちがつてゐるのを見て、ちがつたところへ來たのかと、あやしみながらあたりを見ると、そこに誰かゞ死のくるしみでもがいてゐる。

それは、ぴらむすだつた。ちすぺは叫んだ。さうしてぴらむすに抱きついて、その涙を拭ぐちにそゝいだ。

歌ひ手はうたひつづける。

『ぴらむすよ！ぴらむすよ！わが聲をきけよ！わが戀人よ！これぞ、なが、ちすぺこそいまこゝに語るなれ。ぴらむすよ、われに答へよ！いかになはなしけるぞ？』

ぴらむすは、ちすぺの名をきいて、一度目をあいてまた閉じてしまつた。

ちすぺは、樹にかかつてゐる自分のうすものと、そこにうつろになつてゐる劍の鞘を見た。

『わがために、なが手はなれをあやめしか？わが戀も、たれのそれにや劣るべき。一とたびはわれもまた強かるべし、死を超えてたれを追はん』と、うたひ手がそのあとを、うたつてゐるそのなかで、慧蕉さんは劍をその胸にあてた。

幕はおろされた。

慧皓さんはいまどこにゐることやら？

慧燕さんは、つい、近くに住んでゐるさうだが、その後、この庵へは見えない。

入門

今朝も新たに入門の人があつて、わたしはその人のために、參禪の儀式を教へることになつた。

朝參は、夏の間はこゝでは朝の六時からはじまる。今朝は朝から晴天で、立ちならぶ銀杏の林の向ふには、雲の峯が、わたしたちの起きるまへから立ち上つてゐた。

少し寢すごしたわたしたちの目には、禪堂のなかは恥かしいほどあかるかつた。直日はあはてながら、文珠さまに線香をあげたほどだつた。

直日と云ふのは、堂内のとりしまりをする役で、靜座のしかたがわるいと、この直日にしかられる。

文珠さまの像は、堂内の正面に安置してある。文珠菩薩は根本の大智の表象であるから、直日は、毎朝のやうに、それへ香をあげて三拜する。

新入門の人と云ふのは、一人の若者だつた。

長大なからだを遲くはこんで、太い聲でものを云ふ若者だつた。おもい眼の光と、かたくとざした唇とを持つてゐた。

こゝへ來る人には誰だつて、深い疑ひを持つてゐない人はない。わたしはこの人から、それをきゝはしないけれども、その人の眉にあまる憂ひを見ると、それが他人の煩惱とは思へない。

わたしは丁寧に參禪の儀式を教えた。ちやうど幼い弟が、知らない旅にたつまへに、色々と途中のことなどを云ひふくめてやるやうな思ひをしながら。

『あすこに掛けてある、あの小さな鐘は、喚鐘を云つて、老師の室内から、鈴の音が三度きこえたならば、あの喚鐘を二つ打つて、合掌して、あそこの石のじきの廊下を通つて、つきあつて左へ曲つて、そこにある緣の上へおあがりなさい。さうしてそこで三拜をするのです。その三拜と云ふのは、かういふやうに』と、わたしは云つて長跪の拜をして見せた。

わたしは立つて合掌した。そのまゝで、ひざまづいて、兩手を前にさし出しながら身をこゞめて、ひたひを疊に押しあてた指さきを少しあげた。

さうしてまた、合掌のまゝ立ちあがつて、またひざまづいて、手のひらを前に、ひたひを疊に押しあてた。

さうしてまた、もう一度それをくり返した。

『これで、丁度三度です。これを女人の拜とも云ひます。こ手

ゝてためしにやつてごらんなさい』と、わたしは云つた。
　若者は、立つて、ぎごちなささうに、その三拜の稽古をした。袴のすそをふまへたり、こゞむときによろめいたりした。それは、はじめて、柱にすがつて歩き出す赤子のやうに　見てゐてもあぶなかつた。
『さあ、さうしたら、その緣の上から、疊の上へ上つて、老師が、すはつて看經をしてゐられる、三歩前で、また、もう一度今度は三拜でなく、一度だけ長跪の拜をするのです。』
　若者は、また立上つて、それをして見た。
　熱心なその面ざしは、わたしに淚をかくさせた。誰れか、自分の求める道に、ひざまづいて、そこに眞理を見いだすことをいなまうぞ。この若者の抱いてゐる心も、またわたしのはぐくんでゐる心も、それは同じものである。
『その一拜が了つたら、手を膝の上へのせて、老師から公案をいたゞくのです。公案をいたゞいて、老師が鈴をお振りになつたらば、胸元に兩手をあて、その座をそのまゝ立つて、またもとの緣に出て、そこでまた三拜するのです。さうして再び禪堂に歸つて來て、その公案を念じて靜座をするのです』と、わたしは敎へ了つた。
　その時には、もう、參禪ははじまつてゐて、ひとりふたりの入室のすんだあとだつた。室内からは、やがて鈴の音がした。
　わたしは、喚鐘のわきへ來て、撞木をとつて、二つ高くうち鳴らした。それは、その若者の代りに打つた鐘である。
　若者は、唇をかみ、合掌して、そこにあつた竹の皮の草履をはいて、ふるへながら石の廊下を歩いて行つた。
　わたしは、くびをさしのばして、案じながらそのうしろ姿を見送つた。淚は熱くわたしの目に湧いて來た。あの若者は、今こそ彼れの波羅蜜の第一步をば踏みはじめたのであると思ふと、云ひしれぬ感激にこの胸はみたされた。

參禪

　それは夏ではなかつた。
忘れもしないそれは二月の梅が咲いてゐる頃だつた。
かぞへれば、今からちやうど十九年の昔である。その頃ここにゐた大夢さんと云ふ人の紹介で、はじめてわたしはこの老師のお世話をうける身となつた。
　それはちやうど雪の晴れた朝だつた。わたしは、喚鐘のまへにすはつて、參禪の時の來るのを待つてゐた。夙の喚鐘場はまだくらかつた。
　やがて室内からは、老師の讀經がきこえて來た。いま聞

それは老師が毎朝の懺悔文をとなへるのであると云ふことはわかるけれども、その時のわたしの耳には、たゞ堂内の闇を透して、幽かにそれの抑揚がきかれたばかりであつた。

そのうちに諷誦の調はかはつて來た。心經を讀みいだされたのである。當時のわたしにはそれさへわからうはずはない。わきにゐた宗碩さんと云ふ首座が、始參の鐘をうちはじめた。はじまりは高く、末は低く。うち刻んだ音のをはりに、また高く二つ打つた。最後の二つはわたしのための鐘だつた。

思へば『無眼耳鼻舌身意、無色聲香味觸法』と云ふ聲がきこえた時に、わたしは立つて、合掌して、石の廊下におり立つた。

わたしの世界はくらかつた。わたしは草履のうらに觸れる敷石の上を歩いて、椽の上にあがつて敎へられた通りにそこで三拜した。

わたしは、たゞ、おほひなるもののまへに立つたと思つた。

室内も、まつくらだつた。わたしは讀經の聲のしてくる方へ歩みをすゝめて、よこむきになつて趺坐してゐられる老師の膝を、おぼろげに見た。

わたしは、そこでまた禮拜した。手を膝の上へついてすはつてゐると、老師は誦經をやめられて、こちらを向かれたやうなけはいがした。

わたしは少し首をあげて老師の胸のあたりを見つめたが、七條も黑衣の袖もまだきの闇のなかでは見えなかつた。わたしは耳を澄ましてゐた。

『不思善、不思惡、正與麼の時、奈個か這れ、上座が父母未生以前の本來の面目』と、その聲は嚴かに、暗いなかからひびいて來た。

香のかをりがして、一點の火の見える下にはほの青い香爐があつた。老師は懇ろに、今の公案の意味を說かれた。

『この大宇宙に未だなにものも現はれざる以前の、おまへの本來のつら魂は如何に？禪では、神とか佛とか云ふやうなことは云はぬ。たゞちにおまへの本來の面目を呈して見よ』と、云はれて、手に持つた鈴を高らかに鳴らされた。

わたしは、手を胸にあてゝ、退いて、入口の椽のところでまたうやうやしく三拜して、石の廊下をまた踏んで、禪堂にもどつてすはつた。

その翌朝の參禪に、わたしは公案の見解として、『絕對』と云ふ一語を呈した。

『三昧に入つて來い？』と、一喝されて、とりつく潮もなく引きさがつた。

また、その翌朝の參禪に、わたしは『色なき色の如し』と云ふ一言の見解を呈した。

『如しと云ふは嘘ちや、本物を持つて來い』と、また熱喝を蒙つた。老師の振られる鈴の音は、わたしの胸を劃つてひびいた。

わたしの智慧と學問は、この二た朝の參禪によつて、たのみがひのないものになつてしまつた。わたしはその時、美術學校の生徒だつたが、少しばかり諳んじてゐた美學なぞは、この公案に對しては、何のたしにもならなかつた。わたしは目に涙をうかべながら石の廊下をもどつて來た。

目に見ゆるあらゆる形はわたしには悉く疑ひのたねとなつてしまつた。耳にきこゆるすべての音は、あたしには、もう何の意味もなくなつた。何んのための藝術？何んのための人生だらう？もしこの公案を解くことが出來なければ、わたしは、はたして何を根柢にして活きて行かうとするのだ？

何の本をもひらいて見る用はもうない。誰れを訪ねて何を聞く用ももうない。わたしは自分の力で必ずこの公案を透して見せやうと誓つた。

わたしはその夜、我が本來の面目如何にと念じながら、不忍の池のまはりをまはり明かした。

四五たびも廻つたかと思ふ頃、東の空はしらんで來て、辨天堂の屋の棟の彼方に落つる曉の明星は、わたしの目に映つて來た。

思ひあぐんだわたしは茫然として池のみぎはに佇んだ。

靜座

これは日本の空ではない。

太平洋のかなたのごおるでんげいとと云ふみなとで、長年の恩師兩忘老師と袂をおわかちしなければならない日が來た。

兩忘老師の乘られた、さいべりやと云ふ船の殘す烟を見送らなければならない日が來た。

たよりにしてゐた師に行かれて、心の道のしるべを失つたわたしは、それからはたゞ一人で、さまよひながら歩まなければならなかつた。

わたしはひたすらに靜座した。ひまさへあれば座禪した。またそれさへもするひまのないときには、その折り〳〵の出來ごとを公案と思つて、それに參じた。

ある時、わたしは、おれごん州の、めいどふおどと云ふところへ來て、半年あまり過ごしたが、過去にもまた現在にも、その時ほどよく座禪したことはなかつた。

めいどふおどと云ふのは、山谷の野だひらのなかにある小さな町だつた。南には、一萬尺の、しやすたあと云ふ山が聳えて、その山から流れてくる、ろおぐ川と云ふ河が、その山谷を洗つてゐる。

昔の河床は今の山の頂きとなつてゐるものと見えて、その野をかこんでゐる山の頂きは、みな平である。昨日の岸は、今日の丘となつてゐるものと見えて、小高い丘はそこゝに列なりながら殘つてゐる。

丘の上には岩がある。岩の上はたひらである。野のおもてには茅萱がある。茅萱の穗なみもたひらである。

河には水が少なかつた。町はその川をはさんで並んでゐた。木の吊り橋があつて、わたしはその橋の袂に住んでゐた。

ちやうど、それは晩夏の候で、半天を蔽ふやうな黄色い雲がくづれると、川岸の楡の葉がさゝ〳〵と鳴りいだす日が續いた。

わたしは、たそがれ時から、茅萱の原を横切つて、原の向ふの丘の上の岩にのぼつて、その上で毎夜のやうに靜座した。

茅萱の原は廣かつた。草にはもはや露がおきはじめて、はるか彼方の丘につくまでにはわたしの靴は濡れそぼちた。

岩には、水に洗はれた、千年の齢ひが刻みつけられてゐた。

私はその刻みを踏んで岩の上にのぼつて、來た方に向いてすわつた。

めいどふおどの町の灯は、草のかなたにまじろいで、川ばたの雜木林は、そこからまた、川下につらなつてゐる。

汽車のひびきは山の上からして來て、長い長い汽笛をならすと、めいどふおどの町には急にもの音がきこえ出す。

こゝへは日に四たび、汽車がつく、上りが二度、下りが二度。あとは貨物列車が時をり通るだけである。

汽車の汽鑵の吐く息がこの山谷に、こだまを刻むと、靜かだつた空氣は急に波だつて、汽車がもう行つてしまつたあとでもその音はしばらくくりかへされてゐる。

そのこだまは、わたしのすはり澄してゐる心をも波だゝせる。その波が、だんだん靜かになつて行つて、わたしの心臟の鼓動と、ぴつたり一つのものになつてくると、目前の景色はみな、わたしの肉體そのものだと思はれた。

わたしの心から、汽車のこだまが消え去つてしまつた頃は、もうあたりは暗かつた。山の彼方の空と、空のこなたの山と、野原と、町の灯の影は、眼には見えながら、それ等のものゝ持つてゐる意味はみな消えうせた。

たしかに息はついてゐた。意識にものゝ色や形がのぼらない

から、それはたしかに夢ではなかつた。ほのかに火のやうなものが、耳の左右で燃えてゐると思つた。

・それはたしかに眠つてはゐなかつた。細(ほそ)い針のやうな光があつて、底も知れない海のなかへ、まつすぐにどこまでもどこまでも沈んで行くやうに思つた。

ふと、氣がついて見かへると、うしろの山のたひらの上に、月がまんまると登つてゐた。月の光があきらかなものだから、その前に立つてゐる一本の高山松(かうざんまつ)の片枝(かたえだ)が、はつきりと見えてゐた。

蟲の音をきくと夜も更けてゐるらしい。わたしは立つて、裾(すそ)の露を拂つて、岩を下りて町へ歸つた。

經藏

わたしの身のまはりはまつくらだと思つた。

目を明いても、どうせむだであるから、目をあくには及ばないと思つて、まぶたをかたくとざして、わたしはその暗いなかに、小さくうづくまつてゐた。

しかしながら、眠(ね)つと考へて見ると、まつくらなのは、わたしの身のまはりだけで、わたしの心のなかは決してくらくはない。みどり色の光がみなぎつてゐて、脈打ちながらのがれるところを求めてゐるやうに思つた。

ことによつたら身のまはりも、わたしの心の光のために照らされて、明るくなつてゐるのではないかしらと思はれた。

わたしは、むだとは知りながら目を見ひらいた。身のまはりは、あやぶんだやうに暗くはなかつた。或ひはさうでないかしらと思つた通りに光つてゐた。

目に見ゆるあらゆるものは、たゞ一やうにみどり色の光だつた。わたしの身も、おなじ色に光つてゐた。光はみな透きとほつて、脈打つてほんのかすかにひらいたりすぼんだりしてゐた。

わたしは、自分の身をのばして、そのうちでも小(ちい)さいひとつの光りを、手のひらにとつたと思つた、とたんに、今迄の美しかつたみどり色の光の世界は、またゝきする間にかはつてしまつた。

わたしは思はず聲をあげた。わたしは深い土窖(あなぐら)のなかにゐて、なにかはしらずおもい罪でも犯してゐるやうに恐れながら、そのかたすみに、ちいさくなつてかくれてゐた。

土窖(あなぐら)の上からは、一道(いちだう)の光がもれて、その光にすかして見ると、その邊には、うづたかく、卷物や、折本(をりほん)や、綴(と)ぢ本が積み上げられて、その上には、何百年にも、人の手が觸れたことの

ないやうに、深い塵がかぶさつてゐる。

さうだ、わたしは、修業のしあがる迄は、決してはひつては見ないと誓つた、あの、わたしには禁斷の、經藏のなかへ忍びこんでゐるのであると思つた。

わたしは一軸の卷物を手に持つてゐた。さうしてそれはもうひもとかれて、なかばは床にたれてゐた。惡いとは思ひつゝも、わたしは目を、その消えかゝつた金泥の文字の上にはしらした――急いで――今にも誰れかこの經藏へはひつて來て、わたしの犯してゐる罪を見咎めはしまいかと思つて、胸もはらはらしながらに、それの文字を讀み下した。

文字は、たしかに日に映つて、意味はたしかにうなづかれたと思つたが、そのとき目にさし込んで來た太陽の光線は、わたしの心をかき亂した。わたしは目ざめた。

樹の葉を透した光線は、窓のそとからわたしの閨にさしこんでゐて、窓かけに一度くだけたその光線は、あたりの壁一面に、やはらかく照りかへされてゐた。

七月の、それはしづかな朝だつた。わたしは寢がへりもうたずに、いまの夢に讀みかけた、經文の文字を思ひうかべやうとした。それは深い意味だつた。それは尊い文章だつた。けれども、夢と現とは二つのちがつた世界である。わたしはどうしてもその文句を思ひ出すことができなかつた。

寢ながら見つめる天井には、いつの間に降つたか？夕べのうちに、庭にたまつた雨水が、まはるく反射して、さまざまに、それの光を、ふるはせるのが見えてゐた。

わたしは、寢臺に身を起して、足のつまさきを、床の上にそろへてある草履の上に觸れながら、顏を兩手のひらでかくして、なほ、その夢に見た經を思ひ出さうとあせつた。

窓からそよぎ入る風に、白の、ぱじやまはわたしの肩に涼しかつた。戶をたゝく人がある。わたしはなかゝら返事した。戶の隙き間をほそめにあけて、くすくすと笑つた人は、朝餐の仕度のすんでゐることを知らせながら、靴音も立てないで行つてしまつた。

『諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は皆この經より出づ』と云ふ、金剛經の一句を思ひ出したが、これと、夢に見たそれとは、似ても似つかなかつた。

相見

棹もささず、舵もとらず、水の流れにまかせてゐた、放浪の十とせあまりは、まぼろしの如く過ぎ去つて、ここの老師と、再び、相ひまみえることの出來る、よろこびの日はわたしのまへ

にめぐつて來た。

それは、去年の八月の十八日だつた。眞靑の海の船たびに、疲れは　た　げくではあつたけれども、相見の出來ると云ふことを力にして、わたしはその日の晝ごろに、この庵をおとづれた。

玄關に立つて案内を申し入れると、顏色のつやつやした、小肥りな女の方が一人出て來た。

挨拶の濟んだあとで、女の方は、わたしの顏を見あげながら、

『そんなに長らく外國にゐらしつては、日本の言葉よりも、あの國のお言葉の方が、御自由でいらつしやいませう？』ときかれた。

昔から禪門の女には、なかなかのやりてがある。これは小琴禪子と云つて、當時寮寓の方だと云ふことは、今程の挨拶で承知してゐる。

『いえ、どう致しまして、うまれ故鄕の言葉ほど、重寶なものはございません』と、わたしは答へた。

老師は、ちやうど御在庵で、わたしはすぐさま相見をゆるされた。

一別以來の御挨拶を申しのべたが、わたしはもうなにごとをも聲に出して申し上げることが出來なかつた。云ふべきことがないのではない。潤んだ聲を、お耳には入れまいと思つて、しばらくはこらへた。

得も云へぬ感慨にこみあげてくる胸のうちを、御居間の窓から見える靑葉にまぎらしながら、わたしは老師のお手づからついで下すつたお茶をいたゞいた。

あけはなされた障子には、疊の陰が濃くさして、光のなかに立つてゐる銀杏の樹は、千萬の小さい扇子を吹く風にひるがへしてゐた。たけの低い木の柵は、窓の下に見えた。赤い草花は遠くの木の根にほの見えた。床の間には、良寛の行書がかけてあつた。

よもやまの話が次第に語り出されたその末に、老師はなにげなく、

『もうこれ、さんふらんしすこで別れてから、一と昔の餘にもなるが、その間、あめりかにゐて、何か得るところがあつたか？』と、かうきかれた。

わたしは、靜かにうなだれた。わたしは答へる一と言のあつたがために恥らつた。

『はい、別にこれと云つて得て來たものもございませんが、たゞ、でもくらしいと云ふものを掴んで歸つてまゐりました』と申し上げた。

攝心

わたしは、いま、蚊帳のなかですはつてゐる。そとには蚊の聲がきこえる。火袋のなかにまじろいでゐる瓦斯の灯は、仄かにその青じろい光を、蚊帳のそとからわたしの膝にそそいでゐる。

まだ雨戸をしめないからすりがらすの障子には、葛の葉かげがうつつてゐる。空には月があるらしい。その葛のかげがときどき暗くおぼろめくのは、月のおもてを浮き雲が、たしか、通つてゆくのだらう。

こゝは僧堂ではないから、夏安居と云ふこともない。たゞ志のある人たちがあつまつて、老師に随つて、夏季の攝心をしてゐるのであるが、晩餐ののちはみな思ひ思ひに町へ出て行つてまだ歸らない。そこで蚊にせめられるよりもいいと思つて、わたし一人が、これにこもつたわけである。

攝心も楽ではない。一日四回の參禪に疲れはてたわたしは、もう、本參の公案を工夫する氣力もなく、たゞぼんやりと座つてゐるばかりである。つかれゝば心のうちも亂れ易い。しきりなしに浮いてくる幻影をうち消さうともしないで、それの浮かんでくるまゝに、まかして見てゐた。

ふと、見ると、攝心中、臺所の手傳ひに來てゐる一人の老人が、いつの間にか隣りの部屋につゝてある蚊帳のなかに這入つてゐて、腹卷をとつて、そのなかゝら、たばになつてゐるものを出して、その皺を丁寧にのばしながら、いまはそこへはさし込んでゐる月明かりに、一枚、二枚とかぞへてゐる。老人は店から歸つて來たものか？障子を明けはなして、素はだかになつてゐる。

家根の上にあがつてゐるのは、わたしである。七日七夜の大雪の降つたあとで、大吹雪にわたしの住んでゐる、ぐりんれいきの町を壓して來やうとしてゐる。夜をこめて、わたしは家根の上にのぼつて、一心に、雪を落してゐる。はやくも雞小屋なぞは潰れたと見えて、この闇夜なかに、一ヶ所、二ヶ所から、けたゝましい雞の鳴き聲がする。

老人は、かぞへた、たばを腹卷きのなかへしまつて、今度は前よりも少し小形なたばを取り出して、指のさきへ唾をつけては、またその皺を一々にのばして、三枚、四枚とかぞへてゐる。

雪はいそいで降つて來る。雪の夜空を見あげると、うす明るさを含んだその中から、大きな雪の片片は、舞ひながら落ちてくる。わたしの目の上、口の上へ、かぶさるやうに落ちてくる。

崖の下の屋根にも、人があがつてゐると見えて、下の方から、三人、四　の叫び聲がきこえてくる。

　老人は、また一とまはり、小形なたばを取り出して、それを今度は二枚づゝ、枕の上に並べては睨つと見てゐる樣子である。そのなかには、また一だんと小さいのもまざつてゐて、老人は、それと、ほかの大きいのとを、五枚、六枚と數ぞへわけてゐる。

　屋根の下には、子どもたちが、何んにも知らずに、枕をならべて寢てゐると思ふと、その寢顔が、降つてくる雪のなかにもうかんでくる。わたしは、握つた、しやぶるの柄に、折れなば折れよと力をこめて、すべる足をふめしめながら、見てゐるひまにつもる雪とたゝかつた。風が吹いてくると、木造りの家はきしめいて、今にも屋根は落つるかと思はれた。妻は、聲さへをののきながら、外から家へはひつたり家から外へ出たりして落ちるな、すべるなとよび立てる。

　力いつぱい、しやぶるを摑んだわたしの手に、一心の沸き立つ汗はしたゝつた。

　やがて、非常を知らせる鐘は、下の町から鳴りひびいた。風はいよいよつのりながら、雪をあほつて吹いてきた。ぼりすまんがわたしの家の横の坂を、膝がしらまでとどく雪に立ちなやんではのぼつて來て、屋根の雪をおろせと、崖の上にある家を五軒、六軒、おこして歩いた。崖の上には、わたしの住んでゐるやうな、かよはい家は少なかつたが、それでもう、おほかたは寢間のうちに、雪をおろしてしまつてゐた。

　老人は、かぞへた、たばを、またすつかり胴卷のなかに納めて、その胴卷をかたく腹に卷きつけて、身をのばして布團の上に横はつた。手に持つてゐる團扇の背を、ぱたぱたさせながら。

　わたしは腕に力を入れて、ひざがしらをたつた一つたゝいて笑つた。聲には出さないが、わたしは笑つた。それは老人が、隱し金をかぞへたのを笑つたのではない。

　ともかくも、わたしの見所はあの時までは死んでゐた。しかし、あの、しやぶるの柄に、一心の汗を注いでからは、わたしの見所はちがつた。

　洪波浩渺白浪滔天と古人が云つたのは、たゞの形容の言葉ではなかつた。あの澎湃として動いてゐた白銀世界。そのなかにわたしは、全身、雪にまみれて、いかにこの生命のかぎりを盡したか？それは、手にも、心にも、一丸の活きた力の世界をしつかりと握りしめた、わたしの自覺の刹那であつた。

　その頃から、そろそろわたしは、自分のためには、自分の

であせぃなかつた。自分のためには、自分の智慧で心配はしなかつた、自分一人で活きてゐる生命ではない。わたしは自然のなりゆきのまゝに任せるたやすさと、尊さを覺えて來た。人間の力なぞで、何が出來るものかと云ふ多寡がわたしにわかつて來た。また、自分のために苦しんで活きるがものはないとさへ思ひ出した。

今、わたしは、はたして何んになる身かわからない。然しわたしの生命は、たゞ一つの光つたものに、捧げた生命であると云ふそのことだけはわかつてゐる。それを思ふとときどきに感激の涙にくれる事もある。

庭の木戸の明く音がして、七八人の居士たちが、こつそりと歸つて來た。

『老師はまだお休みにならないやうだ。お居間から灯が見えてゐたと云つて、居士たちは聲をひそめて語り合つた。

老人は、晝のつかれに、もうぐつすりと寢ついてゐた。

——(完)——

都筑ヶ丘から相模野へ

(東京から最も近くして忘れられたる多摩の丘陵)

河井醉茗

私のあるいた道

多摩川へ鮎漁に行く人は、大きい鮎を釣ることばかり思つて多摩川を見ない。多摩川などは何う流れてゐてもよいのだ。又たゞ多摩川へ遊びに行く人は、多摩川さへ見ればよいので、川の向ふは何んな風になつてゐやうが、行つてみやうともしないで大抵は川の此方で引返してしまふ。

何處から見ても多摩川の對岸には一帶の丘陵が續いてゐる。山といへば山、丘といへば丘、兎に角多摩川を前に道を遮つてゐるかの如く見えるので、渺漫として平らに流れてゐる多摩の

清流を見た眼には、それでもう氣が休まつて對ふの山まで行つてみる氣にはならないらしい。それで地理に無頓着な連中は、河の對ふは多分相模の國だらう位にして置く。成程下流の方の對岸は神奈川縣だけれど、國は一帶に武藏の國だ。他國扱ひは速斷だ。

多摩川右岸の丘陵はなか〳〵長い、日野、立川邊から、ずつと下流の丸子、矢口邊まで切れ目なく續いてゐる。多摩川に最も近く走つてゐる京王電車の窓から見ても分る通りだ。その丘陵を向ふへ横斷すると、所謂相模野の臺地へ出る。私はいつも地圖を披げて、その道を一度歩いてみたいと思つてゐた。その機會が來た。

京王電車の終點、府中の古驛から歩き出した。町の入口に大國魂神社が鎭まつてゐる。六所明神ともいふ。社前から一直線に廣い道の兩側に欅の大樹が並んでゐる。ちやうど若葉したばかりで四五町先まで夜明色（よあけいろ）の青いトンネルのやうだ。

武藏野には欅の大木が多い。よく街道に沿ふて欅の林を見かける。此處の欅並木もその一つで、よくもこれだけ揃つて生存したものだと思ふ。その中の一つに、源頼義等祈願のため欅苗千本を植ゑたその中の一本で、年代は凡そ八百五十年以前、樹の周圍約三十尺と說明をしてある樹もあつた。これが八百年なら毎日見てゐる私の家の前の四五本の欅も二百年乃至三百年は經たらう。強ち樹齡の永いのを羨むわけではないが、人間の生命よりも長い時の間、同じ日の下に、伸びて行き太つて行き、ひろがつて行く、欅の樹を祝福する。凡ての欅が二百年も三百年も長生するとは思はないけれど、私は欅の實生をみつけると何となく盆栽にしたくないやうな氣がして、花壇の緣に植ゑて置く、初めの年は二三寸、次の年は一尺位になる、若葉もすれば落葉もする、これで環境さへよければ百年でも二百年でも生きるだらう。

府中の欅並木を歩いて行くと、欅の花がまるで雨のやうに降つて來る。小さい〳〵花が降つて來る、今年は氣象か何かの關係だつたとみえ、私の庭にも欅の花が一面に降つた。子供達は青い雨が降つてきたと云つて騷いだが、全くハラ〳〵と俄雨のやうに降つてくる。府中の町はづれの道も青い雨が一面に降り敷かれてゐた。

社殿の裏から田圃へ抜けて、細い道を多摩川の方へ向つて歩いた。頓て分梅の部落へ出た、その邊の全體が分梅河原の古戰場だ。

鎌倉時代と室町時代とには武藏野に大小幾度といふことなく戰爭があつたので、これを一々詮索すると歷史の解釋になる。

府中より上流の立川原も、下流では(少し河を離れて)人見ケ原も皆名高い古戰場だ。新田義貞と北條泰家、足利持氏と上杉憲實、上杉朝興と北條氏康、此等の人々は皆分梅河原で激戰をしたのだ。

城址とか、古戰場とかいふものは、說明をきかないでも、點頭かれるやうな地形を持つてゐるもので、分梅河原も見渡したところ究竟の戰場だ、右岸は丘陵起伏してその間に道の隱れた鎌倉街道、左岸は草茫々として人馬を埋める武藏野原、多摩川はその間を流れて河原の幅が恐らく當時二十町以上もあつたらう。生命を賭けるグラウンドとしてこれほど形勝の地はない。

昔の河原が今は桑圃や麥圃になつてゐる。村があり、家があり、コンクリートでかためた立派な往來があり、分梅河原古戰場と立札のある場所には、瀟洒な一構の家があつて、築山を築いたり、泉水を掘つたりしてある。倶樂部にでもするといゝやうだ。それからだん〳〵道が砂交りになつて行く、そこに燒けた寺の跡があつた。

首塚、胴塚などいふものがあると聞いたが、それは見當らなかつた、細徑(こみち)へでも外れたらありさうだ。併したゞ一基の石燈籠と、まねのやうな小さな祠と、榎か樺の木が二三本と、百姓家が一軒と、壞れた堂の一部とが殘つてゐるだけの河原の寺の燒跡が古戰場らしい氣持を漂はしてゐる。

堀れば板碑や鏃ぐらゐは出さうな砂交りの寺の跡の地面には草が青々と伸びてゐる。道との境界もなければ、圃(はたけ)との隔てもない、鎌倉武士が蹂躪(ふみにじ)つたか、武藏七黨の軍勢が休んだか知らないが、それ以來人間に踏まれた數が思ひの外少からうと思はれるやうだ。何の爲めにあつたとも分らぬ捨石にも、人間同士が眞劍になつて斬合つたらしい記憶を遺してゐる。戰爭は悲慘であると同時に華美なものだ、生の火花の幻滅だ。綺麗な水の流れてゐる多摩の河原は、機械化した戰爭から原始的の戰爭へ時代を逆轉させてみるには最も好い舞臺だ。

分梅河原から多摩川を渡ると、直ぐ關戶といふ村があるが、その村から右の方へ小山の間を五六町も分け登ると此邊での高い(一二三米突)山の上へ出る。早くから天守臺といふ名が附いてゐた。周圍の地形も小さな城址らしい、でも誰の城址とも分らない、その天守臺の上から見ると、如何さま關八州の大軍が押寄せて來た動靜を尤もよく察知し得たゞらうと思はれる。古戰場にはかういふ山もなくてはならない

天守臺から見た展望は、多摩川沿岸でも稀に見る好い風景で百草などよりも勝れてゐるだらう。百草も關戶から直ぐの道で風景も無論似てゐるが、天守臺の山は高く孤立してゐるだけに

武藏野展望臺としては申分はない。『新編武藏風土記稿』に「天守臺、村（關戶）の西へよりてあり、上り三町許りの山なり。山上に老松二株あり、この山よりの眺望近郷に類ひなし、北の方はるかに上毛の山々をみなし、近くは國の内足立豐島荏原多摩入間高麗等數郡の地おしなべて望み、且玉川を前になして東西に甲府への大路を通じ、東は向丘をうけ西は百草和田の山丘ありて云はん方なき絕勝の所なり。地形をもて考ふるにいかさまものみの櫓など置きたらばよき要害なるべし。後世櫓の大なるものを天守と云ふゆゑ、この所も天守臺と呼ぶなるべし。この邊何人の住みし跡なりと云ふことを傳へず、又古き書にも未だ見ざれば、恐らくは昔關ありし比、是に上りてものみなどせし跡ならんか。今はこゝに金毘羅の社あり」と記してゐるのは決して誇張ではない。

右にも昔關ありし比とある通り、關戶は關所のあつた所だから村名になつたらしい（或は小山田の關址ともいふ）。鎌倉から東北地方へ通ふ街道唯一の要衝であつた。關戶に戰爭のあつたことは北條氏の記錄にも、太平記にも散見されるので、曾我十郎同五郎が建久四年四月に武藏國關戶宿に泊つたといふやうな記錄も遺つてゐる。降つて豐臣氏の頃まで猶要害地であつたと見え、秀吉の制札にも軍勢甲乙人等濫妨狼藉事、放火事、對地下人百姓非分之儀申懸事などを禁じてゐる。

村の往來を右へ一寸入つたところに關門山地藏院（今は延命院）といふ寺がある、堂はひどく荒れてゐるが、住居の方はさうでもない。住職は藤澤へ修業に行つてゐるとかで、留守居をかねて玉川工事の土方の親分が家を借りてゐる、親方は不在だがお内儀さんや子供がゐる、緣側を拜借して辨當を食る、お内儀さんは年に一二度東京からの人が來るといつて歡待の意を表してくれる。

寺の入口に小さな塚がある。『江戶名所圖會』に正慶二年武藏野合戰に討死した四百餘人の塚が延命寺の入口にある、榛の木を植ゑて印とする云々とは書いてあるが、果してそれか何うかは分らない。勿論此邊には古墳も多かつたらう。

寺を出て愈よ鎌倉舊道を歩き出した。豫期した通りの山つゞきではあるが、豫期したやうな舊道ではない。道は玉川砂利で固くかためた新道だ、勾配もよくしてあるから少しも山道らしくない、極めてらくな好い道だ、これなら自働車なでも來られると潜かに村の青年會々員達の文化的施設に感心すると同時に雜草の生えた廢道でも歩くつもりで來たのが聊か失望を感じたが、それは此方の得手勝手で、道の歩きよいのは何よりありがたい。

道がよくなつてゐるやうに山も開けてゐる。麥が伸び、桑が伸び、野菜が伸び、殆ど野生のまゝの山林は少い。けれども兎に角三四百尺のうね〳〵した丘陵の間をめぐつて行くので、山里を歩いてゐるといふ感じが快い。さう苦まずに歩いてゐるだけに、無條件に自然に親みながら行かれる。

喘ぎ〳〵登るやうな山路では何を思ふ餘裕もないが、斯うしたらくな山路を行くと、たとへそれが驚異でなくとも、發見でなくとも、何んなに私たちの囚はれた心持から超越することができるだらう。

見える限り一軒の家もない、見える限り一人の人影もない、山も丘も自然が褶曲したまゝに傾斜し、木も、草も、穀物も、大地の自由のまゝに生え、汽笛、人聲、物音など一切の音響から絶たれた境に、じつと靜かに佇んでゐると、自分といふものゝ生存の意識がはつきりして來るやうに思ふ。

正宗白鳥君が嘗て私に斯ういふことを云つた。「歌人や詩人は木や花を見て綺麗だとか可愛らしいとか云つてるが、僕等には然ういふ氣持にはなれないがなア」と。如何にも正宗君らしい言葉だと私は微笑みを禁じ得なかつた。花や草を顧みない正宗君は、人間のなかをかき分けて、人間の魂を凝視しやうと試みてゐる。魂を持つてゐるやうな女は不氣味だと君の小説にも書いてあつた。が、それだけ君は人間の魂のはたらきを恐れてゐる。人間の生活に對して少しも謙遜ならざるかの如き態度を有してゐる君は、人間の魂の根本のはたらきに大いなる謙遜の意を持つてゐるのではあるまいかと思ふ。

娑婆氣の多い者が人間の中へ飛びこんで行くのも、娑婆氣の少い者が自然にあこがれるのも、複雑と單純の相違で、謙遜なる人間の本質から出發して居れば、そこに意義が生ずる。思想の現はれとして見る時は、人間も自然も變りはない、自然に現はれたる思想は再び思想に戻るだけだ。そして絶えず永久の前方に向つてゐるのだ。

自然は絶えず覺めてゐるが、しかも絶えず靜かだ。喧騒なる人間の宣傳者ばかりが覺めてゐるわけではない。蛙井の涯に路はないけれど、鳥は必ず前方に飛ぶことを知つてゐる。空氣に方向はないけれど、草木は決して伸びる場所を忘れない。自然は少しも同じ狀態ではゐない、吾等が斯うしてゐる間にも、木の枝は伸びつゝ、花の蕾はふくらみつゝあるのだ。

たゞ人間の生活には謂ふ所の事件がある、自然の生活には事件がないから單調だ。併し吾等の生存の意義といふものは單純なものかも知れない。その單純なことすら事件の中に沒頭してゐると忘れてゐることがある。却て事件の中から脫出して、單

純な自然に包まれてしまふと、生存のありがたみも、かなしさも、端的に體驗されるやうだ。それが少しも退嬰的からの意味でなく、人生に對する根本的の謙遜な態度で自然にも親みたい。人間性を愛するから自然性をも愛したい。

昔の人のやうにお人よしで世間離れをしたい爲に草庵生活を營んだり、今のある人のやうに野心を糊塗する爲に田園生活を試みたりするのでなく、公平な眼で人間も觀、自然も觀ることが出來たら、それが何んなに惠まれたる生活であらう。吾等はまだ山や野を歩きながらいら〳〵してみたり、或は人中へ出ることを嫌つてみたり、まだなか〳〵さういふ心持にはなれない。

都筑ケ丘の中途で飛んだ道草をした。私はまだ前方へ歩かなければならない。

高いとも低いとも分らぬ道を歩いてゐる間に、こゝは確に高いと思はれた所が二ケ所ほどある。五萬分一の地圖(八王子)に一二六米突と、一一七米突の標號のある個所で、前者は一本杉といふ邊、道連になつた聟の男の說明では此街道では最も高いのださうだ。多摩川から武藏野一帶、東京灣も確に見える、こゝから海が見えやうとは豫期してゐなかつた。

この峠(？)を越すと、右の方が深い窪地になつて家が見えてくる。坂を下りて村へ入つて行くと、森や、街道や、麥畑に沿ふて、大きな住居が多い。村の名は小野路村と云つて此の街道では一番大きい村だ。元祿以前には小野路町と云　たさうだから、鎌倉頃には矢張往還で繁昌した一つの宿驛だつたのだらう。村のあるところは低くなつて、周圍は山に圍まれてゐる。靜かないゝ山里だ、かういふ村なら二三日は遊んでゐられさうだ。

村から道は二つに分れる、左は神奈川街道、右は相模野の方へ通ふ道だ、右の道は今まで歩いてきた道より細くなるけれど矢張わるい道ではない。小野路を離れると直ぐ明神坂とかいふ坂があつて、上り切ると前に云つた第二の高い場所だ。こゝからは海は見えないらしいが、何處までも起伏してゐる丘陵ばかりが見える。

次の村は圖師と云つて物を商ふ店などがある。だん〳〵相模に近くなつたやうな氣がする。

それから忠生村の本村に入つて行くと、境川が流れてゐる。武相の境を流れてゐる河だが下流は片瀨川になる。丘陵の起伏が少くなつて、道はまた更によくなつて行く。人家も多い。もう横濱線の通ふてゐる相模野に近いだらうと思つて聞いてみると、淵野邊の停車場まではわけはないと敎へてくれた。

今まで幾つとなく丘陵から丘陵へ上つたり下りたりしてきたが、此邊から一向道は下りにならない、坂を上つたまゝで道は平らに通じてゐる。村の人に此先淵野邊まで下りはないのですかと尋ねてみると、下りはないといふ。一緒に行つた武藏野ばかり研究してゐるT君が、この時、成程分つた武藏野と相模野が異ふ筈だと今更の如く相模野の特徴を感じたやうにいふ。

向ふに淵野邊の停車場が見えてゐるところまで來た。桑畑の道に立つて今歩いて來た方を顧みると實に奇異の感じがする。今立つてゐる所は平らな野だ、野の地平線の上に一むらづゝの杜が湖上の島のやうに浮び出してゐる。それはつまり私の歩いて來た丘陵の最も高い峰だけが現れてゐるのだ、低いところは皆地平線の下に沒してゐる、それだけに此邊は高い。晴れた日には遙に關東平野から東京灣までも見渡せるに異ひのない地形だ。

けれども汽車で淵野邊の停車場まで來て、突然降りてみたところが只ひろ〳〵とした平らな桑畑が見えるだけで、これが相模野であるといふ感じは一寸分り難いだらう。われ〳〵のやうに多摩川の方角から幾つもの丘陵を上つたり下りして最後に此臺地に上り着いてみると、初めてこゝが相模野の原野であるといふ感じがはつきりする。

相模野といふ名稱は武藏野と相對して一部の人達の間には知られてゐるが、武藏野ほどは知られてゐない。多く知られない間に、殆ど開墾されて既に原野らしい面影はなくなりつゝあるから、軈ては相模野の名も忘れられるだらう。

以前の相模野は、地圖にも描かれ、文章にも書かれた。『新編相模風土記稿』に據れば、相模野は高座郡の中程より北端に及び、東西一里半、南北五里餘、その間一圓の曠野で、過半萱莽に屬し小松など生えてゐたといふことである、土地高く、水利の便が利かないので容易に開墾されなかつた、鎌倉將軍の頃は秣など刈取つて貢獻したとある。今のやうに一望際涯なき桑畑となつたのは明治以後のことだらう。小島烏水君が初めて相模野を歩いた頃は、まだ横濱鐵道もなかつたから徒歩で八王子街道を淵野邊あたりまで歩いたものだ。今は横濱線に由ればわけないので、原町田、淵野邊、橋本、相原の各驛が所謂相模野に接した驛で、中心は即ちふちのべだ。以上の線路から大山、丹澤群山、道志山脈の連山へ向つた方角が凡て相模野である。山脈の裾には相模川の狹い溪谷があるだけで、野からすぐに山岳に連つてゐる。相模野から見る大山や、丹澤群山の大きく高いことも、山を愛する人達には見免し得ない感興だらう。武藏野から秩父連山を見るよりも、土地も高く、距離も近いから山が

鮮かに見える。

さて新宿を八時頃に出て、かなり道草をしながらでも淵野邊へは四時に着いた。一日にはらくな遠足だ。私はそこから汽車で歸つたが、横濱鐵道を神奈川まで下る間、線路の兩側は斷崖が斷續してゐるので、矢張相模野のつゞきを走つてゐるのだといふ氣がした。

私のあるかない道

都筑ヶ丘は私の歩かない道にも、面白い道がありさうだから一言して置きたい。

その一つは玉川電車の終點から二子渡しを越え、溝口村を經て大山街道を相模野まで横斷する道だ。山の標高は關戸道より餘程低くなつてゐるに異ひはないが、大體に於て感しは然う異はない。

一つは中央線の日野驛で下車し、淺川を渡り、高幡不動、百草の松蓮寺などを訪ふて關戸の先の乞田といふ所で私の歩いた道に合するので、それは無論山も相當に高くなつてゐるから面白い山路だ。

もう一つ、それは都筑丘を横斷するのではなく縱斷するのだ。二子の邊から百草あたりまで、多摩川の沿岸を少し離れた丘陵の間を通ふてゐる道で、上から下に向つて歩いても、下から上に向つて歩いても、好いたやうに行けばいゝのである。この道はところ〲寄り道をすると記錄に載つてゐるやうな場所が多い。先づ上から下るとして、百草の次は關戸、關戸から是政の渡し、次は矢口の渡し、小澤何某の城址といふ所があつて、小澤ヶ原ともいひ、自ら山林の形象が勝れてゐる。お寺や天神がある。菅村の壽福寺は聖徳太子の草創だと傳へられてゐる。壽福寺十境の一に淺間山の眺望が最も好い。それより下流が登戸の渡しで、桝形山の城址に近い。桝の形をした稍變つた城址で稲毛入道重成居城の跡だ。稲毛山には櫻樹がある、桝形山のつゞきで澤ヶ坂といふ所はまた景色が好い。頓て溝ノ口までは一直線の道だ。二子の渡を渡つて東京へ歸るのもよし、或は丸子、矢口の渡から六郷の方まで歩いてみるのもよい。

要するに都筑ヶ丘の縱斷は、伸縮自在に歩いてよい道だ。東京に最も近い丘陵地を歩いてみたいといふ希望には極めて適してゐる。

元來都筑ヶ丘といふ名は私が勝手にその一つを選んだので、或は多摩の横山とか、或は向丘とか、二三種の名稱がある。殊に向丘といふ名稱は廣く用ゐられてゐるやうで、都筑丘と何れが正しいか私には分らない。多摩川の此方(左岸)から見れば向

ふの丘だから向丘だといふ說もある。都筑ケ丘といふのは無論丘陵が都筑郡にもまたがつてゐるから起つた名であらう。併し丘陵の大部分は南多摩郡だ。よくは分らないけれど、私が推定する處によると南多摩では多摩の橫山といひ、都筑郡では都筑ケ丘といひ、橘樹郡では向丘といつたのではあるまいかと思ふ。何れにしても多摩川の岸に沿ふてゐるのだから、總稱して多摩丘陵といへばよいだらうと潜かに思つてゐる。

西は日野邊から東は二子までとしても長さ凡そ六里（西を八王子より東を矢口邊までとすれば八九里になる）、南は橫濱鐵道から北は多摩川まで橫が凡そ三里、此間殆ど平地に乏しく一帶が低山性の丘陵で私の所謂都筑ケ丘である。相模野で平らに發達した臺地が起伏を生じ、その斷層の際に沿ふて多摩川が流れてゐるのだ。廣義に謂ふ武藏野にはその餘波に及んでゐる。

山の高さは八王子附近で二百米突內外、關戶道附近で百米突強、二子の街道ではもう百米突以下になつてゐる。此間にある小さな峯は殆ど數へ切れないほどあつて、多くは名もないやうだけれど、內務省地理局に居た河田羆氏の著『武藏通志』（寫本）の山岳篇には可なり詳しく此の丘陵の山の名を擧げてある。

何の道を何う步いたにしても東京からその日歸りの出來る近い郊外に、こんな山つゞきがあらうとは、多くの人は知らないだらう。知つても面白くなささうだからとわざ〳〵出かける人も稀だらう。けれども山つゞきの道は變化がある。變化のある道は面白い。世に吹聽されたる目的地がないのに步くのは嫌だといふやうな人は別として、など、民衆的の道に感興を覺える人達は試みに一度步いてみたまへ。

刺笑の世界から

大泉黑石

感想の一

不思議な男である私は、生れつきにも育ちやうにも三千世界の苦患とある苦患を一手に引受けて脊負ふて來たと信ずるほど

こと程な様に深刻な苦悩や絶望的の災厄の持ち主であり且つ持ち主であらう辯に、生活の苦悩や災厄や不幸や空虚に對して反抗と悲哀とを感ずると同時に、より大きな滑稽を感じて笑ふのである。私とした男の貧しい生活は誰の目にも御同様に悲壯である。滑稽と悲壯とは大低の場合同じ深さであらねばならぬ譯であるが、私は別だと見えて、滑稽が悲壯よりも倍大にこたへる。私の生活は私儀降誕以來二十八年と何ケ月になる。それが徹頭徹尾　お目にかけるやうな生活でなく、甚だお粗末なもので、悲しいとばかりで、むしやくしやと腹の立つことばかりで、ほんとに私はこの二十八年と幾ケ月にインキ壺をいくつ女房に打つつけたか！と云ふ位の淺ましい生活なので、まことにまことに笑ひたくもない。そんな賦らしくもイケ好かない悲哀の連續的苦悶が、つまり私の不思議な男であることには、苦悶によつて印象づけられないで、言ひ替ゆれば苦悩を媒介として私の人格的乃至生活の人格的價値の意識が高められずに、どうしたわけであるか、滑稽の記憶によつてのみ少かに生命を保つてゐる。それが私の過去現在恐らく未來の生活であらうところの刺笑の世界であると考へてゐる。そこで私が云ふことには、「俺に自分の世界があつて俺が完全至極の Artist であるならば！」と、いや實際それに考へるだけが損なことで、私には自分の世界が確かにあるばかりか、有り難いことには、立派な藝術家である。と假定すれば諸君は大いに喜んで、また次の言葉を待つに違ひないことは、そんな世界の持ち主であり、そんな世界の觀察者である黒石氏の私に嘘僞りもなく文學があれば、それは勿論、宣教師の說教のやうに流石に仕入れ物の不安を感ずるやうな嚴肅と、警察署長の說諭のやうに流石に職務の手前尤も千萬な道理と、五九郎の喜劇のやうに流石にどう見直しても不眞面目な馬鹿々々しい興味と、場末の鰹節屋のやうに、堅實一方を身代ありつたけの資本にして、屑ばかり拵へてゐる味も匂ひもない藝術的贅澤品の特徴と、それから詩人のやうに流石に動脈が膨張して來ると迚もあんな小綺麗なことは言つて居られないやうな感じの優雅と微溫とまことにソツのない講談を打ち壞して妙な小理屈のある刺々しいパラドツクスを旗印にしてゐる悧巧な且つ勇敢な、しかし、私の大嫌ひな、私共の生活に一體どれほどの味方や貢獻を與へてくれるのかさつぱり解らない作者先生等のペダンチカル・アリストクラチツク・ムード。――そんなものはどうでもいゝところの刺笑の文學に違ひないのである。今少し上品に修辭學的に云へば、私は私の修養と學問の不足を忽然として感ずるによつて、此處に止むを得ず伊太利詩人レヲパルヂーの「百鳥頌讚」から記憶にある一句を借りて來て云ふの

る即ちと――最も深酷な災難にも最も深苦な快惱にも生活の嫌厭や、地上萬物の虚無などが刻明に目に映る場合に於て、人間の悦樂歡喜は望まれず、希望は亡びて、猶而も我々は笑ふことが出來る。そんな場合に人間の笑ひが見られる。否、人間が此の世の歡樂の空虚と、苦惱の實在性とを自覺すれば自覺するほど、それに對して絶望的であり不愉快であればあるほど實際はます〳〵餘計に笑ふやうな人間があるのだ――そんな種類の人間も随分居るだらうところの中に私は自分を發見するが、しかし、私はそれがために不眞面目なんだらうか？飛んでもないことだ！と私は主張するのである。私は半年沈默して、何一つ書く氣にたれないことがある。また書きたくても書けないことがある、昔、尾上松之助の芝居を、一日百枚書いて十四圓つて、ほんとに、見つともないほどお辭儀をしてゐた時分や、三日三晩――と云へば何だかお伽話の定り日のやうだが――かゝつて、女房に蚊を追つて貰つて、燒酎の元氣で「中央公論」へ百五十枚ばかりの自叙傳を書いた（實際へマをやればその百五十枚で壁でも貼らなければならなかつたのだが）時代は殆んど文壇と云ふものゝ存在も知らないし、そこに何の野心も目的もなかつた。従つて其文壇と云ふものに如何に多くの小姑が巣喰つてゐて、いかに偏狹と野鄙と嫉妬は俺だ！と云ふ風な

面がまへをして散々私と云ふ孤立の一文士の、貧弱な立ち場の損な一文士の城壘に切り込んで來ることか？そして、時々、そんな五月蠅い商賣なら今日限り、お早う！サヨウナラ！にしちまへ！と思はねばならぬことを、どうして豫想しやうか？――と云ふ時代の元氣と勇猛な精力は夙の昔何處かへ飛んで行つて了つた今日只今、一日一枚も書けない日がだん〳〵屡になるのである。部屋の中を名狀の出來ない混亂に置かねば私は何にも書けないのである。机の前に座る刹那に、書かうと考へてゐる事柄に含まれてゐる雰圍氣と、私の氣分と、机の上の空氣とがピタリと合はなければ呼吸がばら〳〵になつてもう其日は駄目である。一字一句に拘泥して三日も四日も弱つてゐるなんて、大袈裟な誇張にしたいほどの辭だ。そして質屋通ひもいゝ加減に切り上げたい切ない祈禱も女房の口から散々聞かされて、五尺あまりの大男の、輜重輸卒の、安物買ひの、生れ損ないの、癇癪持ちの、酒のみの、ニコチアンの、いや自分の惡口ならまだいくらもあるところの、どつちかと云ふと女房、子さへなければ「俺だつて、まけるものか？一日も早く二葉亭四迷だ！」と云ふのである黒石氏の私は、哀れにも面目を潰すのである。そうして、以前も左樣なんだが、面白くもない雜文屋の仕事に愛相がつきて、小説家になつてから（セメヨノーフのやうに私は

自分自身で何にでもなる)、前々からの書き置きの手入れをしてそれぞれ片づける處へ片づけて、漸く小説道へ入門しやうとすると、盲目の祖母が死んだ。丁度櫻が滿開で、柩の後から火葬場へ行く途中で死人と共に花見をしたやうな塩梅にも後から新聞や雜誌にいゝ加減の借金が出來たり故郷へ戻つたり草臥れたり、ほんとに老人が死ぬのに異存はなかつたけれども、あと始末でこつちが往生した。そして、八十枚ばかりの創作を二百枚ばかり書き潰して、いつも傑作なんだが、今度もその積りて特に力んでゐたら、生憎書けさうもなかつたから、私はその原稿を一まとめにして、紐で固く縛りつけて、畜生！そんな風にも机の上に叩きつけて、勝手にしやがれ！なのである。そこで、否が應でもその創作の前話に取りかゝつて、どうにか、こゝにか「妾の番人」を書き上げた次第で、全く誰に向つて申し譯のない事なんだか、一人でに涙がこぼれたり、苦笑が浮んだりして、この一文を景物のつもりで、私は今、ほんとに皆さん厭な天氣ですねえ。滅入つちまひますね。しつこい雨ではありませんか？そんな心持ちの窓際で書いてゐる。

感想の二

何しろ私は文壇に、と、誰でもが云ふ通り、随分にも大きに不利な立ち場から入つて行つて、ここに無茶苦茶に譯の解らぬことを漸々乍らやつて居たので、文壇大方の諸君から、小氣味よく罵倒されて來た。流行作家もいゝ面の皮だが、しかし、自分乍ら、恐ろしく旨くなつたもんだ。始めて雜文と云ふものを書いた時分に、人様のお書きになるのや、昔の西洋人が書きやがつたものを見て「迚も小生などが」と、誰に云ふとなく、私自身で企て及ばぬものだと、まるで星を仰ぐ時の氣持ちで、ひたぶる恐れ入つた仕事の、眞似でも今日お蔭さまでと云ひ度ひほどに、やれる修業がつんだのである。しかし、それは、まだ〳〵人様のものに比べると、その邊に轉つてゐる駄馬と、マホメットの「アルボラック」との相違があるに違ひないことを重々承知の上で、恐れ乍らと云つた風にお目にかけて行けたら、また精々勉強も致しますのである。何分初心でございますから手際よく參りますればお慰みと云へば、藝人の口上見たやうであさましくも哀れに聞えやうが、打ちあけて云へば、何の、何の、實際そんな氣持ちで居るのでごらんなさい。一生懸命研究した學術の發表にすら、人々は大方の叱正を待つてゐるやうな擽つたい前書きを列べてゐるのに、この私である。況んや於ておやである。（そんな謙遜な俺ではなかつた筈だが——と[illegible]しく考へると、この間から、それは諸君に未知かも知れない

ろのレルモントーフや、ネクラソーフや、ジユーコフスキーの物ばかり讀んでゐた故で、露西亞では、どんな人間でも普通でなければ、結局碌なことはないと、例のいつも親切なドストイエフスキーが世界中で一番冗々とした面倒臭い作物の中に何遍も繰り返してゐるやうな事件に出會して大いに悟つてゐたからであらう。）私は實際さう考へてゐる。俺の藝術は苦笑の世界から生れて來るのだ。刺笑の世界に限られてゐるのだ。何もいつも其處を狙つてゐる譯ではないが、無意識にそんな妙な世界でなければ書けないやうな氣がして、でなければ自分自身に興味も同情も經驗もないやうな氣がするだけのことである。そんな世界の存在もあつていゝことだ。從つて、と此處の處いさゝか手前味噌の氣味であるが、そんな世界の藝術化に就ての努力も必然のことだと私は信ずる。しかし、強ひて云へば、それは何故であるか？となるべく、私は又次の言葉を用意するであらう。私は先刻のレオパルヂーの思想に影響されてゐるかも知れない。またアーサーシモンズの說に感服したかも知れない。私は少年時代に多くチツケンスを讀んだ。チツケンスの中でもピツクウイツク、ペイパースを好んで貪り讀んだ。その長々しき物語のうちにかう云ふ一場面があつて、それが幽靈のやうに何か書かうと試みる度の私の目の前にチラつくのである。そこは或波止場であつた。ピクウイツク同人は船に乘つて解纜の時刻を待つてゐた。鐘が鳴つた。今まで近所の茶屋で休んでゐた子供づれの一婦人が慌てゝ船へ乘るべく走り出した。片手に食べかけのパンを握つて、片手に子供の手をとつて。茶屋と棧橋との間に小さい――しかし、そこを潛らねばならぬ石門があつた。婦人は其門をくゞらうとして、狼狽の餘り頭を門の石に打つつけた。だが、さて、それを見物してゐた船の上の人々は全く驚いて膽を潰して、叫んだことであらう？しかし婦人は漸く子をつれて船に乘るべく辛うじて間に合つた。落ちついて見ると急に以前の空腹を感じた。彼女はそのパンを食べやうとしたら Alack!―彼女は、そのパンを持つて行くべき口のあるところの頭が失せてゐたことを始めて發見したのである。これは立派な、しかし「藝術は生よりの逃走――生の忘却の一手段」としての落語に違ひない。私は、私の世界は、こんな計略の捕虜になるべく餘りに窮屈すぎるのであるが、チツケンスは、實際に彼女が石門で頭を打ち飛ばした瞬間の厭な光景の描寫を避けるためにかうした「忘却の世界」と云ふやうな、結果としては要するに刺笑、終るべき手段を取つたに違ひな　ことは、例の有名な落語で、一人の男が美女に金入を掏られる話よりもよりアーチスチツクであり、より人格的であると私は考へてゐる。そんなことは餘

計な話だ。私が云はとうすることは、ほんたうに人間だけが賦與されてゐる笑ひと云ふ自己忘却で、（自己忘却の方法としては其他に失神や睡眠や、酩酊、陶醉などがあるけれども）積極的に幸福と云ふものゝない人間の、開闢以來私どもの生活に必然的に伴つて來る、そして、その中から脫却することの出來ない不幸を、一時休止させる一種の發狂狀態が私の主張する私の藝術だと云ふのである。陶醉も笑ひも結果は同じことである。生よりの忘却の手段である。藝術に最高の目的があるとすれば、それは陶醉であり笑ひであるに違ひない。と、私が自分が發見したやうなことを云ふのであるが、しかし、それを除いて私は自分のこれからの仕事に何の意義をも見出すことが出來ない。もし、それでは眞つ平御免を蒙ると云ふことなら、私は小說を止めてウイスキーの製造人にでもならねば納まりがつかぬかも知れない。しかし、諸君は私の仕事を考へてくれるであらうことを豫め希望すると共に感謝する次第である。私ども、少くとも私だけは醉つ拂ふために生きてゐるやうな氣がする。でなければ、一分間だつて苦しくて生きてゐられない。私はペンとインキと原稿紙で、ほんたうに眞面目にウイスキーを拵へて行かうと云ふことを、まあ、ごらんなさい。文章がまづいものだから、これ、こんなに長くなつて了つた。しかし、最初からこんな感想めいた愚にもつかぬことを長々と列べるつもりではなかつたのである。何だか、自分の口から出た拙い洒落の說明をしてゐるやうで、一寸變な氣がする、と私は云ふのである。

（完）

南畫新論

最新刊

四六判絹表紙函入
寫眞版數十葉
定價貳圓五拾錢
郵稅八錢

文學博士
黒板勝美先生序
帝展審査員
小室翠雲畫伯著

蒼古素朴、瀟洒また洒脱、氣品あつて、些の俗氣のないのが南畫の特徴である。佛蘭西最近の傾向たる印象派が南畫の刺戟を受けて勃興したといふもは亦た所以ある故である。

本書は現代に於ける南宗畫壇の泰斗たる小室翠雲畫伯の新に筆を執られたもの、實に畫伯の天才と體驗に依つて自得した結晶であり、同時に畫伯が南畫に對する一大抱負である。

卷頭まづ畫伯の立場を明かにし、寫生の心得、自然の觀方を說き個性の錬磨を力說し、南畫の氣韻生動を高潮し、南畫の起源と由來とを叙說し、その發達を論じたもの。附錄また必讀の好文字、讀者を益する二三に止らない。

裝釘は頗る優美高尙、口繪には和漢古今の名畫數十葉を收めてある。恐らくは他に見るを得ざる絕品である。南畫に志すの士、南畫を鑑賞するの士は、座上つねに此の書を缺くを得ない。

――内容概目――

畫術の價値
私の立場
まづ寫生から
二つの觀方
模寫に就て
繪を始める心得
個性の錬磨
品といふと
氣韻と傳神
繪畫と書法
筆墨の心
老莊の開いた道
南畫の起源

――附錄――

畫訣拔抄 卅餘頁
口繪解說 廿餘頁

南宗畫壇の大獅子吼

今泉雄作氏著

書畫骨董 **鑑賞と鑑定の仕方** 三版

定價四圓 郵稅十八錢
四六判和布函入

藤田草城氏著

風流の友 **茶道美談** 再版

定價參圓 郵稅十錢
四六判紙布函入

東京市京橋區南鍋町二丁目 **實業之日本社** 振替東京三二六番

耐火建築の研究

住宅の本質的及人文史的考察と耐火建築

工學博士 佐藤功一

(一)

發生的に考察すると住家は自然の脅威――男はてゝら、女はふたのゝの夕顔棚の下凉みと云ふ様に、自然とミングルして住つて居る、文化生活から遠く隔つて居る日本人にとつては、甚だ妙な言ひまはしではあるが寒暑其他の天候の變化――と、他の動物の攻撃から身を保護するための避難所（シェルター）であつた。斯う考へる事に依つて住宅の第一要件は寒暑を凌ぎ、風雨を避け、他の侵入を防ぎ、安んじて家に閉ぢ籠り得ると云ふ事であらねばならぬ。要するに住家はそれが堅牢であると云ふ事が最も主眼とする所でなければならぬが、更に角此避難所たる條件が比較的完全に行つた所で、次いで起つて來る事は樂しく住はうと云ふ欲望である。其爲に種々の設備や装飾――装飾の根原が發生的には宗教的意味を有して居るにしても、其装飾などに考を廻らすやうになつて來た事は、單に自分達が樂しく住はうと云ふ計りでなく、同時に訪ねて來る隣人をも樂しましめるが爲めに工夫されるやうになつたからである。――勿論獵人生活から農業、牧畜へと進んで來るに伴れてそれ〲の生産に對する設備を家に施すやうになつて來た。斯んな風に種々と工夫を凝らすやうな時代になつて來ると、在來は各人が隣人の助けに依りて手づから製作して居つた家が特に之れを作る特殊の工人に委ねらるゝやうになり、從つて大建築も出來、丈夫な、堅牢な構造も生じて來た。

家は極めて古代から木造と土造りとの二つが存在した。土造りから後になつて、コンクリートと煉瓦の建築とが生れて來て居る。

各部落からの、交通の便利な場所や、水運の便ある地、神社寺院の門前や領主の城下と云ふやうな所に段々と人が集合して來て、今日の都市の形式を備へて來るやうになる。都市の住民はそれ〴〵の職業に對して種々の設備を家に施す事になり、又都市の住家は其當然の性質上一層深い經濟的考慮を要する事になつて來た。卽ち重要なる問題は、限りある土地の事であるから各家坪數を眞に必要な丈に止めて、階數を上に增して行くと云ふ事が一つである。記錄の傳ふる所に依るとフェニキアの港は土地極めて狹隘な爲め、古代に於て民屋の高さが六階から八階に增した。帝政羅馬に於ても六階以上の民家があり、北歐地方に於ても中世紀に既に數階の民家があり、これが漸次に廣まりまた階數も增して行つた。スコツトランドのエヂンバラに於てさへ千六百九十六年に法令を以て五階以上の家屋の建築を禁じて居る事を知らば此趨勢を知る事が出來るであらう。都市の住家に對して當然に起つて來たも一つの事は、それが密集した家屋の事であれば、爲政者の注意や命令に依つて出來る丈け丈夫に耐火的のものを作ると云ふ事になつて來た事である。永久の都市と呼ばれる羅馬の立派な民家建築と云ふものは、アウグスト皇帝以後に改築せられたもの である。ロンドン市などは千六百六拾六年までは其民家の殆ど全部は木造であつた。木造と云つても、勿論街の目拔きの場所にあるものは、木の柱を立てゝ、梁を渡して、其柱の間へ、日本で壁を塗り板を張る所へ漸く煉瓦を嵌め込んだものであるが、兎に角大部分が木造であつて、此年の大火でロンドン市が全燒けになつてから全煉瓦造り石造に改善されたのである。十五世紀末に佛蘭西王シャル、八世が伊太利に遠征した時に之れに扈從した僧正ブルスネーの手紙が殘つて居るが、巴里の街の薄汚い木造の家に對して嘆聲を發して居る。今日のあの立派な巴里や墺太利の維納とか、其他の街と云ふものも多くは十九世紀になつてからの改築である。それまでは木造の家が隨分殘つて居たのである。斯樣に何處の國でも皆爲政者の命令や注意に依り、段々堅牢な耐火的な建築に都市の家屋が變つて行つたのである。

ずつと文化の低い時代に於ても、殆ど人間は本能的に明るい室を好み、濕り勝ちの室を嫌ふと云ふ傾向を持つて居る。それが文化の進步に伴れ、段々意識的の衞生思想になり、工業の進化と伴ひいろ〳〵の設備を生じて來た。

最近十九世紀に於ける自然科學の勃興、殊に之れに伴ふ同じ世紀末からの工業の著るしい進步は建築に大革新を及ぼした。それは直接には新材料の發見と、之れに伴ふ構造方式の變化で間接には社會狀態の變化に伴ふ新用途の發生であつた。換言す

れば鐵の大量生産は鐵骨構造を生じて來るし、又之れがセメント統業と伴つて鐵筋コンクリートの發生となり、之れに依つて今や絶對的耐火耐震の建築を容易にならしむるやうになつて來た。更にエレヴェーターの發達は高層建築を可能ならしめる。之れが前に云ふ構造方式の變化の方である。富の蓄積に依り發達した資本主義は集中的に廣大な工場、大商店、及び事務所建築を生ずる事になり、同時に都市は工業都市に變つて來る。斯うなると從つて住宅は工場や商店と分離せしめられるやうになつて、官吏の住宅とか、商人の住宅とか職業に依つて住宅の相違がなくなつて來た。又一方に於て大量生産の工業と經濟政策とは材料の性質及び大いさと云ふものを一定させる。即ち今日呼ばれて居る規格統一を促す事になつて來た。そして經濟的壓迫は空間と時間とに對して技術の最も有效なる使用を熱望するに至らしめた。玆に至て古い建築の特長である所の力の大樣なる浪費を行はしめないやうになつて來た。換言すれば家は生活上必要にして且つ充分（ネセサリー・エンド・サフイシエント）の大さ及び構造となつた。之れが今日の進んだ文化の下にある建築の狀態である。之れを現代の日本の建築、殊に都市の住家に當め嵌て見たならば日本の家が甚だ遲れて居ると云ふ事が直ちに明瞭である。

自分は今こゝまで住宅を中心として建築の發達史の概要を述べて來た。未だ住宅に對して述ぶべき事、住宅以外の建築に對して同じく述ぶべき事が澤山ある筈であるが、今こゝでは住宅建築の要件には堅牢、便宜、愉快、衞生、などいろ／＼あるが發生的に見る事に依りて避難（シエルター）と云ふ事が第一義であり、避難所である以上今日の文化生活に於ては絶對的耐火耐震を第一要件とせねばならぬと云ふ事と、今日の工業に於ては此要件を容易に充し得ると云ふ事を主にこゝに述べれば事足る次第であるから其の他には言及せぬ事とする。實に建築が堅牢を第一とすべき以上、文化の低き時代に於てこそ耐震、耐火、甚だしきは耐震建築法と云ふやうな事も云はれたけれども、今日に於ては斯う云ふ言葉が耐雨建築法と云ふ事と同じやうに可笑しく聞ゆべきものであらう。

（二）

耐火建築を得やうとするには日本人の生活形式を大部分改めなければ不可能であると思ふ。

鐵骨で骨組を作り、それを煉瓦やセメントコンクリートのやうな耐火材料で被覆したもの、又は内部に細い鐵筋を入れてセメントコンクリート　總ての部分を一體としてカストした建築は當然耐火的であると同時に耐震的なものを生ずる。乍併在來

の日本の住家の形式を其儘此の方法に依つて耐火構造にする譯には行かぬ。其第一の問題は壁體に存する。元來家の壁體の形式を發生的に考慮すると其所には二つの形式がある。一つは全く閉された壁體の所々に窓を穿つたもの、一つは柱の間を輕く閉して其多くは此部分を解放自在になし得るやうに構造したものである。分り易く云へば一方は所謂西洋風の家の壁體と、他方は在來の日本風の家の壁體とである。日本の戸や襖は西洋人の觀察に依れば横に滑り動く輕い壁である。耐火構造にするには此壁體が横に滑り動き得る輕いものであつては何うしても不可能である。日本と雖も昔から耐火的ならしめんと企てた一つの構造である所の土藏造りの壁體と云ふものは、普通の家と全く異なつて、周圍をしつかり閉して光線を小さな窓に依つて取つたものである。耐火的ならしめんとするには何うしても此の土藏の形式の壁體でなくてはならぬ。即ち耐火建築を得やうとするには住家にも此形式を採用する事を第一歩にせなければならぬ。所が戸障子をカラリと解放して自然と融和して生活すると云ふ事が日本人の生活形式の大部分をなして居るのであるから、耐火的の住家を得ると云ふ事の爲にはまづ第一に生活方式から改めなければならぬと云ふのも此點に存するのである。今日周圍をカラリと明け放した家に住んで居るのは世界に於て日本人と南洋地方の人間位ではないかと思ふ。朝鮮に於ても支那に於ても此點に於ては我々の生活方式からは全然違つて居る。—此方式は何時頃からのものであるか、殆んど日本の自然が然らしめたものか、或は此の島國に移住した民族が本來から持つて居つた民族性の遺物であるか。朝鮮に行つて見ると、誰しも朝鮮の民家が自然の暴威におち恐れて萎縮し切つたものゝ様な狀態にある事を感ずる。そしてそれが一歩滿洲に入ると滿州の家屋が如何にも堂々と自然を征服して居る様に見える。この兩者に對して日本人の生活が如何にも自然とミングルして居る様に殊に其の家屋から感ぜられる。朝鮮のものは寧ろ大部分多年の苛斂誅求が然らしめたものであらうが、日本のものが以上の如き狀態にある事を其の家屋の構造の脆弱さと同一原因と見做して——それは一見兩者は矛盾して居る様に見えるが——日本人の諦らめ主義に歸して居る人がある、そして其の諦らめが日本人の生活の總てに現はれて居る才永久性（インパーマネンシー）を形作るものと認めて居る。ラフカヂオ・ハーンが其著「心」の日本の文明（ジャパニース・シビリゼーション）なる章に於て此の事に言及して居る。殊に其の住家建築の簡單さを叙するあたりは餘りに極端ではあるが、誠に能く定著とか永久性とかいふ思想の缺けて居る事を暗示して居る。

「朝、家を出かける時、次の街の曲り角の空地に竹の柱を立て

〻居るのを見た、五時間たつて歸りに其所に二階建ての骨組が出來て居つた、翌日の午後にはもう壁が小舞と泥とで殆で仕上つて居つた、日沒頃には屋根瓦が大體葺き上げられた、次の朝には疊が敷かれて內部の壁の上塗りが出來上つたのを見た、五日間で家が落成した。これは勿論安普請であつて立派は家は建ち上つて完成する迄にはもつと永い時日を要する」ところである。

自分の先き程から言はんと欲して居つた事は住家の改善にはこれに伴つて人々の心に永久・定着・堅實といふ思想を養ふ事を必要とするといふ事にあつた。それは堅牢な家を作ると云ふ事を第一義とせなければならぬといふ樣に。

ヘーンは此の日本人の不永久性を、其土地が外觀は東洋の樂園で如何にも風光明媚であり乍ら、然かも世界有數の地震國で殆ど動き通しの地盤であり、火山からは火を噴き、又一方北太平洋の颶風帶にあつて年々颶風の襲來を受け、其の地勢がまたこれに伴つて洪水を起す樣に出來て居る是等の事に歸して、これが國民の心理に影響して永久とか定着とかいふ思想を奪ふ樣な傾向を生じさすといふ樣にいふて居る。鴨長明が方丈記に述べて居る所もまたこれと同じ意味であつた、說の良否に付ては暫く玆には論ぜぬ事とする。

吾が國に於ては、古くから住家に二つの形式があつたやうに思はれる。即ち其の一つは板壁の家で多くは四周が明け開かれて木の床が高くなつて居るもの、も一つは四周が泥壁で床は土間で其の上に藁を敷き或は低い簡單な床を持つて居つたもの、此の二つの形式がそれで、兩者の內前者は貴族の家で後者は下民の家であつた。そして此の兩者が段々と相融和して今日の住家を形造つた事が推考せられる。今日ではもう殆ど全く、四圍の明け開いた形式の住宅の中で住ふといふ、生活の大きな樣式を開く形造つて居るものである。

此の四圍の明け開いた家の形式は耐火構造に對して大たる障害をなすものであつて、これは是非改めなければならぬものいである。自分達でも單に自分一個の趣味から云へば、それは子供のうちからの永い習慣の然らしむる事であらうが、閉した壁の形式の家よりは四圍の明け開いた形式の家に住む方が愉快でもあり好ましくも思ふ。然しそれがために何處までも此の形式を固執しやうといふ事はいけない事である。それも四隣から隔つて居る郊外や田舍の家ならば兎に角、相密集して互に共同の利害の伴ふ都市の家、それは當然耐火的になされねばならぬ所のものである都市の家にあてそれをいふ事は我儘といはなければならぬ。何うしても四周を取り圍んだ家に住む事に生活の方式

を改めなければ家を耐火構造にする事は困難である。

（三）

四圍を壁で取り圍んで處々に窓を穿つ形式の家は、これを發生的に考察すれば、寒い風の吹き込まぬやうに、外部の低い溫度が屋內に入らぬやうに、言ひ換へれば火を焚いて溫めた屋內の煖氣が外へ逃げ出さぬやうに、必然的に寒い地方に發達したものであつて、それから之れと反對に四圍を解放自在にした方式のものは、氣候の良い地方に起つたものである事は明瞭な事實である。

斯う云ふとアラビヤなどの暑い地方に於て厚い壁で四圍を閉して居るのは矛盾して居る樣に見へるが、それは熱の傳達を防ぐためにする、寒い國の方式と同一の理由に基いて居るのである。寒い國では內部の溫度を外部に傳達させないやうにするのに對して、此方は外部の暑熱を屋內に傳達させないやうにするためである。で、熱を最も傳達し易い窓を、アラビヤなどでは寒い國より一層小さくする傾向を持つて居る。

日本では氣候の關係上ヨーロッパなどゝ反對に夏が一番空氣中の濕度が高く、そしてこう云ふ空氣の內に居ると、その空氣中の水分の爲めに體からの水分の蒸發を妨げらるゝから暑苦しく感ぜらるゝので、皮膚の表面近くに沈滯して居る水分を奪ふには空氣を震動させる事が必要であつて、斯くすれば皮膚からの水分の蒸發を促して涼しく感ぜらるゝのである。卽ち風が吹き拔けるやうになつて居る方が凉しい、其のために四周の開放自由の家に住むのであると。事實日本の家屋のやうに貧弱な建物、それは坪千圓以上の檜普請といつても、多くは建築根本の理想から見て貧弱な構造である。此の貧弱な建物で、薄い壁や屋根からは眞夏の熱暑が室內に傳達され、明け開かれた部分が多い丈けまた其所からは地上よりの反射熱が入り來り易い。こう云ふ狀態であつては風をして室內を吹きぬかしめなくては凌ぎ難い筈である。併し壁も屋根も相應に厚ければ是等を通じて內部への熱の傳達もなく、室の容積も相當にあれば體溫に依つてそう直ちに室內の空氣が溫められるといふ事もなく、こういふ家では寧ろ窓を通して地上からの反射熱を入れしめぬ樣に、硝子戶を閉して更に窓掛を下ろして置いた方が凉しいのである。中流家屋の事であるから、そう室の容積を充分に取り難く閉さゝれた壁の室では體溫に依つて空氣が濕り易いと云ふならば、また風を吹き通させる樣にも出來るのである。

以上は夏に付ての話しであるが、冬に於てはこれを開放自在の家よりも遙かに溫かいのは明瞭な事である、煖房の話は後に

述べるが、煖房の設備をするにも四圍を閉した壁の家の方が遙かに合理的に行く。そして愉快に生活能率を高める事が出來る。或る論者は房を溫くして密閉した家に住むと、體が自然と弱くなる。我々の祖先は何れも不完全な家の中で體を鍛へたから丈夫であつたのであると、斯ういふ事をいふ。然し乍らこれは、今日の我々の生活や仕事が其の當時とは遙かに違つて居るといふ事を考へない淺薄な議論であつて、不完全なる生活を主張する事は、自然淘汰の理に基いて弱い者が死に、强いもの丈けが殘るといふ事を肯定しての上でなければならぬ筈である。

閉したる壁の家、此の方式は貯藏所としては古來我國に存在したものであつたが、それがまた明治時代に西洋の建築法と共に輸入せられて學校官衙等の公館に用ゐらるゝ事となつた。西洋の建築法は西班牙葡萄牙其他と交通以來、平戸を初め九州の要地に建築せられたのを見たが、徳川氏の鎖國と共に毀壞されてしまつた。そして長崎それは日本に於て最も市街らしい市街として明治に引きつがれた都市、なぜかといふて此の市街のみが現今に於てすら東京大阪といふ大都市に於ても行はれて居らない街衢路面の鋪装を石でやつて居り、橋梁の殆ど大部分が石拱から出來て居つたといふ樣に、ヘーン氏のいふ所の日本人の不永久性を大分裏切つて居る――尤も是等の鋪道や石橋や西洋からではなくて南支那の都市からの影響であつたのである――此の長崎の出島の和蘭屋敷もそれは日本造りであつたのである。

明治時代に輸入せられた西洋建築は、當初から煉瓦造りもあつたが、當時の經濟狀態に相應して最も多く――殆ど全部といふてもよい――用られたのは木拱建築であつた。そして其の內には骨組を木造にし外壁から軒先迄を防火的に漆喰塗りにしたものもあるが、其の又殆ど大部分が木造下見張りの建築であつた。これは建築費の問題で止むを得ない事であるが、貴重なる子弟の生命を入るゝ學校建築が、直ちに燃燒し易い尨大なる木造建築であつた事――或はありつゝある事――は今日から見て誠に寒心に堪えない事である。其の當時は木材も廉價で、他の技術も進まなかつた爲めにこれよりほか致し方がなかつたのである。漸次に木材も騰貴し來り、また一面に於て他の技術も進歩して來たので、十數年前より木造骨組の外に鐵網を張つてそれにセメントコンクリートを塗り着ける方法が行はれて、これが木造下見張と殆ど同價格で出來得るやうになつて來た。そして良く施工せられた此の建築が耐火的である事は、今日迄數度の實例がよくこれを證明して居る。そして建築學の術語に於て此の種の構造を木造準耐火構造と呼ぶ。今日東京市中に此の建築が中々多く存在する。しかも裝法が余程上手になつて、金網

にコンクリートを塗つた上に煉瓦や石を巧みに張り付けたものは、專門建築家が觀ても、只外部から眺めた丈けではそれが木造であるか、鐵筋コンクリート造りであるか、煉瓦造であるか石造であるか見分け難いものが多いのである。また一面に十數年前迄は極めて少く建築家にすらも珍らしいものとせられて居つた鐵筋コンクリート構造も、建築術の長足の進歩と共に漸々大容積の建築物を比較的短日月に完成し得る事となり、今日に於ては其の工費も比較的安價に出來るやうになつて來たのである。

（四）

よく人が建物の價格をいふ時に、煉瓦造で何程木造で何程といふやうに、簡單にいひのけるが、實はこれを間違なく述べる事は頗る困難な事である。なぜかといふに木造で價格何程で仕上げるといふても、同じ木造でどんな程度のものといふ説明を付けたにした所が、これに對する甲の人の概念と乙の人の概念との間には雲泥相違が出來るからである。

今自分は玆に左程の裝飾のない木造下見張の家を一坪現在東京の相場で二百圓位ときめて話して見やう。先に述べた木造準耐火構造でも、裝飾のない、外側にコンクリートを塗つた丈けのものであれば同じ金額を以て建築をする事が出來るのである。更に同樣の標準的概念を以て鐵筋コンクリートで三百圓で仕上げる事が出來る。先達内務省・警視廳が耐火構造の宣傳に木造の五割増にて耐火建築が出來るといつたのは其本旨玆にあるのだと思ふ。自分は更にこれを在來の日本風の住宅と比較して見やうと思ふ。今日中流の人の住つて居る家を、木造下見張の西洋建て一坪二百圓のものと比較して、自分の概念で同樣の程度のものとして一坪百六十五六圓を建築費に要するやうに思ふ。それでは五割増にてコンクリートの家が出來ぬではないかといふかも知れぬ。所が在來の日本住宅に於ては、玄關・臺所・廊下・便所・風呂場・階段・押入といふ樣な疊を敷かない場所と、室として疊を敷く場所とは殆ど全く同じ面積を占めるものである。解り易くいへば五十坪の家なら二十五坪の疊敷で丁度五十疊を敷き得るといふ樣に家の坪數と疊數とは殆ど同數をなすものである。即ち家の總坪を一〇〇とすれば室に用ゐらるゝ場所が五、然らざる場所が五の割合である。これを新しい科學的の考を以て間取り圖を作製する事に依つて――重に緣側を減じて――室として用ゐ得る面積六に對して然らざる場所を四の割合にする程度迄は室の面積を增す事が出來る。此の方法に依れば、在來の間取りにかけるものと同じ面積の室を得んとするには、其全體

の家屋の建坪に於て一割七分弱を減じ得る事となるのである。即ち總工費に於て在來のものゝ八割三分強にて出來る譯けである。解り易くいへば在來の間取りで百坪必要ならば、西洋風の構造にする考で間取りを切り縮めると、八十三坪三合餘になる。即ち一坪百六十六圓として百坪で一萬六千七百圓を要するが、これを八十三坪三合で割る事に依つて一坪二百圓といふ數字が出て來る。これで在來の日本風の住家の工費と、西洋風の構造にした木造の住家との工費が等しくなるから、やはり鐵筋コンクリート構造にしたものゝ工費とを比較して五割増と見てよい事となる。併し坪數の小さな家になればなる程間取の節約の不可能になる事は勿論である。

鐵筋コンクリート構造は全く理想的の建築構造であつて、火災にも地震にも抵抗し得る建築であると同時に尚且つ永久不朽のものである。此れは砂及びセメントを材料としたコンクリートが普通の酸類やアルカリ性に作用されず殆ど無限の年月に堪ゆる事と、又コンクリートの中に含まれた鐵材が絶對に不朽の性質を有するからであつて、二千年以前の古羅馬のコンクリート構造の建築物が――其中に鐵筋は使用されなかつたが――今猶其儘に使用されて居り、今後幾千年間の使用に耐へ得る實例を示して居る。

以上の各種の條件に見て、鐵筋コンクリート構造に對しては木造や煉瓦造は到底其敵手であり得ない事は一見明瞭で、これからの建築はどうしても此構造に依らなければならぬ。併し經濟から云へば未だ鐵筋コンクリートの持つ缺點はこれをカストするために要する板で作られたる假枠、それは一二回より以上使用に堪へない假枠、此假枠に對する工費の點に在るのである。假枠の工費は最も少ないものでも鐵筋コンクリートの價の三分の一以上を要する。若し此三分の一以上を占めて居る假枠の工費と、それから其の假枠の製作及びそれの組立、取り除きに要する時日と、コンクリートの硬化を待つ爲めに要する時日とが經濟上相當な部分を占める。今若し是等の事柄を要さないで濟むやうになつたならばそれは一層理想的のものである。此の問題を解決するために近來鐵筋ブロックと稱して、セメントコンクリートを以て中空のブロックを作つて、其中空の間に鐵筋を挿入して、其所にコンクリートを詰めて積んで行く方法が行はれて居る。之れは二三階の倉庫や住家などを作るのには最も適當なものであつて、其の工費も鐵筋コンクリート建築に比して其の二割以上は安く行ける筈である。現在の日本の富の程度に於て住家の建築などに適した構造法であると思ふ。

既に木造準耐火構造の建築に於ても、市内の事務所や商店建

築などは皆そう造られる傾向を持つて居つたが、鐵筋コンクリート構造――前述の鐵筋ブロックも勿論此の中に含んで――になると最早在來の屋根の形といふものが全く必要がなくなつて來る。そして當然今日三越や海上ビルデング其の他の建築に見るやうに屋根は平たいものとなるのである。

（五）

元來屋根の形式は既に發生的に二つに別れて居るものである。それは一つは勾配のあるもので他の一つは平らなものである。埃及のやうに雨の少ない地方では必然的に平らな屋根、これを建築學上の熟語で陸屋根と呼んで居る、其の平らな屋根を用ひるやうになつて居る。勾配のある屋根の形は、全く雨や雪を凌ぐ爲めに當然雨雪の多い地方に發生したもので、若しそういふ地方に於ても、平らな構造にしてもこれを凌ぎ得る程良い材料が手近かにあつたならば、既に古くから陸屋根が用ひられて居る可き筈である事は疑ない。

近來セメントコンクリート工事の非常なる發達を見たためにどんなに雨の多い地方でも陸屋根を用いて差支へないやうになつた。日本でも都會 大きな建築が次第に陸屋根を用いるやうになつて來たといふ事は、既に述べた通りである。こういふ問題を人は當然の事として觀過して居るが、此陸屋根を住宅に用いるといふ事になると初めて種々の議論が聞こえて來るやうである。我々は家に對して感情の上から勾配ある屋根に執着を持つ事、丁度開放自在な家に執着を持つと同じである。昔しから市街の壯觀を形容する言葉にも「甍を並べ」などといつて居る程であり、淺草の本願寺などの建築を見ても分る事であるが、徳川時代の或る種の建築は外觀殆ど屋根から成つて居るといふ様な有様で、我々は勾配ある屋根の傳習に餘りに永く養はれて來て居る。殊に住家に於ける簷の深い屋根、それは其下にある椽側と共に日本在來の住家の情調を形作つて居つたものである。それ故此の屋根にはなか〳〵心を牽かれがちのものである。これ等を總て經濟的耐火構造を得る爲めに棄てゝしまはなければならぬといふ事は中々耐へられぬ事であらう。殊に先に論じた様な氣質の日本人に取つては別してそうあるべき筈である。

事實今日の文化それは、工業の發達が都市の人口集中を來たし、其の膨脹に對して整然たる有機的組織を要する事となり、其の住家が昔日の低級安逸なる生活と漸々遠ざかり、共同利益の下に支配せられて劃一的になりつゝある。これは獨り住家の方より見た事であるが、其他の方面に於ても種々の問題から我々の生活が或る種の束縛を受くる様になりつゝある此の如き文

化が、絶對的の立場から見て眞に我々に取つて福音であるや否やは別問題であるが、斯うなつて來る事が嚴正な現實である以上、保守的消極的な理想論を離れて、如何なる改善を以て之れに應す可きかを考へねばならぬ筈である。

今日の進歩したる建築學の下に於ては、勾配ある屋根の如きは當然切り棄つべき傳習である。昔の乘物は輿や籠であつた。我々の先代は之れに一種の執着を持つて居た。併し今日の我々にに是等の形がそれ程の親しみを持たせるものでなく、自動車に此形を採用しやうに考へるものゝ今はないと同時に、總ては都市の建築に勾配ある屋根を使用しやうとする樣な事は、或特殊な建築物を除いてはなくなる事であらう。

適當に構造された陸屋根はまた、庭の延長として使用せらるゝ利益がある、即ち此上で運動も出來、干物も出來ると云ふやうに。都會の土地が次第に騰貴して廣い敷地を明けて置かれ得なくなるのは當然の事であるから、此點から云つても陸屋根は將來の都市建築に用ひらるべき筈のものである。

然し乍らまたこういふ人が多い事であらう。即ち、劃一的になるもよい、四方の閉ざされた壁になるもよい、更に鐵筋コンクリートになるもよい、勾配のある屋根のなくなるもよい、しかし結局それでは箱に窓を開けた形になつてしまふのか、今迄

述べて來た所は何から何迄物質づくめではないか、美の問題をどう取扱ふつもりであるか、と。此の問題に對しては斯う答へる。

製作物に關する美の形式はこれを大別して二つとする事が出來る。一つは時の古今洋の東西を問はず全く不變のものであつて、一つは地方と時代とに依つて自ら變ず可きものである。前者は誰もが生れ出でゝ以來、日々間斷なく大自然から一樣に感得したる形式であつて、後者は其地方或に其時代の傳習より致育せられたる形式である。色彩の調和（ハーモニー）の如きは殆ど全部が前者に基くものであつて、形の適當（フイツトネス）と釣合（プロポーシヨン）の如きに於ても又これに基くものが決して少くはない。然し乍ら建築物の形の適應や釣合の如きは殆ど一部が後者に屬す可きものである。

自分は今此處に適應とか釣合とか云ふ樣な形式美學の術語を用ひたが、次に大體此を說明し樣と思ふ。先づ適應と云ふ事に就いて述べる。多少前に述べた事項と重複するが、譬へば屋根が雨に對して勾配を有する形を持つて居ると云ふが如き、或は入口の高さが人體の高さに應じて約六尺であると云ふが如き、木の柱を用ふる時にそれが木の性質上から普通の住宅に於て三寸七八分であるが如き、斯くの如き事項を指すものである。そして此等の事項がピツタリと機能的に適合した時に其の形は美を

なすものである、此が破られた時にそれが甚だ不愉快に見えるものである。今此等の適應の事項を別けて考へて見ると、屋根の如きは自ら其地方的環境によつて定るものであると同時に一面に於て構造に支配せられ、構造術の進むに從つて當然變化す可き性質のものであるが、入口の高さの如き人體の大さに適應して定つたものは他の何等かの事情から支配を受けぬ限りは全く不變のものであり、柱の太さの如きは單に材料の性質からの問題であつて、木造がコンクリート造になる場合の如き際には當然最も容易に變化せらるべきものである。適應に對する事項は此處に詳しく論ぜずとも、前に揭げた自動車と輿のとの比較の如きが最も良い例ではないかと思ふ。まだ殆んど傳習に染まない青年にとつては自動車や汽車汽船等は最も美く見えるものであつて、工作物の歴史的樣式に對して智識を持つたものが最も傳習美を固守し勝ちである。自動車や汽車が美しく見えると云ふ事は機能的適應の統一を得て居るからであつて、工作物の美觀の主なるものは此等の點に存するものである。次に釣合の事項に就いて述べて見れば襖の大さが約三尺に六尺の割合なのがよく見えると云ふ事は前に述べた如く人體の形によつて定まるものである、此は不變的な釣合である。而も尙ほ斯くの如き釣合の他に變化し得る釣合のある事を忘れてはならぬ。譬へば草葺の住家に於ては差渡しに對して高さが其半分なのが釣合よく見へ、瓦葺の住家に於てはある特別の場合を除いては差渡しの四分の一以下の高さの屋根が釣合がよく見えると云ふ樣な事が此である。而しながら建築物全體に對する各部の釣合及び各部と各部との釣合は全く適合の合成から來るものであるが故に、既に適應に就て述べた以上更に此處に繰返す必要はあるまい。只だ此處に一言申述べて置く事は新材料新構造新用途から來る新らしき適合並に釣合の如きは、此れと美を感じ得る迄に多少の時日を要する事は勿論である。

（六）

他に尙一つの美の要素は裝飾の問題である。然し全體の形が機能的に良き統一を得たものであつたならば、何等の裝飾なしに裸其の儘の形で材料其の儘の色で美をなし得可き筈のものである。鐵筋コンクリートの家、それが眞に以上の調整を得たものであるならば、表に何等の被覆をなさずとも充分美しく見ゆべき筈のものである。これはよく調つた體軀が立派な裸體の美を有すると同じ樣に。

然し裸體に首飾りや腕輪を施し或は入墨をするやうに、入口や軒先きに或る種の色彩や輕い彫刻を施しても差支へなきのみ

ならず、却て良き効果を齎らし得るものである。金を惜まぬ建築であつたならば、よき意匠に全部をピツタリと石や煉瓦で包んでもよろしい。然し乍ら裸の形から來る美を覆ひ包んで外に表にさぬ様な、餘りに不必要な過多の勞費を其の裝飾の爲に使ふ事は何處までも避けなければならぬ。

建築家が建築術に要する科學上——精神科學をも含んで——問題に熟達して、しかも殆ど其細目を念頭より去りて熱情と歡喜とを以て製作した時に、結局斯くの如き建物が美をたすものであつて、ある時代に考へられて居つた様に、特に美の外面的形式なるものがあつて、これに達し得らるゝ筈のものであるといふ問題の如きは、最早今日に於ては取るに足らざる迷信となり了つた。

自分は既に外壁と屋根とに付て述べた　そして其の結果建物の外觀に付て論じた。次は屋內の間仕切をどうするかにある。在來の日本家屋の間仕切である所の襖類は、西洋人の觀察に從へば横に辷り動く紙壁（スライヂング、ペーパーウオール）である。これは室を大小自在に使用する事が出來て誠に便利なものである。然し乍ら自分の考ふる所にては是等の間仕切をも出來得る限り固い壁になす事を望むものである。此の方が屋內に起つた火災に對しても良い。各室が固い壁と丈夫な木に依つて閉ざされた家は、襖の如きものに依つて自由に開かれて、殆ど常に開放せられてある室よりも消極的に惡るい、といふ様な說をなす人があるが、これは恐らくは僻見であつて、斯くの如き事項は餘程問題とす可きものでなく或は見方に依つては寧ろ後者の方が前者よりも惡い意味を持つものではなからうか。各室が總て固い間仕切に依つて仕切られて其の內の秘密が保たれる事を、英語でプライヴエーシイと呼んで居るが、此の室のプライヴエーシイの如きものも、文化の進むに伴つて漸次に發達し來つたものであつて、中世紀あたりの歐洲の普通の民家は云ふまでもなく、貴族の家とても今日のやうに鍵のかゝり得る小さい室が澤山あつたのではないので、之れは今日に至るまでに段々にこう進化して來たものである事は誰れしも知れる事である。今日此プライヴエーシーの感念の最も發達せる英國に於てさへも、中世紀から文藝復興期の初期にかけての貴族の邸宅の主要なる室は、大廣間なるホールであつて、ホールの奥の方は主人及び貴賓用の高い上段になつて居り、其の壁には綴織が張られ狩の獲物が掛けられたるに係はらず、家族と奴僕從者とが日々一緒に食事する事にも用ひられ、そして夜は從者だちの寢所にあてられたもので、床には藺草が散布せられて其の上に眠つたといふ事である。これから漸々と客間食堂等が獨立しました此のホールに隣接して私室が造られて

ホールは段々に居間（リービングルーム）としての重要の度を減じ遂にはたゞ各室に通ずる大きな通路の様な役目をなすに至つたものである。しかも十七世紀頃までは以上の諸室も、他の室に行くために通り抜なければならぬ様になつて居つたものである。斯くの如くして漸次に現今の上流住家が出來た。そして丁度日本に於ても今日どんな小いさな住家でも昔しからの貴族の住家の方式を眞似て床の間が付けられる様に、歐羅巴の中流住家殊に英吉利の間取りがまた上流住家を眞似てこれを其儘引き縮めたといふ行き方をなし出來て居るものである。即ち玄關を入るとホールがあり食堂や客間が獨立し其他各私室が別にあつて、ホールや廊下から丈け其等の室に行き得るといふ風になつて居る。近來此の間取りの形式が日本の住家に影響し、一見純日本式のものと見らるゝ住家にも、其の間取りに於て此の影響のないものは殆ど稀れであるといつてよい。これは誠に良い事である。然しこれに伴れて入つて來た缺點も亦多い。中流の住家に於て一日中他の目的には使用せぬ食堂などを麗々しく獨立させた間取などを能く見かけるが、これ等などは寧ろ考ふ可きものと思ふ。歐洲に於ても近來總ての社會の趨勢と同じく住家の如きも民衆的傾向なつて來て、間取りの如きも余程變つて來て居る様に思ふ。北米合衆國のものなどは國柄から歐洲のものとは、以前から餘程異つておつた。譬へば入口を入ると大きなリービング・ルームなどがあつて玆が家族の常の居所ともなり、客あれば玆にも通し食事の時は室を二つに別ち得る様に設けられてある。帳をたれたり引き戸を引いたりして其所でやると云ふ様なのがある。日本の居間と茶の間と一緒になつて居る様のものである。これは一つの例に過ぎないが、此の外にも餘程變つて居る所が多い。西洋風の間取を採用するにしても餘程此の點を研究して最も便利に能率能く使用し得る様に室を間取りする事を考へなければならぬ。我が國の古い貴族の家を眞似た間取りの如きは、心して吟味せなければなるまい。

（七）

建築はこれを三つの部分に別けて考へる事が出來る、周圍の防禦である所の壁と、上部の防禦である所の屋根と、下部の防禦である所の床とがこれである。既に壁と屋根とに付て述べた、次には床に及ぼそうと思ふ。

世界の人間の坐る形式に二つの種類がある。それは平坐と椅坐とである。日本人などは前者に屬し西洋人などは後者に屬する。勿論平坐と云ふても必ずしも現代の日本人の様に脚部を折り曲げて重ねるのを指すのではなく、腰部を直ちに床に着ける

ものを意味するのである。平坐と倚坐との起原、これに付ては或る種の説をなす人もあるが、自分の信ずる所にては倚坐の方が後で、極めて古くは誰でもが直接に地上に腰を其儘着けたに相違ない。そして日本人や南洋人などは高く組まれた木の床の上に住まつたからして、何時までも此の平坐の形式を持續したものであらう。高く組まれた床といふものは古い時代には伊太利や瑞西にあつたと云ふ事は遺跡から發見され、瑞西の民家の高い床が此傳習の殘つて居る者であるにしても、北歐の如き寒い國は多くは屋内の土間の中央に火を焚いて其周圍に家族が集まつたもので、床が土間であるから汚れを防ぐためにも冷を防ぐためにも腰掛けを用ひる事が自然であり、また寢るに當りても何等かの臺を用ひて其上に横臥するやうになつた筈である。今日の歐洲人の生活形式は全く之から來て居るのである。從つて此方法は外を歩つた履物のまゝ家の中に入る形式を生じ、平坐の方には履物を脱いで入る形式が生じたのである。東洋に於ては支那が割合に早く倚坐の生活方式を採用して居る。之れは六朝頃から西域の風習に慣ひ、今日の如き統一を見たのださうである。併し支那人は腰もかけるが又一方今日でもまた平氣で平坐もやる。朝鮮人は日本人と同じく平坐である。倚坐の形式を日本人は明治時代に學校とか、官衙とか、事務所とかの公生活に採り入れた。そしてこれに依つ現今の文化を來した。然し乍ら今日に於てはもう公生活に丈けこれを行うといふ事では、濟まぬやうな狀態になつて來て居る。斯くの如くにして今日稱へられて居る住宅改善の主たる問題は、平坐を改めて倚坐にかへよといふ事にある。倚坐の方が平坐に比して動作に便利で生活能率を増進せしむる外に更に衛生上大なる利益がある。即ち日本人のなす様な脚を折つて其上に重き上半身を乘する方法は、下脚の血管を壓迫して血液の循環を惡くする。從つて心臟を弱むる。聞く所に依ると、日本に腰の曲れる老人の多かつたのは坐居に起因したものだといふ事である。容姿美の上より云つても、足が短くなつて外部に向つて弧形をなして脚部が灣曲すると云ふ事になる。此坐居の方法と云ふものは一日も早く改める必要がある。コンクリート構造であるならば床は靴で上り得るやうになるが、これを實地に行ふには未だ日本の道路が餘りに不潔である。併し道路が許さぬとしても、それはやりやうで何うにでもなるものではなからうか。既に學校や官衙、事務所などではそれをやつて居り、ホテルや倶樂部や劇場などでは並々ならぬ立派な床を、外を歩いて來た靴のまゝで上り得るやうになつて居る。住家に於ても玄關に十分な靴脱きのマツトと、更に腰かけたまゝ靴に清潔に拭ひ得るやうにブラツシと布とを具

いたらばどうであらうか。雨などで路の甚だしく惡い時にオバーシユーズを用ひなかつた人には汚れた靴を脱いで貰つて上靴を穿かすやうにしても宜いではないか。來客は勿論家の人がそんなに室と外の間を出たり入つたりするものではないか差支へないやうに思はれる。勿論婦女子や女中などで、習慣上未だ靴を常習的に用ひない人や、或は出たり入つたりの多い人のためには常に上靴、或は上草履を穿かしても宜いではないか。三越、白木屋などが、あの不思議た靴のカバーを穿かすのは其原因の大部分は今日下駄で來る人が極めて多數であつて、此多數の人々に對して上草履を用ひる事の不便と云ふ事が大部分を占めて居るのではなからうか。

何程下駄をきれいにしても外出して來た足部を洗ふて上るか或は足袋を脫ぎ代へて上るのでなければ黴菌の多い外の埃でよごれて來た足で步む疊の上へ坐り、其上に手を突き、或は禮をするとて其上へ額を付けたりするよりは、靴を拭つて上る床でも、腰を掛ける椅子や、物を載せるテーブルには足部を觸れず床に額を付ける事などはない樣にする生活の方が、衞生的ではあるまいか。殊に掃除に際しても固い床の方が疊よりも埃を除去するに易く、洗滌するにも容易である。

中世紀の西ヨーロツパの貴族の邸宅に於ては、其婢僕がめいく椅子を持つて居たのではないやうに思はれる。彼等は隨分と慘めな生活をして居たのである。それは段々と文化が進むに伴れて家屋も不燃質物になり、室にも必ず硝子を用るやうに統一されて來たと同時に、誰でもが椅子を用ゐて、此上に倚坐するやうに統一されて來たと見る方が確かであらう。斯う云ふやうに統一されて行く事が今日の文化に對應して行く道である。現代の文化即ち泰西諸國に其を發して居る文化は之れ等の生活方法から生れて來たものであると云ふ事が出來る。此文化の發達を認め、之れを採用して其文化の中に生きて、調和よく、能率よく生活して行かうとするには、單に公生活ばかりでなく、私生活にも其根本樣式をなして居る生活方式を採用せねばならぬものであらうと思ふ。

斷はつて置くが、決して無批判的に泰西文化に屈服して此の言をなすものではないのである。

（八）

人に依ると只平坐する事しか出來ぬ家よりも、亦倚坐する事しか出來ぬ家よりも、同時に兩者の出來る方が便利であり、進んだものであると云ふ說をなすものがある。卽此人の云ふ所に依れば疊敷の上に椅子テーブルを用ひたた方が良いと云ふのであ

るが、之れは一見甚だ面白い考へのやうであつて、深く考へて見ると甚だ不徹底な遣り方である事が分る。それも經濟上の問題から未だ直ちに固い床の家屋を建設する譯に行かず、取り不敢在來の家屋で倚坐の生活を行ふて漸次改善して行かうとのために疊の上に椅子を用ひよと云ふならそれは別問題である。

倚坐する事を大變に臆劫に考へる人があるが、それは椅子に對する智識のない人である。普通の事務所などに用ひらるゝ椅子は幅も一尺二三寸位のものであつて、高さは大抵一尺五寸である。此の狹い高い椅子に永い間倚坐して居つては堪まるものではない。永く坐するには幅も廣く高さも低い安樂椅子がある。之れに寛やかに倚りかゝつた氣持と云ふものは疊の上に坐るよりは遙かに樂である。日本の家屋は寛ろぎの家であつて疊の上では疲れゝば其の儘直ちに横になる事も出來るといふ事がよくいはれる。併しこれとてもソーフアの上に體を横へたのと比べると、其の快適さは到底及びもつかない。

日本固有の住家には極めて僅少のもののみで殆ど家具を用ゐない。されば西洋風のものにして建築費が同等に出來ても、家具の價を入れると中々高價に上りはせぬか、といふ事に誰れしも念頭に浮ぶ事であらう。しかしこれとても家に比してそんなに立派な物を用ゐなくとも、革で編んだ疊の上に坐る事を考へたならば、竹を骨として籐や柳やあけびで編んだ椅子の上に坐布團を敷いて坐ると云ふ事にした程度で差支ないではあるまいか。一寸考へると椅子を入れて倚坐するよりも坐つた方が澤山の人を容れ得るやうに考へられるが、椅子にして中央のテーブルを圍んで倚坐した方が反つて澤山の人が這入つて不自然を感じないやうである。譬へば八疊の室に十人の人を平坐の方式で容れる事は割合に困難である。之れは坐り方が不規則になり勝ちであるからである。椅子テーブルを配置してキチンと坐る場所を定めて了へば十人の人を容れてそれ程不便を感じない。現在自分の家では八疊の室に小さいテーブルを圍んで、兩方に四人づゝ坐し得る長椅子を向ひ合せて、又別な方には一人づゝかけ得る安樂椅子を向ひ合せ、都合十人の倚坐し得るやうにして相當の餘裕を見て居る。

椅子にかけるやうにするには、務め人である主人は事務所に行く時は洋服を必ず着るから、家に於てもさうして居る事は勿論である。男の子も女の子も學校に行く者は出來る丈洋服を着るやうにする。日本では家庭では窮屈袋――洋服――を着て居られないなどゝ我儘を云ふ人でも、海外の旅行をして居る時は何んの苦もなく出來る。若し固いシヤツやカラーが苦ければ、柔かいのを用ひてもよからう。又必しも洋服でなくとも十分に

股引さへ着けて居れば、女と雖も腰かけて寒中でもそんなに寒さを感ずるものではあるまい。只其の煖房を何うするかと云ふ事が問題である。理想的のものは蒸氣や温水の煖房であるが、之れは現今の所で煖むる室の坪に對して、四十五圓から六十圓の工費が要る。それ丈け建築費が増す譯である。金のある人ならばどし／＼さうする方がよからうが一般はさうも行かぬであらう。イギリス風の燃えて居る火を見るやうに出來て居るストーブは見る眼に愉快を覺ゆるものであるが割合に石炭の消費が多い。獨逸やロシヤなどで用ひるペチカと稱する煖房も缺點がある。瓦斯や電氣のストーブも急速に室を煖めやうとする時にはよいが、一日焚きづめ、付けづめと云ふ事では之れもなかなか金が要る。蒸氣煖房が工費が安くなるまで、或は經濟が之れを用ひるに適するやうになるまでは、止むを得ず在來の火鉢でもよいではないか。室に相當の換氣法さへつけて置けば炭酸瓦斯の問題が充分とは行かずとも解決せらるゝ様に思ふ。日本人は火に體を翳す事を知つて居つても、全體の室を煖めて其中に居ると云ふ習慣がまだついて居ない。それ故火鉢にカン／＼と火を起してそれに手を翳しながら、窓を開いて外の雪を觀ると云ふやうな事をする。甚だしきになると事務所建築などで蒸氣煖房を具へて窓を明けて置くと云ふ滑稽な事をして居るのである。室内に相當の換氣設備を施し窓を閉じて居つたならば、床や壁に殆んど全く隙間ない室に居る以上、火鉢に起つて居る火を眺めこれに手なり足なりをかざして居つたならば、一定の温度に室の空氣を温めずとも差支ないやうに思ふのである。

實際炭火に依つて室内の空氣の温度を一定の高さに煖めるといふ事は、蒸氣煖房の石炭の消費料や之れに要する手間とを合したものよりは遙かに經費を要するのであり、且つ炭酸瓦斯の多量の發生を來す不利益があるが、火鉢や英吉利風の火見爐は火をながめ乍ら直接に手や足をあぶる事が出來るために、室内の温度がそれ程に高められずとも、心理作用で温く感ずるものである。斯ういふ話がある、或る事務所で蒸氣煖房の裝置が破損したゝめに、炭火で室を温めたら其の經費が蒸氣煖房の約二割を要したのに、一方では或る木造の餘り上等の建築でない銀行で同じ様に蒸氣煖房が破損した時に、其の營業室に於て行員の手焙りとして火鉢を與へた時に其經費は蒸氣煖房の約八分の三で濟んだといふ事である。これは前者は炭火で室を温めたに對して、後者は手焙りに炭火を用ゐたからであつて、殊に後者は木造の隙間の多い建築で銀行の營業室の事であるから、坪數に對して容積多く空氣の温度を高むるには甚だ能率の悪い室であつたからである。

自分は在來の疊敷の室に椅子テーブルを用ゆる時に當つて、丁度テーブルの下に當る所に爐を切つて、或る輕い成功をおさめた事がある。

（九）

居間や客間の問題は既に述べた。次は寢室の問題である。住宅改善論者の內には――敢えて建築家といふ譯ではない――家を二階建として、階下に居間や客間及び臺所風呂場等を置き、これを能率本位に椅子テーブルにし、階上を私室にあてゝ、此の方は寧ろ在來のように疊敷にし、寢床（ネドコ）は其の上に敷くといふ樣にするのがよい、と唱へる人が多い。階下を事務的の室や公的用途の室に、階上を私室にするといふ事に對しては、總ての人の意見が一致する事であらう。併し私室を疊敷にして寢床を其の上に敷くといふ事では、改善の實が擧らぬではないかと思ふ。今此の室に於ける坐居倚居の問題には暫く論及せぬ事として、前に述べた樣に不潔になりがちな疊の上に、直ちに顏をつける布團を敷くといふ事が、餘り好もしくないのは解り切つた事であり、且つ床（ユカ）の面に近い所が汚れた有機的の瓦斯や黴菌の最も多く浮遊する所である。其れ故に寢床はどうしても一段高い所に置かれねばならぬ。此の點に於て寢室を疊敷きの在來の室の樣にして置くといふ事には、未だ充分研究の餘地を有して居る事と思ふ。それも在來の住家に新方式の生活法を入れ、高次に改善して行かんがために不取敢寢室は故のまゝにして置くといふならばこれは自ら別問題である。

しかも夜間より使用しない寢臺を、晝間と雖もこれを室內に裝置して置くといふ方法は、使用し得る室の面積を狹くし不便である事は解り切つた事でもあり、如何に其れが各自の私室なりとはいへ、晝間と雖も裝置したるまゝにて表はし置く寢具を眺むるといふ事は、縱ひ其れは西洋人が永き習慣から當然の事として看過して居る事としても、決して快い方法といふ事は出來ぬ。歐洲の住家であるとて昔しから必ずしも誰れもが室內に常に据置く樣な寢臺を用ゐて居つたものでない事は、先きに英吉利の貴族邸宅のホールに於ける奴僕の寢床（ネドコ）に付て述べた通りである。蘇蘭土（スコットランド）などの市街住家には古くからこういふ寢床があつた。それは日本の押入れのやうに壁際（カベギワ）に引き込んだ所があつて、其所の床（ユカ）は室の床（ユカ）より一段高くなつて居り、其の上に寢床（ネドコ）を敷いて、晝間は其の前面の戶を閉して置いたり或は帳をかけて置いたものである。此の方式などは我々の改良住家に於て採用して見る可きものではないであらうか。勿論これに多少の改良を施す必要はある。それは光線の射入と通風といふ樣な

點である。此の如き寢床に對して夏の蚊帳の問題を云々する人のあるかも知れぬか、窓か所謂西洋風である以上は、夏は窓そのものに細まかい金網を入れるから、室内に蚊の入り込む心配はない筈である。

それは便利の上からいへば、日本の寢床（ネドコ）の如き如何なる室にでもこれに寢具さへ入れゝば直ちに寢室として使用出來る。といふやうに簡便な方式のものはない。これに似た形式のものは現今亞米利加などの簡易生活の家で行はれて居る。それは斯うである。一つの家に寢室として取つた私室も勿論存在するが、その他に晝間は居間とか食堂とかに用ゐられて居る室にも、疊み込み寢臺が裝置せられ、壁を龕燈返しにして引き出すか、或は飾り棚の下の羽目を引き出すか、或は書棚などの樣に見えて居る家具を展開するか、ソーフアーに適當の裝置を施すかすると、それが直ちに寢臺になるといふ樣な方法である。これなどもまた充分考察して見る必要があらうと思ふ。

先きにいひもらしたが、耐火構造にして床（ユカ）にも耐火材料を用ゐたにしても、上に疊なり小繩で編んだ敷物なり、或はコルクなりを敷く事勿論である。強いて木の床が好みならばさうする事も出來るし、有福な人で特に好みならば綿織や毛織の敷物を敷いてもよい筈である。

まだ改善事項に付いていふ可き事は多くある。便所や臺所やなどは其の重なるもので、其の他庭などの事もあるが、是等の事項は生活方式との關係の比較的深くないものであるから茲には述べぬ事とする。

衣食住といふ言葉は、昔しから此の衣・食・住といふ順序で呼びならはしになつて居る。

然し乍らこれを溯つて考へて見ると、食を求むると云ふ事は總ての動物に於て本能であり、住がまたこれと同じく總ての動物の有する本能である。然るに衣の起原は全くこれと異つて、全く裝飾の問題から起つて來たものゝ樣である。此の點が食や住と異つて居る。然し乍ら我國に於ては——何所の國でも或はさうかも知れないが——都會の中流の人々は、比較的多く衣に對して注意を拂ひ來つた樣に思はれる。殊に婦人に於てさうのやうである。そして住家が往々比較的閑却された樣に見ゆる點もある。然るに近來住家改善に對する輿論が喚起せらるゝに至つて、月々各種の雜誌上に殆ど此の問題の說かれぬ事はないといふ有樣である。誠に喜ぶ可き事である。然し乍ら其說かれる所が、新しく家を作るならばこうもしたいあゝもしたいといふ樣な趣味の上から來て居るものが多いように見受けらるゝ。或は趣味といふやうなそんな輕い意味のものではなく、眞平切り捨

て離き人間の心的要求に出でゝ居るといふかも知れない。しかし細部の形式問題を離れ、眞の生命に立脚し、汎人間的の覺醒に基いて、住家を考ふるものが何程あつたであらう。其の大部は輕き享樂に出でゝ居るものと見ても差支ない。眞の人間生活と住家、斯くの如きは哲學上の大問題である。嘗て或る建築専門の雜誌に於て多少考ふる所を述べた事もあるが、然し乍ら此の如き根本理想は玆には別に識者の考ふる所にまかせ、自分は現實に立脚して都市の住家の方式を如何にす可きやを述ぶる積りであるが、人々があゝもして見たいこうもして見たいといふ樣な局部々々の問題よりも、耐火建築の方式に向つて進む事を第一とせねばならぬ。そして其れに伴つて倚坐の生活も採用せられねばならぬといふ事を繰返し述ぶるものである。

東京の火災が市郡合せて、大正六年が消失坪數に於て四萬〇二百餘坪、此の建物の概價が四百八十三萬六千餘圓。大正七年に於て四萬〇四百坪、此の概價三百十三萬七千餘圓。大正八年に於て二萬七千八百餘坪、概價が五百四十七萬餘圓であり、實は此の概價が古家の價を以て計上したもので、これを適當なる價に換算し更に家財の損害を加へたならば、恐らくは此の二倍半に上る事を考へて見、更に年々の平均火災の數約七百五十回、全燒半燒を合して其の家數二千個以上に上ることを見たならば、如何に自己一人の利益のためにも更に共同の利益のためにも耐火建築の急務なるを知るであらう。

（一〇）

小兒の衣服は、其の成長に應じて小さきものを脫ぎ捨てゝ、漸次に大きなものを着けて行くものである。寄居蟹(ヤドカリ)といふ蟲類がある。これも成長に應じて或る意味に於て其の住家なる貝殼を脫ぎ捨てゝ、更に新しき貝殼の適したものを搜し出して其の内に住むものである。人間の家族の狀態は決して不變のものではない。其の人數に增減があり、子女には成長があり、收入にも增減があり、其の他交際の範圍や趣味の如きもまた變化するものである。田舍の家ならば兎も角も、此の地價の高い都會に於て到底餘裕のある坪數を取り得るやうな家を作る事は不可能である。若し望遠鏡の樣に其の要求に應じて機械的に伸縮の出來るものであつたら便利であらうが、それは不可能な話である。それ故に都會の人にはこれ等家庭の狀態が變ずるに從つて家を取り更へて行く事が、最も理想的であるといはねばならぬ。それでは趣味を滿足させる事が出來ぬといふかも知れぬが、これ等の問題は室內の裝飾や其の他の手入れなどにて滿足するやうにしてもよいではないか。若し人間の住家に對する所有慾とい

ふものが、そんなに强烈でどうする事も出來ぬものであつたら充分に坪數の取り得る郊外に作るやうにしたらばよいであらう。併し郊外住宅がまた一人でポツンと家を建つるといふ様な事をしたのであつては、例へば良き水を得隣者の便利を得るといふが如き衛生の上の問題からも、一般經濟上の問題からも、子女の教育の爲めにも、賊難から安心を得るためにも、誠に不便なものであつて、これはどうしても共同の經營に依つて大きく計劃されねばならぬものである。そして斯くの如き組織の下に中心機關に依つて住家の建築が行はれ、それを個人が年賦なり其の他の方法に依つて購買するといふやうになされるのでなければ、吾々の目指す住宅改善は行はるゝものでない。單に素人の趣味によつて改善は不可能であつて、どうしても建築家の深き研究に待たねばならぬものである。

以上は都市の住家に對して心に浮び來る儘に其の大要を述べたものである。最後にアパートメント・ハウスに付て概略の説明を試み此の稿を了ろうと思ふ、

アパートメント・ハウスは又英國に於てはフラツトとも呼ばれる、數階の家に幾つもの家族の住んで居る貸屋建築を指すもので、普通近代的の建築のやうに考へられて居るけれども、其の根元は割合に古いものである。當然地域の限られた都市に生ずべき筈のもので、歐洲の古き都市は城壁を以て廻らされたものであるから、人口の增加に伴つて斯くの如き建築を生じたのである。此の種の住家の既に古代羅馬に存在した事は、拉典語 Insula が一棟の内に幾つかの家族を容へる貸屋を意味して居る事や、學者ミツドルトンの古羅馬遺跡の研究發表や、プルターク英雄傳中のシルラの章中の文句に見ても明らかである。近世に至つては歐洲大陸の各都市に於て既に數世紀の間此の種の住家の建築を見、蘇蘭土エヂンパラに於ても亦これを巴里に學んで、十六七世紀頃には盛に建築せられて居る、先述の數階の民家は全くこれを指したのであつた。倫敦に於ては先述の大火後多少の發生を見たが割合に發達しなかつた。歐洲都市中で最も近代のものなるペトログラードに於ては、實際に總ての住家が此の種の建築である。最近エレベーターの發達に伴つて歐米各都市には高層のアパートメント・ハウスが建てられる様になつて來た。就中發達したものは米國のものである。殊に最も便利なものは最下階に料理店を置き他の階を貸室とした所謂アパートメント・ホテルである。

東京に於ても女子大學附近に出來たさうであるが、近代都市には當然此種の建築の發達す可きものと見て、耐火建築に對する考察と相待つて充分なる研究のなされん事を、それ〲關係の路にある人達に深く望むものである。

國民經濟上より見たる建築改革

法學博士 渡邊鐵藏

日本の人口は毎年約六十萬人ほど增へて行く。大正九年十月第一回國勢調査の結果によると、一世帶約五人の割合であるから、一世帶を一戶と見れば毎年約十二萬戶の家屋を是等の膨脹する人口に對して新に用意せねばならぬ。日本の家屋は大部分木造家屋であるから平均三十年の壽命を保つとしても國勢調査による世帶數一千百二十二萬二千の三十分の一卽約三十七萬四千戶は毎年之を建替へねばならぬ。家屋の平均壽命を二十五年とすれば毎年四十四萬九千戶を建替へねばならぬことになる。此中間を採ば約四十一萬戶である。之に右の毎年の人口增加に伴ふ家屋需要數を加れば一年に約五十三萬戶の家屋を新に建築せねばならぬことになる。家屋の平均建築費(建具を含む)を一戶二千圓とすれば毎年十億六千萬圓の家屋新造費が必要である。

勿論右の家屋命數に就ては種々の點を考へねばならぬ。日本の木造家屋は數年にして根駄板を取替へたり或ひは十數年にして柱を取替へたり家根を取替へたりせねばならず、建具類の命數に至つては更に短く、絕えず一部改造を行つて漸く右の命數を維持し得るのである。然しながら大改造を行へば三十年以上も維持することが出來るであらう。之に反して坑夫長屋の如き十年以內の命數のものもある。要するに右の建物の命數は大改造を行はざる範圍に於ける命數を意味するのである。又一戶新造費二千圓といふも概算であつて、一戶數十萬圓の家屋も一戶數百圓の家屋もあるが大體に於て現在及將來の大多數の日本人の住居すべき家の間數を標準として其建築費及建具費を考へ同時に上流及び下流の家屋の建築費の影響をも漠然と考へ合せた見當に過ぎない。此種の數字は大體の見當を立てる外途の無いとは何人も認むることであらうが、此見當によると日本人は毎年家屋の新造費に十億六千萬圓を費すことになる。もつと正確な見當を立てた方があれば垂示を願ひ度い。(總べて朝鮮及殖民地を除いての議論)。

右の國勢調査の世帶數の內には準世帶數をも含むでをるので

あるが、以上は主として住宅に關する議論を見て、まだ此以外に官衙、學校、工場、事務所、倉庫、純粹の店舗、遊樂場其他種々の生活の根據以外の建物があつて、其の新造改築の費用も亦每年莫大なものにならうが之は計算頗る困難である。然しながら試みに東京市に就いて見ると住宅其他生活の根據となるべき公私の建物の建坪總數に對して約二六%に相當する前記の如き仕事、遊樂其他の建物が存在する。東京市は政治、經濟、教育其他の中心地であるから之を以つて日本全國の標準とすることは出來ぬが、大體に於いて日本人の生活の根據即ち住宅に對して仕事、教育、公共、遊樂其他の建築物が一割乃至一割五分位存在するものと假定しても必しも無稽ではあるまい。更に此の建坪數の割合を價格の割合に變へて考へるとも不當ではあるまい。此論を推して行くと生活の根據の新造費に每年大略十億六千萬圓を要するとすれば此外に仕事、教育、遊樂其他の場所の新造費に每年大略一億四千萬圓位必要であるとして差支へなからう。此數字は多くの人は直ちに甚だ過少であると考へるであらうが假りにこれ位に見ても結局我國民は每年大略十二億圓の金を建物の新造費として費さねばならぬ。此の十二億圓といふ數字は前述の如く推定的の概算であり且つ將來の人口增加數の增加、生活の向上、建築の改良經濟狀態の變化等一切の事情を眼中に置かない數字である。

次に我國內地の世帶數一千百二十二萬を戶數として每戶假りに平均時價（建物及建具合計）千五百圓として計算すれば其の總價格は約百六十八億三千三百萬圓となり、之に上述の如く、仕事公共用遊樂等に要する建物價格として約右の一割三分即ち二十一億八千八百萬圓を加ふれば我國の建物總價格は大略百九十億二千萬圓となる。而して建物の修繕費は建築家の意見によると日本の家屋の構造と氣象より見れば少くとも一年に家屋價格の五%の乃至八%を見積らねばならぬといふとであるから、假に之を六%と見れば大略十一億四千萬圓を要することになる。結局每年の建物新造費約十二億圓と此の每年の修繕費とを合計すれば我國民は每年建築物のために大略二十三億四千萬圓を要することになる。

建築物は更に火災、震災、水害、潮害、暴風雨等のために年々尠からざる損害を蒙むる。而して是等の災害は我國に於いて殊に最甚しい。風水の害による建物の損害は割合に少く內務省の統計によれば年により大差あれど平均年二百萬圓と見得る。震災は偶發的のものであるから每年の平均損害を知ることは出來ぬ。然しながら火災に至つては火災名物國だけありて建物につきても、年々の損害額が尠くない。內務省の統計によれば全

圓の火災損害は年により千六、七百萬圓より三千萬圓位の年が多き樣なれど建築學者の評價によれば遙に大いであつて、片岡工學博士の如きは數年前我國の大災による建物の損害價額を一年平均三千萬圓乃至五千萬圓と推定してをる。

要するに我國に於いては建物の新造費、修繕費に災害費を加へて毎年總計約二十四億圓を必要とするものと推定するも大過はあるまい。

此の貧乏なる日本國民の建物に對する投資額が毎年約二十四億圓に上ることは驚くべき巨額ではあるまいか。

大正十年度の我國の一般會計豫算歲出額は十五億八千四百萬圓であるが政府及帝國議會は之を以つて頗る厖大なる豫算なりとし、數月を費して愼重なる審議をなした。此事は誠に當然である。然しながら政府及び帝國議會は今年も亦それより前の年に於いても右の額年二十四億圓の國民の建物投資の問題に就いて考慮したことがあるか。

生活と政治、經濟と財政は何れが本であり何れが末であるか。政府議會の一面の仕事は政治と財政であらう、然しながら國民の生活と經濟の根本問題を忘れたる政治や財政は惡いか、拙いか何れかである。權力の爭奪や利權の吸收を政治と心得て國民の生活を忘れたり、我黨政策に基く財政に沒頭して國民經濟の大問題を閑却したりしてをると結局は國民に怨まれたり反かれたりすることになる。國民生活の改善、住宅改良　建築改革殊に耐火建築の普及の必要等の問題に關しては既に屢々本誌上其他に於いて論じたことであるから再びこゝに繰返さないが、當局者は少とも米穀法案蠶糸會社等の如き地主擁護、資本家擁護の現在有力階級阿附政策若くは所謂地盤主義に基く政策財政を計畫することを少しく遠慮して、廣く多數國民生活に直接關係ある問題に六千萬人の國民の凡てに關係ある住宅供給及住宅改良の問題、並びに永遠の國民經濟上の大問題である建築改革の問題等に政策と財政上の考慮を費してはどうであるか。

年額二十四億圓の國民の建物投資總額中少くとも十二億圓の建物の新造費の一部に關しては政府は余の屢々論ぜる如く住宅改良、建築改革等を達成する目的を以つて建築の企業組織、建築の金融方法等につきて適宜の考慮をなすべきである。生活方法の改善、大企業建築法の採用、改良されたる建築に對する金融及擔保　法の考案等によつて政府が直接間接に爲すべきと又爲し得べきことは多々ある。

大正九年十月國勢調査速報に基いて計算すると人口三萬以上の市區の世帶數は約二百十萬四千である。然らば人口三萬以上の都市の戸數は全國戸數の一八・七％に相當する。而して住

宅改良、建築改革殊に耐火構造普及の必要は都市に多いのであつて、且つ建物の新造の再築の際に實行し得るのであるから結局是等の目的の對象となる建物價格は十二億數千萬圓の約一割九分卽ち約二億三千萬圓となる。假りに人口三萬以下の可成り大なる町まで住宅及び建築の改良を普及することゝすれば每年五億乃至六億圓の價格に相當する建物に對して適宜の手段を講ぜねばならぬ。

右の範圍の建物新造に際して住宅改良及び建築改革のために建築費が假りに三割を增加するものとすれば、每年の新造費は三億圓乃至七億八千萬圓を要することになる。然しながら特に建築改革、住宅改良のために從來當然建築のために必要とせる金額以上に餘分に金融を要する金額は僅かに每年一億圓乃至一億八千萬圓に過ぎないのである。將來の人口增加其他生活及び經濟狀態の變化に伴ふて此金額は漸次多少遞增するであらうが大略此程度の金額を新に二十五年間乃至三十年間右の目的に融通する計畫を立てれば我國の建築改革、住宅改良の重要なる過渡期を容易に經過することを得るのではないか。

都市の建築の新造費及び建築改革、住宅改良に對する割增を加へたる總額は每年三億乃至七億八千萬圓であるが、改革改良の割增費のみならば每年一億乃至一億八千萬圓である。前者の一部に對して特殊の新なる金融方法を講ずるとも大した難事ではあるまいが、一定の條件の下に後者の全部に對して特殊の金融方法を講ずることは困難の程度は一層少いと言はねばならぬ。

我國の全國預金勘定は

大正四年	二、八一一、〇一八千圓
同　五年	三、七七九、九二〇同
同　六年	五、七〇三、五五二同
同　七年	八、二〇八、八二七同
同　八年	九、八八八、五八五同

といふように、戰爭の影響によるのであるが、右の四年間に七十億圓、一年平均十七億七千萬圓づゝ激增してをる。又郵便貯金は大正四年末の二億一千九百萬圓より大正九年末の八億二千七百圓まで五年間に六億八百萬圓一年平均約一億二千二百萬圓づゝ增加してをる。卽ち我國の民間資金は右の時期には每年約十九億圓づゝの激增を來してをつたのである。將來斯の如き資金の增加があるか否かは疑問であるが現在既に優に百億圓以上の巨大なる民間資金を有し、且つ近年每年十九億圓づゝの割合にて激增しつゝありし資力を有するに拘らず、從來其の殆全部を企業界及政府の財政に運用し來りて國民の生活に直接影響を及

ぼすべき所業殊に住宅建築、住宅改良、建築改革の如き方向又は地方自治體の事業等に運用すること尠なかりしことは此種の重要なる事業の進捗を障害せるに止まらず、徒らに泡沫企業を簇起せしめ、或は中央財政を過度に膨脹せしめ或ひは又國民の日常消費生活を奢侈に導くの因をなしたのである。我國民の資力を以つてし、且つ適當なる方法を以つてすれば住宅問題建築改革問題の切迫せる時に當つて僅に年々此目的のために一億乃至二億圓の金融をなすことは頗る易々たるのみならず當局者の當に努力すべき責任のあることとである。

右は財政及金融の點より住宅改良、建築改革の容易なることを述べたのであるが、之を私人の經濟上より見るも一時の建築資金として建築改良のために假りに二割乃至三、四割ほど餘分の金額を必要とすると雖も、之を改良建物の減價銷却額、修繕費、保險料並びに所要敷地等の減より生ずる利益と相殺すれば結局經濟上の負擔必しも大ならざるのみならず、適當なる建築企業組織に依りて大企模に建築を行へば寧ろ經濟上に於いても明に有利である。況んや政府が直接に又は間接に特殊の金融機關又は特殊の建築會社を通じて住宅建築、住宅改良、建築改革等のために有利なる金融方法を講じ、尚且つ土地の利用、租税其他の方法を以つて之を刺戟すれば我國に於ける住宅問題の解決、建築改革の實行は必しも甚しき難事業ではあるまいと信ずる。要は當局の誠意と決心にあるのである。殊に國民生活及び國民經濟上より見たる住宅問題及び建築改革の一般的且つ恒久的の重要なる意見を洞見するならば當局者は宜しく此際決然として此の大事業の解決に猛進すべきである。

曷ぞ耐火家屋を造らざる

工學博士　伊東忠太

一　火災の慘害

地震、雷、火事、親父と云ふことがある。親父はやゝ趣を異にするが、他の三つは非常の天災として古來世人の恐怖した處

である。今日と雖之を恐怖せぬではないが、今日では學問と技術の力に由て或る程度までは之を防止することが出來る、否若も理想通りの施設が出來れば殆んど完全にこの災害を免れることが出來るのである。只之が實行には種々なる困難が伴ふので、容易に行はれぬのであるが、吾人は吾人共同の幸福の爲にこの種々なる困難を切り抜けて恐るべき災害を免るゝことに全力を竭さねばならぬのではあるまいか。

總ての災害の中で火事程恐ろしい者はない。家を燒き財寶を燒き、時に或は人命を奪ひ、有形の資産を殲滅するのみならず、無形の精神上に與ふる打撃、之より生ずる各種の慘禍は實に測り知られぬのである。この災害を免かれんとするには是非共その家屋を耐火的にせねばならぬことは言ふ迄もない。然るに多數の人、就中頻々たる火災に脅かされつゝある都市の住人が、案外平氣で木造建築に住ひ、殆ど毎日あちこちに起る火災に對して毫も痛痒を感ぜざるが如き有樣であるのは思へば實に不思議である。彼等は果して眞に火災の恐るべきことを知て居るのであらうか、吾人甚だ之を疑ふ。

二　火災を輕視する市民

吾人の見る處では、多くの人は未だ眞に火災の恐るべきことを知て居ない樣である。地震、雷、火事、親父で、火事は都市には必然起るべきものであると合點し、偶まには類燒も致し方が無いと氣前よく諦め、何事もその時の運命と放任して人事を竭さうとはしないのが古來日本人の通弊であると思ふが、この氣分がなほ今日に至つても根底から除かれず、火災を輕視するの傾向のあるのは歎ずべきことである。斯の如きは實に原始時代の現象であり、生命財産の尊重すべき理由を充分に理解して居らぬが爲である。火災の起る毎に所謂彌次馬なるものが逸早く現場に驅けつけて各種の妨害を罹災者及消防夫に加ふるが如きは、即ちこの原始時代の無理解を遺憾なく暴露したものである。火災の慘禍は今更云ふ迄もないが、警視廳の調査によれば東京市内に於て平均一日に一回の火災があり、一ケ年に燒失する家屋は千二百戶であり、この損害高は約六百萬圓である。郡部に於ける統計も市内と略同一である。この外重要物品圖書等の金に見積れぬ損害は何程であらうか、罹災者の精神上に受くる損害は幾何であるか、到底測るべからざるものがある。毎年斯の如き慘害を反覆しつゝあるにも拘らず、平然として驚く景色もないのは何故であらうか、或は東京市の戶數は約四十五萬七千であるから毎年平均千二百戶位燒けても、全市が一と通り燒け盡すには三百八十年もかゝる、自分の家へ御鉢の廻るのは前途遼

遠であるなど、濟し込む者あらば、夫は以ての外の不心得である。

三　耐火建築は木造建築より低廉なり

火災の恐るべきことを痛切に感じて居る者すらなほ且つ耐火建築を作らんとする人の比較的甚た寥々たるは何故であろうか。第一の原因は耐火建築の如何なるものなるかを詳にせざると、その工費が必ず普通の木造に數倍するであろうと云ふ疑懼の念から生ずるのであろうと思ふ。耐火建築の詳細なる説明は玆に述べないが、要するに不燃質物を以て構造するので、材料としては石、煉瓦、鐵骨、鐵筋コンクリート、等があり、建築の性質に由て其選擇を異にし得るが、市街の住宅ならば鐵筋コンクリートが最も有利である。第一經費に於ても低廉であり、火災にも震災にも最もよく耐へ、よく濕氣も防ぎ得る。壁體が薄いので有効面積が大きくなり、仕上方に種々なる工夫を施す餘地があり、見た眼輕快洒灑な氣分を現はすにも適して居る完全なる鐵筋コンクリート造の家屋は絶對に耐火的であるが、爰に又准耐火家屋もある。これは木骨に鐵網を張てコンクリートを施すので、猛火に包まれゝば駄目であるが普通の場合には大抵類燒を免れ得る。

然らばその工費は如何と云ふに、今日の如く鐵もセメントも低價であれば、鐵筋コンクリート造の普通の家屋は一坪四百五十圓乃至五百圓で立派なものが出來る。粗末で宜しければなほ二割も減じ得るかも知れぬ。准耐火の鐵網コンクリートならば又更に幾割かを減じ得る。然に木造の家屋は案外に高價である。木材は需用益多くして供給が之に伴はぬ爲に一向に價か低下しない。彼劣等の貸長屋でも一坪百圓以上百五十圓位であり、普通の獨立住宅であれば一坪二百圓以上三百圓はかゝる。稍普請となれば少くも坪五六百圓以上際限が無く、少しく意匠を凝らせば瞬く間に坪千圓以上となるのである。しかも木造であるから火事に逢へば一ゝ溜りもない。木材の彈力に富む特質は一利一害で強震暴風に撓み、氣候の變化に伸縮し、住者をして常に不安の念に堪へざらしめる、木造家屋は世界第一の贅澤建築であると云ふことは今や世の公論となつて居るのである。

今假に一坪二百五十圓を投じてこの不安なる木造の家を造り、一旦にして火災に逢ひ、再び同樣の家を造れば家屋の價のみでも坪五百圓を費すことゝなる。始より坪五百圓を投じて耐火建築を造つて置たならば、安全に火災を免れて何等の損害も受けなかつたのであろう。況や木造家屋は修繕維持手入れに莫大の金を要するが鐵筋コンクリートの家屋はこの經費が比較

的少ないのである。始めに僅かの金を惜んで結局多大の損をするのを名けて一文惜みの百知らずと云ふのである。

四　舊日本趣味の家屋は市外に造れ

耐火建築が結局經濟上にも有利であることが判明してもなほ耐火建築を作ることを躊躇する人が甚だ多い。それは何故であるか？夫は既往數百千年間住み馴れた、木造建築として世界獨特の發達を遂げた、純日本式の溫かい家を去つて、一朝にして經驗のない、親しみの無い、外國傳來の冷たい鐵や石の家に住むことが何となく不安であると云ふのであろう。成る程一應は至極最である。併し今日の時世は最早斯の如き消極的なる思案を許さぬのである。若もその人が純日本式の建築に捨て難き趣味を感じ、是非に斯の如き家に住ひ度いならば、宜しく東京市外に於て、適當なる廣濶なる敷地を求め、四隣に密接せざる閑遐に於て之を經營すべきである。斯の場合には木造でも茅葺でも、主人の好むが儘に作つて差支はない。併し東京市中に於て、二百餘萬の市民と共同生活を營む場合に於ては、同胞市民の利益の爲にも、將た又自分の利益の爲にも耐火建築を作ることが適當である。東京市中に於て木造建築に住ふことは或る住者の趣味を滿足するのに宜しいかも知れぬが、市民に取つては脅威となるべき性質のものである。即ち市民としての德義上からも木造家屋は之を避けることが至當である。

耐火建築は果して住ひ心地が惡いであろうか、自分は決して惡いとは思はぬ。併し夫は住者個人の趣味の問題であるから、理屈でおすことは出來ないが、內外の施設に由ては舊日本式の家よりも遙かに住ひ心地の善いものとなることを信ずる。若も住者が希望するならば、過渡時代に於ける已むを得ざる要求として、壁體は耐火的としても、間取りや設備を或る程度まで舊來の日本的の家屋の如くに作ることは左まで困難なことゝは無い。併し我輩は一步を進めて玆に舊日本的の生活方法を改善し、鐵筋コンクリート造耐火家屋に相應しい間取りや設備の採用を勸告したいのである。

五　耐火家屋から生活改善へ

鐵筋コンクリート造耐火家屋であれば、先づ以て椅子卓子式の生活を取り度い。疊敷の部屋は已を得ざれば一部に置くのである。さて室內の諸設備等は之から割り出して夫れ〳〵考案するので今玆に詳述し難いが要するに新日本の要求に應ずる新日本式を取るので、我輩は之を以て或論者の如く歐米の模倣とは云はぬ。否假令夫が模倣であつても必要な模倣は結構である。

由來我日本は古來外國文化の模倣及その同化を以て國是として來つたのである。古代に於て三韓の文化を模倣同化し、中古に於て亞細亞大陸の文化を模倣同化した。今歐米の文化を模倣同化するに何等の不思議もない。只無定見に外國の皮相を模倣するのは譽めた話ではないが、我に一定の方針あつて、文化の向上進歩の爲に外國の模倣同化を行ふは誠に時宜に適して居る。しかも我輩はなほ之を摸倣とは云はぬ、只我國の現情の下に於て吾人の幸福と安寧を增進せんが爲に、市中に於ける住家の耐火的ならんことを要望するのである、吾人は住家の耐火的となると同時に、その生活の方法も亦之に準じて改善され、多年の懸案たる二重生活の難問題も、漸次緩和され解決さるべき機運に向ふべきことを認めるものである。

終りに臨みて更に一言したい。自今新たに市中に家屋が作らるる場合には是非耐火構造でありたい。斯くて漸次に全市が耐火建築を以て形づくらるるに至らば、火災は容易に起らない、若し起ても先づ大火にはならぬ。市民は玆に於て夜も警鐘の響きに温い夢を破られる憂は殆どなくなる。盜賊の用心もよくなる。强震暴風に對しても安心である。家の手入や修繕の手數も省ける。衞生設備も都合よく出來る。萬事に立ち居が便利になつて仕事の能率も上る。數へ來れば幾多の利益があるが損失は餘り見出すことが出來ない。只當初の建築費が木造よりは高いと云ふが、夫も程度問題で、前陳の如く廉い耐火建築は高い木造建築よりも低價であり得る。獨り困るのは趣味の問題であるが、吾人は大都市の中に共同生活を營まんと欲する以上は或る程度迄個人的趣味を捨てねばならぬと思ふのである。更に最困るのは、木造家屋と耐火家屋との利害得失を考ふるのでもなく、火災の慘禍は之を知らざるもの丶如く、市民共同の利益は之を顧みざるもの丶如く、只漫然舊來の因襲に囚はれて、何時迄も木造建築を以て滿足し福利の增進、生活の向上を希はざる人々である。吾人は斯の種の人に對して切に考慮を促かし度いと思ふ。英京倫敦市は千六百六十六年の大火以後は殆んど全く耐火建築となつたが、東京市は今以てあの通りである。東京市は倫敦市に比して正に三百年後れて居る。吾人は一日も早く之に追及せんことを努めねばなるまいと思ふ。(了)

都市の防火と耐火構造

東京帝國大學教授　工學博士　内田祥三

●火事は江戸の花

火事は江戸の花と云ふ言葉が古くからある通り東京の地には火災が昔から驚く様に多かった。東京市史稿變災篇には天正十八年から明治四十年迄三百八十年間にあつた重なる火災が八百七十三回、その中で極大きいのが百十回、平均すると東京には二年十ヶ月に一回づゝ大火災があつたことが記してある。明暦三年正月十八、十九の兩日は非常な大風が吹いて江戸府内三ケ所から出火して大慘害を仕出來し、所謂明暦の大火として後世に云ひ傳へらて居る。卽ち十八日には本郷丸山本妙寺から出火して北は柳原、南は京橋、東は大川を超えて佃島及深川、牛島新田に及び、十九日には小石川鷹匠町から始まつて北は神田臺、南は外郭から江戸城を燒き拂ひ、又同日麹町五丁目から起つたものは櫻田一帶から西丸下に至り火先二分して一は溜町を燒き一は愛宕下を經て芝浦に達した。此の三つの火事の爲めの死者數萬人、二十二里八町、市井五百餘町を焦土と化したといふ記錄がある、又小しく性質の違つたものは安政二年十月二日の火災、此の日は彼の安政の大地震のあつた日で、これが爲め市内三十四ヶ所から火事を起した。幸にも此の日は風が吹かず、殆んど無風の狀態であつた故其の延燒は明暦の大火程ではなかつたが、それでも十四町四方に相當する地の建物を燒失した。近く明治になつてからでも十二年十二月二十六日の日本橋箔屋町からの出火及十四年一月二十六日神田松枝町の出火には何れも一萬戸以上を燒失した。昨冬以來の大火も中々多く、十二月には牛込市ケ谷谷町と早稻田の鶴巻町に大火があり、本年になつてからは三月二十三日には本郷赤門前の大火、三月二十六日には二萬千坪を燒失した新宿の大火、四月六日には淺草の大火で二萬五千坪を燒き拂つたといふ風に年々の火災は實に夥たゞしいものである。而して斯の如き火災はたゞに東京だけではなく、木造建築物より成る吾國の諸都市は何れも同様の災害を被つて居

る。殊に例年三、四月の交は東北地方の都市に大火が多く、本年も四月十四日函館の大火には二千三百戸を失ひ、五月一日苫小牧では千二百戸を燒失したといふ情態なのである。

●一人一年の損害金三圓

警視廳の統計書に依れば東京市内の出火度數は

大正三年	三七四回
大正四年	四一五回
大正五年	三三五回
大正六年	四二五回
大正七年	三八三回

で、之を平均すれば一ケ年に三百八十六回四分、丁度毎日一回づつ火事があるといふことになる。又其の燒失棟數は東京市内だけで

大正三年	一〇七七棟
大正四年	一八一四棟
大正五年	八二三棟
大正六年	一三二一棟
大正七年	一〇〇二棟

之を平均すると一年千二百七棟四分となり、毎年千軒程の燒け出されが出來る譯になる。又警視廳の調査に依る建築物其の物丈けの損失は

大正三年	一、二三四、四七七圓
大正四年	一、二〇五、一五九圓
大正五年	一、一五二、五七六圓
大正六年	三、八五九、一二四圓
大正七年	一、一八二、五八八圓

一年の平均額百七十二萬六千七百八十五圓、これに家財道具等の損害を加ふれば少く見積つて年三百五十萬圓、これは其の當時の時價なるを以て之を現在の時價に換算すれば六百萬圓になることゝ思ふ。即ち東京市民は老人子供に至る迄平均して一人一年に時價三圓の財産を火災の爲めに失つて居るといふことになる。耐火構造の建築物を以て都市を形成して居る所の歐羅巴諸國の都市に就て見れば、千九百〇四年に於ける一人當り一年間の損害は

巴里	九四錢
フランクフルト	六二錢
バーミンガム	八二錢
シエッフヰールド	三六錢
ツーロン	一一〇錢

ブレーメン　　七六錢

といふ風に全く比較にならぬ。たゞ吾國に似て居る木造建築の國なる亞米利加では一人一年の損害二弗半に達するといふことである。東京で三圓といふ損害數は小なるが如きも、之を積つて見れば甚大なるものとなり、且之を歐米諸都市の損害額と其富の程度とを比較考慮して見れば、吾國の市民は火災の爲めに年々馬鹿馬鹿しい損害を被つて居るものと云はなければならぬ。

●歐羅巴の都市には火事の延燒は殆んどない

然らば斯の如き著しい相違は何に基いて居るのであらうか、これは申す迄もなく歐洲の諸都市は何れも耐火構造の建築物で出來て居るのに吾國都市の建築物は殆んど總てが木造建築物なるが爲めに外ならない。此の事は常識で考へても明瞭な事であるが少しく具體的に考へて見たい。先づ火事の度數に就て見ると次表の通り

年次	出火度數	人口	人口千人ニ對スル一年間出火度數
大正三年	三七四回	一、七一一、一九八人	〇・二二回
大正四年	四一五回	一、七五九、九九九人	〇・二四回
大正五年	三三五回	一、八二二、五六〇人	〇・一八回
大正六年	四二五回	一、八八一、一二五人	〇・二三回
大正七年	三八三回	一、八九七、九〇二人	〇・二〇回

（出火度數人口共警視廳統計ニ依ル）

人口千人に付一年平均〇・二回位なものに過ぎない。然るに亞米利加で調査したものに依ると、歐洲大都市の出火度數は人口千人に付一年平均〇・八六回、米國諸都市の平均は四・〇五回といふ事である。尤も前記警視廳の統計に表はれて居るものは警察で發見したもの丈けなるを以て實際の回數はもつとずつと多いことゝ思ふ。然しながらそれにしても歐米諸都市の出火度數とは比べものにならぬ。日本の市民は火の用心が上手なのである。裏面から見れば日本人は昔から火災の恐るべきことを知つて火に對して特に用意周到なのかも知れない。木造家屋に生命財産を託して居る吾市民は常に火災に脅かされ、火の用心火の用心と謂ふて常に之に意を注いで居なければならない。誠に厄介なる事と云はなければならぬ。

次に一度起つた火事が如何なる結果に終るかを考へて見ると、東京市では次の様な情態になつて居る。

年次	燒失區別 延燒	不延燒	即時消止	計
大正三年	一一八	五八	一九八	三七四
大正四年	一二一	二八	二六六	四一五

大正五年	七九	四一	二一五	三三五
大正六年	九一	三四	三〇五	四三〇
大正七年	六二	四一	二八〇	三八三

即ち五年間出火度數の合計は千九百七回で其の内四百七十一回が延燒を起して居る。言ひ換へれば平均して出火度數に對して二割三分六厘丈けは延燒を生ずる割合になつて居る。然に歐洲諸都市では火事は上記の如くに甚だ多いが隣家へ延燒するといふことは殆んどない、曾て一八九二年に亞米利加で各國に駐在して居る領事の手を經て此の狀況を調査したことがあつて、其の報告を綜合したものがある書物に掲載せられて居る。それを簡單に記して見れば

アーヴル、ルアン、ミラノ、ローマ、ブルクセルス、アンヴエルス、リーヅ、シエツフヰールド、ブリストルでは一八九〇年に多數の火事はあつたが何れも火元だけが燒けたので隣家へ延燒したものは一回もない。

ドレスデン、フヰレンツエ、ヴヰーン等では火事で燃えたのは火元の床だけで階を異にした所へさへも延燒はない。

ロンドンでは一八八九年中に二千八百九十二回の火事があつたが隣家へ延燒したのは僅かに六回丈けで、殘りの二千八百八十六回は火元の家丈けでとまつたのである。

ハンブルグでは一八九〇年中に六百八十二回の火事があつた中で六百五十九回は火元の階丈けしか燒けず、六百六十九回は火元の家丈け、ただ十回丈けが隣家に延燒した。而して隣りの家を燒いて更に其の隣り即ち火元から一軒置いた隣り迄延燒したことは一八四二年以來未だ曾てない。

グラスゴーでは出火度數五百〇四の中十四回を除くの外全部は火元の階丈けで止まつた。

ローマには一八九〇年中に三百二十八回の火事があつたが、何れも大體に於て火元の室が燒いたばかりで隣室に延燒したことはない。

ヴヰーンには火事で隣家に延燒したといふことは未だ曾て知られて居ないのみならず、ちがつた階へ燃へ移つたといふとも殆んど聞かない。斯の如き防火上完全なる結果を得て居るのは、建築物が耐火的なること相當なる消防設備がある爲めとであつて、其の消防設備は五臺の蒸氣ポンプと多くの手押しポンプとより成つて居るが、此の蒸氣ポンプはめつたに使つたとがない。

これ等の事實によつて見れば日本や亞米利加で火災の損害の多いのは全く延燒が多い爲めに外ならな　とがわかる。日本ではみんなが注意をして火事を出すことか少いにも拘らず、喫

近所から火事が出れば勿論少し風があれば一町、二町乃至十町も先に居ながら荷物をかたづけて燒けた場合の用心をしなければならないといふ情態にある。これが爲めに人々の生活が脅かされることは實に尠なからざるものである。

●火災防備の方法は如何

然らば以上述べ來つたが如き火災の著しい損害を豫防するには如何にしたらばよいか。これは云ふ迄もなく燃えない家を造るのが第一である。燃える樣に出來て居るものはいつか一度は燃えるべき運命にあるものなることを深く考へなければならぬ。尤も如何なる原則にも除外例はあるもので、奈良の法隆寺は建設以來一千三百年未だ一回も火災の厄に會はないといふことである。然しながらこれは特別なる異例、世界唯一つの特殊なる場合であつて、この建築物が國寶として出來得る限りの防火施設を講せらるゝとと思ふが、それにしても未來永遠に燒けないといふことは恐らく誰でも保證することは出來まい。何といつても火災防備の第一策は燃えない家を造るの外はない。建築物が耐火構造でない場合に火災に依る損害を輕減せんとする方法にも種々ある。數箇の例を擧げて見れば、火の用心を嚴重にして出火度數を少くすること、浴室臺所の如き火災の原因となり易き場所の位置構造に對して特別の注意をすること、家の中に消火器を備へて火の燃え上つた時分に早速之を用ひて大事に至らしめない樣にすること。消防の施設を充實して一度起つた火災を出來得る丈け早く消し止めること、防火壁を造つて家屋の延燒を少くすること等は其の重なるものと思ふ。然し何としても建築物自身を耐火的に造ると云ふことが火災防備の根本策で、以上に述べた樣な方法は何れも其の足らざるを補ふ丈けの手段にすぎないことを記憶して居なければならぬ。火の用心、夜警、消火器の如きは多く人事に關することで平常から責任者を定め、其の組織を完全にし各部署を明かにし、消火器の位置用途を暗んじ、其の修理保存を怠らず、常に軍隊的精神を以て訓練して置かなければ、一朝事あるに臨んで徒らに混雜に陥つて其の用をなさないかもしれない。人事常に欠陥ありで、如何に夜番を置いても夜中寸時の間斷もなく隅から隅まで見張つて居るわけには行かない。火の用心にしても既に前に述べた通り、日本人は外國人に比べて著しく火の用心が上手になつて居る。火の用心に對しては既に著しく神經を使つて居る。更にこの上こういふことに腦力を使ふのは堪えられるものではない。火の用心甚より必要なるとである、消防設備の充實最も可なるに違ひはない。然ながら全然かういふとにのみ頼つて其根本策なる建築物の耐火といふとを閑却したならば、到底根本的に火

災を防過するとは出來ない。消防の施設は文明の進歩と共に著しく進歩し又進歩しつゝある。昔の消防は手押しポンプで井戸や河から水をとつて居たのが蒸氣ポンプとなつて馬が之を引く様になり、水道が出來れば市街の所々に消火栓を設けてホース丈けを運搬すれば間に合ふ様になつた。又近頃は自働車ポンプが出來て火の燃え上つたのがわかれば極めて短い時間で其現場に到達することが出來るやうになつた。かく消防の設備が進歩して來るが、然し乍ら世の文明の進歩と共に火災の原因となる事項が益々増えて來る。昔は漏電による火災はなかつたし、化學的藥液による火災もなかつたに違ひない。又自働車が出來ればガソリンの發火といふことも起つて來る。かくして出火度數といふものは都市の人口集中と其の生活の向上とに伴つて次第に増加して來る傾向がある。而して此の増加して來る出火に對應する消防の施設は、如何に進歩しても其の有効なるのは通常の場合であつて、二三特別の場合には消防の施設は殆んど其の效果を發揮することの出來ない場合があることを注意しなければならない。斯く云つても決して消防の施設は無益といふのでない、否これも大に必要なるものである。其の大いに有効なることは消防の設備のある東京市内がこの施設の不完全なる郡部に比して其の延焼度數と出火度數との割合が著しく低いことでも明かである。只私の云はんとするのはそれは通常の場合であつて時には效果を奏し得ない時もあるから、多數の生命財産を蔵して居る都市では豫め其の時の用心もして置かなければならないといふ意味なのである。

●烈風と火災

消防設備が奏效困難になるといふ場合の一つは烈風時に起つた火事の時である。強い風は時々吹く。一秒時間の風速十米十五米といふ如き程度の風は一年を通じて中々多い、又他方に火事を出すといふ機會も屢々ある。警視廳の統計にのつて居るものでも東京市内には一日一回に當る。警察の知らない程度の所謂ボヤをも計算に入れゝばもつと多いにきまつて居る。此の時々ある所の強風と絶えず起るボヤとが結び付くことは可能なとであつて、其の最も甚しかつた例は前に述べた明暦の大火である。それ迄に行かなくとも相當の強風時に起つた火炎はいくらもある。先頃の新宿の大火淺草の大火は其の例と云へる。大正六年十月一日東京に大暴風雨があつて人畜、死傷、家屋の流失を生じ、倒壊したり破損したりした家が大變にあつたことは今猶記憶に新らたなることである。あの當時は大雨が伴つたが爲めに殆

水家屋や水の出た爲めの損害が可なり多かつたけれども、よく考へて見ればあの時雨が伴つたといふことは東京市民にとつては如何に幸なることであつたかわからないと思ふ。あとで當夜の出火を聞いて見ると其の箇所は實に十二箇所に及んだといふことである。其の時は連日來の降雨に木造の建築物が充分に濕つて居たのと、當時大雨を伴つたが爲めに唯一つ越中島の工業試驗所の場合を除くの外は大事に至らずにすんだが、之が若し雨を伴はない暴風であつたならばどうであらうか。新宿、淺草の大火の如きもの否もつともつと大きなものが市內數箇所から起つたかも知れぬ。今日想ひ出しても誠に戰慄すべきことである。

先頃の新宿と淺草の大火には私も其の現場へ行つて見たが、あの風、あの火足を見ては、あの火事をあの程度に止め得たのは全く消防に盡力する人々の特別なる努力といふの外はない。新宿の火事の如きはどうしても靑山の原迄は燃えて來ること丶思はれた。元來あゝいふ火事になつてはまるで燐付の如き家屋のみの日本の都市に於ては其の延燒を止むることを消防施設に依賴するのは無理な話だ。それを僅かに二萬坪の燒失で止め得たとに對しては、吾人は消防の局に當る人々に對して感謝狀を奉る必要があると迄考へた。然るに新聞紙の傳ふる所に依れば警視廳の消防部長は淺草の大火後大火をひき起した責を負ふて進退伺を提出したとのことである。私窃かに思ふに日本の消防施設をあづかる人ほどつまらないものはない。少しく專門的に考へて見れば自ら殊勳に値する程の仕事をして置きながら尙且つ進退伺を出さなければならないとは、よく考へて見れば市民が無理なのである。消防の力の及ばないと迄を之に期待して居るのにその無理な仕…に從來する人のあるのが不思議な位だ。試みにあの新宿の大火の時又は淺草の大火の時に、市內でもう一箇所別な所から火事が出たことを考へて見たらどうであらうか。如何に勇敢なる消防夫ありと雖其の延燒を如何ともすることが出來なかつたに違ひない。燒ける樣に出來て居る家は當然燒き盡くさるべき運命にあることは疑ひない。市民は斯の如き場合をも考へて徒らに無理な注文をすることを止めて、其の出來得る限度に於て自ら其の生命財產を護る方法を講じなければならないのは當然の話しである。

●地震と火災

烈風時の火災にもまして都市生活をして居る吾々が恐るべきものは地震にともなつて起る火災である。地震は地下に絕えず起つて居る歪みが集積して遂に激動を起し、それが地表に傳は

つて來るもので其の大地震の如何に恐るべきものなるかは說明を要しない。然るに不幸にして日本には地震多く、世界の地震國と稱せられて居る、日本の中でも東京大阪の如き大都市は比較的に地震の多い所で東京の例は東京市史稿變災篇に詳しく記述せられて居る、其最も大なるものは安政二年十月三日の地震で死者七千人、江戸市中を震駭せしめたことは今も云ひ傳へられて居る、地震其のものゝ損害は別として、地震があれば家が潰れ家が潰れゝば火災が起る、此火災に依る損害は實に恐るべきものがある、安政の地震の時は幸にも無風であつて其延燃すべき機會は極めて少なかつたに拘らず十四町四方を燒き拂つたといふことでも地震後の火災が如何に恐るべきものなるかゞわかる、最近の例では明治三十九年四月十八日午前五時米國桑港に起つた地震の結果はどうであつたか、この時の地震其のものに依る損害も可なり大なるものであつたが此は世界を驚かす程のものではなかつた、然しながら此地震の爲め電線の切斷、其剝れ、瓦斯管の破裂、煖爐の火烟等が原因となつて無數の火災を起し、十八日より二十日迄三日三晩燃え通して遂に延燒四平方哩に及び空前の慘狀を呈し此が爲めに失つた財産は三億五千萬弗と評價されて居る、元來此地震たるや大きかつたには違ひはないけれども其の強さ即ち物を破壞する力は然程のものではなかつた、

日本で考へて見れば度々あり勝のものに過ぎない。江戸の安政の地震などとはとても比較にならない弱いもので明治二十七年東京の地震の二倍位、大正三年櫻島の爆發の爲めに鹿兒島市に起つた地震の強さの一倍半位、同年秋田縣の地震の時の仙北郡強首附近の強さに比ぶれば半分又は其の以下にしかならず、明治四十二年近江の地震の長濱とほゞ似たもの明治二十四年濃尾の地震の時の名古屋よりは少し弱い位の程度のものであつた、夫にも拘らず二萬五千の家屋を燒失して三億五千萬弗即ち七億圓の損害を生じたのは當時の桑港は木造家屋が大部分を占め鐵骨造煉瓦造石造等火に堪える建築物は燒失した二萬五千の中で僅かに三千位しかなかつたことゝ地震の爲めに水道の水源地附近に於て水道鐵管が破壞して全く其の用をなさなくなり、消防の施設はあつても全く手の出しやうがなかつた爲めに外ならない、今の世の中に水道設備が消火の目的に使ひ得なくなつては、全く何とも仕方がない、桑港にはまだ火に燃えない家が相當にあつたからよい樣なものゝ、こんなことが日本の都市にあつたらばそれこそ大變である、手をつかねて全市焦土に化するのを見ているより外はない。地震の爲めに水道鐵管が破壞したり其の繼ぎ目がはずれたりすることは屢々あることでこれが爲めに大火を起したり、幸に大火事にはならなくともその爲めに傳染

病がはびこつたりした例がある、相當に大きな地震があれば水道は先ず用を爲さなくなると考へて置くのが安全なことである。そうするといふと將來東京のやうな所に水道鐵管がこはれる程度の地震があるかどうかといふことが問題になる、斯の如きことは全くの豫言であつて未だ地震に對する學問が將來を確然と想像し得る程進んで居ない、即ち大地震の有無は全く不明のことゝ云はなければならない。從つて地震國と稱せらるゝ吾國で然もあまり地盤の丈夫でない所にある都市では先づ大地震があり得ることゝ考へて之に對する準備をして置くことが最も當を得たことに違ひない、著しい災害あり得ることなのに少しもそれに對する準備がないといふことは全く近代の文化生活といふことを知らないやり方であつて大なる怠慢と云はなければならない。地震學の泰斗たる大森理學博士が先月の初めある新聞に東京に於ける將來の地震の強さに對する意見を發表して居らるゝそれには安政の大震は江戸の直下から起つたもので、激震は大體に於て同一箇所から再發することはないからあの如き大地震は近き將來に於て東京には先づないものと考へてよかろう、然しながら下町の土地柔軟なる所では鐵道線路、橋梁、電線等と害し水道鐵管は殆んど全般に亙りて破壊せらるゝが如き程度の地震はあるかも知れないといふ意味のことが書いてある、其の

後段に對しては私も全く同感で、都市生活をして居る以上當然かゝる際の準備を整へて置かねばならない、若しも萬一準備なきに際して此の災害が起つたならば假令幸にして家屋の倒壊を免れても火災の厄をも併せ免るることは頗る困難なりといはなければならぬ。火事に會つても火災保險にはいつて居れば其の心配はないと考へる人があるかも知れないがそれは大なる間違である、火災保險は通常の場合の火災の時の保險であつて地震や噴火の爲めに生じた損害は其の原因の直接なると間接なるとを問はず保險會社は其の責に任じないといふ意味のことが保險契約證に明記してあるのが通常の樣である、して見ればこれも地震に伴ふ火災に際しては當にならないのみならず、假令個人としては保險金を得たとしても大きな目から見れば國家の蒙る損害は甚大なるものと云はなければならぬ、吾人は斯の知き時に於消防の威力に信賴することは出來ない、出來得限り燃えない家を建てゝ不時の災害に備ふるの策を樹てゝ置かなければ如何なる後悔をしなければならぬかも知れない、日本人はよく天祐といふ言葉を用ふるが、怠慢なるものに天祐のあろう筈はない、最善を盡して而して後に初めて天祐を期待すべきである。

●耐火構造の建築に要する經費

以上述べ來つた所を綜合して考へれば都市の建築物は之を耐火的ならしめて根本的に火災に因る大なる損害を防遏しなければならないといふ結論に達することになる、そこで火災建築が如何なるものなるかが問題になる。元來建築物に對する災害は種々雜多あるけれども、其の比較的大なるものは火災、震災、風害、蟻害、腐朽等である、昔建築物の構造方法が進歩しない時代には此等の災害を防止するには頗る困難を感じたし、現在でも昔からあり來りの方法を用ふる場合には中々容易でない、即ち火に對して比較的に安全なるものを造らんとすれば、地震に危險になつたり、蟻害を起し易かつたりし、又耐震といふ事に重きを置けば火災の延燒を速かならしむる嫌があつたりしてどうしても全部の災害に對して抵抗力の強いものを造ることが出來なかつた、然るに文化の進歩と共に茲に最も都合よい材料 構造の方法とが生れて來たので鐵筋コンクリート構造といふものが即ち是である。鐵筋コンクリートといふのは細い鐵の棒で筋を造りコンクリートを肉として壁體、床、屋根、階段、等建築物の主要構造部を造り上げたもので、其の起源に對しては相當に議論はあるけれども一八六七年の巴里の博覽會に此の材料構造の出品があつて一般人士の注意を惹いたのが世に知らるゝに至つた初めと考へて差支へない、これを見た獨逸の學者は早速此の構造の基く原理の研究を初め各種の實驗を經て、一八八六年にある雜誌に之を發表したのが鐵筋コンクリートの理論を解決した最初である、斯く此の構造は極めて新しいもので、初めて世間に識られたのが今から五十四年前、其の理論がものになつて來たのが僅かに三十五年前に過ぎない、こんなに新らしいものであるにも拘らず其の構造の方法が最も完全で然も經費が比較的に廉なるが爲めに非常な勢で全世界に廣がり、どこでも從來の構造の方法を驅逐して極めて一般的に用ひられつゝあるし、日本でも十數年以前から所々方々に應用せられ此頃丸之内附近に出來る家は此の構造によつたものが最も多い。鐵筋コンクリートの原料となるものはセメントと砂と砂利と細い鐵の棒とであるから之を得るに困難なるものは一つもなく、本來から燃えない耐火性のコンクリートで造るが爲め火災に安全なるのは勿論、其の構造施工の方法さへ相當ならば地震に對しても木造や煉瓦造の比ではなく、風にも丈夫、永久的のものであるから修繕維持の費用がかゝからない、又鼠がコンクリートを喰ひ破ることが出來ないから在來の土藏のやうに鼠の穴を知らないで火災の時に大事を引き起すやうなこともなく蟻害に對しても最も安全と云ふ風に現代の文化の程度では最も進歩したる構造の方法で、此の方法が生れて以來前に述べたやうな各種の災害

の原因を除かんとするが爲めに起つて來る矛盾がなくなつた、此の方法は同時に各種の災害を防止することが出來る所の最も便利なる構造の方法である、然かも構造が耐火的である關係から火災保險の率も木造の半分位に過ぎない。

斯の如く考へ來れば鐵筋コンクリートは宜しいには違いない、殆んど理想的なることに疑はない、然しながら其の建築費は如何、在來の木造に比較してどの位高いものかといふことが直ちに問題となる、此の問題に付ては先頃內務省と警視廳とが共同で出したポスターにもある通りで大體に於て木造の五割增に過ぎない。元來物の價格を比較するには先づ比較すべき兩者の質と量とを同一程度に置いて之を比べなければ殆んど意味をなさない、安かろう惡かろで何にもならない、本當に安いのではない、然しながら鐵筋コンクリート造と木造とは都合の惡いことには斯の如き本當の意味で之を比較することが出來ないのである、何故かといふと如何に構造に注意し如何に金をかけて見ても普通の煉瓦造や木造は鐵筋コンクリート造と同じ程度の强さを有せしむるやうに造ることが出來ない、從て甚だ意味のないことであるが一方は强固安全なる鐵筋コンクリート造、一方は缺點だらけの木造と斯ふ對立させて通常の情態の建築費を比較する外はないのである、誠に已むを得ない次第で此の意味に於て少しく具體的に建築費の關係を述べて見やうと思ふ。大通りにあるやうな會社銀行事務所の類を木造で造るとすると如何に儉約しても延坪一坪二百圓はかゝる、少しく裝飾でもつければすぐ二百五十圓、三百圓となる、これを鐵筋コンクリート造とすれば三百圓で相當なものが出來る、即ち約五割增なのである。又和風の店家でも大通りに面するものは前面には欅の柱や人見を使ふからこれも二百圓はかゝる。そうすれば其の五割增の三百圓で鐵筋コンクリートの洋館が出來ることになる、斯の如き種類の建築物は多く高價な商品を藏するので建築費の五割增位は何でもない、單に原價の銷却といふこと丈けを考へて見ても二三十年で大修繕を要する木造と永久的の鐵筋コンクリート造とは比較にならぬ。斯くして商店會社の如きものを新築する人には是非此の鐵筋コンクリート造を御薦めしたい。又木造の洋風住宅は事務所に比すれば少しく高くかゝるのが常で、坪二百五十圓位はかゝる、これもやはり裝飾をはぶき實質的のものにすれば鐵筋コンクリート造として三百圓あれば出來る、又世間には檜造りと稱して極めて贅澤な家を造る人が可なり多い。檜造りは少しく其の柱や木質に氣を附ければ坪四百圓や五百圓はすぐかゝる、尤も斯の如き家を造る人は富の程度の高い人で趣味の上から家を造るので、建築費の如きは問題でない、檜

造りの香芳しき、ふつくりした軟かき趣にも捨て難い所があるに違ひはない、從つて斯の如き人に全部檜造りは止めて鐵筋コンクリート造の洋館に住めといふのは無理かも知れない。たゞ然しながら本當の住家として起居する所はやはり是非安くて安全なる鐵筋コンクリート造と爲すことを御薦めしたい、元來家屋は吾々人類の生命財産を依託して置く場所であつて殊に夜中眠つて居る間の如きは全く自分の生命をあづけてあるやうなものである安心して眠り身心の休養を全からしむるには安全なる家に住むに限るのである。以上住宅に關してはかなり程度の高いものに就て述べたのであるが、も少し下つて檜造は高いから出來ない、せめて座敷廻りは檜位にし臺所などは杉の普通ものとしてやらうといふ程度の人は世間に非常に多いことゝ思ふ、此の程度の家は現今延一坪百八十圓位である、斯の如き家を建てんとする人は私の考ふる所によれば別に餘財があるといふ譯ではなく自分の家を持ちたいといふ一種の趣味から起つて居る場合が多いと思ふ、從てこういふ人々には建築費五割增といふことは中々大變なことである、五割も高くては如何によい家でも到底造れないことになるかもしれない、故に此の程度の人には鐵筋コンクリート造の家を御建てなさいと薦めるのは困難である、たゞ然しながらこういふ人が家を建てんとするに當つたならば一つの事項を考へて貰ひたい、それは今自分の建てんとする家の建坪を二割なり三割なり儉約することが出來るかどうかといふことである、若しも二三割の坪數の儉約が出來れば鐵筋コンクリート造として其の建築費は極めて接近して來るのである、即ち先づ考ふべきことは少しく窮屈な思ひをする代りに安全なる家に安心してゆつたりと住むのがよいか、廣々と住つて其の代りに地震に驚き、風に騒ぎ、近所に火事があると家財道具を片づけるといふ風にして暮して行くのがよいかといふことである。此の何れがよきかは全く人々の考ゑ次第で決して強いて耐火構造の家を薦める譯には行かない、たゞ中には無意識に在來の習慣に依て木造を建てる人も隨分あることゝ思ふから最初に以上のことをよく考えた上で其の構造を定めるのが宜しいと云ふのである。

●歐米諸國の都市何れも耐火構造を強制す

歐米諸國の都市を見た人は誰でも都市の建築物が大體に於て煉瓦造か石造又はコンクリート造で日本の都市とは全く趣を異にして居ることに氣が附くに違ひない、此の事は外國へ行つて見なくとも案内記の寫眞でも見ればすぐに明になることである、而してこれは一寸考へると外國の町は昔からみんな煉瓦や石で

られて居たので自然に耐火的のものになつたかの樣に思はれるのであるが事實は決してそうではなく、詳しく調べて見ると歐羅巴の 都市では何れも市内の建築物には法規を以て耐火構造を强制して居るのである、從て木造は建てたくとも原則として許されて居ないから建てることが出來ない、それで木造家屋がないのであつて決して自然に放任されてあつて現在のやうな防火的 都市が出來た譯ではない。

英京倫敦が現在のやうな家ばかりになつた經過は余程面白い點があるから以下に少しく述べてみよう、十二世紀の頃の倫敦の有樣を書いたものゝ中に倫敦に於て最も恐るべきものは醉つぱらいと火災なりといふ意味の言葉がある、當時の倫敦に於て火災が頗る恐るべきものと考へられて居つたことがわかる、當時の倫敦の家屋は大抵木造で屋根は藁か葭で葺いてあつた、富んだ人は煉瓦造や石造をつくつて居つたがそれは極めて僅かしかなかつた、かくて一一八九年には火災の延燒を少なからしむるが爲め隣り同志の家を區劃する爲めの防火壁を土地の境界線に跨つて建てることを可能ならしむる規定が出て居る、一二一二年七月一日の大火後には料理店は石造でなければならず、草葺屋根は八日以内に漆喰を以て之を塗るべしといふ規定を出し且つ生命と財產とを愛するものは屋根を瓦葺とせよと云ふて居る、斯くして一六六六年の大火に襲はれた倫敦は全く之によつて覺醒し、此の大火の後ちきに倫敦市内及近郊の建築物の外壁は石造又は煉瓦造と爲すべしとなし、煉瓦造家屋は體裁よく持ちがよいのみならず火災に際して比較的に安全なりと宣傳して居る、斯くして此の燒けた跡に再建するものは勿論、其の他の建築物も漸次に木造をやめて終に今日の如き市街を作つたのである。倫敦市の人口は一八〇〇年に於て猶百萬に充ちて居なかつたのであるから當時の人口は恐らく五十萬にも足らないものであつたかも知れない、倫敦はかくあまり大きくならない中に火災に目ざめて都市の防備を全ふするに至つた、よく耐火構造は結構だが日本の民度に適しないといふ議論を聞く、私は素人で財政や經濟のことはよくわからないが現在の吾が國が二百五十年前の英國の情態と比較して富の程度が劣つて居るものとはどうしても考へられない、獨逸や墺地利が都市に防火構造を强制したのは何れも數十年前の事で、數十年前の獨逸や墺地利程度が現在の日本より勝つて居たとはどうしても考えられなの富のい、又中には歐洲の諸國では木材が高いから煉瓦造や石造を强制してもさほどの苦痛ではなかつたろうが日本は木材の產出が豐かで其價格が著しく安いから之を耐火構造ならしむるは甚だ困難であるといふ議論もあるが、これは前に述べた倫敦に於

經過を見れば必ずしもそうでないことがわかる、のみならず亞米利加の有様は如何、如何に日本で木材が多いといつても到底米國には敵はない、現に少し大きな家屋に用ふる床梁や屋根の小屋組材は何れも米國から輸入して來たものを使つて居る、近來丸之内で新築中の郵船會社、日本石油會社、丸之内ビルデングなどの基礎に使つて居る長い丸太も米國品である、斯の如く木材多く且つ價格廉なる米國に於てさへ大都市の商業地に木造建築を許して居る所はない、之を以て見ても上の如き議論が正鵠を得て居るものでないことが明かだと思ふ。尚次に歐米諸國の都市でどういふ風に木造家屋を禁止して居るかを少しく詳しく述べて見たいと思ふ。

先づ倫敦建築法第八十四條には

木造工作物ハ其ノ構造設備及存續期間ニ對シテ主管行政廳ノ許可ヲ受ケタル團體ヲ除クノ外之ヲ建築スルコトヲ得ス但シ本法ニ別段ノ定アルモノハ此ノ限ニ在ラス

といふ規定があり、又其の附錄第一章第一條には

家屋ノ外壁ハ本法ニ別段ノ定アルモノヲ除クノ外總テ煉瓦、石其ノ他堅實ニシテ不燃性ナル材料ヲ以テ之ヲ構造スヘシ但シ高十六呎以内ニシテ且面積四「スクエアー」(約十一坪)以内ノ獨立セル小屋ハ建築公證人(デストリクト・サーベーヤー)ノ承認ヲ受ケテ本條ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

と定めて多少の除外例はあるけれども大體に於て建築物の防火構造を強制して居る。伯林では伯林建築警察令第七條及第十條に

建築ノ外壁、床ヲ支フル壁體及屋根ノ突出部ハ之ヲ耐火壁(石煉瓦、(コンクリート)ノ意)トナスヘシ(中略)

建坪百平方米(約二十八坪)以内ニシテ其ノ間口六米以下ノ家屋ハ之ヲ木骨石造又ハ木骨煉瓦造トナスコトヲ得(中略)

建坪二十五平方米(約七坪)以内ノ高三米以下ニシテ且街路及隣地境界線ヨリ六米以上の距離ヲ有スル物置、小舍、庭園ノ廊下、涼亭等輕微ナル建築物ハ之ヲ木造トナスコトヲ得(中略)

荷重ヲ負ハサル間壁ハ之ヲ木造トナスコトヲ得(下略)

ときめてある、即ち極小規模のものを除くの外は燃質材料で造ることを得ないのである。又維納では維納建築法第四十五條に於て

木骨煉瓦造及木造ハ通常之ヲ禁止ス但シ特別ノ場合ニ限リ建築局ハ之ヲ許可スルコトヲ得

と規定して居る。次に米國の都市に於ては全然木造建築物を禁止して居るのではない、然しながら其の木造建築物の許容せら

る、地區は極めて小部分で、其の大部分に付てはやはり耐火構造の建築物でなければ建築することを許されないのである。先づ紐育市建築條例第九十條及び第九十一條に次の如き規定がある。

左記防火地區内ニハ木骨造、木造又ハ燃質材料ヲ以テ構成スル建築物ヲ建築スルコトヲ得ズ本條ノ規定ニ違反セル建築物ハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

(區域略)

左記郊外地區内ニハ木骨造又ハ木造ノ建築物ヲ建築スルコトヲ得但シ左記各號ノ一ニ該當スルモノハ之ヲ木骨造トナスコトヲ得

一 總宗數十五以內、建築面積と敷地面積トノ割合百分ノ八十五以內ニシテ且少クトモ一方ニ空地ヲ有スル住宅

二 建築面積六百平方呎(約十七坪)以內、高十五呎以下、敷地境界線ヨリ四呎以上ノ距離ヲ有スル一階建厩舍又ハ車置場ニシテ一家族用又は二家族用ノ家屋ト同一敷地內ニ建築スルモノ

(區域略)

然してこの區域はマンハッタンに於ては其の殆んど全部が防火地區として指定せられ、殘餘の極一部が郊外地區となり防火上無制限の地區はマンハッタンにはないのである。市俄古市に於ても全市を三つの地區に分ち其の制限は可なり嚴重に定められてある。即ち同市條例第七百十八條に

市俄古市內ニ地區ヲ指定シテ防火地區トナシ別ニ臨時防火地區ヲ定ム

木造家屋ハ防火地區內ニ之ヲ建築スルコトヲ得ス

住居又ハ商業ノ目的ヲ有スル木造家屋ハ建築委員會ノ承認ヲ受ケ之ヲ臨時防火地區內ニ建築スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ建築委員會ニ提出スル申請書ニハ當該敷地附近ノ地圖、平面圖、設計圖及其ノ敷地ノ面スル街路兩側ニ於ケル附近家屋所有者大部分ノ承諾書ヲ添付スヘシ

臨時防火地區內ニ建築シ得ヘキ住居又ハ商業ノ目的ヲ有スル木造家屋ノ高ハ四十呎ヲ限度トス

と定めてある。次に少しく小さい都市の例を揭げて見ると、ミルウォーキーに於ける防火地區は一種類丈けで、同市條例第四七五條及第四七七條に次の樣に規定せられて居る。

防火地區內ニ於ケル建築物ノ構造ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一 高八十呎以上ノ建築物ハ總テ耐火材料ヲ以テ構造スルコト

二 總テノ建築物ノ外壁及主要ナル間壁ハ煉瓦、石、瓦、「テ

ヲカツタ」又ハ「コンクリート」ヲ以テ構造スルコト
三 鐵骨造ノ帳壁ハ煉瓦、石、瓦、「テラカッタ」又ハ「コンクリート」ヲ以テ構造スルコト
四 二階建以下ノ住家ハ煉瓦、石、瓦、「テラカッタ」、「コンクリート」、又ハ「セメント」漆喰ヲ以テ外部ヲ被覆セル木骨造トナスコトヲ得
五 屋根ハ耐火材料ヲ以テ葺クヘシ

●江戸時代の防火制令と明治初年の建築政策●

以上の事實に依り歐米の諸國に於ては都市の防火策に重きを置いて如何に力を盡して居るかゞ窺はれる。吾國に於ては現在都市の防火といふことは殆んど顧みられて居ない狀況で火事で燒ければ其のあとへ前と全く同じ樣な木造を建てゝ又火事に燒く、燒けては建て、建てゝは燒くといふ實に馬鹿げた情態である、吾國でも昔から都市の防火に關する制令はないことはない、其の江戸時代のものに關しては大藏技師の大熊工學博士が詳細なる調査をして先頃之を發表して居る、卽ち萬治三年の大火後には民家の茅葺屋根の上に土を塗らせ、享保五年には從來町家に禁止して居た土藏造り、塗り家、瓦屋根を許して反つて大に之を奬勵して居るし、寛政四年には大火後の燒け跡に建てる家はなるべく瓦葺にせよといふことにした。斯の如く防火的の構造をなさしむると共に一方恩借金の制を設けて之を助成した、恩借金といふのは武家町人各其の分限に應じて十箇年位の年賦償還の方法に依て幕府が金を貸したのである。斯くして在來は全部が普通の木造であつたものが表通りの商店は大部分土藏造や塗家となつた、當時普通の木造と土藏造りとの價格の違ひは現在木造と鐵筋コンクリートとの割合どころではなかつたので、それを考へて見ても今日耐火構造の家を建てるといふことは經濟上極めて容易なるものといはねばならない。

明治になつてからも五年二月二十六日祝田町より出火して東京の中心地三十四ケ町を燒き拂つた時、政府は大藏省に建築局を設け、京橋以南の市街の區劃を整理して此處に煉瓦造家屋を建築することを計畫し、英人技師に諮りて先づ銀座尾張町竹川町の大通りより之を初め明治十年には濠端比丘尼橋南方山下町丸屋町邊に至る迄煉瓦造の建築物が落成した。斯く明治五年の當時集團的に煉瓦造家屋を造つたことを思へば現在耐火構造の家を建てる資力がないとはどうしても考へられない。又明治十二年十二月二十六日箔屋町より發火して一萬六百十三戸を燒失したを機として防火線路の制を設けて重要なる街路の西側に建

築する家屋は煉瓦造、土藏造り、及石造の三種に限ることゝし明治十四年二月二十五日に之を布達したことになつて居るがいつの頃からか効を失つたやうである。

●結論

以上論じた所簡單ではあつたけれども、火災の損害の程度及其の如何に都市生活を脅威するものであるかといふこと、火災防備の方法は數あれども其の根本策は火に燃えない家を建てるに在ること、外國諸都市の實例、現在吾國の富の程度に於て經濟上耐火構造の家を建てることの不可能ならざる所以等の大略を述べたつもりである、尙家屋は人類生活の必需品たる衣食住の一つであつて、其の質の良否が人類の生活に影響する所甚大なることは云ふまでもない、古聖の言葉に養は身を移し居は氣を移すといふことがある、其の居は氣を移すとは堅牢安心なる家屋に住んで居る人は自から其の精神がゆつたりとしおちついた大きな人が出來、危險な少しも注意を怠ることの出來ない樣な家に住んで居る人は自からこせついて神經過敏になるといふことをも意味して居るに違ひない。

斯く考へ來る時は、往時は、完全なる構造のなかつた時代ならばいさしらず、世の文明が進歩して安全にして衛生にも適する立派なる構造法があり、然も之を建つることが經濟上不可能なるに非ざるに世人が之を顧みない、のみならず昔相當に大なる努力を以て造つた土藏造迄が單にいくらか建築費が安いといふことだけで、徒らに體裁のうわべだけを飾つた不健質の木造家屋に次第に變りつゝあるのが吾國都市の現狀である。誠に能はさるに非ず爲さざるなりといふ言葉の通り嘆ずべきことである。

火事に燒け出された人は痛切に其の損害の甚大なるを味ふけれども他人は何とも思はない、對岸の火災とはよくいつたものである。又一度火災の厄に會つた人でも少しく時日がたつとすつかり忘れてしまふ、咽元過ぐれば熱さを忘れるといふことは日本人の通弊らしい、斯の如き次第では何時迄たつても都市の防備の整ふ筈がない、どうしてもある規約の元に市民一同御互に努力する外はない、即ち政府は外國都市の何處にでもあるやうに防火地區を指定して、燃えない建築物を強制し、市民は法規を目印として之に向つて進む外はないのである、それには都合のよいことには昨年十二月から實施せられた市街地建築物法の中には内務大臣が防火地區を指定することが出來ることになつて居るし、其の地區内の建築物の構造の制限も市街地建築物法施行規則の中に規定せられてある、即ち法規上の準備は整つて居る、やろうとすれば出來る樣になつて居るのである。尙一

つ注意するを要するのは假令防火地區の指定があつたからとて其の地區の建築物が耐火的になるには相當に永い年月がかゝることである、家其のものゝ建築に相當の期間を要するのみでなく、現在ある木造の建築物を直ちに改造することは出來ないから少くも十年はかゝることになる、建築物の問題は他の事と違つて遡時には出來ない、地震がありそうだから耐火建築にしやうとか、戰爭が始まりそうだから耐火構造にしやうとかいつてもそれは全く無理なとになる。從つて思ひ付いたら少しも早く之を實行しなければならない、近來かゝる事項の立案の任に當る内務省と其の執行の衝に當る府縣廳とが大に此の事に力を入れて居るのは市民の爲めに逸すべからざる好機會である、市民は出來る丈け之に應援することにしどうかして一日も早く之を實施して都市の災害を除去すると共に現代の文明に適應する文化的の生活を味はい得るやうにして行きたいものである。(大正十年六月二十三日稿)

都市の耐力と大建築

高松政雄

高松氏は永く曾禰中條事務所に在りて數多の建築の實際問題を解決せられ又最近米國を視察し去る四月歸朝せられた許りの工學士である。

(1) 近代都市生活と都市問題

近代の物質文明の進歩は商工業の發達となり、其結果として人口の急激なる都市集中を來たし、勢都市の不規則なる膨脹といふ現象を生ずるに至つた。從て、こゝに自然交通上衛生上或は經濟上、保安風致上諸種の所謂都市問題を生じ、そこで都市を有機體と觀、其全體を統一的見地に立つて觀、これを組識を立てゝ科學的に研究するの必要が起つて來た、從て所謂文化生活の爲めに近代都市工學か必要缺く可らざるものとなつて來る事は世界を通じて近代都市にかける著しい事實である。

翻つて都市を見れば有形の都市を形成し、

(2) 都市と建築と都市計畫事業

其都市の生活を象徴する主なるものは、即ち都市の建築であつて、吾々は建築を見て其都市に於ける時代の生活の實相を見、又其の文明の程度の如何を知る事が出來る。即建築は文明の程度を示す「バロメーター」の如きものであり、又これによつて文明の健否の脈を讀む事が出來るのである。此即ち都市問題の中所謂都市計劃事業に於て建築の問題が其重要なる部分をなす所以である。

(3) 近代都市の事情と市街建築の趨勢

凡そ經濟的事情が凡ての事柄を左右する重要なる要素である事は、必ずしも珍らしい事でもなく、又新しい現象でもない、然し今日に於て殊に此傾向は著しいのである。今日に於ける地價の暴騰と建築材料の騰貴、勞働賃金の増加惹いて建築費の著しい騰貴とは、特に商業地域等に於ける會社事務所等の所謂商業建築に於て、昔の如く小會社、小事務所が小資本を以て銘々個々の小建築を獨立に勝手に樣々に建築して互に其奇を競ひ、個々の樣姿形容を恣にする事は經濟の上から言つて決して得策ではない、のみならず之を感じの上から言つても、今日では個々の小部分の建築も唯綜合的に都市の全體の美觀を形成する一部として役立つ樣に計畫せられた時に初めて其個々の美は社會的に價値が認めらる可きものであるといふ事が、多くの人に依て肯かれる樣になつて來た、今日に於ける之らの事情は從來建築に對して抱かれた一般の考を一變させたのであつて、建築は今や都市形成の重要なる一要素として、又經濟上に有利なる投資物として認められるに至つた。この傾向は都市の商業的建築に於ては、多くの小資本を集め、或は一個の大資本家が巨資を投じて、面積も大きく高さも高い集合式或は共同式の一の大商業建築(コムマーシャルビルヂング)或は大事務所建築(オフィスビルヂング)を作り、數十或は數百の會社事務所は各々その、一部の數室或は數十室を區劃して賃借する。かくして一面地價の暴騰に應ずる事が出來、又比較的低廉の建築費を以て充分に堅牢にして便利、衛生的耐火的の建築を建築し、共通の費用を以て充分に電燈、電話、配線、給水排水衛生煖房換氣汚水處分等諸般の附帶設備を完成し、そして一面其經營並管理を容易にし、同時に使用者の便利を得、併せて投資者に於て相當の收益を見得るの結果を擧げる事が出來るやうになつた。これが所謂近代經濟都市に於ける經濟建築であつて、同時に現今の時代の或る著しい特相を象徴する一の時代建築である。數年來我國の都市に於ても事務所會社等所謂商業建築に於て此種のもの丶年々増加しつゝあるのは喜ばしい現象であるが、更に重要な市街の商店の類に於ても此種の建築の續々起らん事は誠に望ましい事である。

(4) 都市と大建築

一般に都市の大部分を形成するものは建築であるが、就中かくの如き建築は勢其面積に於ても、又其高さに於ても相當に大きいものとなる。而も其性質上所謂商業區域の重要なる場所に建てられるものであるから、それが都市の交通衞生等の上に及ぼす影響は固より、その商業上に及ぼす影響、其他種々の點に於て都市の上に及ぼす有形無形の影響は非常に大きいものである、が殊に主要なのは都市の防備就中都市にとつて最も恐るべき火災に對する防備の上から言つて頗る重大なる關係を有するといふ事である。

(5) 都市の耐火力と大建築

元來都市の火災に對する設備としては消防機關の完備といふ事が重要なる事柄であるには相違はないが、然し如何に消防機關が完備して居ても、如何に道路が完全であつても、風の烈しい大火の際に於ては消防機關は案外に無力であると云ふ事實は吾々の屢々大火に際して經驗する所である。であるから假へ消防機關が完備して居てもそれを以て決して安心する事は出來ぬ。結局建築自身の耐火力に俟つを以て根本の防備策とする。從て火災に對する都市の防備としては、勢適當の場所に防火地區を設け、この地區にある建築物を防火構造として、他の火災に對する防備の薄弱なる部分を保護し、併せて同時に消防機關の運用をして遺憾なからしめ、以て火災防備の效果を全からしめるの必要があるのであるが、前述の商業地域の重なる街路は自然防火地區となるべき場所が多い、從てこの種類の大建築は勢ひ防火帶として獨り自家のみならず、他の保護をもなすべきものである。從つて都市の防火力なるものは、この種大建築の耐火力に負ふ所が頗る多いといはなければならぬ。即ちこの種の建築が十分に耐火的に構造せられて居るならば、そしてその如き建物の數が多ければ多い丈都市の耐火力は大きいといふ事が出來るのである、都市計劃の事業に於て特に保安の點からのみいつても、この種大建築の配置構造等に殊に大なる注意を拂ふ事が必要であるのは是故である。

(6) 大建築の防火設備

この種の商業的大建築、主として所謂事務所建築に於ける防火設備に就て考へるのに、まづ一般建築の防火の條件と同様、第一に發火原因の除去、第二に建築の防火設備、第三に附帶消火設備の完備の大體三つに別つて考へる事が出來るが、第一の發火原因の除去といふ事は個人の注意も大切であるが、それも第二の建築の設計に俟つて初めて完全に目的を達せらるゝ事が少くない。又第三の附帶消火設備といふのは、或は建築の適當の位地に適當の消火栓を備へ、ホースを餘り長くする事なく部分的に便利に注水する事の出來るや

うにするとか、或は場合に依りては自働「スプリンクラー」を適當の箇所に裝置して發火の際自働的に注水する樣にするとか更には相當の場所に相當の數の消火器を備へて萬一の發火の際に備へるとか、或は自働火災報知器を備へ付けて置くとかの類であるが、これらも亦第二の建物自身の耐火設備が不完全の時は、これ丈を以て到底滿足する事は出來ない、要するに第二の建築物自體の構造設備を凡て耐火的にするといふ事が最も重要な事柄である。

(7) 耐火的材料と構造と設計――然らば建物それ自身を耐火的にするといふのは如何かといへば、まづ第一に出來得る丈火の出ぬ樣にする事、次ぎには萬一火災を生じた場合には延燒を出來得る限り狹小の範圍に止める樣にする事であつて、即材料の選擇と其適當なる使用卽構造の如何といふ事である。元來火災の場合に於ては華氏千七百度の溫度の生ずる事は珍らしくないとせられて居るが、燃燒物の如何に依つては二千度以上に昇る事もある。この高溫度に於て絕對に害を受けぬといふが如き耐火的の建築材料なるものはまづない。況んや火災に際しては或る時の間熱せられそれが急に水を注がれて冷やされる、この冷熱の作用を交互に間斷なく受けるのであるから、夫に堪へ得て常時に於ける強度を保つて居る如き建築材料は殆んどない。然し煉瓦、「コンクリート」「テラカッタ、タイル、」漆喰ヂプサムを材料とする或材料、等はその製作がよく且つ適當に用ひられる場合には普通の火災に於て相當の耐火力がある、要するに耐火構造は此等の材料を適當に用ひ或は重要なる構造材料を(例へば鐵骨の如きを)此等の材料に依つて相當に被覆をし、火災に際して夫自身及內部の構材に害を及ぼさず又其構造上の强を失はぬ程度の保護をして構造するのであるが、材料の選擇及構造の如何その凡てを通じて重要なる事はその一般設計上に於ける注意である。一二の例を擧げれば、例へば火氣を貯ふる室發火の恐れある仕事をなす室等は適當の方法を以て出來得る丈之を他の部分と完全に隔離し、或は「ポンプ」室は防火壁及防火扉を以て他室と隔離し、萬一建物に失火のあつた場合にも器械が故障なく運轉し、人が安全に作業をして最後までポンプの消火作用を全からしめる樣にする如き、或は又「ポンプ」には出來得れば獨立の給水槽及給水管に依つても給水し萬一水道の鐵管が破裂して用をなさぬ如き場合に備へる如き、或は又建築物を防火壁及防火扉に依つて適當に區劃して延燒を防ぎ、階段室を適當に配置して赤燈を以て其の位置を示して避難に便し、又序に其他の室とは防火的に絕緣して入口には防火扉を附し下階の火焰の上昇を防ぐ如き、其他物揚機等を設けてある垂直の

開孔に通ずる口には凡て自働防火扉を設けて置くとか、昇降機の數が多くある時は、「シヤフト」を別にするとか、或は採光用の「ライトシヤフト」の配置及構造に特別の注意を拂ふとか其他此種の細かい事柄は實際問題に當つて枚擧に遑がない程である、がその何れもが充分に考へる價値のある事であり、又何處までも研究しなければならぬ事柄である。

(8) 耐火の點より觀たる都市の住宅問題

上來述べ來つた所は之を要するに都市建築殊に商業建築の輓近の趨勢は集合式或は共同式の大建築を作るにあるといふ事と、此種の大建築が都市の防火といふ點から見て誠に重要のものであるといふ事、同時に此種の建築はその性質上比較的に底廉の工賃で充分に防火の設備をもする事の出來るといふ事等であるが、この集合式或は共同式商業的大建築に關聯して、此に都市に於ける住宅に關しても亦現今社會の諸種の狀態から推して、西洋の如く集合式或は共同式住宅なる數階建の大建築所謂「アパートメントハウス」を作るならば、比較的低廉の工費を以て構造設備萬般に現代の科學を充分に應用し、防火の點に於ても比較的容易に完全に近きものを得る事が出來、衛生と安全と便利とを得るといふ望みがあるのである。都外住宅、田園都市或は上流の邸宅、等の問題は自ら別問題ではあるが一般中流以下の住宅としての都市の住宅は少くとも防火の目的から云へば此「アパートメントハウス」式にするを以て最も得策とする。同時に都市の體裁からいふも、衛生の上からいふも、眞の意味の經濟の上からいふも、或は又昨今の住宅難緩和の所謂住宅政策上からいふも何れよりいふも得策であるのみならず、一般に都市民生活の爲めといふ點からいつて良策であると信ずる。(アパートメント、ハウスと同時に特種の個人或は特殊の小家族の爲めの「アパートメント、ホテル」も亦頗る興味ある問題であり注目に値する事である。)唯萬事西洋と日常の慣習を異にする我國民の生活を容れるべき斯種の「アパートメント、ハウス」が決して西洋のそれと同じもので間に合ふ譯がない。殘る所は果して如何樣にして日本人の生活に適する日本の「アパートメント、ハウス」を完成すべきかが問題であるが、これは獨り建築專門家にとつて興味ある問題である計りでなく、これを投資といふ側から見るも、亦社會政策的立場から言ふも、極めて興味の深い問題であり、識者の眞面目な研究に値する問題であると思ふ。(了)

建築問題の趨勢

内務省都市計畫課長内務監察官　山縣治郎

一　都市と建築物

都市は完全なる一個の有機體でなければならぬ、夫には各種の物的並に人的の施設を必要とするが其中でも物的施設たる建築は最重要である。我國では明治二十二年東京市區改正條例實施以來今日迄は單に土木の一點にのみ力を注いでゐたのであるが理想的の都市を構築するには是非建築に多大の力を用ゐねばならぬ。

都市は一國文化の代表であり又國民の文化的生活の根據は家屋であるから建築の問題は都市問題の大部分であると云つてよいと思ふ。

吾國に於て都市計畫法に次いで昨年末市街地建築物法の出來たのも此趣旨より出たものであるが文明國としては一番遲れてゐるのである、一體建築物の取締を規定し之に一定の制限を附する事は民權自由を壓迫するものだと誤解されるかも知れぬけれども、之は有機體としての都市の共同生活より來る當然の結果であつて止むを得ぬ事である、若し極端に個人の自由を主張せしめるたらば延いて一般市民の利益を害し都市本來の目的は遂に蹂躙せられねばならぬ事になる、是れ歐米の如き民權自由の發達した國に於てすら何れの都市でも建築を取締らぬものなき所以である、加之今その建築上の制限につき彼と我とを比較するに歐米の方が遙に吾國より嚴格に出來てゐる、例へば吾國では都市内の一部に防火地區を設定して始めてその地區内に於てのみ耐火構造の如き特別の構造を強制するのであるけれども歐米に於ては全市が防火地區であると云つてよい程で耐火構造の制限は其全範圍に亘つて強制されてゐる、固より之れには國富、生活程度等の問題が關係のある事なれば彼我を一律に論ずる事は困難であるにしても、都市一般の福利の爲に各種の制限強制をなす事に對し動もすれば個人の利益を固守せんとする傾向ある吾國人の參考とすべき所である。

二　大火の頻發と防火策

吾國現在の都市には改良すべき點固より數多あるが其中でも國民經濟上並に保安上より見て最焦眉の急として先づ第一に實行すべきは耐火構造の建築である。何となれば吾國の都市の建物は殆ど其全部が所謂マッチ箱式で一度火災に遭へば數百千軒が一夜の中に灰燼に歸するの例は今も昔も一向に變りなく、之が爲に國家國民の失ひ來つた有形無形の損害は寔に測定し難き程莫大であるからである。由來吾國民は怜悧であるにも拘ず火災より受くる此莫大の損失を見乍ら、火災を例へば「江戸の花」などゝ稱へて恰も當然あるべき事の如く考へ、進んで之が根本的救濟策を講ぜずして今日依然古來の施設と相距る遠からざるは吾人の最遺憾とし且つ怪訝に堪へざる次第である。此點に付ては英人は流石深謀遠慮である。ロンドンは十七世紀の大火後早くも全部不燃質の建築に改造せられたのである。其他歐米諸國に於ても競うて耐火構造を奬勵し、今日に於ては都市の建築と云へば殆ど耐火構造を意味するの狀態にある。然るに吾國に於ては前述の通り餘り近視眼である爲め火災に對する施設も頗る姑息的に流れ、その結果今日尚ほ頻々として大火の猛威に脅かされつゝある悲慘なる狀態である。或は之が對策として防火壁を設け又は道路を廣げるの說もあるけれども、之を實行せんとせば防火壁は家よりも高くし道路は少くとも數十間以上にする必要がある。之では却て餘計の箇所に不經濟なる施設をなす事になるのみならず實際上の效果も頗る疑はしい。過般の淺草の大火に徵しても、同地の小學校の如きは防火壁はあつたが低きに過ぎた爲に何等の效果を發揮しなかつた。又一富豪は高き防火壁を有してゐたに拘らず、之を單に通常風上に當る二方面のみに施しありし結果、容赦なく燃え狂ふ猛火は却て防火壁なき方面より侵入した例もある。然らば高き防火壁を四方に繞らしては如何との說もあらうが、事玆に至れば寧ろ家其物を耐火構造となす事が體裁もよく經濟上の利用をも增す所以である。況んや防火壁は橫よりの火は完全に防ぎ得ても飛火の危險なしとは保し難いのである。若し夫れ道路幅を廣くして火災を防がんとするが如きは、高價なる大面積の土地を犧牲とするもので許すべからざる不經濟と云ふべく、其效果より云ふも烈風時の大火に際しては街路の少し位廣き事は飛火を防ぐに何等の效果なしと云つてよい。要するに斯の如き姑息手段は何等頼るに足らないとせば、根本的に建築物其ものを耐火構造とし燒けざる家を建てる事が急務中の急務であらねばならぬ。之が實行の第一歩として先づ防火地區を設定し地區內には耐火構造を強制す

る事とし、順を追うて全市の改良に及びたいと思ふ。

耐火構造の歐米都市に於ても火災の發生は免れ難い。これ室の内部は必ずしも不燃質のものばかりと限つてない結果である。

而してその損害も我國の約三分の一に當つてゐる。但し右の統計より直ちに歐米に於ても亦我國の三分の一位の火災があると考へてはならない。歐米には我國の火災の如き大災は殆どないと云つてよいのである。何となれば歐米に於ては一回の火災に數個の建物を燒くが如きは稀有の事で、多くの火災は其發火した階のみに止まり、一個の建物の全部を燒くが如きさへ珍しき事に屬するからである。されば日本の如く一回の火災に數百千軒を燒拂ふが如きは殆ど彼の國人の想像の外である。又損害額に就て見るも名義上の金額より云へば三倍であるけれども兩者の國富生活程度等を比較して考ふれば、我損害は實質上に於ては彼の十倍二十倍に當るかも知れぬ事になる。

三　家を高くする事並に整一にする事

都市に於ては一般に地價が頗る高き結果勢ひ其建築物を高くする事となる。之は土地利用上當然の歸結であるが我國民の從來の慣習上高き家を好まない。故に此の事は單に土地所有者の自由に任ずる事は出來ない。蓋し之には都市計畫上大切なる都市の財政問題住宅問題等の重要なる事項が密接の關連を有してゐるからである。

吾が東京では近時住宅難及住宅地難の聲が頗る高いにも拘らず、其建物は未だ平均値に一階半位に當るに過ぎない。然るに獨逸ベルリンの如きは市の中心より場末に至る迄徹頭徹尾六階建(地上五階地下一階)に一定せられ且つ極て學理的に出來てゐるので、其利益は種々の點に於て非常に大いのである。今假りに東京をベルリンの樣に六階建に一定するとせば、現在の地域で今日の約四倍の收容力を有する事となる譯であるから、住宅地問題の如きも敢て地域を郊外に求めずとも十分に解決が出來る筈である。

ベルリンの廣さは東京の〇、八三倍に當るが其人口密度は戰前に於ては東京の現在の密度の一、一五倍であつた。單に此數字より見ればベルリンは東京より人口の集積が甚しい樣であるが、其建築物の高さは前述の通り東京の夫れの約四倍であるから、實際の收容力の點より云へば現在の東京よりも遙に餘裕があつたのである。之は人口集積に對し家を高くする事の利益であるが、更に都市の道路構築費負擔の問題に對しても大なる利益を與ふるものである。

東京市内の道路面積の全市面積に對する比例は僅に百分の十一に過ぎないので之をロンドン、パリの百分の二十五、ワシントンの百分の五十五に對すれば半分にも足らぬ。之は少くとも現在の二倍に迄擴張するの必要がある。而して此等の道路築造費は究極する所沿道の土地建物所有者占有者等に負擔せしめる譯であるが、現在の如き小人數の沿道居住者では其負擔が過重に失し迚も實行は困難である。さすれば之は矢張り建築物を上に伸し多數の利害關係人を作り之に負擔せしむる事によつてのみ比較的容易に之を實行する事が出來るのである。

家を高くする事と關連してその高さを整一にする事の利益をも一言して置きたい。現今諸外國中之を實行してゐるのは獨逸位のもので、米國殊に紐育の如きはその高低不規則なる事は有名なものであるが、之は矢張ベルリンの如く高さを整一にする方が有利である。例ば水道の設備にしても高さの一定せるときは一定均等の水壓を以て足り、特に高き建物の爲に特別なる施設をなすの必要がない。又一定の高さに達する施設をすれば其施設は全部有效に使はれて無駄がない。又消防の設備にしてもポンプ梯子其他の施設をすの時の如き共利益の大なるは勿論、瓦斯電氣其他多くの施設について見ても高さの整一より得る處の利益の多きは想像に難からざるのである。

四　耐火構造と生活様式の改善

以上述ぶる所の要點たる耐火構造と高き建築とを實行するについては建築物は勢ひ洋風ならざるを得ない。然らば之が現在の吾々の生活様式に如何なる變化を來すものであるかを考へて見やう。建築が洋風になる事が生活に對する革命の如くにも思はれる。けれども冷靜に理性的に考ふれば之亦止むを得ない事と思はれる。

吾々は既に現在に於ても事務所に學校に將た工場にあつて椅子に座し卓子に倚り、又多くは洋服を着してゐるのであるから、更に一歩を進めて住宅にまで及さねばならぬ。建築が洋風に改まる事は吾々の公生活には殆と何等の變化も苦痛も與ふるものでない。唯變化を來すのは私生活即ち住宅内に於てゞある。之は各人の趣味よりせば或は洋風建築は殺風景だ洋服は窮屈だとも云へやう。之は吾々古來の生活様式に對する傳統的の因襲に基くもので、此感情を一朝一夕に左右する事は困難であるにしても、物價騰貴、生活難の聲の高き今日何時迄も此の如き感情に囚はれて居てはならぬ。吾々は最早武陵桃源の夢より覺めて眞劍に生活問題を考へねばならぬ。悠長緩漫なる平安朝式生活を棄て合理的活動的の生活を研究せねばならぬ。而して此の、

理的活動的、經濟的、衛生的の生活方法は究極する所洋式生活の外にない。今日の吾々の多くは全く煩瑣無益なる和洋二重の生活を餘儀なくされてゐて事實上世界第一の高價の生活をなしつゝある。

我國の生活方法中最も不合理不經濟なるは衣服である。殆ど贅澤とも云ふべきは絹布を着するの習慣である。而して日本の衣服には四季を通じて厚さには四五種の階段があるので、之を僅に數枚宛作るとしてもその費用だけでも莫大である。然るに歐米に於ては四季を通じて服裝の厚さに大差なく通常服は大抵二種、高價なる禮服は四季を通じて一種である。此點にのみより見ても現在の吾々の苦しき境遇が解るのであらう。何故に彼はしかく簡素であるのに我はしかく繁雜なるや、他なし、我國の建築が餘りに貧弱にして外氣の支配を直接に受ける事が甚しいからである。即ち冬期暖房裝置を施し得ざる結果として室内に於ても特に厚衣を必要とするに至るのである。日本服の不經濟なるは斯の如くであるが之は又吾人の活動能率に大關係ある事で、日本服及日本家屋が敏活なる動作に適せさるの一大缺點ある事は云ふ迄もない。冬季室内に於て火鉢を擁する時又は雨雪時の外出などの時には何人も此感を深うするであらう。此の衣服の不完全と疊の上に坐居する住宅の不合理とは相俟つて遂に日本人をして傳統的に不活發の國民たらしめた事は此際特筆大書すべき事である。

右述ぶる如く現在の吾々の生活狀態が如何に吾々の精神身體並に經濟上に大なる不幸不利を招きつゝあるかを自覺する以上は、最早や決して坐視すべきではない。吾々は此際果斷を以て國家永遠の計を樹立すべき必要に迫られてゐるのである。その第一步は家屋と生活樣式とを洋風に改むるにある事は前述する所によつても明であらう。固より多數の日本人中には古來の生活樣式に非常なる執着を有する人々も多いであらうが、右申す通り種々の意味よりして洋風生活を必要とする時勢となつた以上は、せめて都市の中央に於てなりとも平家の內で疊の上に住みたいなど云ふ樣な時代錯誤は止めて欲しいものである。蓋し都會に於ては共同生活の安全と便益との爲に各個人の趣味の問題を讓るのが都市をして本來の使命を果さしむる所以であるからである。

五 國民性と建築との關係

家屋と生活樣式の改善の必要は既に略說した通りであるが、吾人は此際吾國古來の建築が吾國民性に及ぼしたる影響を附言して此稿を擱きたいと思ふ。

凡そ生物が其環境の如何によつて大なる影響を受るは幾多の事實の證明する所であつて、殊に常住、坐臥、起居、活動するに必要なる吾々の建築物が不識の間に吾國民性に與へ來りし結果の大なる事も何等怪しむに足らない事實である。吾國の古來の家屋は主として木造にして其脆弱なるは云ふ迄もなく其構造は外部より來る寒暑音響等の刺激を防ぐに足らぬ。されば外部の喚音は容赦なく内部に達するのである。安息は活動の前提である。安息をせずして活動する事は人類の生理上不可能である。靜謐でなくても安息が出來ると云ふ人があるが之は生理學の原則に反し、百人千人中稀にある事である。多數の人々は靜謐でなければ安息が出來ず隨て活動能率に至大の影響あるは論を待たないのである。吾國の現狀を見るに多くの人々は喧騷の裡に長時間の惰眠を貪りて其結果は不活潑の人となるか又は短時間しか睡眠が出來ず其結果は神經過敏の人となるか二者共一を出ないのである。而して二者共に非である。之に反して歐米人が常に嬉々として仕事に當り潑溂たる元氣は其能率大に吾國民を凌駕するものあるは其原因の一半は確かに住居の完全なると合理的なるより來つてゐる、一家内に於ても亦同樣であつて、吾國の一家は一室に等しいのであるから父子兄弟互に相牽制して安息も出來ず活動も出來ず、無益の努力と時間の空費をなしつゝあるのである。加之吾々は毎夜眠る前に泥棒の用心をなし、風が吹けば火事を恐れて戰々兢々たる有樣である。此の如くして吾人は神經過敏にならざらんと欲ても得ないのである、是れ吾國民の怜悧にして目先の利く事敢て外人に讓らざるにも拘らず、常に遠大の計なく眼前の事情に拘泥たる所以であつて、又彼の歐米人の特色とも云ふべき堅忍持久、氣宇濶達の資質に乏しき所以である。之は爲政家の最注意すべき大事ではあるまいか。

古來より大聖大哲と呼ばるゝ人々は多く深山大澤の内に入り。長年の間樹蔭巖石の上に靜坐瞑想して天下の大眞理を發見したものである。之は一定の思考を長く繼續し、又は工夫を凝すが爲には出來得る限り外來の刺激を避くる必要があるからである。然るに耐火構造の大建築に於ては、大都市の中央に在つても恰も深山大澤に於けるが如き靜寂を保つに難くない。果して然りとせば建築が堅牢となるに隨りて假令大賢大發明家は出でずとも、多くの小賢小發明家位は續出するに至ると云ひ得るのである。泰西に於て幾多の偉人が市井の間より續出したるの事實は雄辯に此間の消息を語るものである。

之を要するに現在行詰れる國民生活に活路を開くものは都市の改良と生活方法の變更とにあると云つてよい。而て之れやがて我國民性を淘冶して宇内に雄飛せしむる基礎を作る者である。

耐火構造

工學博士　佐野利器

都市の建築物、殊にその重要なる性質の物及び、重要なる街路に建つ物等は、是非耐火構造に據らねばならない。此の事は今日に於いては大都市の成立上絶對に必要であると考へられるのみならず、其の建築物所有者自身の利益から考へても、亦極めて必要である事は、既に種々の人々によつて宣傳せられて居る事でもあり、又本誌の此の「研究」に於いても大いに論ぜられる事と思ふから、私は耐火構造とは如何なる物か、准耐火構造の方法如何といふ事を述べよう。

鐵筋コンクリート構造

耐火的構造として最も推賞せられる物は、鐵筋コンクリート構造である。鐵筋コンクリートとは何ういふ物かと云ふに、コンクリートと鐵筋とを巧みに配合して、兩者の特長を發揮せしめ、其の缺點を相補はしめた構造である。コンクリートは

セメント　一容積
沙　二容積
砂利　四容積

を水を以つて混合し練り合して固めた物で、時と共に其の强度を増加し、凡そ半年も經過すると石のやうに堅くなる。斯く固まつた以上は、押潰さうと思つても却々押潰れない物と成る。併し之を折れば割合に容易く折れる。張力に抵抗する性質が弱いからである。此の張力に對して抵抗する性質の弱いのを補ふ爲めに鐵筋を配置すれば、鐵筋は張力に對して强く抵抗して吳れる。斯う云ふ具合にして、一つの材料が、押潰されようとする作用に對してコンクリートの强さに依賴し、引き張られようとする作用に對しては鐵筋が之に當るといふ共同的の作用を爲す事になる。故に之を以つて柱とし、梁とし、壁とし、床とし、地形として、一つの纏つた家屋とする時には、それに作用する凡ゆる力に具合よく對抗する事が出來るやうになるのである。

此の構造は約五十年前に佛蘭西で一つの構造方法として發明

されたのであるが、其の性質强度のみならず、凡ゆる點に於いて優秀らしく見ゆるので、凡ゆる事項に關して屢々澤山な試驗が行はれて、非常に優良な構造方法と確認せられて來た。鐵筋コンクリート構造の如何に耐火的なるかの試驗は、歐米諸國に於いて非常に數多く行はれたが、其の主なるものを擧ぐれば、一八九三年に伯林に於いて、獨逸の火災保險會社の聯合會の催しで各種の構造の耐火試驗を行つた。即ち小さな各種の家屋を作り、內部に瓦斯を燃やし、漸次に其の溫度を高め、攝氏千三百度まで上げた。他の構造には或は破壞した物があり、或は大龜裂を起して用ふべからざるに至つた物があつたが、鐵筋コンクリート構造は最後まで之に抵抗する事が出來た。爲めに聯合會に於いては、此の構造を以つて耐火構造の第一位を占むるものであると結論した。又一八九七年英國の防火委員會は亦各種構造の耐火性の比較研究を行ひ、即ち約三坪程の小さな家屋を作り、內部に瓦斯を燃して漸次に熱を高めて華氏二千度に達せしめた。之も前例と同樣な結果で、最後まで抵抗し得たのは獨り鐵筋コンクリートのみであつて、試驗後其の床に一平方フートにつき百八十封度の荷重を載せて檢査したが、單に幾かの龜裂を示したのみで、使用するに差支へ無い事を證據立て、耐火構造として第一位に在る事を證明した。亞米利加に於いては一九〇五年から一九〇七年に亙つてプロフェッサア・ウールソンとプロフェッサア・ウードが矢張精密な研究の結果 此の構造の耐火構造として首位に在る事を結論した。獨逸のグロース・リヒタア・フェルデに於ける王立工業試驗所の實驗報告に於いても亦同じ結果を告げて居る。

斯う云ふ具合に澤山の學術的研究の結果、何れも此の構造か第一位に在る事が證明されたので、一九〇七年伊太利ミラノで開かれた萬國防火會議に於いて、鐵筋コンクリートを以つて耐火構造の第一位に置く事が決議せられたのである。

學術的試驗の結果は以上の如くであつたが、更に火災の實例に於いて如何なる結果を示して居るか。之れにも澤山の實例があるが、其最も名高いものは、一九〇四年二月の七八日兩日間に亙りて、亞米利加のバルチモーアの町を燒いた大火の際に示された例である。二千五百棟の大きな家を灰燼に歸せしめた內に澤山の木造家屋が在つたことが、西洋には珍らしい大火を演出した所以であつた。其の間に介在して「ジャンカーアス・ホテル」と「インタナショナル・バンク」と唯二つの鐵筋コンクリートの耐火家屋があつたが、之は完全に火力に抵抗して非常に明瞭に此の構造の優良なる事を示した。災禍後亞米利加の各地からは勿論、英吉利からも人を派遣して此の火事を調査せしめた

が、調査の報告は何れも筆を揃へて、此の構造の優秀なるを稱讃して居つた。

尚ほ此の構造に關する他の事項を述べると、固より耐久的である。コンクリートが耐久的である事は古羅馬時代から證明せられて居る事である。それは宜しいとして中に配合せる鐵筋が腐蝕することがないかといふ疑が有り得ることである。此事についても亦幾多の研究が行はれた結果、セメントは鐵筋に對して完全なる防蝕材であることが明となり、工事に不注意なき限りはコンクリート中の鐵は腐蝕することゝなしとせらるゝに至つた。鐵筋コンクリートの家は外氣の溫度の影響を速く蒙ると云ふ非難を受ける事がある。即ち夏熱く冬寒いと云ふ非難を屢々聽く。併し之は大しい事でない、コンクリート其物は熱の傳達力が略ぼ石と同じく、煉瓦よりは少し多く、粘土や木よりは又更に多い。石造煉瓦造は自ら壁を厚くしなければ造れないし、又窓を小さくしないと構造上危險である。鐵筋コンクリートは壁も極く薄く、又窓も極く大きく出來るから、從つて寒暑の影響を受けよく出來る結果として、幾許か其の事實はあらう。けれども前に云つたやうに、其の量は知れたものである。殊に寒暑の影響を是非嫌はなければならぬ建物ならば、中空コンクリート、ブロツクを混用して壁の中に氣溜を作る事も出來る。即ち煉瓦造石造等よりも更に寒暑の影響を少くする構造になす事も出來る。更に之れを木造に比すれば、木や粘土は成る程熱の傳達力は弱いが、通常の構造では極めて薄いから、鐵筋コンクリートよりも遙かに容易に寒暑の影響を受ける。即ち鐵筋コンクリートの方が是等の構造よりも優つて居る事になる。衞生上の見地から云つても、煉瓦のやうに濕氣を保持する事がなく、又木造家屋のやうに菌類を生殖せしめるやうな憂が無い。煉瓦造石造と異つて窓を十分に大きくする事が出來るから、盛んに通風をつけるに適する。

更に之を工費の上から觀るに、戰前セメント・鐵・砂利・砂等が頗る廉價であつた時に、略ぼ木造家屋と同じ位の價格で出來た。其後是等の材料は、或は高く或は安くなつていろ／＼變化があつたが、今日では木造家屋の約五割位の工費を以つて出來る。五割位の差はあるが、併し保存期限、維持費から考へて觀ると、木造に比べて遙かに經濟と云へる。木造は普通の場合には、保存期限は廿五年位と見なければならぬ。而して保存期限に略ぼ近付いた時は、約五〇%位の大修繕費を投じて、漸く十五年以内を延長し得るに過ぎないと云ふ事を考へねばならぬ。年々の維持費は初め少く後多いのが常だが、之を平均すれば工費の約〇・八%位を注いで行く必要があらう。鐵筋コンクリートにおいては保存期限は永久であり、維持費は窓硝子の破損修繕とか、床板の張替へとか、或は扉の手入れとか云ふやうな事で、工費の約〇・二%位あれば十分である。其の外火災保險率が非常に低廉である。

又地震との關係は我國に於ては重大な問題であるが、之も火、と同じやうに、普通の家屋に於いては、如何なる他の構造より

も優つて居ると云ふ事が、試験的にも亦實際的にも既に充分に證明せられて居る。斯う云ふ具合で此の構造の内に住んだならば、木造家屋のやうに火事に恐れ、地震に恐れ、盗難に恐れ、夏熱く冬寒さに慄へると云ふやうな事なしに生活する事が出來る。心持ちの上の利益と云ふものは、算盤には積もれないが、非常に大きいものであると思ふ。

唯注意すべき事は、此の構造は設計と施工とが他のものよりも技術上少し六ケ敷い爲めに相當な技術家の手に因らないと其の效を充分に發揮し難いといふことである。それから如何なる構造と雖も窓がある。之れから　を呼び得る事である。其の場合に木造家屋や又煉瓦造にして木造の床や屋根を有するものに比べて、此の鐵筋コンクリートは内部の構造部分に通風が無いから火を呼んでも内で燃え難いはあるが、内に絶對に火を呼ぶまいとするには、窓に防火扉を付ける必要がある。隣家が相當に離れて居れば、木造と異つて軒からは勿論窓から火を呼ぶ事も無いが、接して居る場合には防火扉の設置を必要とする。

鐵筋コンクリートの工費と工期とを節しようと云ふ目的の爲めに生れた鐵筋ブロック構造は、鐵筋コンクリート構造の一種であつて亦た設計施工の方法に由つて大いに效果を擧げる事が出來るものである。

煉瓦造

煉瓦造は壁體其物が矢張完全に火に抵抗する。けれども床屋根等が木造である場合には、割合に耐火性が少い。諸所の火災に於いて燒け落ちた家が澤山あつて、煉瓦造は其の效果を疑はれた場合が少くない。煉瓦造を完全、耐火的にするには、是非床及び家根を之に相當するやうな構造にしなければならない。最良の方法は床と屋根を鐵筋コンクリートとする事である。殊に屋根のうち登廻り、破風の邊は最も早く火に冒され易い場所である事に注意する必要がある。已むを得ずして屋根の構造を木造とする場合に於いても、破風、登廻り等は耐火的の材料を以つて完全に被包しなければならない。防火扉の必要については、鐵筋コンクリート構造の場合と同樣である。

准耐火構造

市街地建築物法に於いて准耐火構造と云ふのは、前に擧げた二種類よりも防火力の程度が低いが、普通の木造よりは遙かに優るものを云ふのであつて、即ち木造を相當な耐火力のある材料を以つて被包したものを云ふのである。今日第二流以下の街路に面する家屋其他に於いて、工費等の關係上木造となすの已むを得ないものも多い譯である。併し相當稠密な場所では、是非在來の單純な木造だけで放棄して置かずに、准耐火建築とする事を望む。工費の増額は二割以内で濟むであらう。其の最も簡單であつて而かも有效な方法は、所謂鐵網コンクリート造り

である。之は柱、桁等木骨の外に板を張つて、其の外にコンクリートの鐵網を張り、（金網には川崎式大橋式などあるが）其の上に厚さ一寸五分以上コンクリートを塗り付けるのである、殊に簷廻りを注意すべき事、煉瓦造の中に述べたと同樣である。此の鐵網コンクリートは土藏等に比しては、構造遙かに簡單であるが、相當な防火扉を附けるならば其の効力は相似て居る。

木造

郊外其他人家の疎らな所に在る小さな住宅等は、當分普通の木造たるの已む得ないものがあると思ふ。之を幾分かでも防火的にしたい。即ち附近の火事によつて容易く類燒するやうな事の無いやうにしたいものである。併し木は元來の性質が炭素、酸素、水素等から成つて居るので、燃料として最も都合の好い性質を有つて居る。故に三百度近い熱に逢へば、盛んに引火性發火性の瓦斯を發する。だから短時間と雖も之を防火的にする事は容易な事ではない。防火ペンキ、防火注入劑等の如くして充分の効果ある物は未だ無い。

要するに木造家屋を幾分でも防火的にしようと云ふ事は、何れの點から觀ても難儀な事であるが、併し此處に薦めたいのは簷廻りを豫防する事である。隣家の火災によつて前に云つた瓦斯が、盛んに簷廻りに蓄積し、隙間を通つて屋根に入り、引火して軒と屋根とから火を吹くと云ふ事は類燒なるものの順序と見て可い位である。だから簷廻りを豫防する事は、類燒の時間を幾分か長くする事である。其の間には消防の手も屆く場合もあらう。簷廻りを豫防するのには、金屬盤を以つて簷廻りだけを包むか、又は其の場所に金網を張つてモルタルを塗ける。モルタルと云ふのはセメントと砂との混合を水で練つた物である。又前に云つた鐵網コンクリートを簷廻りに施すと云ふやうな事にすれば可い。即ち如何なる種類の木造でも、家根は不燃燒質物を以つて葺くと同時に、簷廻りを豫防する事を必ず行はなければならないと思ふ。

之を要するに、今日文明國に於いては、類燒とか火元爭ひとか近火御見舞ひとか云ふやうな事は殆ど無い位になつたと云つても敢て過言ではない。亞米利加とかスカンヂネビアとかに於いては、木造家屋が多いから例外である。コンクリートの床及び家根が盛んに行はるゝ所の歐洲の諸都市及び米國の都會に於いては、火事は多くは其の火を失した階層にだけ限られ、上下には及ばない。又縱令上下に及んでも其の家一軒だけで、多くは隣家に及ばない。だから火元爭ひもなければ、近火見舞の必要も無い。類燒に至つては極めて罕な場合に限られて居る。實に世の中は文明だと云ふ意識を强める。今、日本で直ちに其の域を望む事は出來難い話であるけれども、併し文明國人たるの覺悟を以つて、一日も早く其の域に達するやうにお互に努力したいものである。

時論

日米交渉の一問題としての山東問題

法學博士 吉野作造

六月廿一日の「東京朝日新聞」に我が幣原大使は、米國國務卿ヒーズ氏と山東問題について會談したと云ふ報道が出て居る。尤も當局者は講和條約に於いて已に決定せる山東處分を今更ら米國と話し合ふ必要がないと否認して居るけれども、又他の一面に於いて曩に米國議會が講和條約中の山東關係の條項を否決した行き掛り上、日本の極東政策について米國の諒解を求め置く必要から、自然山東に關する事項も話題に上つたらうとも推測さるると云ふから、正式の會談としては之を否認するも、兎に角何等かの形に於いて意見の交換を見た事は疑ひないらしい。而して新聞の報道する所によれば、幣原大使は山東還附の聲明を成るべく速かに實行すべき旨を告げ、其代り本問題を國際聯盟に提議せんとする支那の立場を米國政府の支持せざるやう希望したと云ふ事である。之によつて見れば我國が近く山東還附の聲明を實行すべきは勿論であるが、支那は之に慊らず日本との所謂直接交渉を避け、之を何處までも聯盟の問題とする決心であること、又米國の一部には、支那の此立場に對し同情を表するもの尠からざることが明かである。

此事については、我國に於いても之れまで隨分論議されたのであるが、併し未だ問題の本態が充分に諒解されて居ないやうだ。少くとも對手方の立場が何う云ふ根據に基いて居るかの點が、我々國民に十分に解つて居ない。對手方の立場が正しいか否かの判斷は暫く別として、彼等の據つて以つて立つ所だけは正當に之を理解して置く必要はあらう。

山東の處分は形式上對獨講和條約によつて已に決定された。其第四篇第八款には第百五十六條以下三ケ條に亘つて明白の規定がある。之に據れば山東省に關する獨逸の權利は其政治上

のものたると經濟上のものたるとを問はず、一旦凡て日本に歸することになつてある。此點は條約の文面上一點の疑ひを容れない。而して日本は豫ての聲明に基き自發的に租借地を支那に還附せんとするのである。條約の表面の解釋から云へば勿論の事、又從來の國際關係の慣はしから云うても此日本の態度に不服あるべき道理はない。之に異議を唱へるものがあるとするなら、唱へるものが誤りだ。之が即ち日本の立場である。從つて支那が一旦決まつた此解決案を更に國際聯盟の再議に附せんとする態度に對しては極力反對するのである。況んや米國の如き第三者が條約によつて定まつた此の日本の立場を紛更せんとするに對して不快の感を抱くのは當然と云はなければならない。

日本の立場に異議を挾む態度の中にはいろいろの原因から來るものがある。一つには單純な排日思想から來る。支那人の多數、米國人の一部には確かに之がある。第二には山東に於ける日本の行動に對する猜疑心から來るのがある。日本は初めから山東還附を聲明しては居るが、其後の施設經營の狀態を見ると丸で自國同樣に振舞つて居る。斯くては還附してもそは形式的に止るだらうと云ふやうな考から、條約上に認められたる日本のすべての權利を否認せんとするのである。併し此等の否認論は一時の感情乃至誤解に基くもので、元より取るに足らぬが、又我の態度の如何によつては此種の批難を消滅せしめ得る途もある。此程度の議論ならば我々は之を顧慮せずして之れまで通りの態度で突進して差支ない。けれども支那や米國の殊に昨今勢を得つゝある議論の中には、もつと深い根據のあるものがある。之に承服するや否やは別として、兎も角我々は一應親切に之を聽いて遣るの必要がある。

それは何う云ふ議論かと云ふに、條約が何うの法律が何うのと云ふのではなく、單刀直入道德上の根本論から立說さるゝ所のものである。先度の歐洲戰爭は實に世界の運命にとつて重大な戰爭であつた。此戰爭に參加して最後の勝利を得しめた功勞は、深く之を尊重せねばならない。其功勞を認むるについては、直接人と金とを出して非常の犧牲を拂つたものは申す迄もないが、精神的に味方の優勢を鼓舞作興した力も之を認めてやらなければならない。斯くして此戰爭に於ける勝利は此等の交戰國全體の協力によつて出來たものだから、戰勝の結果敵方より得たるものも、之を二三國の私する所に任かすべきではない。分捕品の如きはすべて皆一旦は交戰國全體のものとしなければ

ならない。分捕品にして斯くの如しとせば、味方の或る一國が嚢に敵方から掠取されて居つたものについては無論直ちに之を當該國に還附すべきである。即ち膠州灣の如きは支那の戰爭參加と同時に、支那に歸屬すべきものぞ、支那が如何なる事情の下に戰爭に參加したか、又之れより先き膠州灣が如何なる事情の下に日本の得る所となつたか、の如きは深く之を問ふの必要がない、と云ふのである。即ち膠州灣は支那の參戰と同時に當然支那に歸すべきものであつた、之を一旦日本にやつたのは失當の所置であると云ふので、米國の議會は明白に反對の意思を表示した。平和條約は此趣意と相容れざる決定をなしたからと云ふので、支那では聯盟の再議に附せんとするのである。而して支那や米國の一部の人の取る此立場は、既に昨今の思ひ附きではない。平和會議に於ても可なり盛んに主張せられた事は當時の新聞電報にも明白であるし、殊に最近段々發表さるるランシング其他の平和會議秘錄の公表の中にも明白である。米國の識者間に如何に斯う云ふ考への強いかは、ウイルソン不人望の一つの原因は山東問題の解決につき、彼が功を急いで日本の要求に屈し、以て米國的正義を踏み外したといふ點にあると云ふにあるに見ても分る。であるから山東問題に對する日本の立場の否認と云ふことは一朝一夕の談でないと云ふ事を認めて置く必要がある。

更に立ち入つて考ふるに、講和會議の前後を通じて此種の問題の解決については常に二つの異つた根本思想が鬪はれて居つたと云ふ事を見なければならない。一つは戰爭の渾一觀であり、他は戰爭の集合觀である。米國は徹頭徹尾渾一觀を以て一切の問題を解決しようとするのに、我國は徹頭徹尾集合觀を以て之に對戰した。而して英佛諸國は或は渾一觀の立場を取り、或は集合觀の立場を取り、時に應じて其與する所を一にしなかつたから、講和條約其物も不徹底なものになり、從つて又いろ〱の問題を未決のまゝに殘して紛糾を重ねしめることになつたのである。

抑々今度の戰爭は世界の殆んどあらゆる國が敵味方二つに分れて爭つたものゝ、而して爭ふについては或は正義の爲めとか或は世界の平和の爲めとか、各々抽象的な共通の目的を掲げないではないが、併し實際に於て、此戰爭によつて達せんとする所の目的は國によつて皆同一ではない。現に日本でも、日本は極東に於て丈け戰爭すればいゝので、地中海の方まで手を出すのは餘計の事だなどゝ云ふ說もあつた。斯くして日本が獨逸と戰爭する意味と、英吉利が獨逸と戰爭する意味とは同一ではな

い。故に理窟から云ふと、日獨の戰爭、英獨の戰爭、乃至佛獨の戰爭、露獨の戰爭は個々別々の戰爭だ、只全く個々別々に戰爭しては速かに勝利を得ることが出來ないから、單獨不講和條約などを結んで作戰上共同動作の措置に出でゝは居る、故に外觀は一つの頭から割出さるゝ一つの戰爭のやうであるけれども、思想上からは澤山の戰爭の集合と觀なければならない。少くとも初期の戰爭は斯くの如き意味のものであつた。けれども此戰爭の集合觀は最後迄一貫して居つたかどうか。

予輩の觀る所によれば戰爭の集合觀は戰局の進むゝ共に段々貫き得なくなつたと考へる。勝利に豫想の如く早く得られない。出來る丈け多くの國を集め、其力を合せて一刻も早く敵を屈服せんとする。其爲めに將來の分捕品の分配に對する密約も出來た。戰爭の集合觀を以て終始する以上、單獨不講和條約並びに之に附帶する密約以外に各國の協力を全うする途はない。慮が此の方法は米國の參戰と共に第一に打ち破られた。何故なれば米國は單獨不講和條約に加盟しなかつたからである。蓋し米國は英吉利や佛蘭西など、戰爭の目的を異にする、少くとも敵を武力によつて壓迫することによつてのみ獲得し得べきやうな利益を戰爭の直接の目的としてゐない。畢竟米國參戰の主たる目的は國際交通に於ける或種の原則の確立にあつたのだから、獨逸が之を認めさへすれば戰爭は何時でもやめる、なまなか此自由を拘束せられざらんが爲めに彼は單獨不講和條約に加入しなかつた。けれども英佛諸國にとつて米國の參戰は非常な賴みである、之に逃げられては大變だと言ふので、段々戰爭の目的に關しても米國に接近せんと努むるやうになつた。斯くして自然英佛諸國は其戰爭目的中から利己的不純分子を篩ひ落さざるを得なくなつた。之を予輩は戰爭目的の淨化と言つて居る。軈て又聯合諸國は一日も早く獨逸屈服の功を全うせんとして世界中の國を仲間に誘はんとした。けれども勝つた所が何も獨逸から獲物を得べき見込もない國々を、自分達が或種の利益を豫期して戰つて居る戰爭に參加せよと言ふ譯には行かないから、そこで彼等は廣く仲間を誘ふの必要に迫られゝば迫らるゝ程戰爭の目的を單純な原則的なものにしなければならない。斯くして戰爭の目的は特殊的な利害問題を離れて抽象的な主義原則の確立と云ふ事に移る。予輩は之を戰爭目的の抽象化と云つて居る。戰爭の目的が斯う云ふ抽象的なものになると、即ち各國の此戰爭によつて達せんとする目的がすべて同一となるので、戰爭は亦同一の目的を以て共同に戰はるゝ一つの戰爭と言ふ事になる。即ち戰爭の渾一觀は集合觀に取つて代らざるを得ない。

初期に於て集合觀が行はれ、終期に於て渾一觀の行はれたと

とは明白一點の疑ひを容れないが、併し斯う云ふ思想上の推移は掌を飜すやうに右から左に移り切るものでないから、渾一觀の行はれる時代に於ても集合觀時代の考方が他のいろ／＼な問題について起らないと限らない。否、それればかりではない。甲の法律を廢して新たに乙の法律を作ると云ふ風に紙に書いて殘して置くのでもないから、將來起るすべての問題を渾一觀の思想で解釋を統一すると云ふ譯にも行かない。喉元過ぐれば熱さを忘るゝと云ふ諺の通り、苦しい時には渾一觀に據つたが、一旦戰勝の目的を達する段になると、集合觀の舊い態度に還つて我儘を云ふといふ事もある。講和會議に於けるクレマンソーの態度は其最も著しきものであつた。英吉利とても亦此例に洩れない。只英吉利や佛蘭西は知つて此我儘を押し通さうとした事が明かであり、從つて其言論行動に其邊の掛引を可なり旨く遣つて居るが、明けても暮れても徹頭徹尾集合觀時代の舊思想一點張りで押し通し、悲しむべき無智を暴露したのは獨り我日本の全權丈けであつたやうだ。此間に立つてウイルソンは叉厭くまで渾一觀を以て押し切らうとしたが、複雜なる歐洲の政界はさう云ふ單純な抽象的原則の其儘の實行を許さず、遂に見るが如き不徹底の條約が出來上つたのである。而して條約其者が渾一觀と集合觀との兩立を見て居るが如く、其後のいろ／＼な問題についての論議に於ても、此兩思想が常に相爭つて居ることは言ふを俟たない。

平和條約の解釋、尙之に關聯する種々の問題の解決につき、右述べた兩思想が如何に錯綜して働いて居るかを包括的に研究するは頗る興味ある問題であるけれども、今は之を略する。只少くとも我國に關係ある問題につき米國側から來る異論の多くは、此立場の相異に基くものであることを一言するに止むる。ヤツプ島の問題にしてもさうだ。山東問題は即ち正に其最も著しい例である。之れ丈の事を念頭に置いて觀る時、平和條約の決定を云ふ事丈けで米國や支那より來る異議を拒ぎ切ることは出來ないと思ふ。拒ぎ切り得ないとは言はない、拒ぎ切るにはもつと實質的の內面的な根據を探す必要はないかと考ふるのである。

差し當つての問題として觀ても、米國は講和條約を批准してゐないから、平和會議當時に於ける立場を今尙主張するのは怪むに足りない。講和會議に於て我全權は頻りに支那との約束を楯として、日本の獨逸の權利を繼承することは支那も已に認めて居ることゝや、又現に日本は速かに膠州灣を支那に還附するの意思あることなぞを說いたけれども、集合觀時代の個々の條約

を櫃に取ることは米國の認めざらんとする所であつた。あの時丈けには限らないが、昔の條約を櫃に取るのは時勢後れだ、分は法律や條約を離れ、全然道義的立場から論議せらるべきであると云ふのが、ウヰルソンの立場であり、又顧維鈞の説の傾端せられた所以であつた。それでも其當時のいろ〳〵な事情によつて結局日本の言ひ分が通つたが、之は譯も分らず無理押しに勝つたといふ形で、一般關係諸國の道徳的支持の至つて薄かつた事は當時の記録に於ても明かである。それでも決つた事は仕方がない、又一旦決めた事を代へるのが日本に對して面白くないと云ふのが英佛諸國の現在の立場であらう。

従つて又支那が一つには平和會議當時の形勢を眼中に置き其後に於ける米國の輿論なぞに鑑みて、其觀て以て失當なりとなす解決に對し進んで再議を求むるのは、彼の立場としては必ずしも不適當な事ではない。之を承認して更に事端を繁くするの適當なりや否やは政畧の問題である。道義的見地に於て支那は決して不利益な地位にゐない事は、我々日本人としては餘り快くはないが、疑ひのない事實である。此際に當つて若し我日本が態々米國を動かして支那の再議提案を妨げんとするが如き態度に出づるならば、益々我が立場の道徳的薄弱を自白するものではあるまいか。どうせ再提議は問題にたるまい。なるまいからと云つて安心せず、我々は兎に角從來のやうなケチな立ち場を固執せず、もつと高い、廣い根據から我々の現在の立場を裏附ける工夫をしてはどうか。

要するに山東問題に對する對手方の立場は、一寸考へるやうに無鐵砲な見當外れなものではない。山東問題をどう處分すべしとしても、之れ丈けの事は十分念頭に置く必要がある。

我國勞働運動の一大缺陷

此春以來各勞働組合同盟の分裂の聲が高かつた。新聞では穩健派と過激派の分裂だとか、理想主義と直接行動主義との對立だとか、社會問題に對する左右兩翼の思想の當然の別れだとかいろ〳〵に説明する。此等の説明は何れも正しい。我國の勞働運動は、昨今いろ〳〵の問題について二つに分るゝ傾向の顯然たるものがあるからである。而して之を總括すると、一つの問題で別れた同じ顏觸れが又他の問題についても又別れると云ふ傾向があるから、矢張り此分裂の根柢には思想の相違と云ふ事が横つて居ると觀なければならない。斯う云ふ意味で勞働運動が二派に分れると云ふ事は、之れ寧ろ當然の順序であつて怪むべきことでも憂ふべきことでもない。只遣り方の如何によつて

は資本家に乘ぜらるゝ危險はある。夫れ丈又外形的に觀れば勞働運動の頓挫のやうにも見ゆる、が併し實を云ふと、盲目的に資本家對抗戰に結束した初期の華々しき運動よりは、此方に本當の强味があるのだ。勞働運動は斯く一旦分裂することによつて引緊まるのだといへる。

勞働運動の分裂が、其發達の當然の順序として止むを得ないものであるが、すべての分裂が皆此意味のものであると云ふのではない。勞働運動の分裂と云ふ現象があらはれた時、それが果して此意味のものか或は單純な喧嘩に過ぎないか、之をよく識別する必要がある。而して予輩は我國の勞働運動の分裂に第一種の意味のものあると共に、又第二種の不純の爭ひも含まれてゐはしないかを憂ふる者である。何故かと言へば分裂の起る度毎にお互の間に時々醜穢な罵倒の聲が交換さるゝからである。

近頃勞働運動の或る機關雜誌を見た。此中に友愛會の幹部に對する激しき罵倒の言葉が載つて居つたが、其文字の醜陋を極めて居るには思はず極度の反感を催すを禁じ得なかつた。友愛會幹部諸君の立場が正しいかどうかは今論ずるの必要はない。只之に反對する自家の立場を堂々たる主義の爭として辨明せずして、無頼漢の好んで用ふるが如き言辭を弄するの必要が何處にあるか。而かも彼等はつひ最近まで相提携して居つた仲ではないか。

予輩は又時々勞働運動の中堅となつて居た人から次のやうな愁訴を聞くことがある。自分等は勞働者の先頭に立つて運動する場合には無暗に擔ぎ上げられて何も彼も任かされた。時として仲間からは神の如く尊敬と信賴を受くる。けれども一旦何かの拍子に誤解を受けて人望を失すると、裏切り者の如く罵倒さるゝ。毀譽褒貶の此位激しく變る所はない。一生懸命犧牲的努力をやつて居つても安心が出來ない、と。此訴を聞いて予輩はつくづく我國の勞働者間に相互信任の甚しき缺乏を思ふて、勞働運動成功の前途尚頗る遼遠なるを感ぜざるを得なかつた。蓋し此種の運動の眞の成功は理義を明白にすることゝ、幹部の誠意との外に、一般民衆の信任と云ふ事が缺くべからざる要件であるからである。

一體我々の間には人を本當に信任するといふ態度が甚だ缺けて居る。昨日までは神の如く尊敬すると云ふて居りながら、今日は掌を飜すが如く犬畜生の如く罵倒する。往年政治運動に憲政の神と呼ばれた犬養・尾崎氏が、忽ち變節漢にこきおろされた事あるは、今尚人々の記憶する所であらう。昨日までそれ程尊敬したと云ふ事が本當なら、只一朝の過失によつて直ちに其人

を爲り得る道理がない。今日其人を罵るのが本當なら、昨日の尊敬は甚だ輕卒であつたと言はなければならない。輕々しく之に信頼し、輕々しく又之を見棄てると云ふやうでは、到底玆に健全なる團體運動の發達しようがない。信頼するに足る人物がないのだと云へばそれ迄だが、民衆の態度の重厚を缺くのも亦大いに改めねばならぬと思ふ。

團體運動成功の一大原因は結束である。堅い結束の本當の基礎は人格的信任でなければならない。勞働運動などは少くとも其第一次的の卑近な目標は勞働者階級の利益の擁護であるから、此點からしても堅い結束は一時は出來る。併し畢竟其結束は一時的たるを免れない。利を以て集るものは利を以て相別れ、而かも強いて別れしめざらんとすれば時に暴力に訴ふるの外はない。暴力に訴へて結束を維持せんと欲するの時は即ち結束の目的の全然失敗した時である。本當に堅い結束は何うしても精神的なものでなければならない、即ち人格的信任の最も重ぜざるべからざる所以である。蓋し利害の打算や又は單純な主義などは、時により場合に應じ變り得るものである。可變の目標に據つて永久の結束を維持せんとするは、木に縁つて魚を求むるの類ひと云はざるを得ない。變らざるは唯人格のみである。此不變の人格に着眼するといふ訓練が附いて居ないから、輕々しく信頼もすれば又輕々しく離反もする。又敵の離間中傷をして容易に成功せしめる事にもなる。予は必ずしもさうでもない人を無暗に信じて主義の徹底までも犧牲に供せよと云ふのではない。が、今日のやうに人格信任の痕跡すらも無いやうでは、到底團體的運動の成功を見ることは出來まいと思ふ。

固より之は前にも述べた通り勞働階級丈けの現象ではない。或意味に於いて國民全體に通有の弱點とも思はれるが、現に角此點を指摘して我勞働運動の一大缺陷となすに多くの識者は異議あるまいと思はれる。

佛國と羅馬法王廳との接近

六月初め羅馬の發電に云ふ、佛國元老院議員ジョンナートル氏大使の資格に於いて法王に謁見し、信任狀を捧呈したる後、法王に對する佛國民の誠意を述べ、法王は之を快く受けた、兩者の會談は又極東に於ける教徒及び教會の保護權の事にも及んだ、と。佛國と法王廳とは十七年前時の大統領ルーベーの伊太利宮廷訪問以來國交斷絕の姿になつて居る。戰前まで兩者の接近は

殆んど絶望に近かつたが、昨今に至つて俄かに双方から進んで相近かんとするのは抑々何を語るものか。

予は前號の卷頭論文の終りに於いて英佛諸國の政治家が、過激思想の流行に對する一防禦策として天主教會の勢力を利用せんとしつゝある旨を説いた(四一——四二頁)。此事は今後の國際政局を研究するものにとつて見遁し能はざる頗大な運動である。巴里とヴアチカンとの接近は此種の運動の最も著るしい一つのあらはれとして現代政治の上に頗る重要な關係を有するものである。

天主教會が歐洲に於いて今尚ほ偉大な勢力を有するは云ふ迄もない。言ふ勿れ、其信仰の時勢後れなることを。又前代の法王パイアス十世の頑迷執拗が著るしく教會の世俗的權威を失墜したことを。又日進月歩の一般思想的發展は到底天主教會の從來の立場を維持し得べからざるものたらしめずんば止まざることを。信仰の問題は理外の理の働く所、大正の日本に大本教の跋扈するを思はゞ、歐洲文明國民の過半が今尚天主教會の勢力の下にある所以を理解することが出來よう。况んや天主教會は過去二千年に亘る長き歴史的背景を有し、又一糸紊れざる整然たる組織を有するに於てをや。羅馬法王が信仰の支配者として獨自絶對の地位を有するのみならず、もと歐洲に於ける一獨立國の君主であつたこともある關係の惰性として俗界にも可なり深い交渉を有つて居る。各國と公使授受の特權を有するが如き即ち之れである。加ふるに一九一四年九月就任せる現法王ベネヂクト十五世は前代に對する反動として法王廳の俗界に於ける權威を建て直さんとするに意あることは公知の事實である。教會の此勢力、法王の此態度、歐洲諸國が之に着眼したのは決して怪むに足らない。

露西亞で火蓋を切つたボルシエヴイズムの歐洲に於ける流行は、善かれ惡かれ今や燎原の火の如き勢である。之を喰ひ止める爲めに、少くとも之を緩和するが爲めに、政治家はあらゆる方法を取つた。けれども一として殆ど成功の見込を示したものはない。此等の點について委しい説明は今は省く。兎に角如何にして之を喰ひ止むべきやに困つてあらゆる方法を試みたことは、日本の政府が浪花節を奬勵したり又昨今のやうに氏神の祭禮や盆踊りなどを奬勵するの比ではない。そして遂に天主教會に頼るのが一番有效だと云ふ事になつた。斯くして英吉利も益々法王廳に接近するの態度を取り、佛蘭西も亦十七年間の國交斷絶に終りを告ぐべく辭を卑くして法王廳に取入つたのであ

る。前代の法王なら無論膠もなく之を拒絶した筈だが、政治的天分に富める人丈けに現法王は之を受け入れた。斯くして此種の運動が更に歩を進むる所から、歐洲にはボルシエヴイズムに對する一つの有力なる反動運動が起らんとしつゝある。謂はゞルーテルによつて點火された新思想の勃興に對してゼズイトが起り、佛蘭西革命に續いて神聖同盟が起つたやうな形になるのではあるまいか。歴史は常に繰返す。されば結果も亦略ぼ想像するに難くない。

終りに極東に於ける信徒及び教會の保護權の事について一言して置く。天主教會は世界に於ける唯一の教會だから、天主教民は卽ちすべて法王の支配の下にある。法律上何國に國籍を有するやは其問ふ所ではない、と云ふのが天主教會の立て前である。而して東洋に於ける教徒及び教會は、直接之を監督するの設備を有せざるヴアチカンは何れかの國に保護を託するを例として居つた。而して此受托は又當該國の好んで政治的目的に利用することになつて居つたことは云ふを俟たない。從來東洋に於ける此種の保護權は佛蘭西の有する所であつたのに、一九〇四年の國交斷絶以來法王廳は之を取り上げたのであつた。之を再び佛蘭西に與ふると云ふ事が今度新たに問題になるのであらう。併し佛蘭西政府が法王廳との接近に骨折つて居るのは、斯んな小さい保護權が目的ではない。二三の新聞に斯く解釋したものがあつたから、序に此事を一言して置く。

小題小言四則

◎**太平洋會議開催の説**　六月二十日の「東京朝日新聞」に、十七日英國下院に於ける討議の模様が電報されてある。いろ〳〵の人の演説が紹介されて居るが、其中のサア・サミユエル・ホアール氏の演説の中に、日英同盟の續否に關しては英國屬領地は勿論のこと、支那や米國邊の意嚮も十分に顧みられなければならないと云ふやうなことを述べ、更に東洋方面に於ける各種の問題が根本的に且つ平和的に解決する爲めに、英國各自治領並に支那米國の代表者を加へて太平洋會議を開いては何うかと云ふ說を述べて居る。此提議其自身は別に大した實際的影響のある大問題とも思はないが、唯滿場の大喝采を博したと云ふ所から、精神的に現代の思想に觸れて居るものあるを思はしむる。政治上にはいろ〳〵の行掛りや理外の情實が相當の強き力を持て居るから、單純な理論上の要求は直ちに容れられるとは限らない。けれども時代の思想に觸れた據り所のある

提議は、やがて實質の殼を破つて極東問題とならずしては已まない。現に具體的の影響を貽さなかつたとて吾々は之を等閑に附してはいけない。今に極東の關係が多くの關係諸國との共同によつて定めるといふ時期が來るだらう。日本もさうなれば内外の政策を何時でも赤裸々に世界の批評に晒すの覺悟を定めて置かなければならない。

◉**所謂評議會の成功不成功**　前度の議會の昇格問題の騒ぎ以來の懸案であつた教育評議會は、近く其組織を見るべしとの事である。二三新聞の揣摩する所によれば、政府豫定の議員の大半は所謂昇格論者であり、從つて名は評議會と云つて普く天下の議論を集めると云ふ形は取つて居るものの、其實政府の昇格案を裏書きせしむる丈けのものに過ぎないと云ふ。之は恐らく邪推であらう。が併し、斯う云つたやうな疑のかかるのは、遺憾ながら、實は怪しむに足らない。第一、議會にしてからが、政府の提案は盲目的に承認する丈けの機關ではないか。我國に於ける所謂評議會の凡ゆるものは、形は各方面の人才を集めて自由に意見を闘し、其間に自ら最良の意見を見出すといふ事になつて居るが、其實幹部の提案に一も二もなく盲從せしむる爲めの機關となつて居る。故に人選をするにでも、廣く適材を採ると云ふのではなく、幹部に都合の好いもののみを舉げる。偶々都合が惡るければ買收籠絡、其他凡ゆる方法を以つて誘惑する。故に本當に自由なる意見は殆ど全く闘はされる機會が無いのである。昨今矢釜しい勞働問題についても、米國などでは此評議會制度に上つて見事な成功を收めて居ると聞く。資本家の代表者と勞働者の代表者とが一堂に會し、何うすれば双方の利益を十分に完うし得るかを誠實に研究するのだから、後の解決は甚だ楽だ。日本で同様な事をやらうものなら、資本家代表者は頑として一歩も讓らない。讓ると軟弱の非難を蒙るの恐ある事も亦自分の不面目のやうに考へる。だから無理にも勞働者の代表者を抱き込まうとするからます〱其反感を買うか、又よし巧く籠絡の功を奏すると、今度は代表者と勞働者本人との間に廣い隔りが出來て、勞働運動をます〱險惡ならしめる。要するに問題を根本的に見つ平和的に解決せんとするの誠意が無いのだ。勞資協調は主義として推賞に値する解決策でないかも知れない、けれども當事者に誠意があれば之れでも問題の解決は一通り出來る。誠意がなければ理論上如何に立派な主義でも巧く成功するものではない。

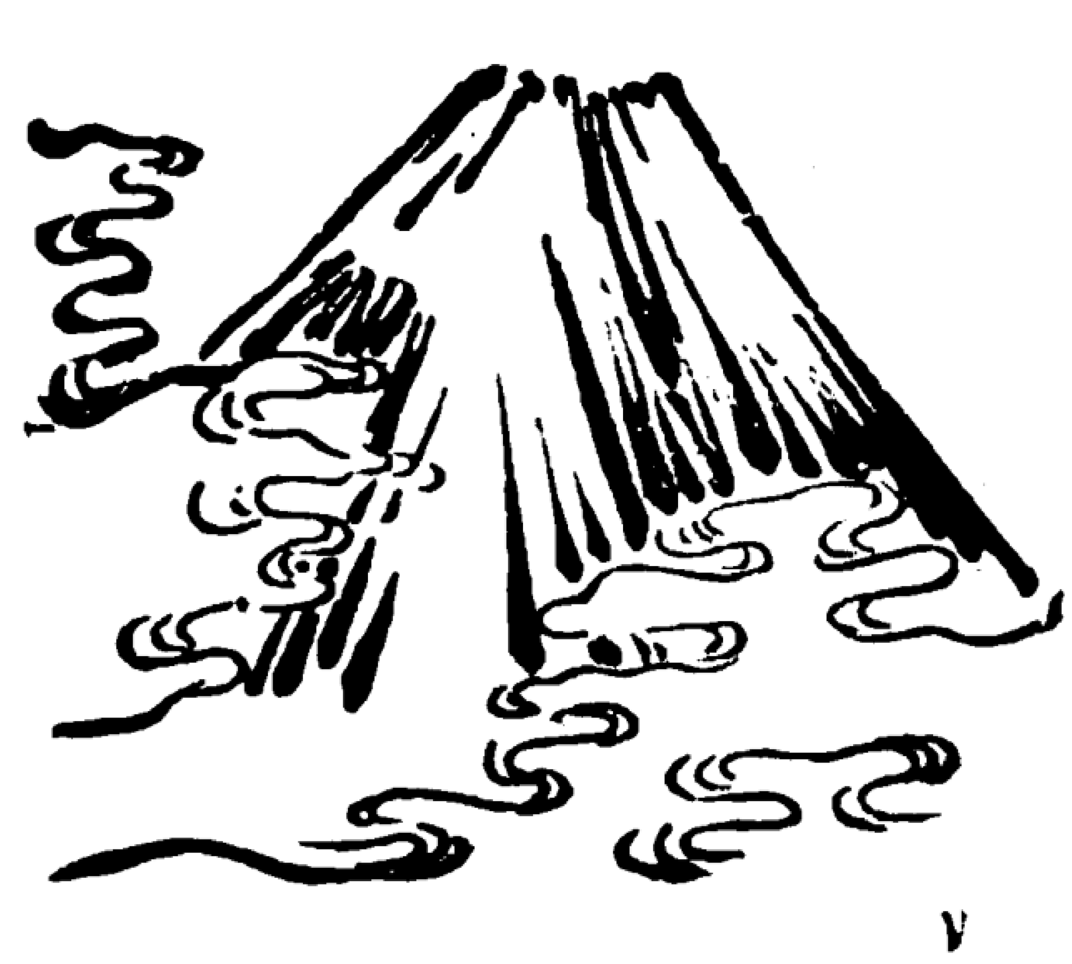
◉**虚構の自白**　近頃の新聞の三面記事を讀んで我々の常に意外に感ずる事は、刑事被告人の多くが裁判官の前に出ると必ず云ひ合したやうに警察に於ける自白を否認する事であ

る。而して其云ふ所は皆警察で無理に心にも無い事を白狀せねばならぬやうに強制さたと云ふのである。中には萬一を僥倖して殊更らに豫審廷で白(しら)を切るものもあるかも知れない。が、兎に角警察に於て刑事被告人は一旦は必ず虛構の自白をすると云ふ事は輕々に看過し能はざる出來事であると考へる。而して其原因に就いてはいろ〳〵の事があるだらうが、中にも我々の常に意を留めて居る事は、官吏社會に仕事の出來高を爭ふと云ふ風がある事である。仕事の高に依つて勤惰　賞罰が定まるのだから、斯う云ふ弊害も起るのであらう。我々が官吏となつて居る友人などと話す時にも、能くあの人は之れ丈けの仕事を殘したと云ふやうな事を云ふ。官吏の良否を判別するに仕事と云ふ事が如何に重きを爲して居るかを想像すべきである。小學校の先生などになると此弊は殊に非道い。教授細目に揭げてある丈けの事を杓やり終はせないと職務を忠實に盡したものと云へぬから、憶えようが憶えまいが構はずどん〳〵進む。それと同時に小供の腦力を考へずに無理に澤山の宿題を出し、力の及ばざる所を課せられたのだから、他人の助力によつて辛うじて之を始末するのは已むを得ない。之れでは教育にも何もなつたものではない。斯う云ふ風に人を見ず、其爲した仕事に着眼すると云ふ所からいろ〳〵の弊害が起るのであらう。虛構の自白なども、唯之れを人權蹂躙の一例として見る位の程度なら、それほど矢釜しい問題にもならないが、予輩は更に之が我國官界の隱れたる通弊と相涉る所と信ずるから、玆に敢て一言を發した所以である。

●現内閣の殘せる精神的債務

此頃地方に役人をして居る友達が來て言ふには、昨今それとなく政府が奬勵するので寺參りや氏神の祭禮などがなか〳〵盛んになつた。金も隨分使つて居る。けれども時々寺に集つた若者の議論や又氏神に祈る彼等の希望などを私かに聞いて見ると、政府が之を奬勵した趣旨とはまるで異つた事をやつて居る事もある。此頃は亦相撲などを奬勵して居るが、斯うして煽てた田舍の人氣が一轉して政府反對の仕事に利用されなければいゝがと心配して居ると。成程此の男の言ふやうに、滔々たる今日の時勢の流れを浪花節や草相撲で食ひ止めようとするのは飛んでもない誤りだ。唯それ丈けならいゝ。彼等が共同じ目的の爲めに奬勵する其仕事の中から、反對の運動が生れて來ないだらうか。ブルボン家が財政困難の極、之れで巧く難關を切拔けようとして久し振りで召集した三族會議から佛蘭西革命の騷ぎが起つた。支那でも淸朝の末年、之れで天下を平安に治めんと各省諮議局を開くと、豫ねて民間に潛んで居つた不平の政客は之れ幸と議員となつ

て得手勝手の熱を吹く。淸は之れが爲めに仆れた。時勢を觀るの明なきものゝやる仕事は常に斯の如きもので、彼等が焦れば焦せる程其爲す所が常に反對派の利用する所となつて終ふ。さうでなくとも、一體餘計な事をやると、之れが將來の禍の種とならぬ爲めには、不斷多大の苦心と努力とが要る。今日の政府はなまなかいろいろ餘計なものを搆へた爲めに、而して將來此等をして國の禍を爲さしめざらんが爲めに、後の政府はさぞ困る事であらう。現內閣の餘命幾何もないと言ふ噂を聞く毎に、予輩はつくゞ現內閣が飛んでもない精神的債務を將來に殘したといふ事を考へずには居られない。



驚くべき治療力を有する

電波治療器現はる

—電氣王エヂソン氏發明のウアイオレーヤー機—

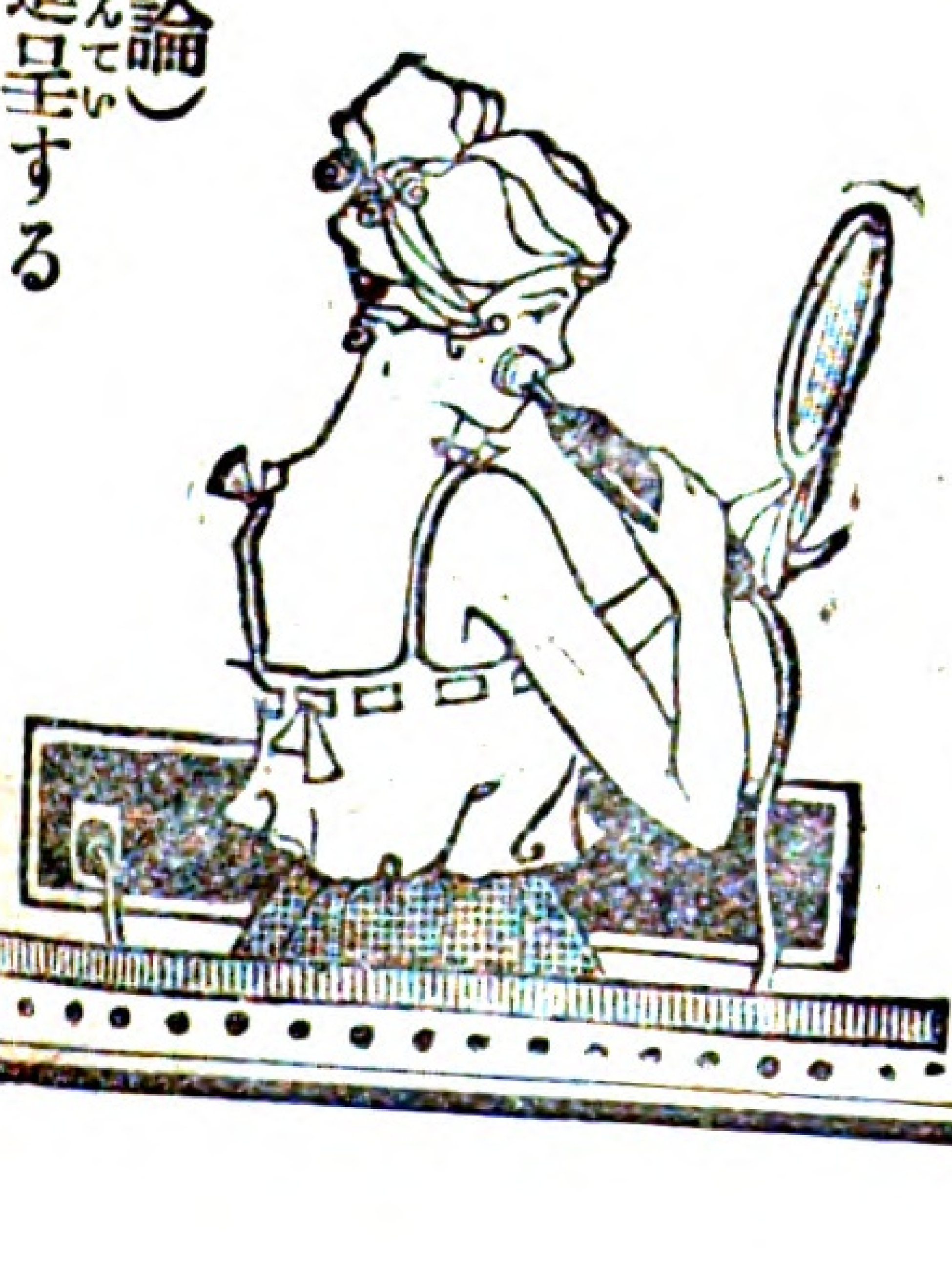
—歐米にて目下流行を極むる健康增進器—

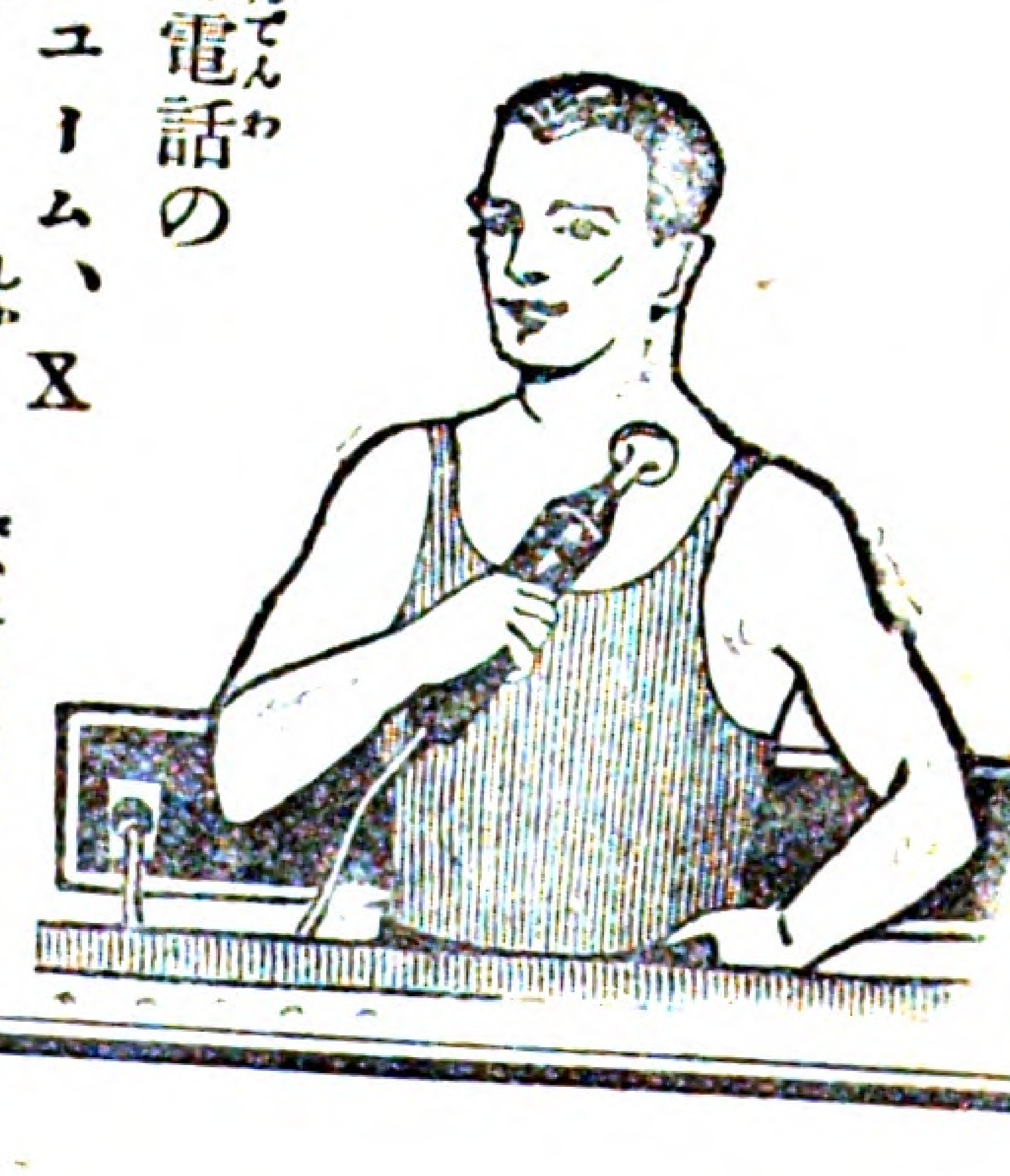
—永久使用—使用簡易—**一具金參拾五圓**—



世界的の科學者ニコラ・テスラ氏の發見せる高周波電流は今日無線電信及び無線電話の電波發生機として驚くべき作用を顯はして居る。此の電波或は高周波電流はラヂユーム、X光線と共に近世醫學上の三大治療法として大なる病院には必ず之れを備ふるに致つた、然るに米國發明王トーマス・エヂソン氏は之れを各家庭に於て使用せしめんが爲め小型の電波發生機を發明しヴアイオレーヤーと命名して發賣した、此の電波は人體に應用して無痛無刺戟にして快感を伴ふのみならず些の危險なく何人にても直ちに使用し得べく此れを醫藥の効なき慢性の疾患に偉效を奏し難治の胸廓及び内臟の諸疾患に卓効あり不眠、神經衰弱に速効し、肋膜肺病に有効にして不姙症、子宮病一切に寄効あり、痲疾及び生殖器系諸疾患に確實に奏効する、有力なる電氣、紫光線、酸化の三大作用を有するものである。

詳細は東京市本郷一の九ヴアイオレーヤー商會へ(中央公論)にて見た旨書いて說明書を要求せよ、無代進呈する





七月十五日號
七月廿日前後發賣

中央公論

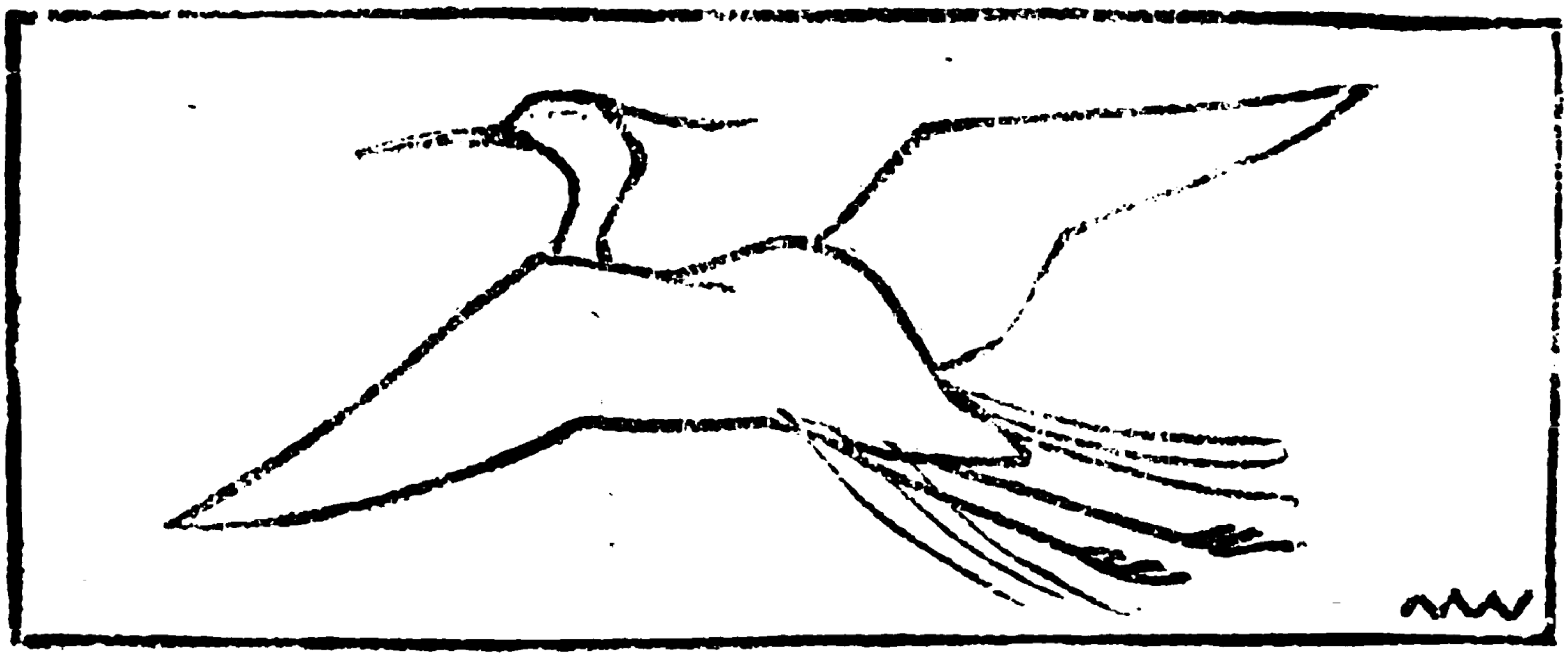
本號特價金
壹圓五拾錢
郵稅金四錢

一年一回定期增刊

都市の改善と都會生活者の安寧幸福の增進を圖り、農村の興隆と田園生活者の向上發展の方策を講じ、熱鬧の巷に、劇務と疲勞と塵埃に喘ぐ者をして、自然の風光と田園の幽趣とを掬するの雅懷を養はしめ、僻陬の地に、荒廢と粗野と寒素とを嘆く者をして、文明の利便と文化の惠澤に與かるの方途を考へしめ、都鄙何れに住するを問はず、各人をして生の充實と共に生の享樂を得て、眞に人間として意義あり、生甲斐ある生活を營ましめんとする、是れ實に本號發行の大眼目たり

『都市と田園』號

——此大眼目に對する論議・研究・記事を滿載するは勿論、或は「都市の享樂と田園の娯樂」を叙し、或は「郊外生活者の感想」を蒐め、或は「世界の大都・舊都の壯觀・美觀」を說き、或は「山上の生活・水上の生活」を描き、或は新詩人數氏の「都會と田園の歌」を載す。若し夫れ創作欄に至つては、東京・京都・大阪の三大都と農村及び田園に材を取れる文壇第一流大家の會心作を網羅し、啻に近時雜誌界の偉觀たるのみならず、又實に炎暑苦熱を忘るべき銷夏の絕好讀物たらずんばあらず。



鶴唳

谷崎潤一郎

三月へ這入つてから間もない時分の、天氣の好い或る日のことでした。私は晝飯を濟ませると、その町の城趾にある公園から、一帶に別莊の多い小山の方へ、ぶらぶら杖を曳いて散歩に出かけました。

その町と云ふのは、東京から程遠くない海岸にある暖かい土地で、私はその頃體の工合が思はしくないところから、もう半年ばかりも、小ひさな茅葺きの家を借りて其處に住んで居たのです。で、冬の間はぢつと書齋に閉ぢ籠つて、めつたに外へなぞ出たことはなかつたのですが、その日は空の色が何となく優しみのある靑みを帶びて、いつの間にか春が來たのを知らせて居るやうな心地がしたので、珍しくも其の邊をぶらついて見る氣になつたのでした。

出て見ると、私が豫想した通り、ところどころの百姓家や邸の庭の梅の花はあらかた散つてしまひ、私の家の前通りにある若木の櫻の並木路が、遠くからぽうッと紅く見えるくらゐに蕾を持ちかけて、もうその町には春が來て居ました。東京だとまだ餘寒の嚴しい時分なのですが、此の地方では此の頃が一番いゝ陽氣なのです。全體、そ

の町は南に海を控へ、北から西へかけては高い山を繞らした屏風の蔭に包まれて居て、冬の間も冷めたい風が吹くやうな日は一日もなく、しツとりとした、神經を鎭めるやうな閑靜な趣があつて、それが大へん私の氣に入つて居たのでした。殊に三四月の頃は海から來る風も惡くジメジメせず、暖かいうちにも肌を引き締める爽やかな空氣が、シーンと澄み切つて、頭の中が冴え返るやうた好い氣持ちになるのです。東京人の別莊地とは云ひながら、その邊の家の作りは割合に俗惡でなく、官吏の古手や金持ちの隱居などが、靜かに餘生を樂しむと云つた風な、奥床しい構へのものが多いので、ちよいとした生垣の小路などを歩いて見ても、一種の落ち着きと寂びのある工合が、何處となく京都の郊外を想ひ起させます。それらの家々の周圍には大概さゝやかな溝があつて、山から來るらしい清冽な水がさらさらと流れて居たり、こんもりとした竹藪がところどころにあつたりするのも、さう云ふ風情を助けて居たに違ひありません。德川時代の「根岸の里」などと云ふところも、大方こんな風ではなかつたのかと、私は歩きながら考へました。東京に住んで居ると、めつたに花の香を嗅ぐ時はありませんが、此の邊では非常によく花が香ひます。梅の香や、丁子の香や、そんなものが、ふいと、道を通つて居る時に微かに鼻を襲つて來ます。さう云へば土の色なぞも、下駄の齒に快く觸るくらゐな濕りを帶びて黑ずんで居て、埃の立つやうなことはなく、山が近いせゐか地層の下は岩から出來て居ると見えて、雨上りにもぬかるみになるではなし、却つて立ち昇る水蒸氣の中に、花の香のそれに似たほのかな薫が感ぜられます。私は木々の間でしきりなしに囀る小禽の聲を耳にして、鼓膜でも啼きさうなものだと思ひながら、やがて町を拔けて公園の方へ出かけました。

公園へ行くには、此の町の停車場から某溫泉地へ通ふ電車路を越えるのですが、その溫泉のある山はつひ二三里の近くにあつて、頂きの方にはまだ銀色の雪を積みながらも、何となく春めいて來た霞の底に紫色の襞を曳いて居る姿が、

打ちつゞく人家の屋根の上に、ゆつたりと、冬の間とは違つた形で懐しく間々と眺められます。その山の裾がずうツと伸びて來たところに、此の町を圍むいくつも愛らしい丘があり、それらの丘の南を向いたなだらかな斜面には、蜜柑畑が澤山に作られ、又そこからは海を見晴らすことが出來るので、或る宮殿下の御別邸だと云ふ露臺や、尖塔のある白塗の西洋館や、その外眺望の好さゝうなさまざまな家屋が、松林だの梅林だの竹藪だのの間に、ちらちらと隠見して居るのです。で、私はその丘の下をぐるりと廻つて、お城の濠端から公園の方へ出たのでした。公園と云つても極く小ひさなものですけれども、今も云ふやうな可愛らしい丘が三方を取り巻いて、恰もアンフィセアタのやうな環を成して居る中に、いかにも子供の遊び場に好さゝうな、木の一本もない、平らな芝生がひろがつて居て、或る和やかな感じを抱かせるのです。そしてその北の方の丘には、此の町の名所の一つに數へられる見事な梅林がありました。何でも此の芝生は昔は城内の侍の馬場だつたのださうですが、うらうらとした春の日永なぞに、こんな所でポクポクと馬を馴らした其の頃の武士の生活を想ふと、羨しいやうな氣がしないでもありません。今では西の小山に中學が出來て、夕方になると學生たちがその原つぱへ集まつては、野球の練習をして居るのを折々見かけることがあります。が、その日はやつと午少し過ぎたばかりのことで、學生たちの姿も見えず、一人の人影もない公園はヒツソリとして居るのです。私は暫く、梅林の中にある茶店に腰かけ、そこに賣つて居る蜜柑をたべながら、穏やかな芝生の景色をずつと見渡して居ると、別に何と云ふ理窟もなしに、體中がゆつくりとくつろいで來るやうな、近來にない安らかな氣持ちになるのでした。

　私はそれから公園を出て、裏道づたひに、例の別莊のある丘の方へ登つて行きました。そこは可なりな坂道になつて居て、歩き難い所なのですが、登り詰めると南側の斜面がなだらかに展け、その向うには、直ぐ眼の下にひろびろとした海が眺められます。ちやうど私の立つて居る地點から、山つゞきにだら〳〵と海へ突き出た半島があつて、その半島

の頸の所の深く灣入した海岸には、枝ぶりの面白い磯馴れ松が島の鬣のやうに列び、うねうねと鎖が揺れて居るやうな工合に白い波の打ち寄せる風情と云ひ、こつてりした青い水の面に點々と光る白帆の影と云ひ、極く有りふれた、昔の石版畫にでもありさうな景色だとは云ふものゝ、さて其處へ來て見ると滿更惡くはないもので、氣が晴れ晴れとするのでした。一體此の丘の中腹は、日あたりのいゝせゐか町中でも一番暖かで、眼が覺めるやうに明るくて、ちつと道端に休んで居ても、ちりちりと汗が湧いて來るのです。で、元來なら此處が一等の別莊地になる筈ですが、路が狹い上にごろごろした石段などがあり、車が通はない爲めか思ひの外家が建て込んで居ないのでした。私はその町へ引越してからそんな所を歩くのはそれが二度目か三度目だつたので、兩側のきらきらした青葉がくれに、程よく散らばつて居る洒落た門構への邸だの、せせこましい傾斜を利用した氣のきいた西洋館だの、垣根の隙間から覗かれる亭だの花壇だのを、ヘエ、こんな所にこんなものがあつたか知らんと思ひながら、だんだんその石段の路を降りて行きました。さうして恰も降り口から半町ほど手前へ來た時でした。とある生垣の角に沿つて、――今までつひぞ氣が付かなかつたことですが、――更に右の方へ曲るささやかな徑があり、それをずつと傳はつて行くと、そこに古ぼけた石の塀のある一軒の家を見出したのです。

その石の塀と云ふのは、何しろ恐ろしく年數の立つたものらしく、ところどころ崩れかゝつて蔦だの雜草だのの生ひ茂つて居る樣子が、全く此の邊の別莊とは趣が違つて居ました。昔此處にあつた士族の邸の名殘でもあらうか、そして今では住む人もなく荒れ朽ちて空家になつて居るのだらうかと、一と目見たところでまあそんな風に思はれました。最初に私は、その家の裏側へ出た譯なので、森閑とした、廢墟のやうな塀に沿うて、突きあたりに見える竹藪の方へ通り過ぎようとすると、その時塀の内から或る奇妙な人聲――か、又は鳥の啼きごゑでもあるか、ガヤガヤと云ふ騷が

しい音が、ふいと洩れて來たのでした。私は塀にぴつたりと耳を附けて暫く聞いて居ましたが、なかなかその音は止みさうもないので、遂にはボロボロになつた石の裂け目へ足を掛けつゝ、塀が餘り高くないのを幸ひに、それへこつそりと這ひ上つて行きました。と、蔦の繁みに顏を隱して中を覗き込んだ私の眼に、何より先に映じたのはそこの藤棚の蔭の、池の汀に居る一匹の鶴と、一人の支那服を着た少女でした。――かう云つたからとて、決して夢の話ではなく、事實それがそこにあつたに違ひないのですけれども、しかしその時は私自身にも夢のやうな氣がしたのです。さて、その鶴と少女とが遊んで居る庭は、丘の傾斜の一部分を圓く抉り取つたやうな窪みにあつて、矢張り塀と同じやうに荒れ果てて居ながら、何處か捨て難い雅致のあるものでした。と云ふのは、今も云ふ通り狹い場所で、高い所や低い所がでこぼこに入り交つた區域であるのに、その地形をそのまゝ應用して出來るだけの變化を持たせるやうに、こんもりした木立だの、明るい斜面だの、池の汀をうねつて居る路だのを、非常に手際よく配置してあるのです。私の覗いて居る塀の向うには、十坪ばかりの地を隔てて、洞穴のやうに凹んだ、今にも泥が崩れ落ちさうな二三丈の高さの崖があり、それがずうツと北から東の方を塞いで、その蔭の薄暗いジメジメした所には、恰も濃い綠青で描いたかと思はれる清新な竹の幹が、たつた今地の中から抽んでたやうな潑剌とした色を示して細かに生へ揃ひ、その藪の間からは一條の遣り水がちよろちよろと流れつゝ、藤棚の周りを迂廻して池へ注いで居ます。池は、それも餘程古いものらしく、一面に青い水草が浮いて居るのですが、その水草の塊が折々ゆらゆらと微かに搖ぐ風情を見れば、水が腐つて居るのでもなささうです。さうして、ちやうど藤棚の下から、綠の苔が一杯に附いた平べつたい石の板が突き出て居て、それが「亥」の字のやうな形に幾つも折れ曲つた橋になつて、向う岸の池の汀に續くところに、一本の新芽を吹いた柳の木が、ぼうぼうと打ち烟りつゝたつぷりした枝を水面にさしかけて居ます。池のぐるりを繞つて居る路は、その柳の蔭から次第に左手の丘の方

へ伸びて行つて、もうそこへ來ると全く地勢が打ち開けて明るく晴れ晴れしくなつて居ました。築山と云ふ程でもない極く柔かな勾配を持つたその丘には、公園のそれにも劣らない見事な梅の古木が五六株植わつて居る中に、支那の太湖石に似た岩がところどころに据ゑてあつて、その先の方はどうなつて居るのかハツキリ分らないけれども、多分それらの梅や岩で庭の景色が限られて居るらしく、丘がだらだらと降り坂になつた方面に、ほんの少しばかり瓦葺きの屋根の一端の見え透くのが、此の邸の母屋だらうかと思はれました。ですが、此れだけならば此の庭はさほど變つて居るとは云へないかも知れません。私が以上に記したところは大體の地勢を述べたので、實は此の庭の眼目とも云ふべきものは、一方の暗い竹藪と、一方の明るい丘との間に、池を前にして建てられた或る支那風の建物にあつたのです。

それは、まあ譬へて云へば、箱根細工の組み物のやうに、全體が紫檀に似た木材で組み合はせてあるかと思はれる、二階建ての、非常に可愛らしい、やつと室内に人間が立てるくらゐな樓閣でした。見ると、傍に一本の百日紅があつて、きれいに洗つたやうな茶色の肌をしたその樹の幹が、恰も建物の屋根と背比べをして居るやうに思はれたのでも、それがどんなに小さいかと云ふことは分るのです。さうしてそんなにも可愛らしく、玩具の置き物のやうに見えたのは、一つには甍の瓦がまるで陶器で造つたかの如くつやつやとして居たからです。實際その樓閣の外觀は、周圍の荒廢した景色の中に、つやつや布巾で拭き込んだやうな光澤を放ち、美しい瓦を載せた四方の軒先は、八字髯のやうにピンと空へ撥ね上つて居て、その下にある卍字つなぎの二階の欄杆と共に、日本の建築には餘り例のない空想的な曲線を弄んで居るのでした。全體こんなものが此の庭にあるのからして不思議ですが、飾り物にしては少し仰山だし、例の支那服の少女の事から察すると、或は支那人でも住んで居るのかと考へられました。が、私がさうやつて眺めて居る間、階上の窓にも階下の扉にも、一樣にその卍字つなぎの——欄杆よりはずつと細かな卍字つなぎの——格子戸が靜かに鎖されて居て、

その格子の裏に張つてあるらしいガラス板がピカピカと輝く外には、誰も中から出て來さうなけはひもありません。やがて私の注意は、樓閣の正面に掲げてある一つの額に向けられました。少しく距離が遠いのでそれを讀むには可なり困難でしたけれども、ぢつと視つめて居るうちに「鎖瀾閣」と書いてある楷書の字體が、だんだん分るやうになつて來て、なほその額の左右の柱に、それこそ細かくてとても讀めはしませんけれども、一對の聯のかかつて居ることや、その下に花崗石の石階があつて、石階の左に大きなぐみの木が——全く、珍しく大きいぐみの木だと思ひました、——あることや、それと並んで二三本の芭蕉の植わつて居ることなどに、一つ一つ氣が付いたのでした。

ところで、先の鶴と少女とは今話した石の橋のまん中あたりの所に居て、鶴は池の中に降り立ち、少女は橋の上にうづくまりながら、恰も睦しい友達ででもあるやうに遊んで居るのです。少女は、餌か何かを入れてある壺をさし出してチヨツ、チヨツ、と、舌を鳴らしつゝ、「さあ、此れをお上り、」——とでも云ふのでせうか、支那語らしいので意味は分りませんけれども、彼の國の言葉に特有な小禽の囀るやうなキイキイした發音で、さう云つて居ます。と、鶴の方でもしなやかな頸をヒヨイヒヨイと曲げながら、その壺の中へ鐵火鉢のやうな嘴を入れて、獲物をカチンと挾むかと思ふと今度はぐつと仰向けに空を望んで、嘴をカタン、カタン、と二三度たゝいて、ゴムのやうにぴんぴん體を彈いて居る小魚を、そのうねうねとした道中の長い項の奥へ、何となく窮屈で飮みにくさうに、然しながら又非常にうまさうに、ちやうど人間が頗る長い蕎麥を鵜呑みにする時のやうに、ずるずると一と息に送り込んでしまひます。送り込むと同時に鶴はぐつと唾吐を嚥んで、眼には切ない涙を溜めさうに思ひますが、それは人間の考へで、彼女は猶も空を向いたまゝ、切なかつたのか旨かつたのか、兎に角ガアガアと鵜鳥の啼くやうな聲で啼きます。さつき私が塀の外で聞いたのは、その鶴の啼き聲と少女の言葉だつたのですが、所謂「鶴の一とこゑ」などゝ云ふものも、さうやつて聞いて見ると何となく

騒々しいばかりで、あまり品の好いものでもありません。しかし、それは勿論鶴に就いての話であつて、彼女の神々しい眞白な體が、――多分その鶴は丹頂だつたのでせう、――ちやうど南へ廻つた明るい午後の日を受けて、カツキリと反射して居る姿は、その傍に居る少女の絢爛な支那服と相映じて、暫く私をうつとりとさせずには居ませんでした。鶴が歩く度毎に池の面にどんよりとひろがる波紋、それへだんだらになつて映る白い影、又その上へ赤や青の千代紙を刻んだやうにチラチラと落ちる支那服の影、それを取り圍む眞青な浮草、さてその浮草の上に更に金色の斑點を洩らす水邊の柳や藤棚の影、――そのさまざまな光と影の渦の中に、例の少女は餘念なく鶴をあやして居るのでした。年頃は十三四年でもありませうか、圓顔の色の白い、眼元のパッチリした悧巧さうな子で、緋繻子に何かきらきらした花の刺繍のある上衣を着、濃い緑のヅボンを穿いて、桃色の襪に紅い切れの沓を穿いて居る姿は、繪にある唐子人形のやうに思へるのです。頭なぞも其れが支那の風俗と見えて、前髪を絹絲の房のやうに切り揃へて、クツキリと富士額なりに眼の兩側へ垂らしてあるのが、やゝ不自然ではあるけれども、大へん可愛らしいあどけない感じを與へて居ます。それからその髪の際にちらついて居る翡翠の耳環だの、手頸に篏めてある金色の腕環だの、凡べてそれらのケバケバしい色彩が非常に天氣の好い、朗らかな春の眞晝の、森閑とした庭の中に、金魚の鱗のやうにぎらぎらとする様は、ちよつと譬へやうのない美しさで、考へて見るとどうしてこんな少女が此處に居るのか、不思議でならない氣がするのでした。第一、此の町に支那人が住んで居るのも奇妙ですし、こんな所に鶴を飼つて居る邸があらうなどとは、つひぞ噂にも聞いたことはありません。で、私は時の移るのも知らずに、ぢつと石塀にしがみ着いたまゝ、氣長に中を覗き込んで居ました。

すると、先から三十分も立つた時分でしたらう、餌をたべてしまつた鶴が、チヨコチヨコと池の汀の柳の木の側へ駈け上ると、少女も後を追つて行つて、又そこで一緒になつて遊んで居る様子でしたが、その時ギイと云ふ重々しい音が

して、鐵欄閣の扉が開いて、中から四十恰好の、痩せた、黄色い顏をした、黒繻子の服を纏つた一人の支那人が出て來ました。その男は、口の周りと頤の先にちよんびりと薄髯のある、見るから氣むづかしさうな眼つきの人物で、まだ腰が曲ると云ふ年頃でもないのに、やゝ俯向き加減に、兩手を背中へ廻して、ムツツリと不機嫌らしく默り込んだまゝ、閣の前から右へ藤棚の下を通つて橋の方へ歩いて來たのです。さうして、少女の方を見て、何か話しかけたさうに口の中をもぐもぐやらせて、その癖斯う、――何となく極まりの惡さうな、モヂモヂ躊躇するやうな風をしながら、ちつと佇んで居るのでした。と、少女も其の男を見て最初は無邪氣に笑ひましたが、次第に悲しげな顏つきになり、彼の傍へ行つたものか行かないものかと、相手の心持ちを測りかねて居るやうでした。が、男は耻かしさうな横眼を使つて、時々偸むやうに少女の方を見るだけで、呼びもしなければニコリともしません。それが又少女には一層悲しいのであるらしく、その悧發さうな眼に涙を潤ませ、今にも泣きさうに眉を顰らせつつ、もう鶴の事も忘れてしまつたやうに、何か知ら考へ込んで居るのです。やがて彼女は、恐る恐る立ち上つて、その男の顏色を氣に病むやうな作り笑ひを浮かべながら、遠慮がちに傍へ寄つて行きました。男は少女の近づくのを見ると、いよいよ極まり惡さうに、こそこそと逃げて行きさうにしましたけれども、その時彼女は直ぐ側へ來て、手を執らんばかりにして、甘へるやうな、訴へるやうな聲で話しかけたのです。男がそれに對して何と云つたのか、――勿論支那語で、而も早口で、極めて曖昧に一と言二た言もぐもぐと云つただけなので、聞き取ることは出來ませんでしたが、云つてしまふと、彼ははつとしたやうに顏を擡げて、急にキヨロキヨロとあたりを見廻しました。その疑ぐり深さうな、臆病らしい眼は、グルリと庭を一と周りした後、今度は塀の上へ注がれて、私が首を引込める暇もなく、ヂロヂロと此方へ向けられたのです。しかしさうなつてから慌てて引込めるのも變なものなので、私は猶もさうしたまゝ動かずに居ると、男は始め蔦の蔭にある私の顏を何か外

の物體と思ひ違へたらしく、暫く不思議さうに見て居るうちに、漸くそれと分るや否やぎよつとしたやうに瞳をひろげて、それから又改めてヂロヂロと、念入りに睨み詰めました。睨まれて居た間は半分ぐらゐだつたでせうか、私がもう少し頑張つて居ればどうなつたか知れませんが、その間男は默つて、腹立たしげな眼をイライラと見据ゑて居ただけで、怒鳴らうともしなければ手を擧げさうにもしないのです。私はその刹那、「ひよつとしたら此の男は氣違ひぢやないか、」と、思ひました。それと同時に、その男の黄色い顔つきが非常に無氣味に感ぜられて來たので、ズルズルと塀を滑り降りてしまつたのです。そして突きあたりの竹藪へ出て、そこから或る淨土宗の寺の境内を横ぎり、電車通りの方へ丘を下つて行きました。

「おい、おい、今あすこの丘の所で不思議なものを見て來たんだぜ。」

家へ歸ると、私はさう云つて、早速妻に話しかけました。すると妻はその邸の事を精しく知つて居るらしく、私の迂濶さを笑ふのです。

「だつて、己は知らなかつたんだから仕方がないさ、今迄そんな噂を一度も聞いたことはなかつたからネ、」

「そりやあなたが惡いんだワ、いつも書齋にばかり立て籠つて居て、碌に口も利かないんですもの。此の町中に知れ渡つてる事だつて、あなたが知らないのは無理もないワ、」

「だが何にしても、あんな所にあんなものがあるのは不思議ぢやないか。あの支那人の男と女の兒とは一體何者だネ、あれは親子なのかネ、」

「あなたの見た女の兒ッて云ふのは、いくつぐらゐ？」

「さうさネ、十三か、十四ぐらゐだつたらうネ、」

「あゝさう、それぢややつぱり親子なのよ、けれど二人とも支那人ぢやないのよ、」

「支那人でもないのに、支那語を使つて、支那服を着て居るのかい？」

「ええ、さうよ、」

それから、妻はその邸の事を知つてゐるだけ話してくれましたが、聞いて見ると面白い事實なので、私は其の後此の町の知人に會ふ毎に、いろいろ問ひ質して見たのでした。で、その邸の謂はれと云ふのは、さつと次ぎのやうな事なのです。——

一體、此の町は舊幕時代に何十萬石かの或る大名の城下で、問題の邸は、矢張り私が推察した通り、その大名に先祖代々仕へて居た星岡と云ふ醫者の住居だつたのです。そして、維新後になつてからも、今の主人の祖父にあたる人が明治三十年頃までそこに住んで居て、醫を業とする傍漢籍や詩文の道樂　耽つて居たので、今殘つて居る庭はその時分にそのお爺さんが、大體の形を造つたのださうです。尤も、鐵瀾閣と云ふのは後に出來たので、もとは其處に梅花莊と云ふ草庵があつて、それがお爺さんの隱居所になつて居た。何でもお爺さんは八十幾つまで生　た人で、當主の靖之助は、——それがあの支那服を着た男なのです、——父が早く亡くなつた爲めに、そのお爺さんと母親の手で育てられました。一人息子で、非常に我が儘な子だつたさうですが、彼の中　時代にお爺さんが亡くなつてからと云ふものは、母親と二人きりで淋しく暮したせいか、だんだん性質が陰鬱になつて來て、やがてはその陰鬱を紛らす爲めに酒を飲んだり藝者買をしたりして、始終母親に心配の種を蒔いたのでした。彼が東京の帝大の文科を出たのは三十七八年頃のことで、そ

の時分は放蕩生活がますます募るばかりだつたのです。文學士になつても職業を求めるのではなし、仕事らしい仕事もせずに、金さへあれば幾日でも東京へ遊びに行つたきりで、たまに歸つて來ると例の梅龍莊へ引き籠つたまゝ、お爺さんの遺して行つた漢籍を讀み耽つて居る。もともと、彼が文學をやるに就いては、母親は大の不贊成だつたので、「醫科をやるやうに」と云ふ祖父の生前の言葉もあり、先祖の業を受け繼ぐやうに勸めたのですけれども、靖之助はどうしても承知しなかつたのです。そして、最初英文科へ這入つて、一年ばかり立つと嫌になつて哲學科へ移り、又一年立つとそれも嫌になつて漢文科へ移り、五年もかゝつてやつと大學を出たのでした。

母親は倅の身を堅めさせようといろいろ氣を揉みましたが、何分當人がそんな風で、とても結婚する意志などはないらしく、手の附けやうがなかつたのです。道樂をするにも別に惚れた女がある譯ではなく、たゞ燒け糞に茶屋酒を飲んで、家に居れば一日ムツツリと塞ぎ込んで居る、さうして爲す事もなくブラブラと日を送るより外に、彼には何の樂しみもないやうでした。其の頃の話ですが、靖之助はよく、「日本は詰らない、何處か外國へ行つてしまひたい」と、口癖のやうに云つて居たさうです。「母親が居なかつたら、疾うに外國へ行つてるんだが、」と、縁組の相談などを持ち込まれると、きまつて彼はそんな愚痴をこぼしたさうです。然るに、その變り者の靖之助が、どう云ふ風の吹き廻しか、ふいと母親の頼みを聽き入れる氣になつて、極く有り來たりの方法で嫁を迎へたのは、彼が二十七の歲でした。そのお嫁さんの里は、やはり此の町の舊家で、昔の家老職の家柄でした。お嫁さんの名は「しづ」と云つて、町でも評判の器量の好い娘でしたから、靖之助も滿更いやではなかつたのでせう。まあそんな譯で、たやすく結婚を承諾したのだらうと、當時の人々は噂しました。で、結婚後の一二年は彼も生れ變つたやうになり、土地の中學に漢文の教師を勤めて、母との折合もよく、そのうちには照子と云ふ女の兒も生れるし、夫婦は睦じく暮らしました。母は、照子が生れると間もなく、

安心したせゐか病氣になつて、或る年の冬、たしか明治四十二年頃に、亡くなつたのです。さうして靖之助の心が、再び青年時代の憧憬と寂寞とに囚はれ始めたのは、その事があつてから間もなくでした。

それは或は、妻のしづ子の性質が彼に滿足を與へなかつた事が、原因の一つだつたかも知れません。なぜなら、しづ子は高雅な人品の婦人でしたけれども、昔風な士族の家に育てられたので、云はば透き徹つた湖水のやうな、靜かな、何處か靜に淋しみのある、內氣な人だつたのです。靖之助は彼女に對して不平を云つたり、叱つたりしたことはないのですが、無言の裡にだんだん餘所々々しい素振りを見せるやうになりました。彼女は、良人が終日一と言も口をきいてくれなかつたり、飯もロクに喰はなかつたり、家庭の空氣を厭ふやうにコソコソと梅崖莊へ逃げ込んだきり、晝も夜も出て來なかつたりするのを、大人しく、ぢつと堪へて居なければなりませんでした。「お氣遣ひな事があるなら、仰つしやつて下さい。」と、たまにさう云つて尋ねても、「いや、お前に云つたところで仕樣がない。お前には何も惡いことはないのだから安心するがいゝ。」と、良人はたださう云ふのです。そして、「日本は詰らない、日本の國に居たくない、」と結局はそれを云ひ出します。彼の樣子は、妻に限らず、此の町の凡べての人に、――事に依ると人生全體に、強い反感を抱いて居るやうでした。勿論中學の敎師も罷めてしまつて、陰鬱の度は若い時よりも尙激しく、もうとても酒の力や藝者遊びでは慰める術もないのでした。彼がさういふ孤獨な時を如何にして過したかと云へば、古本が一杯詰まつて居る梅崖山莊の書棚を漁つて、支那の文學と云ふ文學なら、詩詞であれ、戲曲であれ、小說であれ、稗史であれ、手あたり次第に抽き出しては氣の向くまゝに拾ひ讀みして居たのです。彼の祖父は枕南や岐山と詩の應酬をした人なので、「梅崖詩稿」と云ふ草稿がありましたが、靖之助はそれを始終傍に置いて、自分でも折々詩を作つて居ました。その詩は誰にも見せなかつたのせ、巧拙は分りませんけれども、恐らく彼はそれに依つて、纔かに遣るせない情懷を述べて居たので

せう。が、町の人々は云ふ迄もなく皆しづ子に同情しました。しづ子は其の時分、どんなに貞淑に、どんなに溫順に、良人に仕へたか。我が儘な病人のやうな良人に疎まれれば疎まれるほど、一と入優しくして、痒い所へ手の屆くやうにいたはつてやつた彼女の心がけは、當時町中での褒めものになつて居たのでした。彼女も亦、さうして居ればいつかは良人の胸の解ける時もあらうと、それを樂しみにして居たに違ひありません。

かうして、苦しい切ない夫婦の生活が、お互ひに動きが取れないほど行詰まつてしまつた時、靖之助は或る日ヒヨツコリと、「支那へ行きたい、」と云ひ出したのださうです。それも、支那へ行つて來るのではなく、行きつきりに、もう日本へは歸つて來ないと云ふのでした。彼が突然そんな事を云ひ出したに就いては、どう云ふ立ち入つた譯があるのか、それは未だに、誰もハツキリ知つて居る者はありません。知つて居るとすれば妻のしづ子だけでせうが、靖之助は彼女にも、精しい事は話さなかつたやうです。要するに平素から支那文學を好み、身の周りの器具なぞも出來るだけ支那製のものを用ゐ、支那に對しては餘程強い憬れを持つて居たやうですから、それが昂じた結果、遂にそんな氣になつたのかも知れません。町の人はどうせロクな事は云はないで、物好きにも程があると取り沙汰をしましたが、當人は眞面目でその覺悟を妻に告げたのです。その時の彼の言葉として傳へられる所に依ると、自分は支那の文明と傳統の中で生き、そこで死にたい。自分にしろ、祖父にしろ、兎も角も此の貧弱な日本に生きて居られたのは、間接に支那思想の恩惠に浴して居たからだ、自分の體の中には、祖先以來、支那文明の血が流れて居る、自分の寂寞と憂鬱とは支那でなければ慰められない。と云ふのでした。で、その決心を遂行する爲めにいろいろ細かい點まで考へて置いたらしく、自分が居なくなつてからの妻子の身の振り方や、暮らし向きの事や、財產の處分などを、スツカリ取り極めて云ひ含めたのです。「長々お前にも世話になつたが、もう一生會へないものと思つてくれ、己が此の後何處で死なうとそんな事は心配しないがい

ゝ、たゞ照子の事だけは、勝手ながらお前に頼む、此の頼みを己の遺言だと思つてくれ。」と、彼はさう云つてしづ子に別れを告げ、家屋敷を始め全部の不動産を彼女に與へて、後々の生活に困らないだけの計らひをしました。しづ子の意向次第では離縁の手續きをする積りでしたけれども、それだけは彼女が許してくれろと云つたさうです。自分は何處までも屋岡家の人として、あなたの妻として死なせて貰ひたい。此の家屋敷と照子とをあなたの形見として、あなたの居らつしやらない後も、居らしつた時と同じ心持ちで暮らしたいと、彼女はさう云ひました。靖之助もそれには逆らはずに、不動産の外に幾らかの動産があつたのを現金に換へ、――その額は二三萬圓だつたとも、六七萬はあつたらうとも云はれて居ます。――それを持つて、とうとう支那へ行つてしまつたのです。

勿論、靖之助はそれきり何の便りも寄越しませんでした。しづ子は、當時やつと五つか六つになつて居た照子を相手に、嘗て良人の前で誓つた通り、貞淑な心を幾年も幾年も持ち續けつゝ、佗びしい生活に堪へて居ました。彼女が、三度の食事にも良人に陰膳を据ゑた事や、祖父や姑の佛事などをも常に怠りなく營んだことは、未だに美談として此の町の語り草になつて居ます。かうして、照子が十二の歳になるまで、六七年の歳月が過ぎたのです。

然るに、今から一年ばかり前、去年の正月の或る寒い晩に、――それがちやうど、彼が立つてから七年目になるさうですが、――靖之助は思ひがけなくもフイと歸つて來て、永久に捨ててしまつた筈の、我が家の門口に立つたのでした。もう其の時は見る影もなく痩せ衰へて、懐には一文の金もなかつたさうです。「しづ子、許してくれ、己はやつぱり意氣地のない人間だつた、己を哀れな男と思つて、何卒此の家の中に入れてくれ」彼はさう云つて妻の前にひれ伏し、昔に變らぬ彼女の情に縋りました。しづ子と照子とが涙を流して、彼を歡び迎へたのは云ふ迄もありません、が、玆に斷つて置かなければならないのは、靖之助は一人で歸つて來たのではなく、奇妙な二つの土産物を携へて來たのです。その

一つは私があの庭で見た鶴でした。そしてもう一つは、それもあの鶴のやうな優しい姿をした、十七八の可愛らしい支那の婦人でした。我が儘な靖之助は、日本が戀ひしさに戻つて來ながら、やはり支那を忘れることが出來なかつたのです。彼は一旦しづ子に與へた家屋敷を取り返して、置き所のない自分の身をそこに落ち着かせ、支那の鶴と支那の婦人とを朝夕の友としつゝ、煩ひのない、好きな生活を營まうとしたのです。

靖之助は七年の間、支那で何をして居たのか、持つて行つた金は何に使つたか、それも一向纏まつた事は分つて居ません。つまりはまあ、その金を贅澤に使ひ流して、したい三昧の樂しみに耽つて、所々方々を流浪して居たらしいのです。彼は照子が、「支那はいゝ所ですか」と聞いたとき、未だに消えやらぬ夢を趁ふやうな眼つきをして、「いゝ所だ、繪のやうな國だ」と答へたさうです。それから、その婦人との關係に就いては、彼女が楊州の生れであること、彼と彼女とはもう五年も連れ添つて居る仲で、或る時は共に杭州に住み、或る時は蘇州に所帶を持ち、鎭江、南京などにも暮らして居たこと、その後二人して長江の沿岸を此處彼處と經廻り、安慶に行き、蕪湖に行き、南昌に行き、岳州から湘潭に行き、遂には蜀の成都に這入つて、昔杜子美の浣花草堂のあつた附近に、一年あまりも逗まつて居たこと、さうして一昨年の夏、峽を下つて再び南へ戻つて來たこと、今ではもう、彼女なしには一日も生きて居られないこと、――それらのことを、彼はぽつぽつと曖昧な口調で、耻かしさうにしづ子に語りました。自分の爲めを思つてくれるなら、何卒此の女を疎略にしないでくれ、此の女が傍に居てくれれば、自分は日本に居ても支那に居られる、自分は「支那」を愛するやうに此の女を愛する、自分が憧れる「支那」の凡べては、今では此の女と鶴にあるのだと、さう彼は云ふのでした。結局しづ子は、良人が歸つて來たことは、ほんたうの意味で歸つて來たのではないことを、悟らなければならなかつたのです。彼女はほつと安心する暇もなく、今迄よりも更に辛い思ひを、忍ばなければならなかつたのです。

靖之助が歸つてから間もなく、或る日支那から材木だの瓦だの、種々な建築材料が屆きました。それが濟くと、靖之助は待ち構へて居たやうに大工を庭へ入れて、長い間住む人もなく荒れ果てて居たところの、――しかし、祖父以來深い由緒のある梅崖莊を、取り壞してしまひました。そしてその跡に、自分が一々指圖して、それらの材料を組み立てました。それがあの鎖瀾閣だつたのです。鎖瀾閣が出來上ると同時に、靖之助は支那の女をつれて其處へ閉ぢ籠つてしまつたまゝ、今日になるまで、さうして住んで居るのです。

その邸の謂はれと云ふのは、大體以上のやうな譯ですが、私がその日塀の上から見た少女は、その支那の婦人ではなく、娘の照子なのでした。照子がなぜ支那服を着、支那語をしやべつて居たかと云へば、それには又一つの哀れな物語がなければなりません。

照子の父は、初めのうちこそ母や彼女に優しい言葉をかけもしましたけれども、鎖瀾閣の普請が出來て、その方へ引き移つてしまつてからは、再び昔の、冷めたい人になつてしまひました。彼はもう、日本語を一と言もしやべらないで、いつも支那の女とばかり、何か樂しげに支那語で話し合つて居ました。そしてそんな時にはまるで別人のやうな、機嫌の好い笑ひ聲さへ洩れて來ることがあつたのです。照子は屢々その笑ひ聲を聞きました、と云ふのは、外の者はめつたに父の住居へ近寄ることは許されなかつたに拘らず、照子だけは、折々こつそりと閣の傍へやつて來ても、父はそんなに嫌な顏をしませんでした。彼もさすがに自分の子は可愛かつたと見えて、彼女が池の汀などに、ぢつと悲しげに彳みながら考へ込んで居たりすると、――さうです、照子はさう云ふ風だつたのです、日陰者のやうにして育つたせいもあ

るでせうが、陰鬱な父の性癖を受け継いだ、神經質な兒だつたのです、——それを見て見ない振りをしたり、時にはなつかしげに彼女の姿を窺つたり、それを照子に感付かれると極まり惡さうに顔を赧くしたり、又或る時などは二階の欄に凭れて、支那の女と二人で、彼女を見下しながら何かぺらぺらと噂をし合つたりするのでした。照子は次第に馴れて、始終庭へ來て遊び、遂にはあの鶴とも友達になりました。彼女が鶴と遊んで居ると、支那の女はそれを面白がつて何か支那語で話しかけたりする事がありました。そしてその女が興がる時は、父の機嫌も惡くはありませんでした。照子はそんな風にして少しでも父の笑顔に接するのを、せめてもの樂しみにしたのです。

彼女に支那服を着せたのは、良人に對するしづ子の優しい心づかひだつたのです。自分は良人に會ふことも、言葉をかけて貰ふことも出來ない、が、照子だけは良人の氣に入るやうにさせてやりたい、さう思つた彼女は、密かに横濱から支那服を買つて來て、それを或る日照子に着せて、良人の許へ送つたのです。靖之助はそれを見たとき、悲しいやうな嬉しいやうな、不思議な顔つきをしましたが、その後は前よりも又心が解けて、屢々笑顔を見せるやうになりました。照子は或る時父の機嫌の好い折を窺つて、思ひ切つて物を言ひかけて見ました、と、父はたつた一と言、「己は日本語は話さないぞ」と云ひ捨てて、すたすたと部屋へ這入つてしまつたのです。けれどもそれから一と月ほど過ぎて、照子がふいと、支那の言葉で、而も浙江の訛のある音で、彼女に話しかけた時の父の驚きと喜びとはどんなでしたらう。彼女は支那の女が何くれとなく自分に物を云ひかけるのを、分らないながらも聞き覺えて、いつの間にか片言交りにしやべれるやうになつたのでした。その女は照子をいとしがつて、綺麗な服だの沓だのを與へたり、簪や耳環をくれたり、髮の結ひ方などを教へてやつたりして、その間に自然と言葉を習はせたのでした。

「お父さんはいつになつたら、日本語をお話しになるのでせうか、」

照子が、漸く自由に會話する事が出來るやうになつてから、父に尋ねたのはこれでした。

「己は一生日本語は話さない。」

父はさう答へて、ひどく機嫌を損ねました。それからと云ふものは、彼は再び、あまり照子に馴れ馴れしくされるのを、厭ふやうな風になつたのです。

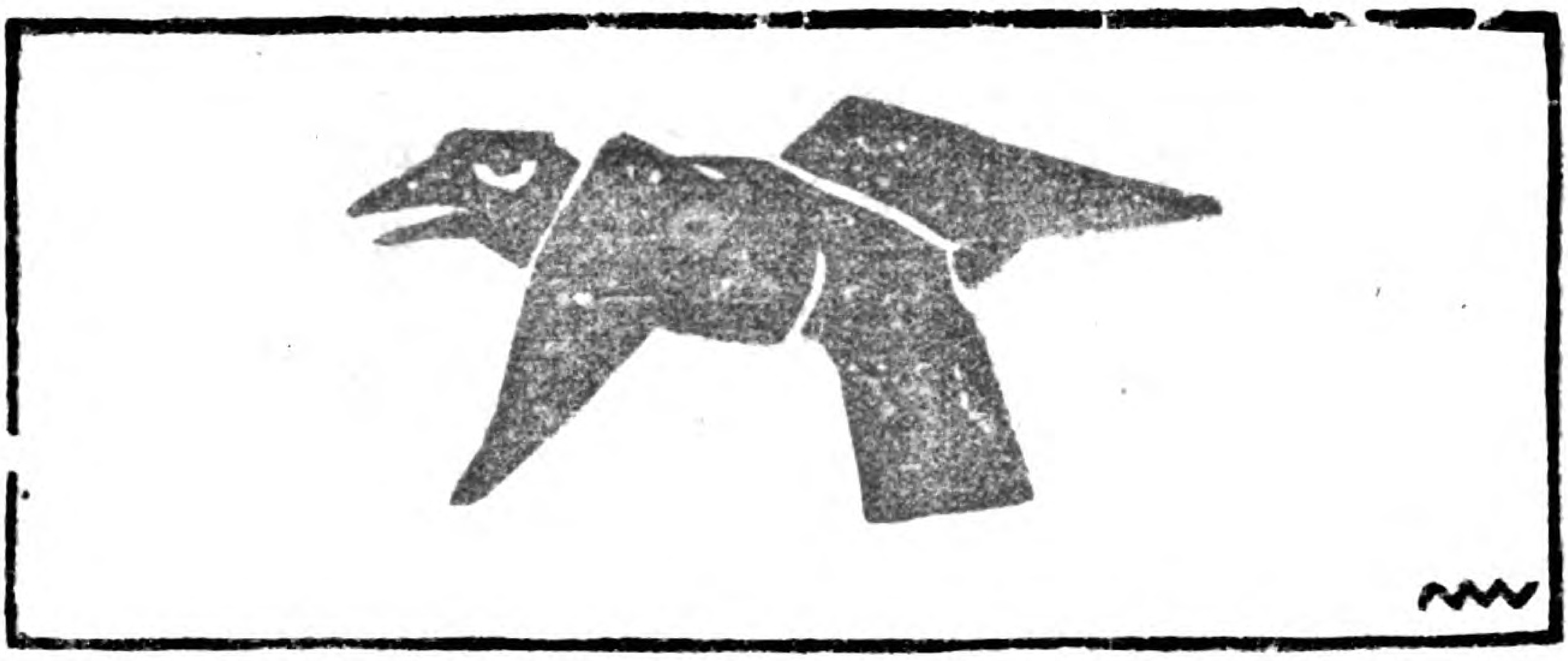
私はその後、あの建物の中に居る支那の女を見たいと思つて、たつた一遍、たしか五月の半ば頃に、あの塀の上へ登つたことがありました。が、人影のない靜かな底には鶴が歩いて居るばかり、樓閣の扉はひつそりと鎖されて居るのでした。さうしてただ、藤棚の花が紫の房を垂れ、池の面には睡蓮がただよひ、水邊の柳が日に光りながら、ぴつしよりと濡れたやうな枝をさしかけ、南の丘の太湖石のほとりに、大輪の芍藥が咲き狂つて居るのを見ただけでした。

然るに、つひ五六日過ぎて、その美しい靜かな庭に一つの椿事が起つたのを、私は知りました。その出來事は此の町の人々の口から口へ傳へられて、珍しい騒ぎになりました。――と云ふのは外でもなく、照子が或る日、その庭で支那の女を短刀で殺してしまつたのです。

その可愛らしい殺人が行はれたのは、天氣の好い、きらきらした初夏の眞晝のことでした。支那の女は、今まで鶴と遊んで居た照子に、不意に斬りつけられてキヤツキヤツと叫びながら、庭中を逃げて歩きました。その叫び聲を誰も氣

に留めなかつたのは、鶴の啼き聲だと思つたからださうです。彼女は、やつと照子と同じくらゐな小柄な女で、而も非常に小ひさな足を持つて居たので、實際鶴が歩くやうにチョコチョコと走りながら、池の周りを逃げ廻つて南の丘の方へ驅けて行きました。二人の支那服を着た少女は、そこに咲いて居る芍藥の花のほとりを追ひつ追はれつして、遂に取つ組み合つたまま、芝生の上をころころと柳の木の陰へころげて來ました。照子はそこで相手を組み伏せて、日本語で「お母さんの敵」と云つて、彼女の喉へ、ブツリと短刀を突き刺しました。

殺される時の支那の女の悲鳴が、それが又、鶴の啼き聲にそつくりだつたと云ふ話です。（大正十年、六月作）



妾の番人

大泉黑石

一

ふと醒めた目に、閉された雨戸の隙から流れ込むライラック色の朝の光がパツと映つた。總體四間の家の眞中の座敷、と云へば、そんなにぼろ〳〵の疊が敷つて、そんなに破れ放題の建具が取りつけてあらうとは思はれぬ部屋の蚊帳の中に私は寢てゐたのである。妾は產んで二十日あまりになる赤ん坊と隣りの部屋で添ひ寢してゐた。それは最初の西伯利出征隊がハバロフスクを占領する少し前で、本郷座の裏の路次の奥に汚ない立ち腐れの家を借りて、そこから家賃と米代とを差し引けば殆んど一文も殘らぬ給金で兩國橋際の風湖堂と云つた大きな、しかし、けちな赤本屋に勤めてゐる頃の私としたことが、自分の力でそんな場合にも下女を傭ふなどゝは思ひも寄らず、いゝ具合にもその時代に、麻布の簞笥町に瀨戸物の店を開いてゐた妻の義理の叔父が使つてゐた女中で、内密には彼の妾であつたお里と云ふ女を借りて來た當座であつた。お里の部屋はいろ〳〵と面倒な事情で一番奥にとつてあつ

た。――芝居町の夏の夜あけは海の底のやうな靜寂に支配されてゐた。いつも眞夜中に車を挽いて戻つて來るモデルおでん屋やカツとテキの外に何にも出來ない本郷バーや、そこに時々芝居の出方とふざけてゐる切符賣り娘の家や、寄席の下足番や、そんな路次の中の雨戸があくまでには五時間も早からうと思はれる時刻にいつも氣まぐれに早くからかうして一度目が醒めると寢つくまでには際限もない過去の事を考へてはお了ひに泣きたいやうな淋しさとやるせもない悔に襲はれる私としたことが、その朝も同じことであつた。

目に映るのは、お定りのことのやうに死んだ母の墓へ　まだ間もなく死んだ父親の柩を送つて行く少年の私であつた。それから海を渡つたり、山を越えたりして見ず知らずの人間達の手に引取られたかと思ふと、知らぬ間に監獄のやうな陰欝な學校へ放り込まれて、また幾年の後に生れた家に戻つて來てそこに私を待つてゐる一人の盲目の祖母のあることを發見した私であつた。それからその盲目の祖母さんを連れて、まるで雙六の骰子の目の向き次第に、飛んでもない世間の隅々を五里霧中に往つたり來たりして佗びしく暮した私であつた。やがてその頃ふと同棲した娘と夫婦になるが早いか、零落して、一番目の子供が生れる時分には仕事を失くする私であつた。私も、私より二つ年下の三輪子と云つた妻も、善人で同情があつて、綺量も萬更でなくて、智慧も少しはあつて、たゞ困つたことには學問と藝の仕込みが足りない上に、これまで人に騙されてある金も取られ、煽てに乘つて勤め先を失敗る癖に、人を騙して煽てゝ物にするだけの勇氣のない氣の弱い不幸な私達としたことが！せつぱ詰つた生活のどたん場に飛び込まねば仕樣も思案もなくなつたとき、私達はもう東京と云ふ見知らぬ人間の顔や足や、どうだらう！　あの目まぐるしくチラ〳〵チラ〳〵と動き廻る大

きな忙しい、しかし、困つたことには仕事の口に乏しい街の中へ來てゐたが、食へないことほど恐ろしいものが、外にあれば、實際その時その場で、あんな小五月蠅いばかりで耳の聾になるやうな石川島の造船所なんかで鑄物工夫になつたり、その後、ある男の世話で三河島の屠牛人足になつて、いやなことには、頭も足も手も可哀相な獸の血だらけになつた上に、しつこいほどにも、そいつが髮の毛穴にこびりついて搔けば虱になつてぼろぼろ落ちて來る商賣なんか、眞つ平の筈だつた。その頃この悲しくも可笑しな筒袖一枚づゝの夫婦は、握り飯をこしらへてたべるにも、三つになる男の子を大きな楠の根に腰に細をつけて遊ばせるに都合のいゝ今戸公園のそばにある親切な床屋の二階を借りてゐたが、間もなく屠牛場を廢めて、ふと思ひつきの、匂ひ袋賣りを始めたのであつた。私の記憶はその邊から段々はつきりして來るのである。それは私達夫婦の死もの狂ひの考案であつたに違ひない行商の鑑札なしで、新橋、烏森、濱町、よし町と毎夜々々、ごまかし物の香袋を乞食のやうな口上を列べて賣りに出た。その或日の出來事こそ、不思議にも、今まざまざと私の頭を過ぎつて行く。匂ひ袋の中に入れる香料と云ふのは、三の輪終點にあつた淺田と云ふ小さな藥草園で貸してくれた草の葉であつたが、たゞそれだけは口錢が出ないので、惡いことではあつたけれども、そして此度その後で自分達の小さい罪惡がばれることを怖れたけれども、藥を刻んで詰め込んだ袋——その半年もつゞかねばならぬ匂ひは、たつた一日で、さよなら！とお了ひになる匂ひ袋箱を抱えた私と、賣り口上の役目をつとめるために私について歩いた彌つきの三輪子とは、よし町の料理屋とか待合とか、藝者屋の勝手口を覗いて歩いて、一文にもならぬ日焦けのした夏の晝間を、ほんたうにがつかりして吾妻橋の方へ歸るのであつた。ねえあなた。惡いことをするなら、いつそ思ひ切り肚を据えて、どうでせう、大きくやりませうか？ごらんなさい、これだけの人間が公園の方へ行くのに、一人だつてわたし達見たいに困つてゐさうな人はありませんよ！ほんとにさうだ！と私も彼女もその時橋の畔にしよんぼりとして、そこ

をぞろ／＼と公園の入口へ向つて行く景氣のいゝ別世界の人間たちを羨しく眺めてゐたが、考へると、しかし、よくこれだけの人間が感心に仕班を持ち合せて、銘々食ひつぱぐれのないやうに出來るものだ！ふと、その群集の中に、それは話に聞いてゐるやうな掏摸の目つきをして、人と人との間をきよと／＼歩いては右を見たり左を見たりする夏マントの男がゐるのに氣がついて、私は一心にそれを見てゐた。それはやがて私の目の中から消えて了つたが、尤も、掏摸であつたかどうだか、たゞそれつきり大したことはないのであるが、色々情けないことばかり考へてゐた矢先に、泥棒まがひの男に出會つて、橋は違ふけれども、わけも多少違ふけれども、ふつと、鑄掛け松が金持ちの遊船に腹を立てゝあしたから泥棒にならうと、川の中へ鑄掛けの道具を投げ込んだときの心持ちを考へてゐたが、ほんとにさうだ！あいつの眞似でもやつて見やうか？そうして、妻と子の姿を一寸見て、ねえ、おい。悪いことをするなら、どうだらう一つ思ひ切つて、と半分は自分の心の慰める冗談に云はうか云ふまいか迷つてゐた私の目には、人の袖の中へ手を突つ込んだまゝ、こら！先づそんな風にも不意に後ろから摑まつた景色が突然浮んで來た。妻や子が、群集に蹴られたり踏まれたりしてゐる私の許しを乞ひ乍ら、大聲を上げて泣いてゐる姿がまた現はれた。私はそんな不吉なことを考へて、ふと三輪子へ「行かう！早く此處から逃れやう、緣起でもない」さう云はうと思つてふり返ると、すぐ側にあつた交番の巡査がこつちを見て、にや／＼と笑つてゐた。異なことだ！そんな馬鹿々々しい夢見たいなことは、七里けつぱいだ！それから妻が一寸！と指す方の川上を眺めた。すると、言問ひの岸邊から、妙なこともあるものだ、一人の男が鎧を着て火縄銃を擔いだまゝ、流れへ飛び込んだ、かと思ふと、いきなりまた後ろから洋服の上に袴を佩いて鉢卷をした男が驅け出して來るや否や、これもどう云ふ了見であるか、流れへ輕！と落ち込んだ。だが、ハッと思つた時それは直ぐ解つたやうに、活動寫眞の役者が、しかし、どこにそんなレンズが仕掛けてあるのか解らない前で、芝居をやつてゐるのだつ

た。妻は子どもを忘れて見て居た。

「行つて見ませうか？」

「面白さうだね。」

そんな具合にも、私達としたことが、目先にちらついて來る心配を忘れて、態々サツポロビール會社の堤を傳つて、とぼ／＼と撮影場へ足を運んだのであつたが、一つは私達がどんな場合にも他人に預けることの出來ないほど愛してゐた子どもを連れてゐたのと、も一つは多分私達の身采(なり)が大きに見すぼらしかつたのと、その二つの氣のひけることが、どうして私達——ではない私——でもないやつぱりお互に仲のいゝ此夫婦——に思ひもよらぬ突然の幸福を與へてくれるなんて想像しやう、たとへその幸福が一時の糟よろこびに過ぎなくても、と云ふ證據には、川に面して、小脇に汚い泥みぞを抱へてゐるやうな草と杉と背の低い竹にこんもりと圍まれたバラツク建てのＮＫ會社の活動撮影場の入口から五六間引つ込んだ芝生に二三人の役者が、ボールを投げて遊んでゐた。そこから小屋まで可なりの距離があつて、橋の上から小さく、しかし、正面にやゝはつきり見えた芝居はその小屋に遮ぎられてゐた。そこまで、折角やつて來て、あまり美しくもない場内のあちこちに、舞臺で使ひ古したとしか思はれないさま／＼の、しかし、罌一式の背景、書き割り、破れ崩れてゐる岩石やら燈籠やら何だかだと愚にもつかぬ道具の日ざらしを見て引つ返すには、全く、それは、はじめてゞはあつたけれども、うつかりやつて來たことが悔ゐられる筈であつたのを、私達は仕事を終へたのかこれから演(や)るのか知らない、しかし、橋の上から眺めた役者と同じ扮裝の官兵らしいのや、女中や、岩石のやうな頑亘一力の皺だらけの顔にこて／＼と白粉を塗り立てたお姫樣に違ひない四十あまりのボールを持つて、そこに、暫く立つて、せめて、こんな妖怪變化の遊び戯(ごと)でも見て戻らうとしてゐる私達の方へつか／＼とやつて來て、子供の相手になつたものである。

「可愛いゝお孃さんだなあ」と云ひ乍ら、にこにこ笑つて極り惡さうに、妻が「オチちやん！僕は坊やですよつておつしやい」とそんなことで、「へえ。坊つちやんなの？」とお姫樣は云ふのである。「オイ！君。鳥井君！」さう云ひ乍らお姫樣は、父親によく似た、眼玉の青い、髮のくる〳〵とお釋迦樣のやうに縮れ上つて灰色の、摘むのにも不適當な小さい鼻の、餅を二つぶら下げたやうな、五錢のキユーピーさんのやうな、成るほど、このあたりにはさうたんとない顏の子を仲間に知らせたわけとこそなつた。せめてこの妙な人達でも見て歸らうと云ふ氣で、そこに可なり長い時間を潰したことが緣であつたことには、私は時々遊びに行つた。そこにある一人の、あまり金廻りのよくない脚本作家と出會つて、それから、その人の脚本を書物に拵へ上げて貰つてゐた兩國橋際の風湖堂の書記に世話して貰つたことである。同時に本鄕の金助町へ引き移つた。そこは南洲翁の僞書の名人と云ふやうな評判のあつた刑事の家の二階であつた。前々からも、まるきり交際はなかつたことではない麻布の叔父は芝居を見に來る度に、序だから寄つた。さて思ひ出すことには、私達のその二階ずまゐは妻の腹が大きくなるまでに半年もつゞいた。人に訊かれたら屹度こう云ふに違ひないやうに、私はこれだけの、不愉快な、苦しい、陰鬱な、結局何のためになつたんだか解らないばかりでない、心をひがませたり、世の中なんて醉つぱらいと火葬場のほかに何にもないぐうたらなものだと思はせたり、そして、今になつて見れば跡かたもないやうな厭な事業に見棄られて、こゝへ落ちつくまでに二十六年もかゝりましたよ！二十六年！ほう、隨分長いこと貴男はそんな出鱈目な生活に摑まつてゐたもんだね。然しこれから貴男の生活は明るくなりますよ。光明と希望が――どうです、目に見えて來たでせう？ふゝん！止しやがれ！人間の、それは私だけでないに違ひない世界に光明の希望のと云ふそうなそんな讀本の精なんか始めつからありやしないのだよ。何でもかんでも出鱈目なんだよ。理想なんて文句は實際そんなものがないから拵へたんだらう？現に俺が匂ひ袋を貰つて步いたのだつて世の中を、あの美しい魂の

溶けるやうな匂ひで包んで了はうなど丶、考へもしないのであつたではないか？ほんとに冗いやうだが、不具者でも滿足に一人前に妻子を養ふ世の中に、どうした間違ひなのか？哀れな、たつた今死んで了へ！それでも厭やことはなかつた私や妻や、何の不平も云へない性質の妻が、——蚊帳の中から、青白い顏が浮き上るのだ——しかし、私は一寸寢返り打つた——突然一人の無智な女の顏が現はれた。その女と云ふのは、彼女の兄のために奉公先から病氣だと騙つておびき出されて、千束町の怪しい銘酒屋に賣られて、ほんとに命から〲で逃げ戻つた上方者であつた。そして今でも、その兄に附け狙はれて劫えてゐる女であつた。その兄と云ふのは彼女の主人の隙を見て、彼女をいたぶりに來る性質の惡い船大工であつたが、その彼女とは、妾の隣室に寢てゐるお里でこそあつた。おかしな身の上の女ばかりに緣のある私としたことだ。叔父の店は田島屋と云つたが、お里は田島屋の女中であつた。

田島はもう五十に近い老人であつた。大低毎日店の帳場に座りきりで算盤を彈くこと丶、時々外へ出て女遊びをするらしい道樂以外何の趣味もないあばた面の男で、義理の叔父とは云ふが、ついこの頃病死したおつまさんと云つた妻を貰ふ前に、これも田島と連れ添ふて男の子を一人生んで（その男の子はその時分名古屋の高等學校に入つてゐた頭の惡い青年だつた）死んだ妻が、三輪子の母の三人兄妹のうちの末の女であると云ふだけのまことに薄い緣なのであつたけれども、私達の親戚としても知人としても田島の外には東京に誰もゐなかつた。だから、無論よくせきの事がない限りは滅多に訪ねて行くことはないと云ひ條、本郷へ來たから、と云つて田島が立ち寄る時は、いざ鎌倉と云つた場合のことを考へて私達は出來得るだけもてなすことを忘れないのであつた。さて、お里がどうして田島老人の妾になつたかと云ふ事情に就てはよく知らないばかりか、實際私達はお里と彼との關係を知つたのは此薄暗い路次の中へ引越した時であつたから、まだ一月と經たないのである。

こゝに來る前、例の刑事の家の二階にゐる時分田島がやつて來て、「どもう」と顎の先で四疊半の部屋をしやくり上げるやうにして、こんなところでお產をしちや不便でもあるし、第一この急な梯子段を上つたり下つたりしては危ないから、お產まで引越した方がいゝ、敷金位なら出すと云つた。私は成る可く便利のいゝこの近所をと思つて空家を心掛けてゐるうちに此家を偶然見つけたので、その時、田島が云ふには、お三輪さんが寢込んだら、お前さんや大きい子の世話をする人があるかい？なければ床拂ひまでお里を寄越して上げやう。無論私はそう云ふ人が欲しい矢先であつたから、何卒何分などゝ頗る丁寧な要願に出たもので、かくて、お里はやつて來たが、しかし、弱つたことに、今まで大きに横柄づくであつた田島老人が、實はねと云ふ具合に急に妙な顏をしていやに、にやつき乍ら、講釋師の云ひ草ではないけれども斯樣しかじかである。何のことはないお里が彼の立派な妾で而も依然として女中なのであるが、打ちあけたところ、三年も四年も下の病ひで床についてゐたおつまさんが死ぬ少し前から關係がついてゐる程こと程左樣に彼女に目をかけて甚だ老人としては親切に取り扱つてゐた次第であつた。婦人としては、ほんとに孫のやうなお里を可愛がることに就ては大きに尤も恥かしくもないやうな話かも知れないが、そのお里を店に置くと、とその割に隨分氣の小さい老人の賴みであつた、と云ふのは、もう一人の女中が妬くし、第一お里の兄の鐵造が五月蠅いから、私の處へやつてあることは絕對秘密にして、もし嗅ぎつけられるやうなことがあつても、また絕對に鐵造の手へ渡すことがあつては困る、鐵造は遠からず西伯利へ出征するほどに、その代り私の家に必要な小使ひやお里の食ひぶちは寄起すと云ふのであつた。あまり珍らしい物語りではないが、兎にも角にも私達の經驗としては隨分はじめてのことで、直ぐ此老人の親切の意味が解つた。そのうちに適當な家を探してお里をへれる積りだが、「何しろ、」と田島は云つた。「こんなことはさう無暗に出來るもんぢやない。世間の手前もあるし、第一あの娘が藝者か女郎かと云ふなら、まだしもいゝのだが、下女なんだからね。

一寸具合が惡いのだ。それに鐵道の用もあるし、これにはわたしも弱つてゐるんだよ」と。つまりこんなわけで私は自分達のためにいゝことが、田島のためにも有難いことだと知つたが、この時老人の口から聞いたところのお里の兄と云ふのが始末に終へない放蕩者で腕つぶしの強いのんだくれだと云ふことを考へると、その番人にならねばならぬところの、丈こそ人並すぐれてゐるが、事實どうかした風の日には心細いやうにひよろついてゐる私自身を描いて少なからぬ不安と危惧の念に襲はれたのであつた。私達は日頃の田島を知つてゐたので、女中にしては勿體ない氣もするが、妾としては何一つ藝も手管もお世辭も知らないお里が僞りもなく彼の妾になつてゐたと云ふことに就てはほんとに女と云ふものは騙らないものだと一寸感じたゞけで別段に不思議とも思はない代りに、三輪子よりも私の方に妾の番人と云ふ責任が一つの壓迫となつて來た。——そのお里は私達と一緒に小さい柳行李を提げて此處へ引越して來て、お産も濟んだ、妾の左側の部屋に今、いつものやうに寢てるが、考へると、實際彼女もあまり運のいゝ女ではなかつた。

「わたしの家は代々箕面公園の落合橋におました。兄の代になつて人手に渡りましたが、それは景色のえゝところでおました。後ろは楓の崖で前は一面に青い青い山でな、家のぢつき側に深い眞つ黒い流れが落ちてな、夏はあんた神戸大阪から仰山人が登りに來まんが」と或時お里はその大きな、いつも潤んでゐるやうな瞳を見張り乍ら、やがて五年にもなるに違ひない以前に、いかに彼女が美しい、しかしいつも悲しい生活の持ち主であつたかと、それを思ひ出すやうなセンチメンタルな口調で云ふのであるお里のうぶな姿が、ふと蚊帳の中の私の目に浮ぶのであつた。その時の彼女の話が斷々に、まだ見たこともない有名な瀧を包んだ綠の山、蔭深い谷、朽ちた橋、音のない水、毎朝五十人も百人も牛に薪を積んで鈴音を立て乍ら町へ下つて行く農夫、そんなものをバックとした崩れさうに古び傾いてゐるお里の奥深い家の中に、いくつも列べてある巨きな酢甕の間に立ち働くよぼよぼのやもめの老人の父や彼女や、滅多に居つかぬ兄の鐵道の

姿が描かれて行つた。最後に、肉も骨も使ふだけ使つて人間の出がらしのやうな姿で老人が死んだ時に、得體も知れぬ神戸あたりのおひき女を連れて來て家を疊んで、女と一緒に神戸へ出やうとしてゐる鐵造に反抗してゐるお里の樣子であつた。鐵造等と一緒に旅へ出やうものなら、行先でどんな目に逢ふか知れない彼女は、二度と再び兄の顏を見たくないので、取れるだけの家財を分けて取らうとするのであつた。その時鐵造の云ふには「お咲！お前がそんな物を取つて如何するかえ？お前は女よつて體一つあれば女工になつても酌婦になつても世の中は結構渡つて行けるがな。男の俺はさう行かへんぞ。お前は俺達の行くところへついて來さいすれやえゝ！」そこでお里は勿論いやなことだ！あゝ、恐ろしい！ほんとにこんな心の人間と一刻でもゐるのは厭なんだが、どうせこの儘此處で別れることなら今まで苛まれた腹いせに、一つ自分がどんなに怒つてゐるかと云ふことを見せてやりたいものだ、とさう考へてゐる處へ、兄の鐵造の又云ふには「お前にやるものはないと云ふたが、欲しけれや、あの酢甕でも取るがえゝ！」と、仕事場の土間にある直徑七八尺もある大甕を指したのであつた。畜生め！あんなお化け見たやうなものがどうなるもんだ！貰らうたつて貰ひ手もあるまいと思つたが、しかし、「鬼に角、よろしい。貰ひまほ！」と云つた。兄と女が顏を見合つて「ふゝん。あれをどないにするのだ？」と嘲笑つてゐる目の前で、「こないにするのだ！」と、そこにあつた大きな砥石をとつて大甕を微塵に砕いて了つたお里の、胸のすいたやうな、しかし、ぶる／＼顫へてゐる姿が見えるのであつた。それから間もなく、彼等兄妹は勝手に別れて、兄は神戸のメリケン波止場へ稼ぎに行くし、お里は大阪で奉公したり、東京で口を探してゐるうちに、田島屋へ傭はれて、止さう止さうと思ひ乍ら、つい、勝氣でも淋しがり屋の彼女のついに兄へ手紙をやつたのである。兄は其頃、以前の突堤で働いてゐた。その時、例の曖昧な女とは手を切つてゐた。その手紙が餘計なことであつたのだ。鐵造が、東京の舟松町にやつて來て、それから、佃島の木船ドックに稼ぎに出るやうになつたのも、それが

手引なのだ。私の目にはお里の或日のことが、また映つた。

いくらか縮れてこそゐるが、濃い髮の房々とした、默り勝ちな円い顔の血色のいゝ二重顎の下から、なだらかに前へせり出してゐる鳩胸のさきに、ふんわりと盛り上つてゐる大きな二つの乳房は、いつも肉に食ひ込むほどぴたりと締めた白い博多の伊達卷を、半ば埋めてゐた。そして胡座でも搔かねば、ほんとに苦しさうに肥つてゐる膝と、こんもりした下腹との間に深い谷のやうな窪みをこしらへて座つた。用のない時はそこに樂々と大きい方の子や、赤ん坊を乘せて何物にも迫らぬやうな悠々としたお守りをしてくれるのである。

「お里さんのお乳は格好がいゝわね、そして隨分大きいこと！」

そう云ひ乍ら妾の三輪子は、この見ごとな格腹のお里に床の中から羨ましく見惚れるのである。そんなときには屹度もうおなかゞ大きいのかも知れないわ？そしてお里が叔父に雇はれた月から今日までを胸算用してゐるに違ひないのである。すると彼女は言つた。

「あら、奥さん」と三輪子の心底を悟つたやうに「そんなに、わたしのお乳は大きうおますしやろか？」と羞かな風情でます〳〵鄭重に祕ひ乍ら、同じやうな丸つこい體質でも大貧血の氣の失せた青白い産後の三輪子の胸や、二人の子にこれまで散々しやぶられて萎びてゐる乳房を凝乎と見詰めては、何を考へるのか、急に心配さうに默り込んだら、もうなか〳〵物を云ふ樣子がないのであつたが、しかし、默り屋の彼女が一度しやべらうと思つてしやべるとき、ことに、外にたんと話材を持ち合せなかつた彼女が自分の兄の惡口を列べる日は、私達は實際目の前に、神戸あたりの女の持ち前の相手に息もつかせぬやうな、能辯を聞かされるのである。

「兄の放蕩にもつく〴〵愛憎が盡きまんね。あいつ子どもの時から酒が好きやて、一いきに三合も飲んで平氣なものだすえ。その時分家はまだ酢屋でしたが、あいつ酔つ拂ふと猿見たやうに、大きい酢甕の縁をぴんぴん飛び廻りますのや。あいつ子供の癖にえらう膽が太うてな。家のものなら何でも持ち出して賣り飛ばしますのやが、そんなときには三日も四日も姿をくらまして、よう戻りよりまへんけど、わたしも父も、あんまりしよむない奴よつて、探しまへんときたのこ〴〵歸りよりまんがな、いちばん困つたのはあいつが、そうだんね、檢査前のくれだつしやろ、死よつた父に金をせびり居つて貰へなかつた腹いせだつしやろと思ひまんが、わたしの簞笥の錠前を打壞ちして、わたしが一等大事に藏つてゐた――ほら奥さん、二上り〽ひけやひけ〳〵ひくもの品々、櫻はきはすみ琴や琵琶、胡弓三味線東雲横雲――つて唄がおまつしやろ、あの七福神の模様の縮緬の縫入れだんがな、それはそれはギツパなもんを持ち出して町で五圓に叩き賣つてな、到頭飮みよりましたがわたし口惜しうて敵ひまへんけど」とお里はその時の悲憤をくり返へすやうに、口を歪めて、とき〴〵しばたきし乍ら「何か云はうものなら直ぐ拳固やよつて我慢しよりましたが、あいつも戻るのが怖かつたと見えて到頭半年ほど、何處をどう迂路つきよつたものやら、影も形も見せずに、ひよこつと戻つて來ますとな、おい！お里。俺は船大工になり居つたぞ！明日から神戸の築港で稼いでやるぞと云ひますのや。それから」と云ひかけてさすがに可笑しかつたやうに、笑ひかけて「神戸に出よりました、わたし不思議でかなわぬよつて、あとから父に云ひつかつて築港に行つて見ますと、どうでつしやろ。いつの間にそんな藝を覺えたものか、あの第一突堤に横づけにしてあつた大きな汽船の帆柱に登つてペンキ塗つて居りますのや。わたし、呆れてよう物が云へまへんのや。でもな、奥さん、そうは云ひまんが、腰にペンキの罐をぶら下げて、口に刷毛を啣へて、つる〳〵と登つたり下りたりする仕事は大したもんですのえ。しかし、陸の上では見たうもない奴だんね。稼いだものは一人で貰ふて、相變らず酒はのむし、道樂は

はじめるし、誰が意見しよつてもちつとも聞きまへんで、『俺はこれから貴樣たちを養つてやらうテンだ。』と生意氣に東京辯で來まんが、ほんまにどむならん奴で、お前はん見たいな野良犬は失せやがるとえゝ！顏見ても胸糞がわるい！血肉を分けた兄でも構やへん、どつかへ失せやがるとえゝのだ！さう云ふてやりました。そんな時考へると、あいつが憎らしうてたりまへんがな。」といかにも殘念さうに齒を食ひしばり乍ら、私達に慰めて貰ひたいやうに訴へるのである。そしてぼろ〳〵涙を零し乍ら、また鐵造が兵隊に行くときに、人に笑はれないやうにと思つて、一人で物を賣つたり、借りられるところからいくらでも融通をつけて貰つてそれを鐵造の小使ひに、大阪驛まで見送つて行つた話をしてから、「惡いことばかりしよつた報ひにえゝ事はおまへん。見なはれ、西伯利へ行つたら、早う鐵砲の玉にあたるやうにと祈つてやりまんが」と云つたものだ。

「隨分ひどい兄さんだわねえ。」

と三輪子まで釣り込まれて、泣きさうな表情で、しみ〴〵嘆くと云つた風である。

「奧さん。」と、さて、お里はさう云つたかと思ふと、しく〳〵泣き出して妻の寢床に顏をふせて「わたしほど、世の中に不運なものがありまほか？ほんまに、ほんまに、あいつは人間でなうて、鬼だ」とつゞけさまに泣きじやくるのを同情者の私や三輪子は、しかし、お了ひには流石に草臥れて「ほんとにお前さんは可哀さうな娘だよ」と云ふのもアーと欠伸の種になるほど時々は詳い女としたことであつた。彼女は、然し結局こんな境遇に苛められて來た[illegible]よくあるやうな勝氣な質であつた。と思ふたときに、ふと十日ばかり前の小さい、しかし、可なり私達の神經にこたへた事件がパッと浮び出た。西伯利へ行くまで來なければやいゝがと、頭を惱ましてゐた鐵造が、ある日突然に、しかし、妻にも私が家にゐる時にやつて來たのである。

「私はお里の兄です」

そう云ひ乍ら格子戸をあけて薄暗い上り口に立つてゐる二十七八の男が彼であつた。そこにゐたお里は慌てゝ妻の部屋へ逃げ込んだ。私の目には、話に聞くほど惡徒らしくもない鐵造の、額に刻まれた深い一本の苦勞皺や、アルコールのために青褪めてはゐるがどことなく情熱的な才人肌の顏を、多少の意外を以て迎へた。

「お里はゐませうか？」

と云つた鐵造の、やゝ顫ひを帶びた歎願的の口調を聞くと、妻の部屋に屹度と妻と二人でふるへ乍ら、到頭やつて來た恐怖から一刻も無事に早く逃れたいと祈つてゐるお里や、田島叔父の顏が、お前の仕事はそこだ！と云ふやうにチラと映つた。可なりびくついてゐた私は、强いて平氣を粧うた。

「ゐませんよ」

「今そこで見ましたよ。」

私は自分の企みを看破られたやうにひやりとしたが、すぐ以前よりも落ちついた。

「何か御用ですか？」

すると、鐵造は、近々西伯利へ出征するが、さうなると迚も生きて返れまいから、今日は暇を拵へて一生の別れをしに來たから一目お里と會はせてくれと云ふやうな意味の話を例の歎願的の口調でべら〱饒舌つたが、ふん！お里や田島の希望の日が愈近づいたんだな。とさう思ひ乍ら、しかし、こいつのことだから萬ケ一狂言でないとも云へない、兎に角、田島の命令通りに、お里の希望通りに、氣の毒でも可哀相でも此儘追つ拂ふことだ！とその時、鐵造は、それが嘘でないのは、これこの通りと、懐ろからあまり判然しない消印の据つた召集令狀を一寸見せた。

尤もこの男からは數日前に田島屋へ宛てゝそんな意味のハガキが行つたのである。旦那にも隨分御迷惑をかけましたが、もう何もかもお了ひです。三十日の朝一番で東京驛から國へ歸つて直ぐあつちへ立つて、そして取り敢へず討死するやうな、流行に感傷的なものであるらしかつたが、田島は勿論のこと、お里も先づ、成る可く早くあんな極道には片づいて貰ひたいと云ふのであつた。然しそれは嘘なのかも知れない。西伯利へ行くだけで澤山だと思つてゐるのだらうと私達夫婦は笑つてゐたことであるが、さて、私がそこでほんたうに梃でも動かぬやうに構へて、お里との面會を斷ると、「はあ？　いけないのですか？」と悚然とした。私の辯としたことが、こんな亂暴な話は滅多にないのであると思ふことほど左樣に「兄が姉に會ひたいと云ふのに君等に兎や角云はれる覺えはない！」さうだとも！と思ふことほど左樣に彼は、到頭熱狂して來たことである。然し私は困る。

「どうしてもいけないのかい？」

と彼は、それが彼の本根であるに違ひない調子になつて來た。

「解らん人だね。現に明らさまに君を恐れ嫌つてゐるのを承知づくで引き會せることは僕として出來ない。」

そう云ひ乍ら、そんな奴だと、いつでも追つ拂つてやりますよ、えゝ。譯はありませんよ、人情なんて、そうしてお里を引受けたことが、目のあたり悔ゐられて來た私としたことだ。お了ひになると、腹が立つと見えて、両手を、まるんや赤ん坊が怒るときのやうに、痙攣的に閉ぢたり開いたりして、到頭くわつとしたやうに右の手を懷ろへ入れた時に今にも私の咽喉に飛びかゝつて來るかと思つてどきんとした。こんな奴だから、刄物でも出すだらう。その時はこれで一突に溝板の上へ突き倒すのだと私は手近にあつた大きな番傘を固く引掴んだが、しかし、鐵造がヒョツと出したのは金蝙蝠の箱であつた。彼は感情の激昂を鎭めるためか、この上の手段を考へるつもりなのか、兎に角それをぶら／＼と迎

ひ始めたとき、ほんたうに、俺は度胸がないな！と直ぐ感じて一人で可笑しくなつた。「どうかして、おたた様の不機嫌を直す工夫はないものかしら？」と云ひたいほどにも可哀相な泣き面であつたところが、「私は君まで私の邪魔をする人だとは思はなかつた！」と私を恨むのであつた。濱平と鐵造を見詰めてゐるうちに私の氣の毒ではある恐れは、憐憫と侮蔑の念に變つて行つた。

「今に後悔するな！おい、お里、手前覺えてゐるがいゝぞ！」

とても駄目だと諦めた彼は漸く歯を噛み鳴らして立ち去つたのである。その時ほつとした妻の三輪子や、今のところ私一人が力であつたお里を見て、私は生れてはじめて、弱いものに完全な保護を與へ得た、しかし、冷やかな自尊を感じたが、それは一刹那に過ぎなかつた。「畜生！も一度來て見ろ！」と、彼の後姿を眺めて、ふと、この先に降りかゝつて來るに違ひない或る面倒の自覺を感じた、私としたことが、必死になつてそれを打ち消さうとする自分を發見して、不安であつた。

「怖い人だわねえ。あんな事を云ひ殘して歸つたから、また屹度仇を取りに來ますよ。一體どうしてお里さんの居處が解つたのでせう？」

と妻は鐵造の復讎を豫期するやうに云ふのである。

「どうせ一度は知れるよ。」

さう云ひ乍ら、私としたことが、鐵造の周圍にゐると云ふ刺青の無頼漢等が復讎にやつて來るまでの不安な警戒深い日を送るのである。お里は流石に一度ひどい目に逢つて懲りてゐるだけに、晝間外へ用足しに出るやうなことがあつても、あちこちから路次の中を見廻した後でないと決して敷居を跨がなかつた。夜など門口に誰か立つてゐるやうだと云つて

は、青白くなつて怖がつたが、それは勿論女たちの氣のせいで、そんな幻影に襲はれるに決つてゐるに違ひないやうに、何でもないことが解ると、顔を見合つて、笑ふのであるが、しかし、實のところ、私もいゝ氣持ちではなかつた。夜なかに、ふと目が醒めて、部屋の窓を、宵の口風を入れるためにあけてあつたのを忘れて、そこから私達の寢姿を凝視してゐるやうな黒影を描いては、ハッと思つて息を殺すこともあつた。そして早く夜があければいゝと、よく寢つかれぬ晩もあつた。鐵造や彼の仲間が、この邊を迂路つき乍ら私の隙を狙つてゐるやうな惧れに追はれて、しかし、無事な日を一週間も過ごしたのである。お里も兄の幻からだん／＼遠ざかつて行くやうに思はれた。あゝ。あゝ。と、大きなあくびに、蚊帳の中の目の中の、こうした夢のやうな像は、一時に消えた。ふと、思ひ出すと、それは、鐵造が國へ立つ日であつた。あゝ。今日から私達はのんきになるのだ。苦しい番人の負擔から解放されるのだ、そう思ふと、心底から、夢のやうな、のんびりした喜びが湧くのである。

二

曉にはいくらか間があつた。考へに疲れて茫とした頭に、ふと、お里さん。起きて下さい。もう夜あけですよ。そう云つた病弱な低い妻の聲が聞えたやうな氣がしたと思ひ乍ら、譯もない不安に包まれてゐた私は、やうやく、うと／＼と、これは夢とも現とも判斷のつかぬ朧ろげな、地の底へでも沈んで行くやうな氣持ちに鎖されたまゝ眠らうとした瞬間であつた。

「あなた」

と妻の聲が枕もとにやゝ鋭く聞えた。私は少かに目をひらいた。

「あなた。大變ですよ。起きて頂戴！」

そう叫ぶやうに聲をかけ乍ら、私は烈しく揺り起してゐる妻を蚊帳の外に發見したとき、それがどんなことであるか解らぬ乍らも、私としたことが、いきなり起き上つたのであつた。

「どうした？」

私の瞳にはまだ妻の姿は、たゞぼんやりと輪廓しか映らなかつた。

「お里さんがゐないのよ」

そう云つた鋭い、しかし顫へを帶びた聲を聞くと、反射的に「どこへ行つたんだ？」と口走つた。

「どこへ行つたのか、ゐないのよ」

彼女はもう泣聲になつてゐた。私は蚊帳の外へ出た。彼女としたことが、いつの間にか自分の寢床から這ひ出して來てゐるのである。

「今朝三時ごろ、わたし赤ん坊に乳を飲ってうつらうつらとしてゐると、お里さんが厠へ行く足音を聞いたのです。あゝお里さんだなと思つてゐるうちに頭倒寢込んで了ひましたから、お里さんが厠から戻つて來たかどうだか覺えませんけど、目がさめた時はもうすつかり空が白んでゐます、でも、いつもその時刻に雨戸をくつてあるのに、そうでないから、おや、お里さん今日は寢坊してゐるのかしらつて、お里さん、お里さんと呼んでも返事がないのです。變でしたからわたし起しに行くと、どうでせう、あの人の部屋の中は夙の昔空つぽでせう？ひよつとしたら、あの時拔けて行つたものではないでせうか？」

「さあ、その拔けて行く先が何處だらう云ふんだよ！」

五時一寸前であつた。口にこそ出して云はないが、預かりものゝ行衛を失つた時の責任の壓迫から來る大きな重苦しい、しかし名狀の出來ない不安と危惧に私達は襲はれた、恐らく私も乾度さうであつたに違ひないやうに妻はたゞ白い顏を一層青白くして、あわたゞしい恐慌につゞいて來る心の狼狽を犇々と感ずるのであつた。お里の居間はすべてがきちんと片づけられて引越した跡に殘る空虛と淋しさが漲つてゐた。彼女が寢るところを見なかつたならば、その時までそこに敷いてあつたとは思はれぬほど夜具も蚊帳も几帳面に疊んで、つま〴〵と隅の方に片づけてあつた。

「可怪しいな。どこへ行つたのだらう？」

「わたし、ふとそんな考へが起きたんですがあの鐵造に騙されておびき出されたのぢやないでせうか？よく考へて見ると、あいつが國へ立つと云つたのはお里さんを引張り出すための手段で、あんなことは皆嘘ではなかつたのでせうか。わたし何だかそんな氣がするわ。あんな奴ですからね」

それが事實となつて現はれる時の劫えを三輪子はあり〳〵と顏に浮べて、そわつくのであつた。

「そんなことはない。お里にしたところで、そんな馬鹿ではない。」

私はそう云ふことは云つたものゝ、實際、考へて見るまでもなく、田島屋か私の家か、鐵造の居處の外に行くところを持たないお里が、しかもこの、電車もない時刻に何處へ行き場があるのだらう？外へ出嫌な、また出る用事も持ち合せないと私達は信じてゐるお里であつた、と思ふと、田島屋でなければ鐵造の處にならねばならないわけだが、あの仲の惡い、そして思ひ出せば、ほんとにあいつ好ゝ氣味だんね！戰爭へ行つたら敵の丸にあたつて眞つ先にくたばることだんね！親兄妹のばちだつしやろ！ほんまに、さようなら！先の世までもいつまでも！往んでなはれ！そう云つて身ぶるいし乍ら、可哀相とは思へもしやへん！と最後に鐵造を追つ拂つたとき、唾でも吐つかけるやうにまた「あいつとわ

たしは前の世で屹度仇同志どしたろ、ほんまにこれであいつの顔を二度と再び見ないですなかと思ふと、せい／＼しまんね」など〻口汚なく罵つた彼女が、まさか、急に氣が變つて別れを告げに行くわけもあるまいし、また行きたくても、田島の「旦那はん」や私達の手前そんな眞似が出來た義理でもなからうではないか、しかし、と私はさう思つた。いくら彼女が勝氣でも、强いことは云つて〻も、やつぱり氣の弱い、涙つぽい女だもの、別れるつもりで、ほんとに隱れて行つたのではないかしら？

妻はもうてつきり左樣だと信ずるらしい口調で、確かにそれに相違ないやうな突き詰めた證言をするが、いや、そんなことはない、と云つた私としたことが、自然にそつちへ決めなければもう考への餘地がなくなつた。しかし、念のためのやうに、

「お前、何かあの娘の氣に障るやうなことでも云やしないか、あんなぽつとした女でも心はなか／＼左樣でないんだからね」

いつか、三輪子の白粉や石鹼や髪油を不遠慮に使ひつくしたとき、三輪子の私に訴へるには、あんなに物の解つた人でもやつぱり田舍もの〻敎育がないだけに人の物だと、がさつに使ひたがる！それが臺處で働いてゐた彼女の耳に入つたのかも知れない、しかし、その晩、使つた品を揃へて買つて來たことである。

「そんなことはありません。」と云つた彼女としたことが、こんな女ではなかつた筈であるやうに突然私の顏を凝視して「あなたこそ」と云ふのだ。それは何か私があの妾に妙な野心があつて、どうかしたのでないかと云ふ風に聞えた。

「そんな！」

「ことだとは思つたけど」と妻はクスリと鼻で笑ふて、さて「妾がいやになつたやうなそりぶもなかつたし、」と、全く

苦労のありたけを仕つくして人の心も世の中のことも胸の中へ疊み込んでゐたお里に、私が、今、現在こんな風に惑つてゐるやうなことのわからう筈がないのである。

「おかしいわね」

「不思議だよ。」

「兎に角、一應叔父さんへ電話をかけて下さい。」

「叔父さんに電話かけるより、俺は一寸停車場まで行つて來る、そこに居なかつたら、鐵造のところへ廻つて來る、叔父さんは一番あとでいゝ。」

さう云ひ乍ら、沖も外に考へやうも、探す目的もない私は、叔父に知らせて、驚かすよりも一走東京驛まで行つた方がいゝと、落ちつきの埒外に飛び込んだやうに、浴衣を引つかけて「一寸行つて來る」さう云ひ乍ら、ふと要のことが氣になつて、「赤ん坊の迷ひ子とは異ふんだから心配せずに寢んでゝくれ、ひよつとすると行違ひか何かで、例のけろりとした調子で戻つて來るかも知れないから」

「でも、もしもの事があればわたし叔父さんに云ひ譯が立ちませんもの」

「大丈夫だよ。お前に今どうでもあつて貰ふと俺が困る。それこそお里や叔父さんの段ぢやないんだからな。」

と、唇の色も失せて、目に一杯涙をためて、赤ん坊達の蚊帳の中へ這ふやうに跛つて行く三輪子を安心させて、お里のあの赤い天鵞絨の鼻緒の下駄が昨夜まで置いてあつた戸口から出た私としたことが、路次の溝板を蹴飛ばすやうに歩き出すと、微かな足の筋の痙攣を感ずるのであつた。寢不足の蒼白い肌に、しつとりと凝つた夜氣の重みが迫つて來た。往來と處々には、まだ淡々しい濁り色の電燈が、ほんとに何て愚かな人間が愚かな眞似をするものだ、とちら/\とも

れてゐた。私は芝居の前から萬世橋の方へ駈け出した。しかし、曲り角やポストや變壓塔の影などから、ひよろ／＼と人の影が動いて行くと、はつと思つて立停つた。事實そんな處に蹲んでゐる筈もない物の陰を一一覗いては、あゝ、ほんとにこんな事で常識を失つてどうするものだ！しかし、成る可く、停車場に居合せてくれゝば助かるが？そんなことはないけれども鐵道の氣まぐれにどうかされてゐなければいゝが？もしさうだつたら、俺達は田島の助平爺に愛憎をつかされて、貰つてゐる月給もお了ひになる。そうすると、今の家にもゐられなくなる。他人の妾の番なんさ孫の代までさせるものではない仕事だ。しかし、まあ待て、と私は須田町の交叉點――いつもこんなにあれば暢のん氣なことだらうほどに淋しい古戰場のやうな廣瀬中佐の下に立ち停つた。何う云ふ頭の發作であつたか、えゝ！何も俺達が逃したわけではあるまいし、寢込を出て行かれりや誰だつて、さにあたりまへの油斷だ。馬鹿々々しい、うつちやつとから！二三歩家の方へ歩き出すと、田島の失望して怒つた顔や、三輪子の「ねえ、あなた。他人を預るのは氣が揺けていけないけど、随分助かるわ、ね？」と、ニコリとした顔が、俄かに愁嘆の相と變つて行くのが、いやにハツキリと映るのだ。すると私としたことが、またハネ出のやうに丸の内へ飛んで行くのである。金持ちと云ふけだものめ！何故あいらは、こんな悪どい道樂をしやがるのだらう。私の頭には、無理に描いて見た、三等待合室のお里の幻影があつた。

ひどい逼迫にわく／＼戦いてゐた心の底から、どうしたことだ！と突差に飛び上つた喜悦と安心の微笑が、涙の流れてゐる私の顔へ現はれたのも覺えずにゐた。齦でも引くやうな心持ちで三等待合室の中を覗いた私は、主よ！我等の上に一生一度の祝福を與へ給へ！と云ひたいほどの恐ろしさに目をつぶつたであらうところの其私の目に、ベンチの隅にごた／＼と塊つてゐた兵卒や勞働者や男や女の群像を見て、次の瞬間に、まあよかつた！と、私はお里の姿をたしかも

たしかにこそ鐵造と肩を列べて發見したのであつた。その又次の瞬間に私は、私と同じやうにおどついてゐる彼等の後ろにどうしたものだらう？と彳んでゐたのである。その邊には卓子を中心に先刻の人々ががや〱鳥舌つたら歩いたりしてゐた。場内は、しかし、伽藍として洞の中の寂けさを保つてゐた。鐵造は汚ない木綿の一重に足袋も穿かず、くた〱のパナマを冠つて、お里の時計を見詰め乍ら、沈んだ樣子をしてゐた。私はお里が糸織りの巾着から五圓の紙幣を一枚出して、「汽車の中で辨當でもあがり」さう云ひ乍ら、人目をはゞかるやうに、こそ〱と兄の手に握らせるのを見た。いつものお里の大きく透きとうる聲で、ふと、又何かやらうとして、兄が斷るらしいときに、かう云つた。

「わたし何にもいらへんによつて、お持ちよ。わたし女だもの、どないなことしたかて食べて行けるわさ、」

それは小綺麗なハンケチに包んだものらしいのである。鐵造はそれを固く握つてゐた。

「お守りにするよ。そうだとも。汗や涙は靴下でも拭けらあね。」

そう云ひ乍ら、そこに私が蹲んでゐるのも知らずに、チラと彼女の横顔を見て、目に涙をためてゐた。さうだ、チラと彼女を見て瞬たきをはじめたのだ。

「惡いことばかり見せたお蔭で俺にもいゝことはあるまい。俺はこれから自分の運だめしに行くんだ。死にたくはないが迚も生きて戻れまい。さぞ憎いことだらうがこれまでのことはすつかり忘れてくれ。」

さう云ひ乍ら、頭の上をひゆう〱と飛んで行く赤い彈丸でも避けるやうな形をして、顏を伏せて、首をちゞめて、チビ下駄の先を凝乎と見つめてゐた、「なんの、お前、憎いことがあるものや。わたい、お前を憎いとは思はんがな。憎うてどないするものか」さう呟き乍らお里は、鐵造が「どれ行かう」と立つまで、もう一口も聞かなかつた。物を云へば泣きたくなるに違ひないと私は思つた。何と云ふこともない、たゞ行先に待つてゐるやうな死の前には、全く特殊

な、それは今までお里が出逢つて來たどんな辛い苦勞とも違つたところの、特別な大きい或物が現はれるやうな氣がした。その或物に壓伏されて彼女は私の家を拔け出したのだらう、さう思ふと、私は鐵造と彼女とを引合せることを怖れた自分の臆病と輕卒とが、つくづく情なくもあるし、私をそんな人間にして了つた二十六年の生活に、まつたく愛憎がつき果てた。私はお里よりも一足早く戾つた。路次の中の家はまだ一軒も起きてゐなかつた。私は待ち侘びてゐた妻に話をして彼女を喜こばせるためにかうつけ加へた。

「お里が戾つて來ても素知らぬふうをしてゐるんだ。お里は兄を見送りに行つたとは決して云ふまいから。そして、俺達はほんとに、もつと人間らしく大膽になつていゝのだ。」

さう云つたとき、私は目先の、貧苦といふ執念深い、そして人間のために恐しい亡靈を征服したやうな心の躍動を覺えた。無論、田島の顏など消えてゐた。

間もなく蚊帳の中に入つた私達はお里の歸りを待つ氣も失せてゐた。

それから凡そ幾月目であつたか、しかとは覺えないところのある日、西伯利出征兵陸軍步兵一等卒鹿泊鐵造と云ふ差し出し人の手紙が來た。それは彼女の兄からお里へ來たのである。

「旦那はん。どうぞ讀んどくんなはれ。わたしはあきめくらどすさかい、讀めまへんがな」

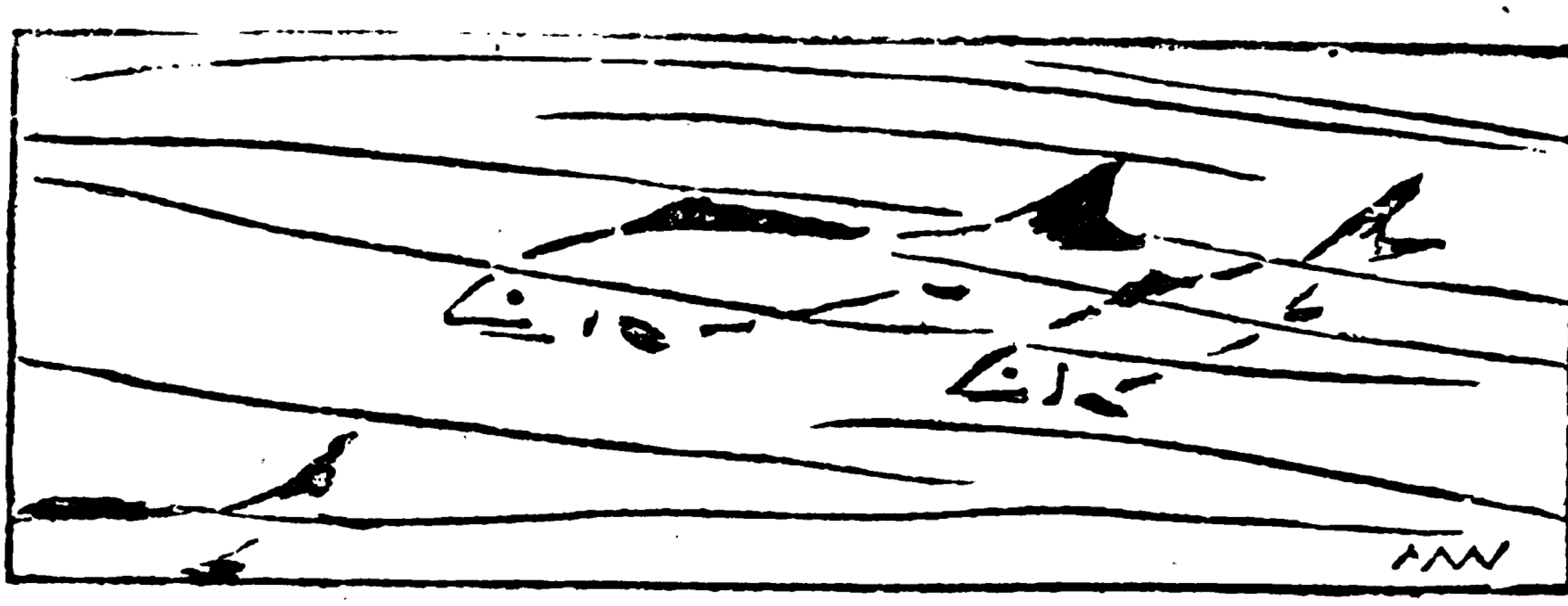
と云ひ乍らお里は私達の前にその、その、軍事郵便の消印のある袋のやうな汚れた封筒を持つて來た。親も友達もない彼女は今まで誰からも手紙を貰つたこともなければ、そんな記憶もない。從つて文字などゝ云ふものは彼女に取つて一番不用なものであつたに違ひない。私がその封を切ると、お里は帶へ挾んでゐるハンケチを出して、いつでも泣いて

いゝやうな顔をした。そして、眼を伏せて、それから一ことも云はなかつた。しかし、その手紙と云ふのは何でもない、誰の考案になるのか知らないが、いつも使はれる馬鹿鄭寧な書き出しで、「拝啓我がなつかしき御許様へ」とか、「私儀其後無事生存罷在」とか、萬事一切こんな紋切形ではじまるのである。お里は一言も聞き漏らさないように腰をかゞめて熱心に耳を傾けてゐた。一個の文句と云ふのは、その後間もなく——師團の兵站電信隊と宇品で落ち合つて軍用船の安寧丸で釜山へつくと、今度は馬と一緒に鄭沢まで來たが、その邊まで來るともう戰爭の話や馬賊の噂ばかりで、汽車ごと大砲を盗まれたり、往來に立つてゐると、いつの間にか誰かやつて來て、首を斬つて持つて行くとか、見る限り家も草も木もない平野に豚が歩いてゐるとか、停車場につくと、夜よなかでも土地の偉い婦人達がお茶や菓子を持つて來てくれると云つたやうな内容で、お了ひの處へ持つて來て、金はあつても買ふものがない、國から買つて來るとよかつた、しかし、どうせいつ殺されるか解らないから、食べても仕様がない。さようなら、お許様御躰御大切に遊ばせ。私儀に手紙を出す時は切手を貼らずに、ブラゴへの隊宛に草々頓首、ほんとうに俺はお前に惡いことをしたと後悔してゐる。今までの事はすつかり水に流してくれるやうに、としどろもどろなのである。お里は細々と泣いてゐた。

「誰がお前を憎むものか。惡むことは何もありやへん。」

そう呟いて、その手紙をまるで兄の位牌のやうにいたゞくやうに懐ろへてしまつた。そして、私達に、「大きに有り難うます」と云ひ乍ら、臺所の暗がりに行つて讀むのが見えた。やがて、そこから、忍び泣きする細い低いお里の聲が洩れて來た。

手紙の文句の中に、「これは、奉天驛についた時、軍馬と一緒に眞つ暗な貨車の中の、蓙の上で、マッチの火の光りで書いたのだら、讀みにくいだらうが、また書けるかどうか、おぼつかないから、是非讀んでくれ」と云ふのがあつた。その貨車の中から、吐き出されたところは直ぐ赤土の塹壕なんだらうと思つた私としたことが、「主よ！」と實際あの無賴漢のために祈つてやりたい氣もちになつて來たのである。（完）



捕獲物

豊島與志雄

七月十日、午前五時半の起床喇叭が響くや否や、寝室中の者は皆一齊に跳ね起きた。先刻から、早くは未明の頃から、この喇叭の音を、うづ〳〵して待つてゐたのである。今日から休暇なのだ！　絶對服從を強ひる規律で、殆んど一刻の餘裕もないまでに、毎日の時間を規定され、峻厳な精神で心身を鍛はれる、終始緊張しきつた生活から、向ふ約一ケ月餘りの間、甘い自由な天地へ解放せられるのである。空が晴れ渡り、曙の光りが冴えきつてゐた。

寝室の中は一時に沸き立つた。彼等は眼を輝かし、両腕をうち振つてゐた。自動人形的な而も的確な動作で、第一装用の軍服をつけた。毛布を卷き、それを整頓棚に並べ、そして封印をした。長靴を穿つと、今日校門を出て歸省するのだといふ思ひが、胸の中ではつきりした形を取つた。彼等の日に焼けた顔は、更に輝いてきた。

寝室と自習室との間の往來が激しくなつた。その日だけは、靴のまゝ室内に踏み込むことが、殆んど公然と許されてゐた。自習室に於ては、机や本箱の抽斗を片付け、それらに封印したければならなかつた。持ち歸る品物は荷造りをして、それを寝室の

廊下に並べるのである。

靴の音、器具の音、談笑の聲、それらに建物全體が騒然と湧き立つてる最中に、六時の食事の喇叭が鳴つた。彼等はぴたりと仕事を止め、どや／＼と外へ出て、別棟の食堂に集つた。一人の後れる者もなかつた。

努めて雑談しつゝ食事すべし——なぜかなれば、雑談は消化を助けるが故に——といふ食事の間に、第三中隊の食堂では、或る忌はしい噂が、三列に並んだ食卓の間に擴がつた。

第三中隊では、歸國の汽車の都合上、時間外外出を許されて、午前三時に校門を出て行つた者が、三名あつた。そのうちの一人、小野が、外出前に貴重品を受取つて、金入の中を檢めてみると、十圓紙幣が一枚不足してゐた。小野はそれを區隊長に屆け、不足の十圓を借りていつたさうである。

その噂は、食器や箸や皿や、凡てアルミ製の器物の音に隠れて、次から次へと傳はつていつた。然し、向ふの小卓に集つて食事をしてゐる區隊長等の顔色は、平素と少しも變りがないやうに見えた。單なる金の紛失くらゐの響きをしか、その噂は一同の頭に與へなかつた。食事が濟んで各自に、室内片付けや荷造などにまた取掛つた時、彼等はもはや歸省のことをしか考へてはゐなかつた。それは籠の鳥が放たれる以上の喜びだつた。遅くも九時頃には、校門を出て行ける筈だつた。

專念に荷物を纏めてる者もあれば、窓から外を眺めてる者もあつた。用を濟した五六名の者が、室の隅で談笑してゐた。その群が次第に大きくなつていつた。八時半頃には、小行李や風呂敷包が、寢室の廊下にずらりと並んでゐた。自習室の中には物音が絶えて、盛んな談笑が湧き上つた。

午前八時に、彼等は寢室の前の庭に、區隊毎に整列した。可なりむし暑くなつた日脚が、彼等の背中に落ちかゝつた。

然し彼等の心は朗かだつた。彼等は第一裝用の軍服をつけ長靴を穿つてゐた。その姿で、中央の學校の第一年の休暇を、故郷に直樂しに歸るのだつた。

所が、第三中隊に限つて、中隊長も區隊長室等も、なか／＼出て來なかつた。他の中隊では、既に凹形に集つて中隊長の訓示が行はれてるのが、向ふに見えてゐた。第三中隊の生徒等は、次第に苛ら立つてきた。勤務生徒は區隊長を呼びに行つた。區隊長等は中隊長室に集つて、內密な相談に耽つてゐた。「待つて居れ。」といふのがその返事だつた。

不安の念が、さつと生徒等の頭を掠めた。他の中隊ではもはや訓示が終つて、解散してしまつてゐた。第三中隊に親しい友人を持つてる十數名の者が、荷物を手に下げながら、向ふから暫く樣子を窺つてゐたが、やがて去つて行つた。ぢり／＼と照りつけてくる日の下に、第三中隊の三個區隊だけが、列を作つたまゝ殘された。

列の中から、不平の聲が次第に起つてきた。汽車の時間に後れること、友人との約束に間に合はないこと、休暇の喜びが臺無しになること、などを訴へる聲と共に、區隊長を罵る聲まで交つてきた。

「勤務生徒、區隊長を呼んで來い。」と誰かゞ怒鳴つた。

勤務生徒自身も苛ら立つた顏をしてゐた。

「何か相談してるんだから、呼んでも駄目だ。」と彼は吐き出すやうに答へ返した。

不平の呟きに疲れると、何處からともなく、小野の十圓紙幣の噂がぱつと起つてきた。噂は次第に、確實性を帶びると共に、不安なものとなつていつた。彼等は苛ら立つた顏を緊張さして、俄にひそ／＼と語り合つた。

竊盜と婦女子關係とは、軍隊に於て最も忌むべき行爲だつた。小野の不足の金は、盜まれたに違ひなかつた。小野は前日、別辨外出をして夕刻歸校してきた。食事後直ちに彼は、勤務生徒の机の上に在る貴重品箱に、その金入を投込ん

だ。勤務生徒は點呼前に、貴重品類の物を區隊長の許に預けた。それ故、もし窃盗が行はれたとすれば、六時の夕食から九時の點呼までの自習時間中に爲されたものらしかつた。而もその行爲は、一同の品性に信頼して貴重品類に監視もつけないといふ、一致協同の相互信頼を基とする軍紀を、土足で踏み躙つたにも等しいものだつた。そしてこの呪ふべき犯人は、犯罪が自習時間中に行はれた以上、他からの侵入者であるべき筈がなかつた。同一室内に居た第三中隊の、何れかの區隊の、誰かであるに相違なかつた。然しそれが果して誰であるかといふ搜索は、至つて困難だつた。所持の現金と金錢出入帳とを調べる位のものだつたが、十圓紙幣は何處に隱されてるかも測り難いし、その上、既に時間外外出をしてしまつた者が、小野の外に二名あるのだつた。

彼等は息をのんで、互の顏を見合つた。その眼は、仲間のうちの誰かゞその犯人であるといふ不安と、己の潔白を自信する誇りとに輝いてゐた。その輝きが、列の間に漲り渡つた緊張の度を、更に強めた。彼等の前には、寢室の高い二階建の棟が聳えてゐた。その一端に區隊長室があつた。彼等はその方を、耳語の合間々々にちつと見やつた。

九時過ぎになつて、中隊長と區隊長等とが急ぎ足に出て來た。生徒等はほつと息をついた。服裝檢査があつて訓示が濟めば、それで學校から暫く解放せられるのだ。校門を出て行くの喜びが、また彼等の胸に蘇つてきて、一瞬前の緊張した不安の念よりも強くなつた。

全列がひつそりとなつた。勤務生徒は威儀を正した。區隊長は各區隊の前にぴたりと止つた。興奮した眼付で全列を見渡した。力強い聲が響き渡つた。

「氣を附け！」

さつと一齊の靴音と共に、一同は不動の姿勢を取つた。所が意外の號令が浴せかけられた。

「右向け－右……前へ－進め。」

その場で服装検査から訓示となるべき筈だつたのに、この意外な行進の號令は、生徒等の頭に大きな打撃を與へた。彼等は上目勝ちに考へ深い眼を見据えながら、徐々に行進していつた。

中隊は撃剣の道場へ導かれた。その入口で長靴を脱する時、憤激の低い聲が一時に發した。道場の中で區隊縦隊に並ばせられた時には、一種陰惨な沈默が落ちて來た。中隊長はその沈默の正面に佇んで、一切の行動を監視してゐた。

各區隊長は木像のやうなぎごちない態度で、自分の區隊の前面につゝ立つた。

「これから諸子の身體を検める。」

語尾が心持ち震えてゐた。憤りと焦慮とを強ひて抑へつけた顔付だつた。沈默の底に含まつてゐた陰惨なざわめきが、しいんとなつた。區隊長の口はまた開いた。

「帯革を解いて剣を取れ。……それを前に出せ。」

生徒等は帯革を解き、剣を取り、つんと伸した兩手で、それを前に差出した。區隊長は駆足で列の一端へ行き、剣の鞘や帯革の剣差など、凡そ物を隠し得るやうな點を、一人々々に調べていつた。調べ終ると、それを一歩前の土間の上に置かせた。

「帽子を取つて前に出せ。」

生徒等は帽子を右手で差出した。帽子の裏や汗革の下までも調べられた。

「上衣を脱げ。」

上衣のポケットから襟布まで調べられた。

「袴を脱げ。」

生徒等はズボンをぬいだ。

「襦袢を脱げ。」

生徒等はシャツをぬいだ。

「袴下及び靴下を脱げ。」

生徒等はズボン下と靴足袋とをぬいだ。

斯くて彼等は次第に裸體にされていつた。それは異様な光景だつた。彼等は一枚々々と剝いだ服裝を、一歩前の土間に丁寧に置き、命ぜられるまゝの動作を直線的に行つて、不動の姿勢を取つてゐた。

然し、襦袢を脱ぐ頃から、緊張した沈默は次第に破られてきた。たとひ一時にもせよ、窃盜の嫌疑の下に檢査される といふ憤慨、また、今に誰か捕へられるかも知れないといふ不安、それらから來る精神の緊張は、長い時間のうちに弛んできた。その弛んだ隙間から、全列が一歩々々裸體に近づくといふ奇妙な情況の意識が、ちらと顏を出した。それと共に、身體もが第に疲れてきた。不動の姿勢を取つてゐる上に、列の末端の者は、區隊長が徐にやつて來るまで、片手を眞直に差伸して、その時の檢査物を手先にぶら下げてゐなければならなかつた。少しでも手先を引込めることは、自分の疚しいことを間接に示すやうなものだつた。實際、三十六人の區隊全員を、區隊長一人で細かく檢べてゆくには、可なりの時間を要した。

道場の入口に脱ぎ揃へた靴を、下士官が細密に檢べてゆくのが、横目でちらと認められても、彼等はたゞ「はゝん」といふ氣持ちしか起らなかつた。そして彼等の思ひは、このために解散の時間が延びるといふ一事に、次第に集中されてき

た。凡てが忌々しくなつた。不平の呟きがぶつ〳〵洩れて來た。

然し區隊長等の眼は、益々嚴肅に鋭利に輝いてきた。自分の區隊から犯人を出すことは堪へ難いことであるが、また一方には、かゝる重大な犯人を發見出來ないことは、軍紀の威嚴に關することだつた。その二つの間に挾まれた心は、遂に焦燥の一念に包まれてしまつた。彼等は額に汗をにぢませながら、益々嚴密に檢査を續けていつた。

遂に最後の命令が下された。

「猿股もしくは褌を脫げ。」

くすりと忍び笑ひの聲が、或る區隊の中央から起つた。それを聞くと區隊長は、列の正面につゝ立つて、眼をかつと日開きながら一喝した。

「將校生徒として、不名譽極まる取扱ひを受けながら、笑ふとは何事だッ!」

生徒等は、猿股もしくは褌を差出してぶら下げながら、全裸體のまゝ不動の姿勢を取つて、ひつそりと靜まり返つた。

區隊長は全列を檢査して廻つた。

凡ての檢査が終ると、區隊長は正面に返つて號令をかけた、

「兩手を擧げ兩足を開け。」一寸間が置かれた。「元へ。」

手を下に下す拍子に、平手で自棄に腿をぴしりと叩く音が、一齊に起つた。それからしいんとした。嚴な顏付と笑ひを押へて眼を固く見開いてる顏付とが、ずらりと並んでゐた。

區隊長は、裸體の列の周圍をぐるりと一巡した。それから正面に戾つた。沒表情な顏付をしてゐた。

「檢査終り。着物を着よ。」

場内は一時に騒然となつた。生徒等は素早く而も的確に、きちんと着服を終へた。

「道場の外に整列せよ。」

彼等は、下士官から一々検べられた長靴をはいて、道場の外に整列した。あーあと欠伸をした者があつた。馬鹿ッとそれを叱した者があつた。

中天に昇つた太陽が、ぢり〳〵と照りつけてゐた。

「勤務生徒は、部隊を寝室の前に引率して行け。」

がや〳〵した行進が初まつた。彼等がひそかに囁き合ふ聲は、自然に高くなつてゐた。外出の時間が後れたことも、將校生徒として不名譽極まる取扱を受けたことも、今少しで解放されるといふ刑罰に對して、影が薄くなつてゐた。此場で押へられた者がなかつたことも――勿論かういふ場合には、證據が上つても後でしか鐵槌は下されないのであるが、區隊長の顔にはそれらしい色は浮んでゐなかつた――喜びの一つだつた。

彼等はまた寝室の前に集つた。規定の服装検査も無事に済んだ。貴重品――金入と時計――が各自に渡された。それから凹形に集つて、中隊長の訓示となつた。

訓示の前に、中隊長と區隊長等とが向ふに寄り集つて、暫く相談し合つてゐた。それは、犯人が擧がらなかつた結果に就てらしかつた。

やがて中隊長の訓示が初まつた。

「今から休暇中に於ける注意を二三與へる、諸子は……。」さういふ風に中隊長は初めた。そして第一に、汽車中に於ける泥棒の注意が與へられた。次には、歸省したら直ちに祖先の墓に詣でること、祖先崇拜は日本國家古來の美風たるこ

と、休暇中はなるべく師長を訪問して有益なる話を聞くこと、などが諄々として說き聞かせられた。それまではまだ無事だつた。然しなほ續いて、休暇中の品行衞生の細目に亙つてゆき、學校內で習得した規則的生活を破らないやうにし、外出時には必ず袴をつけ、酒煙草を禁じ、暴飲暴食を愼み、烏賊、蛸、蟹、不熟の果物、生の物、を食せぬこと、などの段になると、生徒等は早くも倦み疲れてきた。先刻の檢査に疲れた身體へ、日盛りの光りが眞上から一面に落ちかゝつてゐた。そよとの風もなかつた。背中から眞先に、ぢり／＼と汗ばんでいつた。不當の檢査が漸く濟んだ喜びの後に、炎天に立たせられて、長たらしい訓示――それも多くは、校長から既に與へられたものと重複する――を聞かせられるので、外出の時間が更に延びるといふ不滿が、またうづ／＼と胸の底から湧き上つてきた。訓示がなほ進んで、校長及び區隊長――中隊長自身を擧げないだけの婉曲さを含まして――へは暑中見舞狀を出すやうに注意し、歸校の日を後らさないやうにといふ重大な事柄に及んでくる頃になると、ぶつ／＼不平を鳴らす唸り聲が、列の方々に起つてきた。苛ら立ちに加ふるに、空腹の感が彼等を襲つてきた。彼等は訓示を上の空に聞き流しながら、中隊全部にかゝる遲延を齎した責任者に對して、小野の金を盜んだ何奴かに對して、俄に憤怒の念を覺えてきた。その氣持ちは一轉して、凡てに對する反撥心と變つた。自棄氣味の呟きと動めきとが、隨所に起つた。訓示は滅茶々々になつた。區隊長等が向ふを向いて前方に立つてることが、更に彼等の大膽さを助長した。然し中隊長は、それらのことに氣付いてか氣付かずにか、一言の叱責をも與へずに、頰に陰鬱な影を漂はせ眉根を寄せて、なほ說き進んでいつた。そして最後に、一際聲を高めて、將校生徒として最も忌むべき軟弱なる行爲――婦女子との關係――を戒め、軍人精神を力說した。生徒らは、そのことやまたは訓示が妙に長かつたことには、少しも氣付かなかつた。たゞ、中隊長の曇りある顏を下目がちに時々眺めながら、訓示の早く終らんことをのみ待ち焦れてゐた。日の光りを浴びた背中と頭とが、ぢり／＼と熱してゐた。

中隊長の訓示が終ると、彼等はほつとむし暑い息をついた。直ちに區隊横隊に返つた。區隊長は、頬に流るゝ汗を拭ひもせず、各區隊の前面に立つて云つた。

「今中隊長の云はれたことをよく守るやうにせよ。區隊長としては別に云ふことなし。そして一聲高く、「解散！」

聲には現はれなかつたが、わーつーといふ喊聲の氣配が全列に起つて、彼等は一時に四散した。寢室や自習室の建物をり返りがちに去る者、眞直に足を早めて去る者、彼等は皆、先刻嚴密な檢査を受けた、第一裝用の軍服をつけ、長靴を穿ち、小行李もしくは風呂敷包を手に下げてゐた。そして、鐵鋲の靴底に蹂躙られた中庭を横ぎつて、本館前の長い坂を校門の方へ、嬉々として下りていつた。午後の一時頃だつた。

彼等が群をなして校門を出る頃、何處からともなく一の噂が傳はつてきた。第二區隊の須田が禁足されたさうであつた。然し、須田が他人の金を盗もうとは、誰にも信じられなかつた。須田は平素剛健を口にしてゐたし、また一方には常に金錢には豐富であつて、腕時計や眼鏡――彼は輕い近視であつた――なども、校規の許す限り上等のものを所持してゐた。皆は噂の眞僞を迷つた。がそれも、一度校門をくゞつて自由の天地に出ると、解放された喜びのうちに自然と消滅してしまつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

八月の半ば、水泳の練習に行くために、草深い校庭に歸つて來た彼等は、第二區隊の須田の姿が見えないのを怪しみ、更に、須田の名が名簿から抹殺されてるのを驚いた。何處からともなくその眞相が傳はつて來た。――あの嚴密なる檢査の日、須田の荷物の中から或る物が、下士官の手によつて發見された。須田はそのまゝ外出を禁止され、一週間營倉に拘ぜられ、取調べの結果、退校處分を受けたのだつた。

ひそかな囁きが校庭の各處に起つた。

「何が發見されたんだ？」

「寫眞ださうだ。」

「寫眞！」

「女の寫眞なんだ。」

「それで退校か。」

「さうさ。」

將校生徒としては、それ以上の言葉は、恥なしには公然と使へなかつた。然し親密な間柄では、更にも一言耳語された。

「猥褻だよ。」

そして彼等は、眼をくるりと動かして、腑に落ちたやうなまた擽つたいやうな樣子で、互に首肯(うなづ)き合つた。

小野の金を盗んだ者は誰であるか、遂に發見されなかつた。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至盛堂
同　本郷區本富士町	誠春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◎定價　金六拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社　正路喜社
豐國通信社　弘盛社　三誠社
金蘭社　大興社

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一替振貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論代金取り纒め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十年六月三十日印刷納本
大正十年七月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

東京市本郷區本郷三丁目六番地
發行所　中央公論社
電話（長）小石川一四四　小石川三四二〇
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11.90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-c ass mail matter.

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す